金正日総書記
革命活動史

朝鮮・平壌

チュチェ104(2015)

金正日総書記革命活動史

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ104（2015）



はじめに

偉大な指導者金正日（キムジョンイル）総書記は、偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席が切り開いたチュチェの革命偉業を輝かしい勝利へと導いた朝鮮労働党の永遠なる総書記であり、朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる国防委員会委員長である。

総書記は、すでに1960年代に独創的な先軍革命指導と先軍政治を開始し、1970年代の中ごろから党と軍隊、国家の活動全般を指導する過程で、全社会の金日成主義化の旗のもとに革命と建設のすべての分野に根本的な変革をもたらし、労働党時代の全盛期を開いた。

特に、1990年代の中ごろに金日成主席が逝去した後、先軍政治方式を全面的に確立して、日を追って露骨になるアメリカをはじめとする帝国主義連合勢力の対共和国孤立・圧殺策動を粉砕して社会主義祖国を守り抜き、社会主義強盛国家建設の壮大な新時代を切り開いた。

総書記は、祖国と人民の運命、革命の前途に対する崇高な使命感を胸に秘め、革命偉業遂行の核である指導の継承問題を立派に解決した。

総書記は、金日成主席の祖国統一遺訓を実現するという鉄の意志を持し、全同胞を自主と民族大団結の道に導いて、「わが民族同士」の崇高な理念が実現する六・一五統一時代を切り開き、反帝・自主の旗を高く掲げて人類の自主偉業遂行に不滅の貢献をなした。

総書記は革命を導く全期間、人民を一番愛し慈しみ、常に人民と苦楽をともにし､生涯を終えるまで強盛国家建設と人民生活向上のために超強度の現地指導強行軍の道を歩み続けた。

総書記の革命活動史は、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業を代を継いであくまで達成することを終生の使命とし､これに生涯を捧げた偉大な革命家の活動史である。

偉大な金正日総書記の革命活動史を研究し、それに学ぼうとする世界の進歩的人民の一致した意思と願い､時代と革命発展の要請にこたえて、2013年１月に朝鮮労働党出版社が発行した『偉大な指導者金正日同志革命歴史』（増補版）を翻訳して発刊する。

編　集　部

目　　次

第１章　誕生と生い立ち、学生青少年を金日成主席の真の息子・娘として準備させるために

（1942年２月～1960年８月）

第１節　白頭山密営で誕生、偉大な革命家に成長

金正日（キムジョンイル）総書記は1942年２月16日、白頭山（ペクトゥサン）密営（両江（リャンガン）道三池淵（サムジヨン）郡）で誕生した。

白頭山密営は1930年代後半期から1940年代の前半期まで、抗日大戦の司令部が位置していた朝鮮革命の策源地であり、中心的指導拠点であった。

金正日総書記が誕生した当時は世界的規模で人民の反ファッショ解放戦争が激烈に展開され、朝鮮では祖国解放の大業が主動的に推進されていた歴史的な時期であった。

抗日革命闘士たちは抗日大戦のさなかにパルチザンの息子、白頭山の息子として誕生した金正日総書記を「白頭光明星」とたたえた。彼らは白頭山密営の周辺と国内各地の樹木に「ああ朝鮮よ、同胞よ、白頭光明星の誕生を告げる」「白頭山に金日成将軍の継承人　白頭光明星誕生」「白頭光明星輝く朝鮮の未来燦爛たり　独立朝鮮の大幸運」「白頭山に差し昇った白頭太陽星２千万よ万邦に誇ろう」などの文字を記して、祖国の洋々たる未来に対する大きな期待を表示した。

金正日総書記の家庭は最も愛国的で革命的な闘士の家庭であった。

父・金日成主席は朝鮮人民が数千年の歴史において初めて迎え高く戴いた偉大な領袖であり、社会主義朝鮮の始祖である。

金日成主席は不滅のチュチェ思想、先軍思想を創始してチュチェの時代を開き、人民大衆を自己の運命の主人、歴史の自主的な主体として押し立てた思想・理論の英才であった。主席は先軍革命指導によって祖国解放の歴史的偉業を成し遂げ、民族の自主権を守り、アメリカ帝国主義の武力侵攻に抗する祖国解放戦争を勝利に導き、この地に人民大衆が主人となった社会主義制度を打ち立てた先軍革命の開拓者であり、創造と建設の英才であった。主席は革命の道に立ったときから以民為天（人民を天のごとく見なす）を座右の銘とし、人民のために全生涯を捧げた人民の慈父であった。

母・金正淑（キムジョンスク）女史は金日成主席の先軍指導に従い、祖国の解放と人民の自由と幸せのための闘争に一生を捧げた抗日の女性英雄であった。

金正淑女史は抗日大戦の日々、困難な革命任務の遂行と数多くの戦闘で優れた指導手腕と無比の勇敢さ、犠牲的精神を発揮して、抗日女性英雄としての風格を余すところなく示した。特に解放後、新しい祖国建設と建軍偉業の実現において不滅の貢献をした。金正淑女史はチュチェの革命偉業、先軍革命偉業継承の起源を開き、生涯を終える最後の瞬間まで、先軍革命偉業継承の基礎を強固に築いた革命の偉大な母であった。

高祖父・金膺禹（キムウンウ）はアメリカ帝国主義の侵略船「シャーマン」号を撃沈する戦いで偉勲を立て、「シナンドア」号を撃退する戦いの先頭に立って勇敢に戦った。曾祖父・金輔鉉（キムボヒョン）と曾祖母・李宝益（リボイク）は

児孫たちを革命の道に立たせ、彼らの革命闘争を積極的に助けながら不退転の革命精神を持って日本帝国主義に抗してたたかった熱烈な愛国者であった。

祖父・金亨稷（キムヒョンジク）は祖国の独立と人民の自由と解放のために一生を捧げた不撓不屈の革命闘士であり、朝鮮の反日民族解放運動の卓越した指導者であり、民族主義運動から無産革命への方向転換を成し遂げた偉大な先駆者であった。祖母・康盤石（カンバンソク）は祖国の解放と女性の社会的解放のためにすべてを尽くしてたたかった不撓不屈の革命闘士であり、朝鮮における女性運動の優れた指導者であった。

従祖父・金亨権（キムヒョングォン）と叔父・金哲柱（キムチョルチュ）、外叔父・金基俊（キムギジュン）と金基松（キムギソン）も早くから抗日革命闘争に身を投じ、祖国解放偉業に一命を捧げた不撓不屈の革命闘士であった。

代を継いで家系のすべての人が国の独立と人民の自由と解放のために熱烈にたたかった愛国的で革命的な家庭は、金正日総書記が早くから人民の指導者、民族の偉大な息子としての風格を備えて成長するうえで貴重な土壌となった。

金正日総書記は抗日大戦と新しい祖国の建設、祖国解放戦争の苦難に満ちた厳しい歴史的環境の中で偉大な革命家に育った。

金正日総書記は幼少のときから人並み外れた優れた天稟を備えていた。

総書記は物事に対する鋭い観察力と非凡な探究心、創造的な思考力を身につけていた。あらゆる物事を真剣に詳しく観察しながら、その事理を明かすために問題を奇抜に設定して最後まで掘り下げた。 そして１けたの計算をするのも難しい年で、すでに物事の量的関係を単に算数的にだけでなく、新しい眼識で考察し、 自然現

象と社会現象を一つの理に結びつけて分析、判断した。それで人々は正日少年を天が賜った神童だと称するのだった。

総書記は太い胆力と剛毅な意志を身につけていた。幼少のころ白頭山の吹雪の中で育ちながら、白頭山の精気と気象、気質をそっくりそのまま受け継いだ。そうして何か一つを考えても大胆に大きなスケールで構想し、一旦始めたことは自分の力でけりをつけるまでやり通す強靭な気性、そして決心したことは最後までやり遂げる性格を身につけていた。

総書記は熱い人間愛と大きな度量、気さくな品性を備えていた。人々とはいつもおおらかに応対し、友だちを心から愛し、彼らのためであればどんな大事なものでも惜しみなく差し出した。そして人の悩みや苦しみをわがことのように思い、それを解決するために力を尽くした。

総書記はいつも生活を質素にした。幼稚園と小学校に通うとき、みなと同じように綿の靴下にゴム靴か運動靴を履き、服もみなと同じ服を着て、かばん代用の風呂敷包みを持って通った。

総書記は両親の革命的な教育と影響を受けて育った。

父から祖父が座右の銘としていた「志遠」の高志と代々国と革命に身を投じてきた万景台（マンギョンデ）の革命一家、抗日革命烈士、児童団員の話を聞き、幼心に貴い革命精神と階級意識を育んだ。同時に自然と社会、朝鮮革命と世界革命、古代から現代史に至る有名人、経済と軍事問題などに関する貴重な話を聞き、知識の幅を広げていった。

総書記は、国と人民のために不眠不休の労苦を尽くす父の精力的な革命活動を目の当たりにしながら、大衆を巧みに導く卓越した指導力、人民に対する献身的奉仕精神、高邁な徳性をそのとおり学び

取った。たびたび普通(ポトン)江改修工事場や田植え最中の農村へ行って働く母の手助けをしながら、勤労人民に対する愛情と献身的奉仕精神、労働に対する勤勉さを培った。

両親から受けた革命的な教育と影響は、正日少年の優れた品性をさらに気高いものにし、早くから偉大な革命家としての品格を完璧に備えていけるようにした。

総書記は現実に対する体験を通じて人並み外れた資質と品性を一層立派に備えていった。

抗日大戦の銃声を聴きながら生活の第一歩を踏み出し、抗日革命闘士たちの中で育ちながら、幼いときから剛直で太っ腹な性格を持ち、精神的に早熟であった。

新しい祖国建設の時期、平壌(ピョンヤン)学院や保安幹部訓練所、第１中央軍官学校など正規武力建設の指導に当たる両親と行を共にする過程で銃剣の貴さを深く体得し、先軍総帥としての品格と資質を備えていった。

そして各都市と農村を訪ねる過程で、新しい祖国の建設に立ち上がった人民の建国熱意とたたかいの姿、金日成将軍に従う彼らの燃え上がる忠誠心と底知れない力に大いに励まされ、国と人民のために自身のすべてを捧げる覚悟を固めていった。

特に戦火の厳しい日々、総書記は人々が数十年かかっても体得できない最も貴いものを体得した。

総書記は祖国解放戦争の苦難の日々、街と村を焼け野原にしたアメリカ帝国主義に対する敵愾心を燃え上がらせ、戦う朝鮮人民の英雄的気象を通して勝利する祖国の明日に対する信念を固くした。そして、将子(チャンジャ)山のソルメ谷で党創立５周年を記念して妹とともに２

本のゴヨウマツを植え、少年たちに１本の木でも愛護する精神を植えつけ、祖国の山野を一層緑化する決意を固めた。また1952年６月、平安（ピョンアン）北道を現地指導する父に同行して、米軍機と戦う人民軍飛行士の勇敢な戦闘ぶりや戦時食糧増産に立ち上がった農民の姿を目の当たりにし、父から楽元（ラクウォン）の10名の党員の話を聞いたりして、必勝の信念をさらに強くした。

1952年６月下旬から８月中旬まで最高司令部で過ごした総書記は、７月10日、父から授けられた拳銃を革命のバトンとして受け、銃を手にして革命を最後まで成し遂げる誓いを新たにし、最高司令部の作戦台で卓抜な軍事戦法と用兵術、革命的楽観主義、真っ向から突進する意志と戦術を体得した。

総書記は戦争の重荷を一身に担って軍隊と人民を戦争の勝利へと導く金日成将軍の卓抜な洗練された指導力と強靭な意志、戦争の困難な状況下にあっても人民と人民軍兵士の生活に深い関心を払う高邁な姿を身近に目撃した。そして敵の爆撃を誘導した反党反革命分子らの悪辣な策動によって最高司令部が危険にさらされたこともじかに体験した。

こうしたことを目撃し体験した総書記は、祖国と人民の運命は全的に金日成将軍にかかっており、金日成将軍がおられてこそ戦争の勝利と明日の繁栄があることを心底から感得し、金日成将軍を擁護し、より立派に忠義を尽くす決意を固めた。

総書記は自身のこうした信念と意志を込めて1952年８月につくった作品『祖国のふところ』で、お日さまのように明るい祖国のふところは将軍さまのふところだと歌い、1953年６月１日には、将軍さまが健やかであれば朝鮮人民は幸せであり、将軍さまをよ

く守ってこそ祖国と人民の運命が救われるという祝福の手紙を送っている。こうした信念と意志は、その後の金正日総書記のすべての活動の礎となった。

総書記は学習と組織生活を通じて革命家としての風格を一層立派に備えていった。

厳しい祖国解放戦争の時期、戦う朝鮮の息子、娘らしく学習も生活も戦闘的にせよと言った金日成将軍の教えを体して、１年の間に２学年の課程を突破した。

そして1952年11月、万景台革命学院４学年に編入した後、金日成将軍の著作と党の路線と政策を解説した図書、そして新聞、雑誌を熱心に読み、学校で教わるすべての科目に精通しただけでなく、自然と社会に対する多方面的な知識を習得するために鋭意努力した。

総書記は、万景台革命学院に在学中であった1953年１月25日、「朝鮮のために学ぼう！」というスローガンを提唱し、学友の間で学習熱意を高めるようにした。そして学友たちに働きかけて前線支援活動や演芸宣伝隊活動も活発に展開した。

幼いころの両親の訓育と影響、二度の革命戦争と壮大な社会的変革に対する現実体験は、金正日総書記に偉大な革命家、先軍総帥としての風格を立派に備えさせていった。

第２節　金日成将軍の略伝研究サークル結成、
金日成将軍を見習い、断固擁護するために

金正日総書記は学友の間で金日成将軍を見習い、断固擁護する

ための活動を積極的に展開していった。

総書記は金日成将軍を見習ううえで『金日成将軍略伝』の学習をすることを重要視し、祖国解放戦争の時期に金日成将軍の略伝研究サークルを組織して活発に運営した。

『金日成将軍略伝』は1952年４月、金日成将軍の誕生40周年を迎え、朝鮮人民の一致した念願によって出版された図書であった。

総書記はすでに最高司令部で過ごした時『金日成将軍略伝』を学習しており、万景台革命学院に編入した後、学院の少年団指導員に会ってそれまで所持していたこの図書を差し出し、金日成将軍の略伝研究サークルを結成することを提唱した。それは教職員、生徒の積極的な支持、賛同を得た。

総書記は略伝研究サークルを組織する前にまず学友たちに『金日成将軍略伝』の内容を説明し、研究討論会も何回も開いた。そして1953年２月６日、略伝の学習で模範を示した少年団員と分団熱誠者の会合を開いて略伝学習の実態を総括し、早いうちにサークルを組織して略伝の学習を組織的に行うべきだと述べた。

こうした準備に基づき1953年２月10日、分団少年団員の集いで金日成将軍の略伝研究サークルを結成し、サークルの目的とサークル員の任務を明確に示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日われわれが金日成将軍の略伝研究サークルを結成するのは、略伝の学習を強化してすべての生徒を金日成将軍に忠実な朝鮮革命の柱としてしっかり準備させるためです。言いかえれば、すべての生徒が金日成将軍の革命活動を深く研究し学んで、将軍の真の息子、娘になるためです」

総書記は、略伝研究サークル員の任務はまず『金日成将軍略伝』を熱心に学習してその内容を会得することであり、また略伝の解説・宣伝を活発に行うことであるとした。

そして「金日成将軍の革命思想でしっかり武装しよう！」をサークルの基本スローガンとして示し、サークル員がこのスローガンを高く掲げて金日成将軍の革命思想で武装し、それを宣伝する活動の先頭に立つよう強調した。

こうして結成された金日成将軍の略伝研究サークルは金日成将軍の革命思想と革命業績、高邁な徳性を学ぶための初の革命歴史研究サークルであった。

総書記は金日成将軍の略伝研究サークル活動を活発に展開する一方、サークルを拡大するための活動を積極的に推し進めた。サークル員の間でさまざまな形式と方法で略伝の学習を深め、略伝の内容を幅広く掘り下げて認識するようにした。そしてサークル員を準備させたうえで学校周辺の村落に行って、村人に金日成将軍の革命活動に関する写真帳を見せながら、歌や詩の朗誦を織りまぜて略伝の宣伝をさせるようにした。

略伝研究サークルの活動水準が高まるに伴い、総書記はサークルを学院全体の規模に拡大する準備を進めた。そして1953年３月中旬、学院の民青、少年団熱誠者の集いで、金日成将軍の誕生41周年を迎え、学院のすべての青少年が金日成将軍の略伝研究サークル員になる決意集会を開催することを提唱した。

こうして金日成将軍の略伝研究サークルは学院のすべての学級に組織された。

総書記は戦後、金日成将軍に学ぶ活動を一層深めていった。

1955年10月５日、平壌第１中学校の少年団熱誠者への談話『敬愛する金日成将軍の幼いころを見習おう』で、学校少年団委員会の活動の中心は少年団員の間で金日成将軍の幼いころを見習う活動を活発に進めることであるとし、この活動において学校が全国の模範になるよう強調した。

総書記は白頭山地区の革命戦跡踏査行軍路を開拓した。

革命戦跡と革命史跡の参観は金日成将軍の不滅の革命業績を生々しい資料によって認識させることができるので、金日成将軍を見習ううえで重要な意義を有することであった。

総書記は1955年４月に学友たちとともに万景台と七谷（チルゴル）革命史跡地を参観し、その経験に基づき1956年５月末には普天堡（ポチョンボ）をはじめ金日成将軍の不滅の革命事績が多く秘められている両江（リャンガン）道一帯の革命戦跡の踏査を行うことを学校の当該幹部に提起した。そして５月末、白頭山一帯の革命戦跡踏査の問題を金日成主席に進言した。主席は総書記の決心を支持し、未開の道であるから固く決心して踏査してみるようにと励ました。

1956年６月初旬、総書記は平壌第１中学校の少年団委員会で革命戦跡踏査行軍隊を組織し、踏査行軍の目的は金日成将軍の偉大な足跡が残されている白頭山地区の革命戦跡の路程をじかに行軍しながら、金日成将軍の指導に従い抗日遊撃隊員がいかに厳しい試練と難関を突き抜けて戦い、今日の勝利をもたらしたのかを学ぶことだと述べた。

総書記は1956年６月５日から14日にかけて、平壌第１中学校の生徒で組まれた踏査隊を率いて普天堡と三池淵、鯉明水（リミョンス）一帯の革命戦跡への初の組織的な踏査行軍を断行した。

そして踏査行軍の全行程で学友たちが金日成将軍の卓越した戦略戦術と指導の賢明さ、抗日遊撃隊員の闘争精神と強い組織性、規律性を学び取るようにした。

この白頭山地区革命戦跡踏査は、戦後の困難をきわめた時期に党の栄えある革命伝統を断固擁護し継承、発展させるための活動に画期的転機をもたらした。

総書記は革命史跡、革命戦跡の踏査とともに、革命伝統の学習を通じても金日成将軍の革命活動史を深く体得するようにした。

1958年９月と1959年４月、生徒初級幹部と生徒たちに、金日成将軍を見習うのは革命伝統学習において基本をなすことだと強調し、1958年９月には平壌第１中学校（1959年４月に平壌南山（ナムサン）高級中学校と改称）に「朝鮮労働党歴史研究室」を設けることを発起し、金日成将軍の誕生記念日以前に研究室を整備する活動に校内の青少年を参加させた。そして「朝鮮労働党歴史研究室」に備える革命伝統教育資料を広範に収集して革命伝統教育資料集をつくって利用するようにし、この活動で率先垂範した。こうして1959年、金日成将軍の誕生47周年を迎えて平壌南山高級中学校に「朝鮮労働党歴史研究室」が立派に整備され、生徒が金日成将軍の革命活動史を深く学べるようになった。

また校内青少年の間で出版物を通じての革命伝統学習を活発に進め、特に『抗日パルチザン参加者の回想記』を広く学習し、その読書発表会を開き、革命伝統を学ぶ読書運動を活発に繰り広げた。これと同時に革命歌謡の普及活動や革命歌謡合唱競演、革命伝統主題の文学・芸術作品鑑賞会をしばしば催した。

金正日総書記は金日成主席を高く戴き、断固擁護するための活

動を精力的に推し進めた。

戦後に至って国際共産主義運動内には現代修正主義が台頭して世界革命の発展に莫大な弊害を及ぼし､党内では現代修正主義に追随する反党反革命分派分子らが金日成主席の絶対的な権威と威信を切り崩して党の路線と政策に反対し、金日成主席が築いた不滅の革命業績を抹殺しようと悪辣に策動していた。

総書記は1953年９月から1960年８月まで平壌三石（サムソク）人民学校と平壌第４人民学校（当時）、平壌第１中学校に在学中、金日成主席を高く戴き、断固擁護するための活動を精力的に推し進めた。

総書記は学友たちが金日成主席を正しい姿勢と立場に立って心から高く戴くようにした。

1954年４月、戦後初めて迎える金日成主席の誕生日に、平壌第４人民学校の少年団員の名で金日成主席の安泰と健康を祈る文字を記した祝旗を差し上げることを発案し､これを心をこめて丁重に行うよう気を配った。

金日成主席を断固擁護することに最大の力を注いだ。総書記は、党中央委員会1956年８月総会前後の時期､革命の厳しい難局を打開していく金日成主席の安全のために夜を明かしながら全力を尽くす悲壮な決意を固め、その誓いを「死のうと生きようと金日成将軍のために！　1956年９月10日　金正日」と手帳にしたためた。

1956年４月のある日には抗日革命闘士の崔賢（チェヒョン）、柳京守（リュギョンス）たちに、新聞や放送で金日成将軍を守るべきだという記事が発表されればどんなによいでしょう、と語っている。

抗日革命闘士たちは1956年５月、人民軍新聞に論説「金日成元帥の指導はわが党と人民のすべての勝利の決定的保証」「金日成元帥

を政治的、思想的に、命を賭して擁護、防衛するのは人民軍軍人の気高い義務」を発表した。この論説は反党反革命分派分子らに大きな打撃を与え、人民軍軍人たちには領袖決死擁護の精神を深く植えつけた。

総書記は校内青少年の間で金日成主席の革命思想とその具現である朝鮮労働党の路線と政策を擁護するための闘争を強力に展開した。

1956年５月、第１次５カ年計画の展望について講演した平壌第１中学校の校長なる者が巧妙な言辞を弄して党の経済建設の基本路線を歪曲、中傷したとき、即座にそれを断固排撃し、基本路線を擁護した。また党政策教育に反対し郷土史の研究を強調して地方主義を鼓吹する分派分子らの詭弁を粉砕し、金日成主席の革命活動史と闘争業績をしっかり体得するよう学友たちを導いた。

総書記のこうした精力的な活動によって、校内の青少年は金日成主席を戴く限りない栄光と幸せを胸深く銘記するようになり、金日成主席の革命思想とその具現である労働党の路線と政策を断固擁護しようとする政治的、思想的覚悟を高めるようになった。

総書記は校内青少年の間に党の思想体系を確立するための活動を強力に推し進めた。

金日成主席は朝鮮革命と新たな情勢の要請を深く洞察し、1958年３月、朝鮮労働党第１回代表者会議で分派の毒素を一掃するための党内闘争の経験を総括しながら、党の思想体系を確立する課題を提示した。

この課題に基づき、総書記は校内青少年の間でセクト主義の毒素を一掃することに第一義的な力を入れた。1958年４月、平壌第１中

学校高級班の民青初級幹部たちに分派の反動的本質と朝鮮で分派が発生した歴史的根源、分派分子の反党反革命的罪業とその弊害、分派分子を組織的に一掃した党の措置の正当性を深く認識させ、彼らを通じて生徒の間でさまざまな形式と方法で分派を断固一掃した党の革命的立場を説明する活動を根気よく繰り広げていった。

そして党の思想体系をさらに確固と打ち立てるため、1958年９月に開かれた学校民青総会で『民青員の間に党の思想体系を確立するための課題について』と題する結語を述べた。

金正日総書記は次のように述べている。

「党の思想体系は本質において金日成将軍の思想体系です。

民青員の間に党の思想体系を打ち立てることは民青組織に提起される最も重要な課題です。『青年の間に党の思想体系を確立しよう！』、これが現在の党の要求であり、民青員に提起されている第一の任務です」

総書記は党の思想体系を確立するためには一にも二にも党政策の教育を強化して、すべての民青員を金日成将軍の革命思想でしっかり武装させ、金日成将軍にあくまで忠実であった抗日革命烈士の革命精神を学ぶようにし、党の思想に反するあらゆる傾向とたたかう気風を打ち立て、革命的組織生活を強化しなければならないと述べた。

その後、生徒の間に党の思想体系を確立するため、彼らを金日成主席の革命思想とその具現である党政策、革命伝統で武装させることを思想活動の基本的方法としてとらえていった。そして校内民青活動を党の思想体系の確立に基本を置いて進めるようにした。

金正日総書記の指導のもとに、戦時と戦後の時期、校内青少年

の間で金日成将軍を見習い、断固擁護するための活動が活発に展開されることによって、新しい世代を金日成将軍の真の息子、娘としてしっかり育てていけるようになった。

第３節　学生青少年を社会主義建設者として準備させるために

金正日総書記は学生青少年の間で主体性を確立し、組織生活と実践活動を強化して､彼らを知識のある有能な社会主義建設者に準備させていった。

総書記は学生青少年の間で事大主義と教条主義に反対し､主体性を確立するための活動を強力に推し進めた。

金日成主席は1955年12月、党の宣伝扇動活動家に行った歴史的な演説で､革命と建設のすべての分野で事大主義と教条主義に反対し、主体性を確立するための綱領的課題を提示した。

総書記は校内青少年の間で金日成主席が示した課題を実行するための活動を積極的に展開した。

1956年９月と12月をはじめ機会あるたびに､朝鮮で事大主義と教条主義が生じた歴史的経緯を説明し､事大主義と教条主義の思想的毒素が一掃されていない原因とその克服方途を明らかにした｡そして金日成主席の独創的な思想と理論を既成理論と外国の経験の枠に当てはめて解釈しようとする傾向を正し､自国のものに対する誇りと自負心を持って朝鮮の具体的現実をよく知るための教育活動を強化するようにした。

総書記は校内の生徒が学習において主体性を確立するよう導いた。

1957年９月13日、平壌第１中学校の民青初級団体の総会での結語『青年学生の間に革命的世界観を確立しよう』で、学習において主体性を確立するための闘争を強力に展開するよう強調した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは『われわれのものをもっとよく学び、輝かそう！』というスローガンを高く掲げ、学習において主体性を確立するための闘争を強く繰り広げなければなりません」

総書記は学習において主体性を確立するため、金日成主席が指導した抗日革命闘争史を深く研究、体得し、朝鮮の歴史と文化、自然と地理、良風美俗など自国のものを熱心に学び、正しい学習観点と姿勢を持って朝鮮革命と建設に活用できる生きた知識を学ぶよう学生青少年を導いた。

総書記は課外活動において主体性を確立するようにした。学校の芸能サークルと美術サークルの活動を指導しながら、事大主義的観点と態度を捨てて朝鮮人の感情に合う歌をうたい、踊りをおどり、朝鮮画の技法に習熟するよう強調し、植物サークルの運営においても主体性を確立するよう導いた。

総書記は学校民青の活動を新たに発展させるための活動に積極的に取り組んだ。

1956年12月12日、朝鮮民主青年同盟に加盟した後、民青初級団体委員長を経て学校民青副委員長（委員長は教員）を務めながら、学校民青の活動を新たに発展させるための積極的な活動を通じて青少年を知識のある有能な社会主義建設者として準備させていった。

総書記は学校民青委員会の機能と役割を強めるようにした。

1957年２月６日、平壌第１中学校民青委員会で行った演説『学校民青組織の任務について』で学校民青委員会の任務と課題を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「すべての民青員を党と領袖にあくまで忠実な革命家に、知識のある有能な頼もしい社会主義建設者に育てること、これがまさに学校民青委員会の任務だと言えます」

そして、民青員を党と領袖のまわりに固く団結させ、学習に励むようにし、同盟生活に対する指導を強化し、少年団の活動を正しく指導することが学校民青委員会の課題であるとした。

総書記は学校の民青活動に新たな転換がもたらされるようにした。当時、学校民青組織が生徒の学力向上に深い関心を払っていない実態を把握し、生徒が学習に励むようにすることを学校民青委員会の重要な課題、同盟生活指導の基本的内容としてとらえていくようにした。

1957年３月には民青の初級幹部たちに革命的な学習観点と気風を打ち立てるよう教え、学習において新たな転換をもたらすための模範に学ぶ集いを反復して開き、革命的な学習観点と気風を打ち立てるよう導いた。そして学科コンテスト、教科別討論会、読書発表会などを活発に開催して、生徒の学習熱意を高め、学んだ知識を強固なものにしていくようにした。また課外読書運動を広範に繰り広げ、生徒が幅広く深い知識を得ることに努めるようにし、自ら実践的模範を示して彼らを導いた。

総書記は科目別の教材のほかに金日成主席の著作とマルクス・

レーニン主義の図書を体系的に研究し、機械工学や農学、畜産学などの自然科学技術書、社会科学と文学・芸術分野の書籍を精力的に耽読した。

一方、民青組織が課外サークル活動を生徒の特性に合わせて行うようにし、彼らが実用的な生きた知識を身につけるように導いた。すべての生徒が参加できるように、数学サークル、音楽サークル、美術サークル、体育サークルなどの課外サークルを組織するようにし、学校民青委員会がその活動を指導する新たな体系を打ち立て、弁論の集い、詩朗誦の集い、音楽鑑賞会、創作及び考案品展示会など多様な課外活動を活発に展開するようにした。

総書記は学校民青委員会が民青員の自覚的な組織生活気風の確立に力を入れるよう指導した。民青組織が学生青年の間で民青員の栄誉を担って同盟生活に自覚的に参加するようにする教育活動を強化し、彼らが同盟生活手帳を作って利用しながら、組織の決定と分担された任務をきちんと遂行することを助けるようにした。そして同盟員の間に組織に対する正しい観点と革命的組織規律を確立するようにした。

総書記は少年団の活動に深い関心を向け、民青が少年団の活動を責任を持って指導するようにした。1957年の冬休みの間、民青員を少年団の各分団に派遣して、少年団員の学習と課外生活に対する優れた指導経験を生み出すようにし、同年２月には上級学年の有能な民青員で分団指導員（教員）の活動を助けて少年団の分団を指導する補助分団指導員制を設けるようにした。そして、少年団の活動に対する学校民青委員会の指導体系を確立し、補助分団指導員の政治・実務水準と役割を強めるための措置を講じた。

総書記は学生青年を社会主義建設に大いに参加させるための活動を積極的に繰り広げた。

金日成主席は1958年３月の全国青年社会主義建設者大会で、青年は革命闘争において党の最も頼もしい担い手､真の社会主義建設者になるべきだとし､すべての青年が情熱と知恵と能力を社会主義建設に捧げることを呼びかけた｡総書記は1958年５月５日、内閣決定第17号を支持する平壌第１中学校教職員･生徒決起大会で行った演説『青年は社会主義建設闘争にすべての力を捧げよう』をはじめその他の演説で、青年が社会主義建設に直接参加し、物質的にも支援するよう強調した。

総書記は学生青年を首都建設支援運動に奮い立たせた｡1958年５月３日に開かれた学校民青委員会拡大会議をはじめ数回の会議で、首都建設支援運動の目的と意義を明らかにし、金日成主席の遠大な首都建設構想を実現するための闘争で学生青年が先鋒隊､突撃隊の役割を果たすよう呼びかけた｡そして1958年５月初旬から６月中旬まで､学友たちとともに２万世帯の住宅建設のための部材生産に参加し、生徒が実践の中で鍛えられ、立派な思想的・精神的風格を備え、学校で学んだ知識を強固にし、技術を絶えず革新していくよう導いた。

その後にも平壌学生少年宮殿の建設や大同(テドン)江の護岸工事などに参加して巧みな組織･政治活動と自らの実践的模範によって学生青年を勤労の偉勲を立てるようリードした。

総書記は学生青少年の間で社会主義建設に役立つさまざまな活動を行うようにした｡社会主義建設に役立つよいことをする運動と、勤労者の生産闘争を鼓舞する宣伝活動を活発に展開し､学友たちを

これに積極的に参加させた。

総書記は青年学生の間で戦争に対する主体的観点を確立するための活動に力を注いだ。

戦後、人民軍各部隊に対する金日成主席の現地指導に随行しながら、銃剣重視、軍事重視の必要性をさらに深く実感した総書記は、高級中学校のころ、ノートに「朝鮮人民の不倶戴天の敵アメリカ帝国主義侵略者を徹底的に掃滅し祖国を統一しよう！」というスローガンを書き入れて軍事問題の研究を深め、金日成主席の軍事思想を深く研究、体得した。また、さまざまな軍事関連書籍を耽読する過程で正規軍の軍種、兵種、専門兵の使命と任務をはじめ軍事知識の幅を広げていった。

総書記は1959年９月23日をはじめ機会あるたびに、平壌南山高級中学校（当時）の生徒に、戦争と平和に対する党の原則的立場を正しく認識して戦争恐怖症と厭戦思想を徹底的に排撃すべきだと強調した。

このように、金正日総書記は学生青年を政治的、思想的に、軍事的にしっかり準備させるための精力的な活動を通じて金日成主席の革命思想を深く体得し、自然と社会に対する幅広い知識と豊富な軍事知識を兼備し、組織と大衆を導く巧みな手腕と指導能力など、偉大な革命家、卓越した先軍指導者としての風格と資質を立派に備えていった。

第２章　先軍革命指導の開始、チュチェの革命偉業継承のために

（1960年８月～1964年３月）

第１節　先軍革命指導の開始、チュチェの革命偉業継承・完成のための遠大な構想

1960年代に入って朝鮮の情勢は国防力をさらに強化することを切実に求めた。

共和国北半部では金日成（キムイルソン）主席の正しい指導のもと、社会主義基礎建設の課題が立派に遂行され、社会主義の全面的建設を推し進めるべき課題が提起されていた。一方、南朝鮮を占領していたアメリカ帝国主義は、４・19人民蜂起によって彼らの植民地支配が危うくなると「過渡政府」をして進歩勢力の進出を阻止させる一方、地対空ミサイルをはじめ各種の新型兵器と膨大な米軍兵力を本土から引き入れ、大々的な戦争演習を相次いで強行しながら新たな戦争挑発策動に狂奔した。

こうした情勢は、銃剣重視、軍事重視の路線に基づいて国防力を全面的に強化することを切実に求めた。

金正日（キムジョンイル）総書記は金日成主席の軍事思想を深く体得し、実践活動によって先軍革命偉業継承の強固な土台を築いた。

パルチザンの息子として誕生し、早くから銃剣と深い縁を結んで育った総書記は苛烈な戦争の日々、金日成主席から銃剣重視の思

想と拳銃を革命継承のバトンとして受け、卓越した軍事戦法と用兵術を学び取り、戦後の時期、数多くの人民軍部隊を現地指導する金日成主席に随行して、その建軍指導業績と用兵術を深く体得した。特に精力的な学習と探究、革命的実践を通じて現代戦と正規軍に関する豊富な軍事知識を修得した。

総書記は1960年８月25日、朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守（リュギョンス）第105戦車師団（当時の朝鮮人民軍第105機械化師団）を訪ねることによって先軍革命の指導を開始した。

朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守第105戦車師団は金日成主席の賢明な指導と深い関心のもとに正規革命武力の誕生とともに創設され、祖国解放戦争の時期にソウル解放作戦と大田（テジョン）解放戦闘をはじめ数多くの戦闘で英雄的偉勲を立てて近衛ソウル称号を受け、戦後の復興建設と社会主義革命を武力をもって守るうえで大きく貢献していた。

金日成主席に随行して部隊を訪ねた総書記は、祖国解放戦争の時期に部隊が立てた輝かしい偉勲を高く評価し、「敬愛する金日成同志を首班とする党中央委員会を命を賭して守ろう！」というスローガンを高く掲げて、朝鮮革命の最終的勝利を早めていくべきだと述べた。

総書記が先軍革命指導の第一歩を踏み出した８月25日は、金日成主席が先軍革命の指導を始めた４月25日とともに朝鮮の革命武力建設史に末永く輝く歴史的な日となった。

総書記はチュチェの革命偉業、先軍革命偉業を継承していく遠大な志を抱いて、1960年９月１日、金日成総合大学に入学した。

金正日総書記は次のように述べている。

「朝鮮革命を担う主人になって金日成同志の偉業を代を継いで成し遂げていくことは、時代と革命、祖国と人民に対するわれわれの崇高な義務です。

偉大な太陽の国―朝鮮を永遠に輝かせる、これがわたしの揺るぎない信念であり意志です」

金日成総合大学は金日成主席が解放後、国の民族幹部養成事業の重要性と意義を深く推し量って、朝鮮で初めて立てた民族幹部養成の中心基地である。

総書記は金日成総合大学で学ぶことを早くから決心していた。1959年１月、ある社会主義国を訪問した際、自分たちの総合大学へ入学するよう勧めたその国の幹部に、わたしは金日成総合大学に入学すると断言した。チュチェの革命偉業、先軍革命偉業を受け継いでいく朝鮮の真の革命家になるためには朝鮮の現実に足を据え、金日成主席の革命思想を深く体得し、朝鮮の革命に必要な生きた知識を修得しなければならないというのが総書記の確固とした立場であった。

総書記が金日成総合大学で学ぶことは父・金日成主席の気高い志であり、母・金正淑（キムジョンスク）女史の切なる願いでもあった。金日成主席は総書記がチュチェの革命偉業、先軍革命偉業を担っていく真の革命家になるため祖国で学ぶことを望んだ。金正淑女史は解放後、金日成総合大学の建設が進められていたある日、金日成主席とともに幼い総書記を伴って竜南（リョンナム）山の丘に登ったとき、早く大きくなって金日成将軍の尊名を冠した総合大学で勉強し、金日成将軍に忠実な人にならなければならないと懇々とさとした。

総書記は1960年９月１日、竜南山の丘で、金日成主席の高志に

従いチュチェの革命偉業を継承していく遠大な構想を詩『朝鮮よ、その名を輝かさん』にこめて歌い上げた。

総書記がこの詩にこめた竜南山での誓いは、つとに祖父・金亨稷（キムヒョンジク）が代々戦ってでも国の独立を達成する「志遠」の志を立てた南（ナム）山の誓いと、父・金日成主席が「解放の百里の道」を歩いて鴨緑（アムロク）江を渡り、朝鮮が独立せねば二度と帰るまじと悲壮な決意を固めた蒲（ポ）坪（ピョン）の渡し場での誓いを継いで、チュチェ思想の最終的勝利を早めるという不動の信念と意志を時代と革命、祖国と人民に宣言した革命の誓いであった。

総書記はこれについで1962年８月29日、先軍の銃剣をさらに強く握りしめ、金日成主席の革命偉業をあくまで継いでいく確たる決意を詩『白頭（ペクトゥ）の行軍路を継いで行かん』にこめて闡明した。

この詩には、白頭密林に根源をなす先軍の革命伝統を継いで革命武力を無敵の白頭山革命強兵に育て、先軍の銃剣をもって祖国をいかなる敵もあえて手出しできない社会主義強盛国家として輝かせていこうとする白頭の先軍総帥金正日総書記の確たる信念と意志が集約されている。

朝鮮人民はその遠大な構想から、金正日総書記がいてチュチェの革命偉業、先軍革命偉業の最終的勝利が確固と保証されていることを確信するようになった。

第２節　精力的な思想・理論活動を展開

金日成総合大学時代、金正日総書記は金日成主席の革命思想を

擁護し、さらに深化、発展させるための精力的な思想・理論活動を展開した。総書記はその過程に卓抜な思想家・理論家としての風格と資質を遺憾なく発揮した。

金正日総書記は金日成主席の革命思想を完璧に体得し、自然と社会に対する幅広く深い知識を積むために精力的な努力と探究を重ねた。

すでに初・高級中学の時期に体系的に学習した主席の著作と教示を改めて歴史的に、全面的に深く研究し、この時期の重要な会議での主席の報告と結語、演説、各分野への教示などをすべて学習した。とりわけ主席の現地指導に随行して、革命と建設で提起されるすべての問題を人民大衆を中心におき、国の具体的実情に基づいて独創的に解いていく主席の卓越した思想と理論を深く体得するための探究を深めていった。

総書記は人類が残した進歩的な思想・理論的遺産、特に先代の労働者階級の革命思想と理論を主体的立場で幅広く深く研究、分析し、その時代的制約を明らかにした。

大学に入学した当初から『共産党宣言』『資本論』『反デュリング論』『資本主義の最高段階としての帝国主義』『国家と革命』『マルクス主義と民族問題』などの古典を多く読破し、それらの本のスペースに「われわれの時代にはもはや合わない理論」「輪郭を描くにとどまり、それ以上展開されていない」などと、それらの限界や当該の問題に対する見解を書き入れた。

総書記は専攻分野の政治経済学のみでなく、哲学、歴史学をはじめ社会科学と自然科学、文学・芸術、軍事学など各分野の膨大な書籍を全面的に熟読し、その過程で多方面にわたる豊富な知識を蓄積

していった。こうした探究を重ねて、傑出した思想家・理論家としての実力をより立派に備えていった。

金正日総書記は金日成主席の革命思想を擁護するための思想・理論活動を精力的に展開した。

まず主席の革命思想の独創性と偉大さを明らかにすることを第一の課題とした。

そして『社会主義経済建設の基本路線の正当性を正しく認識することについて』『社会主義経済建設における若干の問題』『わが党の自立的民族経済建設路線を断固擁護しよう』『テアンの事業体系は独創的な社会主義経済管理システム』をはじめ多くの著作や談話で、社会主義経済建設の基本路線、自立的民族経済建設路線、テアンの事業体系、社会主義のもとでの労働の性格に関する理論、政治的・道徳的刺激と物質的刺激の結合に関する理論、経済建設と国防建設の並進路線など、金日成主席が示した社会主義建設に関する思想と理論は古典のどこにも見出せない独創的な思想・理論であることを全面的に論証した。特に1962年５月４日、金日成総合大学の学生への談話『わが国での農業協同化運動の特徴を原理的に正しく認識することについて』で、朝鮮労働党の農業協同化方針は社会的変革に関する新しい原理に基づいているとし、技術的改造に先立って経営形態を社会主義的に改造するという方針は、社会的変革に関する理論の発展に大きな転換をもたらした金日成主席の独創的な歴史的発見であると述べた。

また1962年１月、古典に関する討論会では、金日成主席の革命思想は世界的規模で搾取制度を一掃し社会主義を建設すべき課題が実践的問題として提起された革命発展の新たな高い段階の要請

を反映している独創的な思想であるとし、今日の歴史的状況において革命と建設を成功裏に遂行していくための指導指針は当然、金日成主席の偉大な革命思想に求めるべきであると説いた。

1963年７月19日、金日成総合大学の学生への談話『新しい時代は新しい思想を求める』で、金日成主席の革命思想はわれわれの時代の労働者階級の指導理念であり、マルクスとレーニンの段階を越えた新しく独創的で偉大な思想であることを掘り下げて論証した。

総書記は金日成主席の革命思想はわれわれの時代の要請を反映して現れた新しい指導理念であるとし、金日成主席は新しい歴史的時代、われわれの時代の要請を反映した革命思想を創始し、それに基づいて革命と建設に関する理論全般を新たな高い境地に引き上げたと述べた。

主席の革命思想の独創性と偉大さを理論的に解明したことは、その後、主席の革命思想を金日成主義と定義づける思想・理論的基礎となり、確固とした起点となった。

総書記は日和見主義的思想潮流に反対する思想･理論活動を果敢に展開した。1962年12月29日、金日成総合大学の学生への談話『現代修正主義の反動的本質と反修正主義闘争でわが党が堅持している革命的立場について』をはじめ多くの著作や談話で、現代修正主義の発生根源と反動的本質、その弊害を深く分析している。

社会主義制度が確立された後にも転覆された搾取階級の残存分子の蠢動があり、人々の頭に古い思想の影響が残っている状況下で、帝国主義者の圧力に屈服する者が現れかねず、現代修正主義はこのような革命の背信者が党と国家の最高権力を奪取して修正主義を押し付けることによって発生したのだと説いた。そして現代修正主

義の反動的本質は労働者階級の革命的原則を骨抜きにし、帝国主義者と反動階級の利益に奉仕しながら革命闘争を放棄することにあるとし、現代修正主義の弊害は領袖の権威と威信を切り崩し、革命と建設に対する党の指導、階級闘争とプロレタリアートの独裁を否認し、アメリカ帝国主義の核威嚇政策に恐れをなして彼らに屈服し、帝国主義に対する幻想をふりまいて反帝闘争から退き、社会主義諸国と国際共産主義運動の団結を破壊することにあるとした。同時に現代修正主義の危険性は大国、革命の古い歴史を有する国の指導部に発生し、その国の党員と勤労者に修正主義的政策を組織的に押し付けるだけでなく、国際関係の発展にも大きな障害をまねいていることにあると説いた。そして、反修正主義闘争において朝鮮労働党が堅持している革命的立場の正当性を論証し、修正主義を克服するためには金日成主席の革命思想でしっかり武装しなければならないと述べた。

金正日総書記は金日成主席の革命思想をさらに深化、発展させるための思想・理論活動を精力的に展開した。

総書記は労働者階級の革命闘争における領袖の地位と役割に関する問題、領袖の後継者問題の重要性を新たに解明した。1963年６月12日、金日成総合大学の学生への談話『労働者階級の領袖は革命闘争において決定的役割を果たす』などで、労働者階級の領袖は全人民大衆の利益の最高代表者であり、人民大衆との関係で頭脳の地位を占め、労働者階級の革命闘争において決定的役割を果たすということを掘り下げて論証した。

総書記はチュチェの革命理論の根本的原理を深化、発展させた。

革命理論の論理的出発点となる社会革命の本質についての問題

において、革命を単に社会制度の交替と見なしてはならず、社会主義制度が樹立された後続けられる思想・技術・文化分野の革命も包括して革命の概念を新しく定義づけるべきだとした。そして革命の類型も従来の理論を機械的に踏襲するのでなく、われわれの時代の実践的経験に基づいて新しく規定すべきだとし、植民地、半植民地諸国での反帝反封建民主主義革命をブルジョア革命や社会主義革命に帰結させるのでなく、独自な類型の革命と見なすべきであることを明確にした。

総書記はチュチェの軍事思想と理論をさらに深化、発展させた。

金日成総合大学の軍事野営参加者への談話で、金日成主席によって創始されたチュチェの軍事思想と理論は人間を基本にして展開された独創的な軍事思想と理論であることを明確にした。

総書記は、戦争は一定の社会的集団、社会勢力が自己の根本的要求を実現するために武器を持って行う組織的な闘争であるとその本質を規定し、戦争勝利の決定的要因は兵器ではなく人間であり、したがって軍建設と軍事行動において提起される問題はすべて人間を基本にして解明すべきであることを明らかにした。またそれぞれの国での戦争勝利の決定的要因は外的要因ではなく内的要因であり、内的要因に属する人的要因と物的要因のうち人的要因が、政治的・思想的要因と軍事技術的要因のうち政治的・思想的要因が決定的役割をするということを論証した。

同時にチュチェ戦法の基本的特徴と優越性を独創的に解明するとともに、チュチェ戦法を具現するうえで提起される原則的諸問題を掘り下げて展開した。

総書記は革命軍隊の性格と使命を明らかにし、政治活動を優先さ

せながらこれに軍事技術的活動を正しく結合していくことは革命武力建設において堅持すべき革命的原則であるとした。

この他にも1962年９月18日の金日成総合大学の軍事野営参加者への談話『全人民的防衛体制の不抜の威力について』をはじめ多くの談話で、金日成主席の自衛的防衛力建設に関する理論の正当性と独創性を論証し、その内容をさらに発展させ、豊富にした。

金正日総書記は金日成主席の主体的文芸思想と理論をさらに深化、発展させた。

抗日革命闘争の過程で創作された文学・芸術作品、特に金日成主席が創作した名作を大々的に発掘して再現させること、労働者階級の領袖を形象化すること、金日成主席に限りなく忠実で自主的人間であるわれわれの時代の真の人間の典型を主人公にして生活を幅広く掘り下げて形象化することは革命的文学･芸術建設における原則的問題であると強調した。

また、朝鮮で公演されていた歌劇の本質的制約を深く洞察して朝鮮式の革命的な歌劇をつくる方向も示した。

これら革命的文学･芸術建設における原則的問題と朝鮮式歌劇創作についての談論は、1960年代末、1970年代初に進められた文学・芸術革命の強固な思想・理論的基礎となった。

金正日総書記は帝国主義と植民地民族解放闘争に関するチュチェの理論を深化、発展させた。

世界革命と反帝革命闘争の戦略戦術を正しく立て、その勝利を早めるうえで重要な問題となる現代帝国主義に対する研究に心血を注ぎ、その研究結果を総合、体系化して1962年１月15日、『現代帝国主義の特徴と侵略的本性について』と題する論文を発表した。

この論文で、現代帝国主義を政治、経済、軍事の各側面から全面的に解剖し、それに基づいて現代帝国主義の特徴を定義づけた。

金正日総書記は次のように述べている。

「…現代帝国主義は単に独占の支配に基づいているのでなく、国家独占資本主義を政治的・経済的基礎としており、旧植民地主義ではなく新植民地主義に依拠しており、互いに並列的に存在しているのでなく、アメリカ帝国主義を頭目として従属的に再編成されており、成長、強化されているのでなく急速に衰退、没落しながら最後のあがきをしている帝国主義である」

このように現代帝国主義の特徴に対し科学的な定義を下したうえで、帝国主義の侵略的・略奪的本性はいささかも変わっていないのみか、さらに悪辣さと狡猾さを増しているとし、アメリカ帝国主義の二面戦術、特に「平和戦略」の侵略的本質を鋭く暴露している。

総書記は植民地民族解放闘争に関するチュチェの理論を深化、発展させることにも深い関心を払い、1961年３月９日、金日成総合大学の学生への談話『帝国主義植民地体制崩壊の不可避性について』で、世界革命における植民地民族解放闘争の地位と役割を深く解明している。

植民地民族解放闘争は世界革命の見地から見れば、帝国主義の生命線を断ち切る独自の強力な革命勢力であり、国際舞台で力関係を社会主義と革命の側に有利に変える一つの新しい政治勢力であり、世界の平和を維持し強固にするうえで大きな役割を果たす強力な平和勢力であると言明した。そして植民地民族解放闘争の地位と役割に生じたこうした変化は、世界革命と平和のための闘争において勢力配置の根本的転換を求めているとし、世界革命と平和運動の勝

利のための勢力編成において社会主義をめざす労働者階級の闘争と植民地民族解放闘争にともに重要な意義を付与し、この闘争を全力を尽くして支援し、強化、発展させていくべきだとした。

金正日総書記は社会主義建設において切実に提起される理論的・実践的問題を解明するための思想・理論活動を精力的に展開した。

1960年代の中期、社会主義建設の実践において最も重要な問題の一つとして提起されたのは農村問題を正しく解決することであった。これは朝鮮の社会・経済発展において非常に切実な問題であった。

金日成主席はこうした要求を深く洞察し、1964年２月、『わが国の社会主義農村問題に関するテーゼ』を発表した。

総書記はこのテーゼに示された社会主義建設における地域的拠点と役割に関する思想・理論をさらに展開し、深化、発展させるため、1964年３月18日、論文『社会主義建設における郡の位地と役割』を発表した。

この論文で、社会主義建設における地域的拠点に関する金日成主席の思想・理論の革命的本質とその正当性を論証し、主に経済的側面から地域的拠点としての郡の位地と役割を明らかにし、革命と建設の深化、発展に伴ってその役割を強めるための科学的方法を全面的に提示した。

まず、社会主義建設が深まるに伴って地域的拠点を設ける必要性を説き、社会主義建設において地域的拠点としての郡は地方経済発展の総合的単位であり、都市と農村の経済的連係を実現する拠点となるということを全面的に解明した。

また、地域的拠点としての郡は社会主義建設の段階だけでなく、

社会主義･共産主義の遠い将来にも依然として重要な役割を果たすことになることを明言した。

総書記が大学時代に行った精力的な思想・理論活動は､その出発点から目的に至るまで、金日成主席の革命思想を擁護し、さらに深化、発展させることに帰着していた。また、政治、経済、文化、軍事､国際問題など革命と建設の各分野にわたって多方面的に幅広く掘り下げて展開され､朝鮮革命における実践的問題の解決に資することを目的としていた。

金正日総書記が大学時代に金日成主席の革命思想を擁護しさらに深化、発展させたことは、朝鮮を輝かし、チュチェの革命偉業、先軍革命偉業を継承､発展させていくうえで成し遂げた不滅の業績である。

第３節　革命と建設に対する
金日成主席の指導を補佐して

金正日総書記は大学で科学探究と思想・理論活動、社会・政治活動などハードな日程をこなす一方、金日成主席の現地指導にしばしば随行して、革命と建設に対する主席の指導を精力的に補佐した。

金正日総書記は党の路線と政策を作成するための主席の活動を精力的に補佐した。

当時､朝鮮では社会主義革命が勝利して社会主義制度が樹立され､社会主義建設が全面的に推進されていた。こうした環境はそれに適

した路線と政策の策定を切実に求めていた。

金日成主席は革命発展の要請を深く洞察し、新しい環境に適した路線と政策を打ち出すために精力的に活動した。

総書記は当該部門の実態をつぶさに把握し、それに基づいて党の路線と政策を作成する主席の活動を補佐した。

まず、歴史的な朝鮮労働党第４回大会の報告を作成する主席の執筆作業を積極的に助けた。第４回党大会を控えて、政治、経済、文化、軍事、国際関係など各分野の膨大な資料や文献を収集、整理し、主席が執筆した大会報告を清書して差し上げた。

総書記は、さらに主席が進めていた地方の党及び経済活動家昌(チャン)城(ソン)連席会議の準備作業を積極的に補佐した。

主席は1962年７月、山間地帯の経済発展と人民生活向上のモデルとして定めた昌城郡の経験を全国に一般化するため、現地で地方の党及び経済活動家昌城連席会議を準備していた。

総書記は参会者たちの見学対象として予定されていた昌城郡と朔州(サクチュ)郡へ行って地方産業工場と協同農場の実態を調べた。これに基づき1962年８月５日、『地方経済を発展させるためのわが党の方針の正当性』と題する論文を執筆した。

この論文で、朔州郡の経験は郡が決心してねばり強く党の方針貫徹に取り組むならば、地方工業と農業をさらに発展させ、人民の生活を十分向上させることができることを示していると強調し、具体的な数字と実際の資料によってそれを立証した。この論文で分析した資料は、昌城連席会議を準備していた主席にとって大きな助けとなった。後日、主席はこのことを回想して、昌城連席会議を開くときモデルケースを作り、文書の準備をするなどで難問が多かったが、

会議がわたしの意図どおり順調に行われたのは金正日同志がわたしの意図と考えをすっかり見抜いてあらかじめいろいろと助けてくれたからだと語っている。

総書記は『わが国の社会主義農村問題に関するテーゼ』を執筆する主席の作業も積極的に補佐した。

1964年１月、主席に同行して温泉（オンチョン）郡邑協同農場第７作業班を見て回りながら、農村の実態を詳しく調べた。そして主席が当地の協同農場の作業班長と交わす話を聞きながら、主席が最近執筆中の農村テーゼで提起する問題は農村の現状と社会主義農業発展の合法則的要求を正確に反映させている切実な問題であることを改めて感じたとし、社会主義農村建設において現実的に提起される諸問題についての自身の見解を主席に話した。総書記の見解を聞いた主席は農村テーゼで、数年内に農業現物税を完全に廃止し、農村の住宅建設に限らずすべての基本建設を国家が受け持って行うことを当面の課題として提示した。

金正日総書記は党活動と重要な政治行事を指導する金日成主席を補佐して精力的に活動した。

まず党活動を改善、強化するための活動を指導する主席を補佐することに第一義的な関心を払った。

1963年２月、黄海（ファンヘ）北道に対する主席の現地指導に随行した際、党活動家たちに、党活動の中心は一にも二にも主席の教示を立派に貫徹することであるとし、その後、各道・市・郡党委員会を訪ねても、すべての党活動家は常に主席の教えを深く研究し実行することに重点を置いて活動すべきであるとし、その具体的な方向と方途を示した。

総書記は党活動においてチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現してすべての活動を対人活動、政治活動へと転換させるよう導いた。

1963年３月、南浦（ナムポ）市党委員会を訪ねては、幹部がチョンサンリ方法の要求どおり現地へ行って労力配置、技術管理、設備管理を正しく行うよう助ける方法を教え、同年８月には信川（シンチョン）郡へ出向き、里党の活動家が農場の実態を詳しく把握して農業に対する舵取りの役割を正しく果たすよう啓発した。そして、各級党組織が政治活動を先行させて党員と大衆を党政策の貫徹へと奮起させ、政治的方法、特に模範による感化教育と解説対話の方法で人々を教育するよう導いた。

総書記は重要な政治行事を指導する主席を立派に補佐した。

1963年８月、両江（リャンガン）道に対する主席の現地指導に随行しながら、主席を迎えて行う祖国解放18周年慶祝行事を最上の水準で行うための準備活動を自ら手配し指導した。主席を丁重に迎えることに基本を置いて幹部壇を配置するようにし、大衆示威隊伍の編成、行進の順序と方向などを検討して欠点を正し、提起されるすべての問題を主席を丁重に迎え、大衆に不便がないようにする原則で解決するようにした。そしてマスゲームの総ざらいも指導し、祝賀宴会の準備にも関心を払った。

こうして恵山（ヘサン）市での慶祝行事は地方で行われる中央クラスの大きな行事として、高い政治・思想的水準で挙行された。

金正日総書記は国防力を強化するための金日成主席の指導を積極的に補佐した。

金正日総書記は次のように述べている。

「国防力を強化しなければ、国と人民の安全を保障することも、経済建設を順調に進めることもできません。国防力を強化するのは、革命と建設の運命にかかわる死活の要求です」

総書記は主席とともに先軍革命指導の道を歩みながら、人民軍を不敗の革命武力に強化するための活動を精力的に指導した。

1963年２月６日、総書記は主席に同行して最前線に位置する大(テ)徳(ドク)山陣営を訪れ、朝鮮人民軍の指揮官たちに『人民軍を一当百の革命武力に強化しよう』という談話を行った。この談話で主席が打ち出した「一当百」というスローガンの本質的要求は、すべての軍人が防御においてのみでなく、攻撃においても一人で百人を相手どることができるように準備することだとし、人民軍を「一当百」の革命武力に強化するためには軍人に対する政治・思想教育を強化して彼らを軍事技術的に、肉体的にしっかり備えさせ、陣地を強固に築くことが重要であるとし、その方法を具体的に示した。

さらに「一当百」の建軍方針を貫徹するため、人民軍各部隊に対する主席の現地指導を補佐しながら、軍人を政治的、思想的に、軍事技術的にしっかり備えさせるようにした。

1963年７月にはある航空区分隊を訪れ、飛行士の最も重要な任務は主席がいる平壌(ピョンヤン)の空を守ることだと言った。そして人民軍部隊を訪れるたびに、軍人の間で忠実性を培う教育と革命伝統教育を強化する一方、階級的教育と戦争に対する観点を正す教育を強化して、彼らに階級の敵に対する敵愾心と戦争に対処できる思想的覚悟を持たせるようにした。

そして軍人を軍事技術的に備えさせるため、あらゆる訓練を国の実情と現代戦の要求、チュチェ戦法に基づいて行うようにし、航空

区分隊を訪れては革命的な思想と高度の技術を持って戦闘準備を完成すべきだとし、自分の飛行機に精通するのみでなく敵機についてもよく知ってこそ、その弱点をつかみ、戦術的優位によって敵を打ち破ることができると強調した。同時に、前線区分隊に出向いて、防御工事に力を入れるよう指導した。

総書記は全人民武装化と全国土要塞化を実現するための主席の指導を積極的に補佐した。

1963年８月、黄海（ファンヘ）南道信川（シンチョン）郡をはじめ各道、市、郡に対する主席の現地指導に同行して、全人民武装化の徹底した実現に努め、同年12月には黄海北道麟山（リンサン）郡を訪れ、全土を難攻不落の要塞にするための事業を強力に推し進めるようにした。

金正日総書記は社会主義経済建設と人民生活向上のための金日成主席の指導を補佐した。

総書記は主席が示した第１次７カ年計画の基本的課題の一つである人民経済の全面的技術改造の促進に大きな力を注いだ。1961年９月、主席に同行して黄海製鉄所（当時）を訪れ、すべての生産工程の機械化を推し進め、全面的オートメ化へ移行する準備を整えるようにした。そして1963年２月、南浦製錬所（当時）をはじめ各工場、企業に対する主席の現地指導に同行したときには、有害労働をなくし、骨の折れる労働を機械化、半オートメ化する対策を立てさせ、その後にも数多くの工場、企業を訪ねて幹部と勤労者を集団的技術革新運動へと奮い立たせた。

1962年８月、信川郡セナル農業協同組合（当時）を訪ねては、農場の機械化状況を具体的に調べ、この農場が農業の機械化を実現するうえで先頭に立つよう導いた。また寺洞（サドン）区域梨峴（リヒョン）里をはじめ各

農場に出向いては脱穀作業の機械化の水準をさらに高めるよう具体的な方向と方法を示し､斜面畑での作業まで機械化するよう幹部たちを啓発した。

総書記は人民生活を向上させるための主席の指導を積極的に補佐した。

1962年７月､昌城郡､朔州郡に対する現地指導についで1963年８月、咸鏡（ハムギョン）南道と両江道に対する主席の現地指導に同行しながら、徳城（トクソン）郡と豊山（プンサン）郡（今日の金亨権郡）をはじめ多くの山間部の郡を訪ね、必要な対策を立てるよう幹部を導いた。

さらには人民生活を向上させるための商品供給事業の改善に深い関心を払い､中央と地方の商店を見て回りながら､良質の商品を多く確保して人民に供給するようにした。ことに1961年５月５日、中央第１百貨店（当時）を見て回り、幹部に『商業従事者は人民のための商業サービス活動を絶えず改善すべきである』という談話を行い、1963年８月には豊山（プンサン）邑総合商店（当時）に立ち寄って、しょう油、みその生産供給状態とその味まで確かめ、それを主席に見ていただき、良質の商品を供給するための対策が立てられるようにした。

金正日総書記は社会主義文化建設に対する金日成主席の指導を精力的に補佐した。

総書記は文学・芸術を党性が強く、労働者階級的で主体的な文学･芸術に発展させようとする主席の構想と意図を実現することに力を注いだ。

1961年３月､国立演劇劇場に出向いて演劇創作状況を確かめ､社会主義建設で革命的大高揚を起こしている労働者の英雄的闘争を

反映させた作品をより多く創作して公演する課題を示した。そして1963年６月初には朝鮮劇映画撮影所を訪れ、主席に限りなく忠実な自主的人間をリアルに描いた映画を多く創作することを中心的課題として、映画制作に根本的な転換をもたらすよう強調した。

総書記はテレビ放送を創設するという主席の構想を実現するため精力的に活動した。

放送設備の製作に当たるメンバーに、テレビ放送設備を自分の力で作るという自力更生の革命精神で難しいテレビ放送創設事業を成し遂げなければならないと鼓舞した。そしてこの事業に大衆の力を極力動員するようにし、自らテレビ放送設備製作メンバーの一員となって、技術文献や資料、資材など難渋している問題を一つ一つ解決し、深夜に郊外にまで出てテレビ放送の送受信試験を指揮した。こうしてテレビ放送を開始する準備が整い、1963年３月にテレビ放送の創設が宣言され、金日成主席に大きな喜びを与えることができた。

スポーツを大衆化して国のスポーツ技術を発展させ、マスゲームを発展させることに深い関心を払った総書記は1961年７月５日、内閣直属体育指導委員会の責任幹部への談話『スポーツで主体性を確立し、マスゲームの創作に革命的転換をもたらすべきである』で、スポーツを発展させ、マスゲーム『労働党時代』をマスゲームの手本とするための課題を示した。

金正日総書記は革命と建設に対する金日成主席の指導を補佐する過程で、主席の指導風格と指導芸術を全面的に深く体得し、人民の指導者として身につけるべき幅広い眼識と資質を備えていった。

第４節　学生をチュチェ革命偉業の頼もしい継承者として準備させるために

金正日総書記は学生を革命的世界観が確立され文武を兼備したチュチェ革命偉業、先軍革命偉業の頼もしい継承者として準備させることに大きな力を注いだ。

金正日総書記は学生の間で党の思想体系を確立することに重点を置いて政治・思想教育活動を強力に推し進めた。

学生の間で金日成主席に対する忠実性を培う教育に重要な意義を付与した総書記は、1960年12月、学生たちへの談話をはじめ多くの談話や学科討論会で、労働者階級の闘争における領袖の絶対的地位と決定的役割について述べ、朝鮮革命と世界革命に不滅の功績を残した金日成主席の偉大さを全面的に解明した。

1962年４月に行われた朝鮮人民革命軍創建30周年慶祝閲兵式（当時）をはじめ金日成主席を迎えて行う行事のたびに、主席に対する革命戦士の姿勢と立場はどのようなものでなければならないかを実践行動をもって示し、学生が主席を心から信奉するよう教育した。

総書記は、学生を主席の革命思想と党政策で武装させるために極力努力した。

当時、学生の間に現れていた古典文献に対する崇拝心と教条主義的で形式主義的な学習態度を克服し、主席の著作学習に転換をもたらすため、主席の著作に対する正しい観点と立場を打ち立て、明確

な目標と計画を立てて目的意識的に著作を学習するようにした。

1960年10月８日と1962年２月22日の談話をはじめ多くの機会に、外国の古典の命題を覚えるようなことでは朝鮮革命を正しく進めることができないとし、現代の政治、軍事、経済、文化など革命と建設で提起されるすべての問題が解明されている主席の著作を深く学習するよう強調した。

そして、大学に入学して１～２年の間には『金日成選集』に収録されている著作をすべて研究、抜粋し、３～４年の間には専攻科目と結びつけ、反復して学習を深める目標を立て、学年別の学習計画と目標をそれに合わせて具体的に立てるようにし、それに基づいて主席の著作学習を着実に行うよう学生を導いた。

1960年12月をはじめしばしば学生の著作学習状況を確かめ、著作の学習を原文に基づいて行い、その真髄と貫通している思想を明確に把握し、それに基づいて著作の一言一句にこもっている思想的・理論的内容を原理的に深く認識するように導いた。また、党大会や党中央委員会総会をはじめ重要な会議と現地指導の過程での主席の教えをそのつど説明し、学生の著作学習を積極的に助けた。

さらに党機関紙の学習を党政策学習の重要な方法と見なし、学生の間で党機関紙を熟読する気風を打ち立て、それを毎日欠かさず実行するようにした。

総書記は学生に対する革命伝統教育、階級的教育、反修正主義教育にも深い関心を向けた。

革命伝統教育をさまざまな形式と方法で活発に繰り広げ、すべての学生が金日成主席の革命活動史を深く研究、体得し、抗日革命闘士たちの主席に対する忠実性と不屈の革命精神を学ぶようにし

た。これとともに階級的教育と反修正主義教育にも大きな力を入れ、いかなる逆境に立たされても労働者階級的立場と革命的原則を確固と守り、常に革命的に生活するよう導いた。

金正日総書記は学生が高い科学知識を所有するために奮闘努力するよう導いた。

1960年９月７日と11月16日の学生たちへの談話で、学生の基本的任務は勉学にいそしむことであるとし、学生はその本分を忘れず、寸暇を惜しんで熱心に学習しなければならないと強調した。

そして学生の革命的学習気風を打ち立てるため、党及び民青組織のすべての活動を学習を基本として手配し、学習において集団主義が高く発揚されるよう導き、立ち遅れた学生に対する個別指導を行う具体的な対策も講じた。

学生により豊富で多方面的な知識を持たせるため、総書記は1961年３月、１万ページ読書運動を発起し、これを強く推し進めた。総書記は、どうすれば学生の学習熱意をさらに高め、大学期間にすべての学生により豊富で多方面的な知識を持たせることができるかをいろいろと考えてみる過程で、１万ページ読書運動を展開すべきだという結論に達した、と言った。

１万ページ読書運動は、学生が金日成主席の著作を体系的に、全面的に深く学習し、専攻分野をはじめ各分野の書物をより多く、より深く読むようにするための大衆的読書運動である。この運動の目的は、すべての学生が革命的世界観でしっかり武装し、専攻分野の知識を幅広く、深く身につけた革命的人材になるようにすることにあった。

総書記は１万ページ読書運動を強力に推し進めるため、党及び民

青組織が学生の間で政治活動を強化する一方､組織活動を綿密にして、この運動に現れる形式主義的傾向を克服するようにし、生産実習期間や作業期間にもこの運動を中断することなく推し進めるようにした。そして、１万ページ読書運動の歌をつくって普及し、学生の学習熱意をさらに高めるようにした。

総書記は学生を理論と実践を兼備した革命的人材として準備させることにも深い関心を払った。

学生が課外時間と学期末休暇期間を利用して社会･政治活動を着実に進めるようにすると同時に､生産実習と社会主義建設への参加を通じて学校で学んだ知識を強固にし､革命的に鍛えられるようにした。

1961年４月21日から５月８日まで平壌紡織機械製作所(今日の平壌紡織機械工場）での生産実習に参加し、その過程で学生が機械の操作法に精通し、社会主義経済管理知識を深く体得するようにし、労働者階級の革命精神と組織性、規律性を学ぶとともに、労働者の間で社会・政治活動を積極的に展開するようにした。そして26号旋盤を受け持って設備管理の模範を示し､工場の労働者を模範機械創造運動に立ち上がらせた。

また、1961年５月15日から６月４日までに行われた臥山(ワサン)洞―竜城(リョンソン)間の道路拡張工事にも参加し、いちばん骨の折れる作業を受け持ち、学生が労働を通じて組織的、思想的に、肉体的にさらに鍛えられるよう導いた。

金正日総書記は学生を軍事的にしっかり準備させるための活動を強力に推し進めた。

学生が正しい戦争観点に立って軍事訓練に誠実に参加するよう

にさせることに深い関心を払った総書記は、現代修正主義者がまき散らすブルジョア平和主義の反動的本質を暴露し、戦争に対する党の原則的立場を明らかにしながら、アメリカ帝国主義侵略者が無謀な侵略戦争を引き起こすならば、それを一撃のもとに粉砕して祖国統一偉業を成し遂げる万端の戦闘準備を整えなければならないと強調した。そして、学生が軍事訓練に正しい態度で誠実に参加し、必要な軍事知識を着実に学ぶよう、繰り返し強調した。

総書記は、1962年８月中旬から10月初まで平壌市竜城区域禦隠（オウン）洞で行われた軍事野営期間に、学生を軍事的にしっかり準備させることに大きな力を注いだ。

軍事訓練期間、大隊政治部で大隊の全般的活動を指導するよう望む野営参加者と指揮官の要請を辞退し、他の学生たちと同様に軍事規定と教範の要求どおり訓練し生活し、戦術や射撃をはじめ軍事訓練でいつも先頭に立って実践的模範を示した。

特に、金日成主席が創始したチュチェの軍事思想と戦法を深く研究、体得し、朝鮮の愛国名将の伝記と闘争経験、世界の名将の伝記や兵書を研究、分析し、その過程で朝鮮の実情と現代戦の特性にかなった戦闘指揮能力と用兵術を立派に体得していった。

そして学生に主席が創始した独創的な戦法とそれを適用する方法を一つ一つ教え、戦術訓練に励んで実戦に適用できる豊富な軍事知識と軍事指揮能力を習得するようにした。また、すべての学生が各種の武器を巧みに扱い、百発百中の射撃術を身につけるようにさせることに力を入れ、彼らが軍事野営期間、軍隊と同じ強い規律の中で生活するよう導いた。

金正日総書記は学生を組織生活を通じて革命的に鍛えることに

大きな力を入れた。

1961年７月22日、朝鮮労働党に入党した当初から、党員の任務に対する高い自覚と、党と革命に対する重い使命感を抱き、学生の間でさらに精力的な活動を展開した。

ことに学生党細胞が金日成主席の革命思想に基づく集団の思想･意志的団結を成し遂げるための活動を力強く推し進めていくよう導いた。

1962年９月、禦隠洞軍事野営地で、集団の思想・意志の団結を成し遂げるための党細胞総会を開き、会議が高い政治的・思想的水準で行われるよう指導し、『金日成同志の革命思想に基づく党員の思想・意志の統一と団結を強化しよう』と題する結語を述べた。

金正日総書記は結語で次のように述べている。

「労働者階級の党の統一と団結は、必ず一つの思想、領袖の思想に基づいて成し遂げられなければなりません。領袖の思想に基づいて統一され団結していない党は事実上、党とは言えず、そのような党は烏合の衆にすぎません。

わが党は、党を自ら創建し導いている金日成同志の偉大な革命思想に基づいて統一、団結を成し遂げなければなりません」

金正日総書記は学生の間で革命的組織生活を強化するための活動を強く推し進めた。総書記は、党組織に対する正しい観念を持って組織生活に誠実に参加するよう、自らの実践的模範によって学生党員を導く一方、学生の党及び民青組織が党員と民青員の組織生活指導を強化するようにした。

金正日総書記は大学の教育事業を改善するため、主体的立場で教育の内容と方法を改めることに深い関心を払った。

総書記は､教育において提起されるすべての問題を朝鮮革命の要求と朝鮮人民の利益に即して解決していくのが､まさに教育において主体性を確立することだとし､教育において主体性を確立するためには、学生に金日成主席の革命思想と党政策、朝鮮の歴史と地理をはじめわれわれのものを多く教え､外国のものを教える場合にもそれをわれわれのものとして消化して朝鮮革命に適用できるように教えるべきだと説いた。

教育内容を主体的立場で改善することに心血を注いだ総書記は大学に入学した初期､すでに政治経済学科目の構成体系と内容に教条主義的で事大主義的な要素が少なくない欠点を見極め､1960年12月､わが国の実情に適した政治経済学の教科書を新しくつくることを発起し､1961年９月と1962年12月にはこのことで提起される原則的問題を示した。

政治経済学の体系と内容は金日成主席の思想と理論、特に第４回党大会で行った主席の報告に基づいて新しく構成すべきだとした｡そして新しく編纂する政治経済学の教科書をチュチェ思想と大衆路線に基づく教科書にし､そこに社会主義的工業化の前に農業協同化を先に実現した党の政策と社会主義建設の総路線であるチョンリマ運動､人民経済発展における速度と均衡の相互関係に関する問題、労働に対する政治的、道徳的刺激と物質的刺激を結合する問題など、金日成主席が独創的に解明したすべての問題を全面的に反映させるよう強調した。

総書記は朝鮮の歴史を主体的立場で解明し､教育することに大きな力を注いだ。

1960年代の初までにしても歴史学の分野では多くの問題がはな

はだしく歪曲されたままで、教員や学者はそれをそのまま講義していた。

総書記は、事大主義的で教条主義的な思考方式から抜け出さずには朝鮮史を正しく研究することはできないとし、朝鮮での旧石器時代の存在問題と奴隷制国家の形成問題、三国統一の問題、甲申政変の問題、民族問題などの歴史的問題を必ず主体的立場で研究、分析し、評価するよう強調した。

特に、歴史学界でそれまで通説となっていた「新羅（シンラ）による三国統一論」を主体的立場で再検討し、統一国家形成の問題を正しく解明するようにし、1960年10月29日、『三国統一問題を再検討することについて』を発表して「新羅による３国統一論」と「新羅正統説」の不当性を全面的に論証した。

総書記は、哲学の教授内容を改善することにも大きな力を注いだ。

哲学の使命と目的を正しく規定することは、哲学の構成体系と内容を正しく定め、哲学を科学的な学問にするうえで重要な意義を持つ問題であるとし、哲学の使命を新たに解明した。

認識活動と実践活動の担当者は人間であるがゆえに、それは人間の運命を開くことに目的を置くとき正しく行うことができるとし、こうした見地からすれば哲学の使命は実践に奉仕することにあるというよりは、人間の運命開拓の道を明かすことにあるという方がより正確であると主張した。

この他にも、法学、文学、語学など社会科学科目の教授内容を主体的立場で改善するための方途も具体的に示し、現代科学技術の発展趨勢に即して自然科学の教授内容を主体的立場で改善することにも深い関心を払った。

総書記は理論教育と実践教育を密接に結合して学生の実践能力を高めることにも深い関心を向けた。

専攻科目の実習に大きな意義を付与し、1963年２月末、それを円滑に進めるための原則的問題を明らかにし、その実行過程に細やかに気を配った。自然科学で理論教育に片寄る傾向をなくして実験を重要視し、事前準備を十分に整え、手配りを綿密にして、学生が実験を通じて学んだ知識を強固にするようにした。

総書記は学生の文筆能力を培うため、1961年３月と1962年９月に行った学生への談話で、文筆問題の重要性を強調しながら、大学時代に文章を書く練習を多くすれば現実を分析、一般化する能力を養い、学習熱意も高めることができ、社会に出て科学理論の論文はもちろん、報告書、演説文などさまざまな文章を上手に書けるようになると教えた。そして、学生に主体性の確立したきりっとした文章が書けるように論文の題目も選んでやり、執筆の方向と要綱の作成、文章の書き方も教え、彼らが書いた文章を修正加筆してあげたりした。

このように金正日総書記が金日成総合大学時代に示した卓抜な英知と指導力、気高い人品、党と人民のために積み上げた不滅の業績により、人民と人民軍軍人、青年学生の限りない尊敬と信頼を受けた。

第３章　党の唯一思想体系確立のための活動を指導、先軍政治の開始
（1964年４月～1974年２月）

第１節　党中央委員会での活動開始、従来の労働者階級の革命思想史を総括

金正日（キムジョンイル）総書記は金日成（キムイルソン）総合大学を卒業したのち、党中央委員会で活動を開始した。

金日成主席は、金正日総書記が朝鮮革命の最高参謀部である党中央委員会で党活動と、革命と建設の各分野に対する指導を行う過程で党と革命指導の豊富な経験を積み、チュチェ革命偉業を純潔に継承していくことを望んだ。

総書記は主席の高志を体して、朝鮮労働党を永久に金日成同志の党、チュチェ型の革命的党に強化、発展させ、主席の指導を身近でより立派に補佐するために、党中央委員会で活動することを決心した。

1964年４月１日に党中央委員会入りした総書記は、まず実態を把握する作業に着手した。

この実態調査期間に、党中央委員会から地方の党組織に至るまで、党活動をはじめ軍事活動と経済活動、文化活動と青年同盟の活動などすべての部門の実態を具体的に把握するために精力的に活動した。

この実態調査は単なる実務的な下調べではなく、党活動と軍事活動、経済活動をはじめすべての部門、すべての分野の実態を深く分析し、革命と建設を主席の構想と意図どおり前進させていくためのたゆみない思索と探究、創造と革新の過程であり、執務室での文書調べではなく不眠不休の現地視察の過程であった。

金正日総書記は1964年６月19日から党中央委員会で活動を開始した。

1964年６月20日、総書記は幹部たちに、昨日、金日成同志から党中央委員会で活動を始めるよう命じられて感無量でもあるが、党と革命に対し担った責任がなお重くなった思いだとし、自分は金日成同志を立派に補佐し、金日成同志が意図するとおり党をさらに強化していく決意を固めたと語っている。

総書記は党中央委員会で活動を始めた後、指導員、課長をへて1970年９月から副部長、1973年７月から部長を務め、同年９月からは党中央委員会書記の重責を担い、1972年10月、党中央委員会委員に選出された。

金正日総書記は党中央委員会入りした当初から、党事業と党活動における重点をとらえることを第一義的な課題とした。1964年６月20日、党中央委員会の活動家への談話『わが党を永遠に金日成同志の党に強化し発展させよう』で、党事業と党活動の重点について科学的に解明した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党の事業と活動において基本となるのは、全党に金日成同志の思想体系を確立することです。全党に金日成同志の思想体系を確立することはわが党の建設と党活動の根本的原則であ

り、これはわが党が存在し活動する全期間にわたって恒久的に堅持していくべき最も重要な事業です」

総書記は、党事業と党活動の重点を確固ととらえていくためには、金日成主席の教示を無条件あくまで貫徹し、党の統一団結を打ち固め、党活動の体系と方法を改め、党員の党生活に対する指導を深めなければならないとした。

総書記は、党活動において重点をしっかりとらえていくことに大きな力を注いだ。

全党に金日成主席の教示伝達体系を打ち立て、主席の教示を無条件あくまで貫徹する革命的気風が確立されるようにし、1964年４月１日と６日をはじめ数回にわたって党中央委員会の活動家への談話で、党中央委員会の活動家から主席により立派に忠義を尽くし、主席の教示をあくまで貫徹することを党活動の中心としてとらえていくよう強調した。

1964年とその翌年には各道の党活動状況と文学・芸術部門、出版・報道部門の党活動の実態を現地へ出向いて把握し、それに基づき全党的に主席の教示を正確に伝達する整然とした体系を打ち立てると同時に、主席の教示を無条件貫徹する革命的気風を確立することに力を集中するようにした。

総書記は主席の思想と意図どおり党活動方法と作風を改善して、党活動を徹底した対人活動に切り換えるようにした。

金日成主席はチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を創出してそれを党活動に具現するよう導き、1964年12月の党中央委員会第４期第10回総会で、幹部の活動方法と作風を改善するよう改めて強調した。しかし、一部の党活動家は形式主義的な活動方法と作風から

抜け出せずにいた。

総書記は1965年１月８日、党中央委員会の活動家への談話『党活動を徹底した対人活動に変えよう』で、党活動方法と作風を改善して党活動を徹底した対人活動に変えるうえでの原則的問題を解明した。

金正日総書記は党中央委員会で活動を開始した後、精力的な思想・理論活動により、従来の労働者階級の革命思想史を総括する活動に取り組んだ。

総書記は従来の労働者階級の革命思想史を主体的立場で全面的に分析、総括することを決心し、1966年５月から社会科学者たちとともにこの作業を進めた。

1966年５月20日、６月17日、９月30日の社会科学者への談話『従来の労働者階級の革命思想史を正確に分析、総括するために』で、マルクス・レーニン主義の古典研究において提起される原則的問題を解明した。

総書記は、マルクス・レーニン主義を全面的に分析、総括しようとする真のねらいは、金日成同志が創始した革命思想が人類思想史に占める歴史的地位とその独創性を明確に示すことにあるとして、主体的立場に立ってマルクス・レーニン主義の功績と限界を分析、評価すべきだと述べた。そして、古典を研究するうえで留意すべき点についても具体的に言及した。

まずマルクス、エンゲルスの著作の研究、分析に当たっては、マルクス主義が出現した時代的条件と社会的基盤、マルクス主義が反映している労働者階級の革命闘争の要求と水準、そしてマルクス主義の形成と発展の路程が持っている特性を考慮しなければならな

いと指摘した。

　また、レーニンの著作を研究するうえで念頭に置かなければならない問題点は、第１に、レーニン主義が帝国主義時代の歴史的環境を分析し、一国で労働者階級が政権を掌握した初期の革命闘争の要求を反映して出現した理論であるということであり、第２に、マルクス、エンゲルスと同様にレーニンも社会主義・共産主義建設を体験できなかったということであり、第３に、質的界線を引きがたいマルクス主義とレーニン主義の相互関係を考慮しなければならないということであると強調した。

　総書記はマルクス・レーニン主義の古典の中から『共産党宣言』『資本論』『自然弁証法』『反デューリング論』『哲学ノート』『唯物論と経験批判論』『国家と革命』『レーニン主義の基本について』をはじめ30巻余りを選定し、それを全面的に研究、分析し、評価し直す作業を進めた。

　そして従来の理論が依拠していた根本的原理と方法論から社会主義・共産主義建設の問題に至る膨大な内容にわたって問題を設定し、マルクス・レーニン主義の古典を微視的に分析しながら深い研究を重ね、社会科学者たちと数十回にわたって突っ込んだ討論と談話を交わした。その過程で従来の理論の真髄と限界を明らかにし、解明されていなかった多くの問題を新たに解明した。

　総書記は1969年７月１日、従来の労働者階級の革命思想史を分析、総括する膨大な作業を締めくくりながら、マルクス・レーニン主義はその歴史的限界と思想・理論的未熟さのため、人民大衆の革命闘争と社会主義・共産主義建設で提起される理論的・実践的問題に正しい解答を与えることができなくなったということを明確にし、わ

れわれの時代の革命と建設を導く革命思想は金日成同志の革命思想、チュチェ思想の外にはないと明言した。

そして、われわれの時代の指導思想である金日成同志の革命思想を、朝鮮の現実に創造的に適用したマルクス・レーニン主義、またはわれわれの時代のマルクス・レーニン主義とばかり言うことはできないとし、金日成同志が提示した革命思想はいつに金日成同志の尊名と結びつけてのみ呼ぶことのできる新しく独創的な思想であると強調した。

総書記は従来の労働者階級の革命思想史を総括する思想・理論活動によって、金日成主席の革命思想を科学的に定式化するための思想的・理論的準備を整えた。その後、金正日総書記は第５回党大会で修正、補足する党の規約に、金日成主席が創始したチュチェ思想を朝鮮労働党の指導思想として新しく明記するようにした。

第２節　党の唯一思想体系を確立するために

金正日総書記は、党事業と党活動における重点をしっかりとらえていくと同時に、党の唯一思想体系を確立するための活動を指導した。

総書記は党中央委員会の活動家たちに、党内に党の唯一思想体系を確立すべきだという確固たる結論を得たとし、これまで党の思想体系確立についてかなり強調してきたが、われわれの言う党の思想体系とは名実共に党の唯一思想体系であり、それはすなわち金日成同志の思想体系を意味すると述べた。

そして、党中央委員会第４期第15回総会が全党に唯一思想体系を確立するうえで決定的転換の契機となる歴史的な会議になるようリードした。

金正日総書記は次のように述べている。

「最近開かれた党中央委員会第４期第15回総会は、党の唯一思想体系を確立し、金日成同志の革命思想に基づく党隊伍の統一と団結を強化するための党の闘争において大きな意義を持つ歴史的な会議でした」

総書記は党員と勤労者の間で党の唯一思想教育を新たな高さで強力に推し進めることに格別な力を注いだ。1967年８月、党中央委員会から下部の党組織に至るまで金日成主席の教示をそのつど正確に伝達、浸透する整然たるシステムを確立するようにした。

また、1967年12月には『金日成著作選集』をはじめ金日成主席の著作を大々的に出版するための具体的な対策を講じた。これとともに、革命と建設に関する金日成主席の革命思想を科学理論的に解説した図書を編纂、発行する措置を講じ、その原稿まで検討しながら細かに指導した。

総書記は党の唯一思想教育の拠点を整備し、それを通じての教育活動を着実に進めるようにした。

1968年４月末、現実発展の要請に即して「朝鮮労働党歴史研究室」を「金日成同志の革命活動史研究室」に改編する方針を示し、「金日成同志の革命活動史図録」（全65編）を新たに編纂して研究室に掲示するようにした。こうして1969年に新しい図録が編纂され、「金日成同志の革命活動史研究室」を通じての唯一思想教育が新たな高い水準で行われるようになった。

総書記は主席の現地指導を受けた主要単位に現地教示碑、革命事績館を唯一思想教育の拠点として立派に整備し、それを通じての教育活動を強化するようにした。そして1968年７月と翌年８月に両江道（リャンガンド）一帯の革命戦跡を訪ね、革命戦跡と革命史跡を主席の革命活動事績を基本にして整備することを根本原則とし、普天堡（ポチョンボ）、三池淵（サムジヨン）、葡坪（ポピョン）など両江道の革命戦跡と革命史跡を革命伝統教育の拠点として立派に整備し、これらを通じての教育活動を強化するうえで提起される具体的な問題を示した。

総書記の賢明な措置と指導によって党の唯一思想教育の拠点が立派に整備され、これを通じての唯一思想教育が着実に進められるようになった。

金正日総書記は金日成主席を中心とする党の統一団結を打ち固め、主席の唯一的指導体系を確立する活動も強力に推し進めた。

1967年５月、党中央委員会の責任幹部たちに、幹部と党員の間で党の思想的・意志的統一団結を成し遂げることを第一として活動する課題を示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

総書記は党組織をしっかり固めてその戦闘力を高め、党員の党生活を強化し、それぞれの持ち場で献身的に働いている新しい世代の先進分子を党に受け入れるための積極的な対策を講じた。こうして党の隊伍はただ金日成主席の思想と指導のみを受け入れる一心の隊伍に打ち固められ、党の統一団結はかつてなく強化されるようになった。

総書記は主席の意図どおり整然とした党活動体系と秩序を確立して、党活動が主席の唯一的指導を実現することに服従するようにし、行政・経済活動においても主席の命令、指示に従って動く強い

規律を確立するようにした。

金正日総書記が党の唯一思想体系を確立する活動を正しく導いた結果、朝鮮労働党を金日成主席の党として強化、発展させ、主席を中心としチュチェ思想に基づく党の統一団結を実現するうえで画期的な前進が遂げられた。

1970年11月に開かれた朝鮮労働党第５回大会では､党の唯一思想体系を確立し､それに基づいて全党の統一団結を強化した党の歴史的勝利を誇り高く総括した。

第３節　党の自衛的軍事路線を貫徹するための活動を指導、先軍政治の開始

1960年代の後半期に入って、金正日総書記は革命発展と新たな情勢の要請に即して国防力を強化するための活動を賢明に指導し、1960年代末に歴史的な先軍政治を開始した。

国防力を強化することは､帝国主義者の侵略戦争挑発策動を粉砕して社会主義建設を成功裏に進めるための必須の要求であった｡ましてそれは､アメリカ帝国主義の朝鮮に対する新たな戦争挑発策動が日増しに激化していた1960年後半期の複雑な情勢のため特別重要な問題となった。

新たな情勢に対処して、金日成主席は1966年10月、党代表者会議を招集し､すでに提示していた経済建設と国防建設を並進させる方針を党の戦略的路線とし、それを貫徹するよう強調した。

金正日総書記は経済建設と国防建設の並進路線の要求に即して

党の自衛的軍事路線を貫徹するための活動に大きな力を注いだ。

1968年２月２日、党中央委員会の活動家への談話『アメリカ帝国主義の戦争挑発策動に対処して万全の戦闘動員準備を整えよう』をはじめ多くの談話で、党の自衛的軍事路線を貫徹して国防力を強化する課題を示し、それを実現するための活動を指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは高い誇りと自負を持って、党の自衛的軍事路線を引き続き立派に貫徹し、国防力をさらに強化すべきであり、敵があえて襲いかかってくるなら勇敢に戦って、英雄的朝鮮人民の不抜の力を今一度、全世界に誇示すべきです」

総書記は全軍幹部化と全軍近代化の方針をさらに強く貫徹して、人民軍を不敗の革命武力に強化することに第一義的な力を傾けた。

1960年８月25日、朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守（リュギョンス）第105戦車師団に先軍指導の第一歩を印した時から1960年末まで、人民軍各部隊に対する数百回もの精力的な現地指導の道を歩み続けた。その過程で人民軍を先軍革命の前衛部隊、手本として育てるとともに、先軍革命指導を新たな高い段階に発展させ、先軍政治を始めることのできる強固な基礎を築いた。

1964年６月23日、朝鮮人民軍総参謀部の幹部との談話『人民軍は金日成同志と朝鮮労働党に限りなく忠実な革命の前衛部隊になるべきである』で、人民軍を金日成主席と朝鮮労働党に限りなく忠実な革命の前衛部隊にするのが自身の揺るぎない決心であり、意志であるとし、そのためには人民軍内の指揮メンバーから党と領袖に限りなく忠実でなければならないと述べている。

総書記は軍事教育事業を改善することにも深い関心を払った。

1966年４～５月にある軍官学校を数回にわたって現地指導しながら、金日成主席に忠実な軍事指揮官を育てるために引き続き力を尽くし、正規生活と訓練で人民軍の手本となるためにたゆみなく努力すべきだと強調し、その後、各軍事学校を訪ねては、軍事教育と部隊管理で積んだその軍官学校の経験を各級軍事学校に一般化するようにした。

1973年２月８日、金日成軍事大学（当時）を訪ねては、大学内に党の唯一思想体系を確立し、学生に対する教育事業を一層改善して、党と領袖に忠実で有能な軍事指揮官をより多く育てるよう強調した。

総書記は全軍近代化の方針が確実に貫徹されるようにするため、軍人の間で戦闘訓練を強化するようにした。

1964年10月18日と1966年には各航空区分隊を、1965年５月と翌年８月には東・西海岸の海軍部隊を、1965年５月には鉄（チョル）嶺を越えて最前線の戦車部隊を、1967年７月には東海岸の海岸砲中隊を訪ねるなど各部隊と区分隊を現地指導した。そして飛行訓練や航海訓練など軍事訓練を指導しながら、訓練要綱を狂いなく実行し、チュチェ戦法を体得させることに基本を置いて戦闘訓練を着実に進めるようにした。

総書記は人民軍の武力装備を朝鮮の実情と朝鮮人の体質に適したものにし、近代化するための活動にも力を入れた。

1964年から1970年の間にある兵器工場を何回も現地指導しながら、朝鮮人の体質に適した武器を造ることを教え、1967年８月にはほかの兵器工場を訪ねて、山間地帯の多い朝鮮の実情に適した武器を生産するよう導いた。

総書記は全人民武装化と全国土要塞化を強力に促進し、全人民的防衛体系を確立することに深い関心を払い、1967年１月23日には全国を難攻不落の要塞にする方針を示した。

全人民武装化を実現するため、労農赤衛軍の隊伍をさらに拡大、強化し、その指揮体系をより整然と打ち立て、軍事訓練を強化して労農赤衛軍隊員の軍事技術水準を人民軍軍人の水準に引き上げるようにした。また全国土要塞化のために東・西海岸の軍事要衝を視察しながら、地理的特性に合わせて防御陣地を堅固に築くようにした。

1960年代の金正日総書記の先軍革命指導は、人民軍に対する政治的・思想的指導とともに、軍事作戦指揮権を行使できるように全軍を確固と掌握する過程であり、先軍政治を開始する基礎が築かれる過程でもあった。

金正日総書記は1960年代末に先軍政治を開始した。この日々に卓抜な政治的・軍事的実力を示し、軍建設をはじめ革命と建設の各分野にわたって不滅の業績を積み上げた。それゆえ、総書記は党と人民、人民軍将兵の絶対的な信頼を受け、敬慕された。特に抗日革命闘士をはじめ人民軍指揮メンバーは、実際の体験を通じて金正日総書記を指導者としてだけでなく、朝鮮人民軍最高司令官として遇し仰いだ。

総書記は、金日成同志は1960年代末、1970年代初から、わたしに党と軍の活動を直接受け持って指導するよう命じたと語っている。総書記はこの時期、人民軍指揮メンバーに、これから人民軍の活動により深い関心を払うつもりだ、わたしは金日成同志の意図を実現するため、人民軍内の責任幹部がわたしと一緒に力を合わせて最後までともに進むものと信じる、と意義深い言葉を述べている。

総書記は全軍に対する政治的･軍事的指導を行うことから先軍政治を始めた。

1969年１月の人民軍党委員会第４期第４回拡大総会を契機に、金正日総書記による全軍に対する党の指導、政治的指導が全面的に行われるようになった。

総書記は人民軍党委員会第４期第４回拡大総会での主席の教示どおり、人民軍内の党組織と政治機関の役割を強め、唯一思想教育を強めることに大きな力を注いだ。

1969年１月19日、党中央委員会と朝鮮人民軍総政治局の幹部への談話『人民軍の党組織と政治機関の役割を強めることについて』で、人民軍内の党組織と政治機関の機能と役割を強めるべく綱領的課題を提示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

総書記は軍隊内の政治活動家陣容を打ち固め、新しく設けた政治委員制と政治指導員制の効果が発揮されるようにする一方、政治活動家候補の養成事業を改善、強化し、政治活動家を正規教育機関で再教育する措置をとり、1972年10月をはじめたびたび多くの政治活動家に会って政治活動を正しく行うよう導いた。

総書記は人民軍内で唯一思想教育を決定的に強化するようにした。まず、金日成主席の建軍指導業績を通じての教育に力を入れることに着目した。そして1969年６月25日とその他の機会に、その教育を進めるための方法も具体的に示した。

その後、祖国解放戦争の時期に最高司令部が位置していた所に新しく建てられた祖国解放戦争事績館に主席が着用していた元帥服をはじめ事績資料を提供し、事績館が開館された２カ月後の1971年７月には祖国解放戦争史跡を訪ね、革命事績教育での重要な問題

を具体的に示した。

総書記の細かな指導のもとに、人民軍内では金日成主席の建軍指導業績を通じての教育が党の唯一思想教育の基本として確定され、強力に推し進められるようになった。

総書記は、人民軍での各種の思想教育が忠実性を培う教育と密接に結びついて進められるようにした。人民軍の各区分隊を現地指導しながら、軍人の間で主席に対する抗日革命先達の忠実性の模範を学び取るための教育を強化するようにした。これとともに、党政策教育、革命伝統教育、階級的教育を着実に行い、特に緊迫した情勢の要請に即して戦争に対する正しい観点を確立させるための教育に大きな力を注ぐようにした。

総書記はまた、人民軍に対する軍事作戦上の指導を確実に行っていった。かなり前から朝鮮人民軍総参謀部の活動に深い関心を寄せていた総書記は、特に1960年代の末、総参謀部を通じて人民軍の軍事作戦を巧みに指揮した。

総書記は1968年１月のアメリカ帝国主義の武装情報収集艦プエブロ号の拿捕作戦とその後の敵との激烈な対決を巧みに指導していた。

1968年１月23日、アメリカ帝国主義者は朝鮮の領海に深くプエブロ号を侵入させてスパイ行為を働いた。人民軍総参謀部から正体不明の艦船が元山（ウォンサン）沖に深く侵入してきたという報告を受けた総書記は、その艦船を直ちに取り締まるよう指示した。そしてその艦船が逃走するか抵抗してくる状況を予見して、拿捕作戦をぬかりなく行うよう、総参謀部のメンバーに作戦上の妙案を提示した。

総書記の指揮のもとに、朝鮮人民軍海軍はアメリカの武装情報収

集艦プエブロ号を拿捕した。これは朝鮮民主主義人民共和国の当然の自衛的措置であり、侵略者に対する断固たる懲罰であった。

アメリカ帝国主義者は「報復」を唱えておびただしい兵力を朝鮮半島周辺に集結し、情勢を戦争瀬戸際に追い込んだ。そのため、朝鮮ではいつ戦争が起こるか分からない一触即発の情勢が生じた。

こうしたとき、金日成主席は金正日総書記に、最高司令官という立場でプエブロ号をどう処理すればよいか決心してみるようにと言った。総書記は、わたしはヤンキーどもが降伏書を出すまではプエブロ号の乗組員を絶対に釈放しません、そしてプエブロ号はわれわれの戦利品ですから彼らが降伏書を出したとしても返しません、人民軍が拿捕したアメリカの武装収集艦は後日、博物館に展示しておき、次世代にこれはわれわれがヤンキーどもから分捕った情報収集艦だと説明してやります、と断言した。

1968年１月24日、民族保衛省（当時）へ行って当該幹部から敵情報告を受けた総書記は、アメリカ帝国主義者はプエブロ号事件を口実に戦争を起こすかもしれず、また何をしでかすか分からないから、彼らの策動に対処できるよう、人民軍が徹底した準備を整えるべきだと強調し、敵の「報復」措置を主動的に粉砕する作戦案を示した。この措置に従い、人民軍と労農赤衛軍の全部隊は完全な戦闘態勢に入り、全国の人民も片手には銃を、片手には鎌とハンマーを握って生産と建設を推し進めた。

総書記はアメリカ帝国主義者の破廉恥な侵略策動を世界の面前に暴露するための集中的な言論戦を展開して彼らを窮地に追い込み、反復された朝米板門店会談で謝罪文を取り付けるための闘争を巧みに指導した。その結果、人民軍と人民はアメリカ帝国主義者と

の激烈な軍事的・政治的対決において勝利し、ついに謝罪文を取り付けた。

総書記はアメリカの大型偵察機「ＥＣ−121」を撃墜する軍事作戦も巧みに指導した。

アメリカ帝国主義者はプエブロ号事件から相応の教訓を汲み取ろうとせず、最新式の電子偵察設備を備えた大型偵察機「ＥＣ−121」を朝鮮東海の上空にしばしば侵入させて空中偵察行為を働いた。

金日成主席は1969年３月23日、人民軍にこの大型偵察機を撃墜すべく命令を下した。この日、総書記は人民軍の責任幹部に、主席の命令どおりアメリカの大型偵察機「ＥＣ−121」を航空機を出動させて撃墜すべきだとし、戦闘に参加させる航空機編隊を編制し、敵機を撃墜するための戦術を一つ一つ教えた。こうして1969年４月15日、朝鮮人民軍の飛行士たちは「ＥＣ−121」を撃墜し、それに乗り組んでいた30名余りのアメリカ帝国主義侵略軍を朝鮮東海に深く葬ってしまった。

このように金正日総書記の独創的な先軍政治の展開によって、金日成主席の先軍革命指導を立派に継承し、絶えず深化発展させていける根本的保証がもたらされた。

第４節　文学・芸術革命を起こすための活動を指導、古典的著作『映画芸術論』を発表

金正日総書記は文学・芸術革命を起こすための活動を賢明に指導して、チュチェ芸術の全盛期を開いていった。

1964年12月８日、金日成主席の指導のもとに朝鮮劇映画撮影所で開かれた党中央委員会政治委員会拡大会議では、金正日総書記に文学・芸術部門の活動を受け持って指導することを委任した。

総書記は1965年３月３日、党中央委員会の活動家への談話『文学・芸術部門で革命を起こすために』と同年12月11日の談話、1966年10月、党中央委員会の活動家への談話などで、文学・芸術革命を起こして新たな社会主義的文学・芸術の復興を実現する方針を示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれが20世紀に革命的文学・芸術の手本を創造するためには、文学・芸術部門で一大革命を起こさなければなりません。われわれは文学・芸術部門で一大革命を起こし、わが国で文芸復興を遂げなければなりません。わたしは最近、世界における文学・芸術発展の推移を研究しながら、わが国で文学・芸術革命を起こして新たな社会主義的文芸復興を遂げようと決心しました」

文学・芸術革命を起こして新たな社会主義的文芸復興を遂げるというのは、文学・芸術のすべての分野で時代の要請と人民大衆の志向にかなった朝鮮式の新しい文学・芸術、真のチュチェの文学・芸術を建設することを意味する。

金正日総書記は抗日革命闘争の時期に創作された不朽の名作を映画をはじめ文学・芸術の各ジャンルに再現することを基本にして、文学・芸術革命を精力的に指導した。

総書記は映画革命を先行させて文学・芸術革命の突破口を開いていった。

まず映画革命の担い手である映画人の隊伍をしっかり固め、彼ら

の政治的・実務的水準を高めることに力を注いだ。映画人が金日成主席の文芸思想研究会を定期的に行うようにし、しばしば映画芸術部門の会議を指導しながら、映画人が組織生活を通じて革命的に鍛えられ、創作の過程で徹底的に革命化、労働者階級化されていくように導いた。

映画人の芸術的技能を高めるために、演技訓練、話術訓練、美学理論を深く体得するための芸術学習を強化し、技量発表会と舞台公演を定期的に行うようにした。

こうした下準備に基づき、映画創作活動に革命的転換をもたらすための活動に精力的に取り組んだ。

1967年２月26日に白頭山（ペクトゥサン）創作団を組織し、『同志よ！　この銃を受け取れ』をはじめ抗日革命闘争回想記をテーマにした映画や劇映画『遊撃隊の５兄弟』など革命伝統をテーマにした作品創作過程で貴重な経験を積ませた。こうした準備に基づき、1968年４月、映画芸術部門の創作家に、金日成主席が抗日革命闘争の時期に創作した不朽の名作『血の海』を映画化する課題を与えた。そして、この作品の映画化に当たって、原作に忠実でありながらも映画芸術のジャンルとしての特性を正しく生かす原則を堅持するよう強調し、何回も指導した。

劇映画『血の海』を完成させた後は、古典的名作『ある自衛団員の運命』の映画化をわずか40日の間に立派に成し遂げさせることによって、映画人が「速度戦」の火ぶたを切るようにした。これについで古典的名作『花を売る乙女』を脚色した劇映画『花を売る乙女』も成功裏に完成させた。

総書記は不朽の名作を映画化する過程で、新しい創作指導体系と

創作体系を打ち立てた。

1970年６月18日、作家、演出家への談話『社会主義の現実を反映させた革命的映画をより多く創作しよう』で、全社会の革命化、労働者階級化に寄与する社会主義の現実をテーマにした映画をより多く創作する課題を示し、それを実現するための理論的・実践的諸問題を明らかにした。そして数多くの現実をテーマにした作品の種子を選定し、それらの映画の創作過程を細かに指導した。そうして1970年の1年間だけでも『花咲く村』をはじめ数十編の映画が成功裏に制作された。

総書記は主席の革命活動史と党の歴史を基本とする記録映画を立派につくり、科学映画、児童映画を発展させるためにも尽力した。

総書記は映画革命について歌劇革命を起こすための活動を精力的に指導した。

歌劇分野において旧来の形式を打ち破って革新を起こすため、1969年９月には歌劇革命を起こす方針を示し、革命的な内容と民族的形式に基づいて歌劇芸術を近代化、通俗化することを歌劇革命の基本課題として提示した。そして、歌劇を革命的な内容で一貫させる基礎のうえで歌劇の形式を変革し、基本表現手段である歌を有節化し、パンチャン（傍唱）を広く導入し、舞踊をドラマと密着させ、ドラマの進展に伴って絶えず変わる流動式の立体舞台を作り出すという新しい歌劇創作原則を示した。

1971年３月には文学・芸術部門の幹部と創作家たちに、不朽の古典的名作『血の海』を歌劇化する過程を通じて歌劇革命を起こすよう強調し、その実現過程を精力的に指導した。

総書記は原作の深奥な思想的内容を損なうことなく再現し、従来

のすべての歌劇とは根本的に異なる朝鮮式の歌劇台本を作らせた後、中央と地方の優れた創作家、芸能人を選りすぐって創作集団を組織し、革命歌劇の創作過程を指導した。

歌劇創作の日々、創作家、芸能人とともに生活しながら、作品の種子とそれを形象化する方法、歌の歌詞と旋律、舞踊と舞台美術全般にわたって歌劇創作の原則を立派に具現するよう指導した。そして従来の古い創作体系を廃止し、党委員会の集団指導のもとに動く新しい創作体系を打ち立てて歌劇創作の作業全般を統一的に掌握し、全力を歌劇の創作に集中させるようにした。

こうして４カ月後の1971年７月に革命歌劇『血の海』が誕生したのである。革命歌劇『血の海』の完成は歌劇芸術発展の年代記に『血の海』式革命歌劇の新しい歴史を開く始点となった。

総書記は革命歌劇『血の海』を手本として他の革命歌劇の創作を推し進めた。

1971年10月28日には文学・芸術部門の幹部への談話で、『血の海』式革命歌劇の創作原則を具現して思想性・芸術性の高い革命歌劇を創作する課題を示した。そして革命歌劇『党の真の娘』『密林よ語れ』『花を売る乙女』『金剛山（クムガン）の歌』の創作を精力的に指導して１年余りの間にこれら５大革命歌劇を完成させた。

５大革命歌劇が創作された後にも、革命歌劇『ある自衛団員の運命』をはじめ多くの歌劇作品を次々と創作するよう導き、歌劇革命の成果を強固にし、拡大、発展させていった。

総書記は文学作品創作におけるキーポイントは領袖を形象化することにあると見なし、金日成主席を形象化する文学作品の創作に大きな力を注いだ。

1966年２月７日、朝鮮作家同盟中央委員会委員長との談話『新しい革命文学の建設について』で、時代と革命発展の要請、人民と作家の志向を反映させて新しい革命文学、領袖を形象化した文学を建設する方針を示した。そして「新しい革命文学を建設しよう！」という戦闘的スローガンを打ち出し、新しい革命文学は名実共に領袖を形象化した文学であることを明白にした。

総書記は作家たちに、偉大な思想家・理論家としての領袖、百戦百勝の鋼鉄の総帥としての領袖、偉大な人間としての領袖を全面的に深く形象化した作品を多く創作する問題、一定の準備段階をへて次第に大きなスケールで、本格的で旺盛な創作戦闘を繰り広げる問題、新しい革命文学建設に対する指導体系を確立し、作家陣容をしっかり固める問題など、領袖を形象化した文学の建設において提起される理論的・実践的問題とその実現方途を明確に示した。

総書記は領袖を形象化する文学創作活動を細心に指導した。

まず作家たちが金日成主席の接見を受けて、長期にわたる主席の栄えある革命活動史をじかに聞かせてもらえる機会を与えた。作家たちは主席に会って、その偉大さと人間像に魅了され、朝鮮人民の革命闘争の教科書となる文学作品は主席を形象化した文学作品をおいて他にないということを心から強く感じた。

総書記は党中央委員会第４期第15回総会以後、領袖を形象化した文学作品を創作することを焦眉の課題とし、1967年６月20日、領袖形象化を基本とする4・15文学創作団を組織し、1970年５月には主席の革命活動史を形象化した叢書『不滅の歴史』を執筆するうえで提起される理論的・実践的諸問題を明らかにした。そして作品の草稿に自ら目を通して、その思想的・芸術的水準をさらに高めるよう

細かに指導した。

こうして『革命の夜明け』『1932年』をはじめ主席の革命活動史を見事に形象化した叢書『不滅の歴史』系列の多くの長編小説が創作されるようになった。

総書記は主席が抗日革命闘争の時期に自ら創作した作品を小説として再現し、先軍時代の人間の気高い思想的・精神的風格を深く描き出す革命伝統テーマと祖国解放戦争テーマ、社会主義現実のテーマ、祖国統一テーマの作品をより多く創作するよう促した。

総書記は、音楽、舞踊、美術、サーカスなど文学・芸術のすべての分野を全面的に開花発展させるために力を尽くした。

音楽で固有な民族的旋律を正しく生かし、それを基調にして歌をなめらかでやわらかく、人民に理解しやすいものにし、民族楽器に洋楽器を組み合わせた主体的な管弦楽を創造し、民族的香りがあふれる軽音楽を発展させるようにした。そして舞踊芸術では民族的特性を正しく生かし、朝鮮人民の高尚な思想・感情と現代的美感にかなった舞踊作品をより多く創作するよう指導し、『雪が降る』『祖国のつつじ』『箕の踊り』『リンゴの豊作』をはじめ思想性・芸術性の高い立派な名作が生まれるようにした。また美術では朝鮮画を基本として、彫刻、工芸など美術の各種類と形態を民族的なものを基調にして全面的に発展させ、同時に刺繍と陶磁器工芸、手工芸などを高尚な芸術に発展させていくようにした。サーカス分野でも主体性を確立し、サーカスを社会主義的内容と民族的形式が正しく結合された主体的な民族サーカスに発展させるようにした。

金正日総書記は映画革命をはじめ文学・芸術革命を指導する過程で積み上げた成果と経験を理論的に一般化し集大成して、1973

年４月11日、著作『映画芸術論』を発表した。

この著作で、共産主義的人間学に関する理論、文学・芸術作品のチョンジャ（種子）に関する理論、文学・芸術創作において「速度戦」に関する理論、革命的大作の本質に関する思想・理論、創作の過程を作家、芸術家の革命化、労働者階級化の過程にする理論、革命的な創作体系と創作指導体系に関する理論、主体的な映画演出理論と俳優演技理論をはじめ撮影、美術、音楽などチュチェの文学・芸術建設において提起される理論的・実践的諸問題を新たに解明した。

著作『映画芸術論』は主体的な文学・芸術建設のすべての原理的問題と理論的原則を全一的に集大成したチュチェの文芸理論の叢書であり、自主時代の文学・芸術建設の偉大な指導指針である。

第５節　新たな革命的大高揚を起こし、３大技術革命を促進するために

金正日総書記は1960年代の後半期、社会主義建設で新たな革命的大高揚を起こすために力を注いだ。

金日成主席は1967年６月末～７月初、党中央委員会第４期第16回総会を招集し、新たな革命的大高揚を起こす方針を打ち出した。

金正日総書記は主席が示した方針を実行するための活動を推し進めた。

1967年６月13日の談話『政治的・道徳的刺激と物質的刺激に対する正しい理解のために』で、社会主義経済建設において提起さ

れる理論的・実践的諸問題を科学的に解明した。

まず政治的･道徳的刺激と物質的刺激の結合に関する問題を正しく解明することを単なる理論上の問題としてではなく､社会主義建設を成功裏に推進するための重大な問題と見なした｡そして物質的刺激を絶対視する傾向と政治的･道徳的刺激を絶対視する傾向に対し批判した。

金正日総書記は次のように述べている。

「政治的・道徳的刺激を基本とし、それに物質的刺激を適切に結合させるのは、人民大衆の革命的熱意と生産意欲を高めて社会主義建設を力強く促進させる最も正しい方途です」

総書記はまた､社会主義経済建設における速度と均衡の相互関係の問題についての誤った理論に終止符を打ち､社会主義経済建設の根本目的と社会主義制度の本質的優越性､わが国の社会主義経済建設の実践的経験に基づき速度を第一義的に重視し､これに均衡を取り合わせるべきだと説いた。

金正日総書記は全人民を新たな革命的大高揚へと奮起させるための思想戦を展開するようにした。

1967年７月３日、党中央委員会の活動家への談話『経済建設と国防建設で革命的高揚を起こすための思想宣伝の強化について』で、全人民を大高揚へと奮い立たせるための思想活動の方向を示した。経済建設と国防建設で大高揚を起こすためには決定的に党思想活動から革新しなければならないとし､すべての勤労者が自力更生、刻苦奮闘の革命精神を強く発揮して最大限に増産、節約し、技術革命を強力に展開し、チョンリマ作業班運動を活発に展開するようにすることに党思想活動の重点を置かなければならないと教えた。

総書記は大衆の中に入って､勤労者を新たな革命的高揚へと奮い立たせた。

1967年７月、主席に同行して降仙（カンソン）製鋼所（当時）を訪ねた総書記は､この製鋼所の労働者たちが革命的大高揚の先頭に立ってチョンリマ作業班運動先駆者の栄誉を引き続き固守していくよう励ました。

また同年８月には主席が革命的大高揚の先頭に立たせた竜城（リョンソン）の労働者を訪ね､革命的大高揚を起こすという党の新しい方針の本質と意義を詳しく説明し､彼らが革命的大高揚の先頭に立って進むようにさせた。

竜城の労働者は経済建設と国防建設並進路線の貫徹において革新を起こすことを全国の労働者に呼びかけるとともに､新たな革命的大高揚を起こし､1967年度の人民経済計画を80日余り繰り上げて10月10日以前に超過遂行した。

総書記は､各級党組織が党員と勤労者を竜城の労働者の呼びかけに呼応させるための組織・政治活動を展開し、党機関紙をはじめ出版物と放送を通じて竜城の労働者と各地の勤労者の生産成果を広く宣伝するようにした。こうして人民経済のすべての部門では竜城の労働者の模範にならって党創立記念日である10月10日までに年間計画を超過遂行する成果をあげた。

金正日総書記は社会主義経済建設のすべての部門で新たな高揚を起こし､社会主義的工業化の歴史的課題を実現するための活動を賢明に指導した。

まず社会主義的工業化を実現するうえで中心的課題である自立的で近代的な工業建設を促進することに大きな力を注いだ。

長津江(チャンジンガン)発電所と平壌(ピョンヤン)火力発電所（当時）、北倉(プクチャン)火力発電所（当時）の建設現場へ出向いて発電所の建設を早め、発電能力を高めるようにした。そして、金策(キムチェク)製鉄所（当時）と清津(チョンジン)製鋼所、黄海(ファンヘ)製鉄所（当時）を訪ねては、新しい製鉄法を研究、完成して金属工業で革新を起こすようにし、2・8ビナロン工場（当時）、興南(フンナム)肥料工場（当時）を現地指導したときには化学工業の主体性を強化し、早急に生産を増大させるようにするなど、国内の原料に依拠する工業を発展させるために尽力した。また各地の機械製作工場を訪ねては機械工業部門で技術革新運動を強力に推し進めて、新しい大型機械と精密機械を大量に生産するようにし、平壌と咸興(ハムフン)、亀城(クソン)の軽工業工場と各地の地方産業工場を視察し、地元の原料、資材を利用して良質の軽工業製品を大量に生産するよう指導した。

さらに工業部門の技術改造を推進するため、基幹工業部門の多くの工場、企業と地方産業工場を現地指導しながら、技術革新運動を大衆的運動として広範に展開して生産工程の機械化、半オートメ化、オートメ化を実現し、地方工業の技術装備を早く改善するようにさせた。

また、テアンの事業体系が効果を発揮するよう何回も大安(テアン)電機工場（当時）を訪れ、テアンの事業体系の貫徹において模範を示すよう指導し、1968年４月には資材供給委員会（当時）を現地指導して、テアンの事業体系の要求どおり資材供給事業を改善するよう細かに指導した。

金正日総書記は農業を発展させるための事業を賢明に指導した。

金日成主席が確立した新しい農業指導体系の優越性を高く発揮させることに深い関心を払い、主席の指導業績が秘められている多

くの郡と協同農場を現地指導しながら、郡協同農場経営委員会が農業生産に対する技術的指導を強化することに力を集中し、分組管理制の生命力を十分発揮させるよう指導した。

1967年と1968年に重要な穀物生産地帯である西海岸の各農村に出向いて、全力を農作業に集中し、地域別の特性に即して農業を科学的に営んで穀物生産を高めるよう強調し、山間部の協同農場では山を効果的に利用して畜産と果樹栽培、養蚕業、養蜂業など農業を多角的に発展させるよう指導した。

そして稲刈機や小型トラクターをはじめ農業機械を国の実情に合うように作り、それをより多く生産、供給し、その利用率を高めるとともに、水利化を推し進めるように指導した。また農村の技術革命遂行において青年を先頭に立たせるようにした。

新たな革命的大高揚が起こるなかで、社会主義的工業化の歴史的課題が実現され、朝鮮は自立的工業と発達した農業を持った社会主義工業国に変わった。

金正日総書記は朝鮮労働党第５回大会以後、３大技術革命を推し進めることに深い関心を払った。

金正日総書記は次のように述べている。

「現段階において勤労者を骨の折れる労働から解放するために当面して提起される最も重要な問題は３大技術革命の課題を遂行することです。われわれは３大技術革命の課題を成功裏に遂行することによって、勤労者を骨の折れる労働から解放しようという金日成同志の高志と遠大な構想を立派に実現しなければなりません」

金日成主席は朝鮮労働党第５回大会で、重労働と軽労働の差異、

農業労働と工業労働の差異を著しく縮め、女性を家事の重い負担から解放することを基本内容とする３大技術革命の課題を打ち出した。

金正日総書記は３大技術革命の課題遂行において、高熱労働と有害労働をなくし、重労働と軽労働の差異を縮めることに大きな力を注いだ。これを実現するためのキーポイントを生産工程のオートメ化に求め、工業部門での全面的オートメ化の実現に精力的に取り組んだ。

1972年８月初、幹部たちに、社会主義的工業化時期の技術革命が筋肉労働を機械労働に変えることであれば、社会主義的工業化以後の技術革命は機械が機械を動かすようにするのが基本的特徴であると述べた。そして1972年10月23日をはじめ多くの談話で全面的オートメ化を実現するという革命的方針を示し、勤労者を骨の折れる労働から完全に解放するためには、生産のオートメ化、人民経済の全面的オートメ化を実現しなければならないとした。

そして、生産をオートメ化することは単に生産工程を改造するための技術的・経済的課題ではなく、搾取と抑圧から解放された勤労者を骨の折れる労働から解放するための重要な政治的課題であると強調した。

総書記は全面的オートメ化を実現するため、黄海製鉄所をオートメ化のモデルケースとすることを決心し、その実現に取り組んだ。

1973年１月、有能な技術者を根幹として編成したオートメ化推進グループを黄海製鉄所に派遣し、１月28日には党中央委員会の責任幹部への談話『生産をオートメ化して勤労者を骨の折れる労働から解放しよう』で、黄海製鉄所をオートメ化のモデルケースとして立派に整え、その経験を全国に一般化させて、人民経済のすべ

ての部門でオートメ化の実現に取り組むようにすべきだと述べた。

総書記は、オートメ化が到達できる最高水準のモデルにすることを黄海製鉄所オートメ化の目標として示し、それを実現するための段階別の課題を明らかにした。その第１段階は鋼鉄職場の産業テレビ化と無線化を実現して、幹部と勤労者にオートメ化の冥利を味わわせ、第２段階ではふるい分け場のような比較的単純な生産工程をリモコン化して、オートメ化を十分自力で実現できるという自信と経験を持たせ、第３段階では２工程以上の複雑な生産工程で構成されている各職場、さらには高炉と平炉をリモコン化して、勤労者を高熱労働と有害労働から完全に解放することであった。

総書記は1973年３月に開かれた党中央委員会政治委員会で、黄海製鉄所をオートメ化するための活動を促進し、それに対する党と国家の支援を与えるための具体的な対策を立てるようにした。

そして、労働者と技術者の間で、自力で他国に劣らずオートメ化を実現できるという自信を持って自力更生の原則を守るよう政治活動を強化する一方、中央放送分遣隊と芸能宣伝隊を派遣してオートメ化の工事場を大いにわき立たせた。また黄海製鉄所のオートメ化と関連のある全国の工場、企業、科学研究機関が黄海製鉄所を積極的に支援するようにさせた。またこのオートメ化を進めるために数十回もの重要な指示を与え、数回にわたって必要なオートメ化機具、要素、設備などを提供した。こうして１年余りの間に黄海製鉄所は全面的オートメ化のモデルケースとして立派に整えられた。

総書記は黄海製鉄所で創造されたオートメ化のモデルを全国に一般化させるための活動を推し進めた。

1973年12月、主要工場、企業の責任幹部と３大革命グループの責

任者たちの方式講習を行って黄海製鉄所のオートメ化の経験を一般化させるようにし､オートメ化の経験を積んだ技術者たちを主要工場、企業へ派遣する措置をとった。そして、検徳(コムドク)鉱山（当時）をはじめ各鉱山に一式揃えた選鉱場のリモコン設備と各種のオートメ化機具、設備、要素、設計図面などを提供した。そして党機関紙に｢現代はオートメ化の時代だ。黄海製鉄所ののろしを受けて半オートメ化､オートメ化の炎を全国に燃え上がらせよう」という社説を掲載させ､宣伝･鼓舞手段を動員してオートメ化の成果を一般化させるための宣伝・鼓舞活動を活発に展開させた。

こうして黄海製鉄所で燃え上がったオートメ化の火の手はまたたくまに全国に燃え広がり、金属、化学、採掘、建材など工業部門の多くの工場､企業で生産工程の産業テレビ化､リモコン化が実現されていった。

総書記は生産工程のオートメ化とともに､骨の折れる作業の総合的機械化にも深い関心を払った。特に、炭鉱、鉱山の採掘設備と運搬設備を大型化、高速化し、林業、建設などの部門で近代的な機械設備手段を大々的に導入して機械化の水準をさらに高めるようにし、それに必要な条件をすべて充足させる措置をとった。

金正日総書記は農業労働と工業労働の差異を縮めるための農村技術革命を遂行することに心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日、農村技術革命で力を集中すべき問題は、機械化を力強く推し進めることです。農民を骨の折れる労働から解放するためには農業の機械化を実現しなければなりません」

総書記は農業の物質・技術的手段を強化するため、金星(クムソン)トラク

ター工場と勝利自動車総合工場（当時）に黄海製鉄所でのオートメ化の成果を取り入れて生産工程を近代化しトラクターの生産能力を高め、自動車生産基地を拡充するようにした。そして1973年11月に生産鼓舞隊をこれらの工場へ派遣して40余日間、集中的な生産鼓舞活動を展開させた。こうして1973年に年間トラクター生産計画は超過遂行され、１万台の自動車生産課題も成功裏に遂行された。

総書記は各道に農業機械工場を立て、各郡には部品生産基地と修理基地を設け、各協同農場には簡単な農業機械を製作、修理できる物質的・技術的土台を築くようにさせた。

総書記は青山（チョンサン）里を農村技術革命のモデルにし、その成果と経験を全国に一般化させることに力を注いだ。

1971年５月12日、現地へ出向いて青山協同農場の管理委員長、田植えに動員された芸能人に行った談話『青山里を大いに支援しよう』で、青山里を農村技術革命のモデルにつくりあげる課題を示した。そして、新しい農業機械が生産されると、それをまず青山里に提供し、必要な物質的・技術的支援と勤労支援を強めるようにした。また青山協同農場の管理役が先に農業機械を巧みに扱う技術を習得するよう課題を与え、田植え作業の機械化を青山里が先に実現し、すき起こしと種まき、草取り、刈り入れ、脱穀に至るまで、営農作業をすべて機械化する対策を立てた。これとともに、農業の総合的機械化と化学化のモデルをつくりあげた青山里の経験を広く宣伝するようにした。

総書記は、農村技術革命を促進するうえでトラクター運転手の役割を強めるようにした。

６カ年計画初年度の1971年２月に開かれた全国トラクター運転

手大会がトラクター運転手の役割を強めるうえで重要な契機となるようにし、1972年３月には銀波（ウンパ）郡の養洞（ヤンドン）協同農場と玉峴（オクヒョン）協同農場のトラクター運転手たちに会い、彼らに農村へ派遣された機械化戦士としての高い栄誉と責任感を持って農村技術革命の先頭に立つよう励ました。

金正日総書記は女性を家事の重い負担から解放するための技術革命を積極的に推し進めた。

まず主食の生産を工業化するため、市、郡ごとに製麺工場、炊飯工場、トウモロコシ加工米工場、食品加工工場の建設を大衆的運動によって短期間内に完成させるようにした。そして副食物の生産を工業化するため、各地に野菜加工工場、魚類加工工場、果実加工工場を建設してさまざまな加工食品をより多く生産、供給できるようにした。また、家庭用冷蔵庫や洗濯機をはじめいろいろな台所用品の生産でネックとなっていた問題も解決し、全国的に農村の水道化を促し、託児所、幼稚園も立派に整備するようにした。

３大技術革命の課題が円滑に進められることによって、朝鮮人民は骨の折れる労働からかなり解放され、より自主的で創造的な生活を享受することができるようになった。

第６節　金日成主席の生誕60周年を民族最大の祝日として迎えるために

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年を民族最大の祝日として迎え、これを契機に全人民が主席への忠誠心を深く刻みつけ、チ

ュチェの革命偉業､先軍革命偉業を代々継承し完成するためにすべてを捧げていく決意と覚悟をさらに強く固めるよう導いた。

金日成主席の生誕60周年を民族最大の祝日として意義深く迎えることは全朝鮮人民の切なる願いであり､全世界の進歩的人民の一致した念願でもあった。

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年を契機に、すべての党員と勤労者に主席の開拓したチュチェの革命偉業､先軍革命偉業を代々継承し完成させていく崇高な使命感を抱かせることに大きな力を注いだ。

1971年８月､革命の聖山白頭山に登って述べた言葉と1972年４月、主席の生誕60周年慶祝行事に参加した代表たちへの談話､1972年４月22日、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部への談話『新しい世代の人民軍指揮メンバーを朝鮮革命の血統をしっかり継いでいけるように準備させなければならない』をはじめ多くの機会に、主席が開拓したチュチェの革命偉業､先軍革命偉業を代々継承し完成させていくことについて強調した。

総書記は、主席が切り開いたチュチェの革命偉業、先軍革命偉業を代々継承し完成させていくのは時代に対し担っている朝鮮人民の崇高な使命であるとし､その使命を全うするためには主席の革命思想を断固擁護し、あくまで貫徹し、主席が築いたチュチェの革命伝統と革命業績を永久に固守し、立派に継承、発展させていかなければならないと強調した。

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年を民族最大の祝日として最も意義深く盛大に迎えるための活動に力を注いだ。

1971年10月29日、党中央委員会の活動家への談話『金日成同志

の生誕60周年を民族最大の祝日として迎えるために』で、主席の生誕60周年を最も慶ばしい最大の民族的祝日として迎えるための課題を示した。そして、主席の生誕60周年を意義深く盛大に迎えるための準備にしっかり取り組んで、党員と勤労者に対する政治・思想活動を活発に展開し、彼らを新たな革命的高揚へと立ち上がらせなければならないと語った。

また、主席の偉大な革命業績を末永く伝え輝かせるための活動に力を入れ、全党と全人民を主席のまわりに固く団結させるための思想教育活動を一層積極的に繰り広げ、党員と勤労者を社会主義経済建設に奮い立たせるための宣伝・鼓舞活動を活発に展開し、60周年慶祝行事が円滑に行われるようぬかりなく準備することを再三強調した。

金正日総書記は金日成主席の偉大さと不滅の革命業績を末永く伝え、輝かせるための活動に第一義的に力を入れた。金日成主席の生誕60周年を迎えて、平壌の万寿台（マンスデ）の丘に主席の銅像を丁重に建立し、白頭山で戦った偉人たちの革命事績が集大成されている朝鮮革命博物館を新設するようにし、これが党員と勤労者の高い忠誠心によって進められるようにした。

また1971年９月には両江道内の革命戦跡を見て回りながら、革命戦跡と革命史跡を万年大計の構図で整備する課題を示した後、全国の革命戦跡と革命史跡を真心をこめて整備し、革命事績碑を立てるようにし、各道に「金日成同志の革命事績館」を新たに開館するようにした。

こうして、金日成主席の生誕60周年を契機にして、1971年と1972年上半期の間に、主席の銅像を建立した万寿台の大記念碑と茂山（ムサン）

地区戦闘勝利記念塔をはじめ数多くの革命戦跡、革命史跡が立派に整備された。

また主席の生誕60周年を契機に、金日成勲章と金日成賞、金日成青年栄誉賞、金日成少年栄誉賞、それに主席の尊名入りの時計表彰制が制定され、主席生誕60周年行事に参加した代表たちにその時計が授与された。これとともに、主席の肖像バッジがすべての人民に授与された。

総書記は1970年９月、主席の健康を祈る頌歌を創作することを発起し、この創作を熱心に指導し、頌歌『金日成主席の万年長寿を祈ります』が完成されると、それを広く普及させた。

そして、主席の生誕60周年に際して世界各国の党及び国家首班をはじめ各界の人士から寄せられた贈り物を貴重な国宝として保存し、末永く伝えるための贈物陳列館を立派に建てるようにした。

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年を迎え、全党と全人民を主席のまわりに強く団結させるための活動に一層力を入れた。

金正日総書記は次のように述べている。

「党思想活動部門が立派に活動して、全党と全人民を金日成同志のまわりにさらに強く団結させるならば、それは金日成同志の生誕60周年を迎えて金日成同志に捧げる最大の贈り物となるでしょう」

総書記は党員と勤労者に対する思想教育が、主席の思想と指導、徳性の偉大さを深く体得して主席に忠誠を尽くすようにすることに重点を置いて行われるよう指導した。

また、主席の革命思想の偉大さ、指導の賢明さと不滅の業績、高邁な徳性を解説または著述した出版物を多く発行することに大き

な意義を付与した。

ことに1971年10月に主席の略伝編纂委員会を設け、略伝編纂の全過程を細かく指導した。こうして主席の栄えある革命活動史を収録した『金日成同志の略伝』『人民の自由と解放のために』（年代順）をはじめ革命歴史図書や革命的文学・芸術作品が数多く出版されて広く普及された。

総書記は1972年４月、主席の革命思想、チュチェ思想を広く解説、宣伝するための全国社会科学者大会と部門別科学討論会、記念講演会を盛大に開催させると同時に、主席の対外活動を収録した記録映画を制作して上映させるようにした。

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年を意義深く迎えるため、社会主義経済建設で新たな高揚を起こすための闘争を強力に展開するよう指導した。

人民経済のすべての部門、すべての単位で６カ年計画の２年分の課題が繰り上げて遂行されるようにするため、党員と勤労者に対する政治活動を活発に展開し、技術革命の遂行で新たな革新を起こすようにした。

とりわけ６カ年計画遂行のキーポイントである工作機械の生産で高揚を起こし、主席の生誕60周年以前に３万台の工作機械生産目標を達成し、炭鉱、水産部門をはじめ人民経済の主要部門で革新を起こすようにするための生産鼓舞活動に力を集中させた。この措置によって、工作機械工場、炭鉱、水産部門に芸能人が派遣され、強力な生産鼓舞活動は勤労者の生産熱意を高めた。

金正日総書記は金日成主席の生誕60周年慶祝行事が高い政治的・思想的水準で大政治祝典として行われるよう賢明に指導した。

この慶祝行事が主席の革命業績をさらに輝かし、主席のまわりに固く団結した党と人民の統一団結を示威することに中心を置いて行われるようにした。主席の生誕60周年を迎え、全国芸術祭と全国の部門別芸術サークル総合公演が盛大に行われるようにした。そして全国体育祭を盛大に催し、５万の学生青少年が出演するマスゲーム『労働党の旗のもと』を高い水準で創作するよう具体的に指導した。こうして、金日成主席の生誕60周年慶祝行事はかつてない大きな規模で行われた。

世界の革命的人民も主席の生誕60周年を祝って数多くの祝賀メッセージや祝電、祝旗、贈り物を寄せ、多彩な慶祝行事を催した。

その後、金正日総書記は金日成主席の誕生日を民族最大の祝日として慶祝することを伝統化するようにした。

第７節　党活動を改善、強化するために

朝鮮労働党第５回大会以後、金正日総書記は党と革命発展の要請に即して党活動を改善、強化するための活動を精力的に指導した。

金正日総書記はまず、党組織活動を抜本的に改善することに大きな力を注いだ。

総書記は全党に新たな党生活総括制度を打ち立てるようにした。新しい党生活総括制度のモデルをつくるため、1970年代初から文学・芸術部門のいくつかの党細胞で新しい形式の党生活総括を行うようにし、1972年８月に文学・芸術部門のすべての党組織に新しい党生活総括制度を一般化させた。

総書記は実践によってその優越性が実証された新しい党生活総括制度を全党に一般化するため、1973年８月21日、党中央委員会責任幹部協議会で、『全党に新しい党生活総括制度を確立することについて』と題する演説を行った。

この演説で、全党に新しい党生活総括制度を確立するためには、その本質と優越性、生命力を党員にしっかり認識させ、党細胞書記と初級党組織の役割をさらに高めなければならないと述べた。

総書記は党勢を拡張し、その質的構成を改善する活動を着実に進めた。

重要な部門の党組織を強化する方向で党勢を積極的に拡張していくようにし、新しい世代、特に労働青年の中から先進分子を多く入党させ、現在の動向を基本にして党に受け入れるようにした。

金正日総書記は、党の思想活動を革命的に改善、強化することに深い関心を払った。

1973年８月17日、党中央委員会の責任幹部会議で行った演説『宣伝扇動部の基本任務について』をはじめ多くの著作で、党の思想活動を革命的に改善、強化するための課題と方法を示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

まず党の思想活動の内容をきちんと定め、党の思想活動では金日成主席の革命思想で党員と勤労者を武装させることを基本とし、その内容を主席の革命思想教育で一貫したものにするための対策を立てた。

1973年３月には党学習網の運営状況を調べ、まちまちになっていた学習班の名称を「金日成同志の革命思想学習班」と改め、すべての学習班が主席の著作を基本にして学習するようにした。そして

同年12月から、党中央委員会第４期第15回総会直後につくられた『金日成同志の革命活動史図録』を現実発展の要請に即して編纂し直すようにした。また「金日成同志の革命活動史研究室」と「金日成同志の教示研究室」を統合して「金日成同志の革命思想研究室」に改称し、その研究室をさらに整備し、それを通じてチュチェ思想の原理教育と忠実性を培う教育を幅広く掘り下げて行うように導いた。

総書記は、党の思想活動の方法を革命発展の要請に即して改善するよう指導した。

1973年春、文化芸術部（当時）の責任幹部に問答式学習方法のモデルケースをつくる課題を与え、同年６月には中央芸術団体の問答式学習コンテストを行って経験を積ませたうえで、全国芸能人学習コンテストの開催を発起した。こうして同年10月末から11月初にかけて第１回全国芸能人学習コンテストが開かれた。

総書記は1973年11月５日、第１回全国芸能人学習コンテスト参加者たちに行った演説で、問答式学習方法の優越性とそれを具現する方途を示した。

全国芸能人学習コンテスト以後、各級党組織では問答式学習に関する方法論が立てられ、道・市・郡党委員会で問答式学習のモデルケースをつくってそれを一般化させる活動が進められた。

総書記は講演活動の改善に大きな力を注いだ。とりわけ講演の方法を改善するため、講師を有能なメンバーで固め、彼らの水準を高めるための対策を立てた。そして、模範講演、講演コンテスト、巡回講演などを定期的に行って優れた講演方法を広く一般化させ、講演の内容と形式を多様なものにする一方、講演テキストの作成につ

いても細かに指導した。

総書記は党の思想活動の方法を改善するため、抗日遊撃隊式の生産鼓舞活動を強力に展開するようにした。

1973年６月に生産鼓舞隊を組織して、載寧（チェリョン）鉱山、殷栗（ウンリュル）鉱山へ行って採掘工業の振興を促すようにし、抗日遊撃隊式の大衆政治鼓舞方法を具現した新しい生産鼓舞活動経験を積ませた。そしてこの経験に基づき同年11月には金星トラクター工場と勝利自動車総合工場で大がかりな生産鼓舞活動を行わせて、新しい生産鼓舞活動の手本をつくりだした。

そして抗日遊撃隊式の生産鼓舞方法を全国に一般化させるため、生産鼓舞隊を組織し、その活動をさまざまな形式と方法で活発に行うよう指導した。

平壌市と各道、職業総同盟と青年同盟をはじめ勤労者団体に生産鼓舞活動を専門とする芸能宣伝隊を組織し、主な工場、企業、協同農場には働きながら活動する機動芸能宣伝隊を組織させた。同時に、新聞、放送、テレビ、映画を通じての生産鼓舞活動も強化し、党、行政・経済活動家がじかに社会主義建設の現場へ出向いて生産鼓舞活動を行うようにした。

金正日総書記は党活動体系と方法の改善に深い関心を払った。

金正日総書記は次のように述べている。

「…発展する現実の要請に即して活動体系と活動方法をさらに改善しなければなりません」

総書記は革命的な職能をつくり、それに基づいて活動する厳格な秩序を確立するようにした。

1973年９月に新しい職能をつくる課題を提起し、それを作成する

基本的方向と方法を示した。そして、党中央委員会の各部署で新しくつくった職能の草案を検討して完成させるとともに、すべての党組織が新しい職能に基づいて活動し、党活動総括を職能に照らして行うようにする体系を打ち立てた。また、職能を絶えず補足して完成させていくようにした。

総書記は党活動家が下部へ出向いて助ける整然たる下部指導体系を確立した。

1973年８月、党中央委員会の責任幹部の会議で、活動家が下部へ出向く体系を確立するよう強調し、下部指導の周期も定めた。そして1973年11月８日には下部指導体系に基づいて地方の党組織に対する指導活動をして帰ってきた責任指導員たちの協議会を指導しながら、新しい下部指導体系が効果を発揮できるようにするための課題と方途を示し、必要な対策も立てた。同時に、活動家が下部へ出向くのに支障がないよう、党機関の機構体系を改編して、活動家の職制と分担をきちんと定め、彼らがいつも大衆の中に入って着実に活動するようにした。

金正日総書記は党活動の行政化をなくし、すべての活動家が党活動を徹底した対人活動に切り換えるよう指導した。

1973年11月、党中央委員会責任指導員協議会で、党活動の行政化をなくす課題を示し、活動家がすべての活動において思想活動、政治活動を先行させることによって党活動が真の対人活動になるようにした。

金正日総書記の賢明な指導により、朝鮮労働党は生気に満ちて活動する革命的で戦闘的な党に強化されるようになった。

第８節　祖国統一の３大原則と５大方針を実現するために

金正日総書記は祖国統一の３大原則と５大方針を実現するための闘争を賢明に指導した。

金日成主席は1971年８月６日に行った演説で、北と南の幅広い協商を実現する方針を示して北南対話の道を開き、1972年５月３日、北南高位級政治会談に参加するために平壌にきた南側代表との談話で、祖国統一の３大原則を提示した。1972年７月４日、自主、平和統一、民族大団結の原則を基本内容とする北南共同声明が発表された。

北南共同声明が発表された後、金正日総書記は祖国統一の３大原則を固守し、この原則に依拠して祖国統一のための闘争を繰り広げていった。

1972年７月14日、党中央委員会の責任幹部への談話『祖国統一の３大原則を貫徹するため断固たたかおう』で、祖国統一の問題を解決するための闘争において、金日成主席が示し北南共同声明で確認された祖国統一の３大原則を貫徹することを基本としていくことを強調した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは今後いかに困難で複雑な状況が生じようとも、祖国統一の３大原則を固守し、この原則にしっかり依拠して祖国統一のための闘争を展開しなければなりません」

総書記は祖国統一の３大原則を貫徹するため､北南対話と協商をさらに拡大発展させていくことに深い関心を寄せ､北南赤十字団体の会談を細かく指導した。

1972年７月に、北南赤十字予備会談に参加する活動家たちに、北南間の対話と協商において堅持すべき原則を明示した。そして同年７月19日には板門店（パンムンジョム）の会談場へ出向いて予備会談の実態を具体的に調べ､第23回赤十字予備会談が成功裏に進められるよう指導した。こうして１年近く引きずってきた赤十字予備会談は成功裏に妥結され､1972年８月から赤十字本会談が平壌とソウルで交互に進められるようになった。

総書記は北南対話と協商の幅をさらに広げていくために大きな力を注いだ。

共同声明で示されたように北南調整委員会を構成して運営し､それによって北南関係の改善と祖国統一のために提起される重要な問題を協議し解決していくことに深い関心を払った。同時に、北南間の政治協商を多務的な協商に発展させ､祖国統一のための事業を全民族的な事業にするための闘争を展開するようにした。

1972年８月19日、朝鮮労働党、朝鮮民主党（当時）、天道教青友党と各社会団体は、北南諸政党・社会団体連席会議の開催を南朝鮮の諸政党・社会団体に提案する連合声明を発表し、共和国政府は北南調整委員会の活動に北と南の各政党･社会団体の代表と各階層の人士を参加させて北南対話の幅を広げることを提案した。これらの提案は北と南の各界の人士と全人民の絶大な支持と賛同を呼び起こした。

北南対話と協商を発展させるための闘争のなかで､1972年10月か

ら３回にわたって北南調整委員会共同委員長の会議が行われ、民族の常設的な共同機構として北南調整委員会が正式に構成され、平壌とソウルを行き来して北南調整委員会が開かれるようになった。

金正日総書記は金日成主席が打ち出した祖国統一の５大方針を貫徹するための闘争を賢明に指導した。

金日成主席は1973年６月23日の演説『民族の分裂を防ぎ祖国を統一しよう』で、祖国統一の５大方針を提示した。祖国統一の５大方針は、北南間の軍事的対峙状態の解消と緊張の緩和、北南間の多方面的な合作と交流の実現、北と南の各階層の人民と各政党・社会団体の代表によって構成される大民族会議の開催、高麗（コリョ）連邦共和国の単一国号による南北連邦制の実施、単一の高麗連邦共和国国号による国連加盟をその内容としている。

総書記は祖国統一の５大方針を貫徹するため、これに対する宣伝活動を活発に展開するようにした。

当面の宣伝活動方向で重要なのは主席が示した祖国統一の３大原則と祖国統一の５大方針を大々的に宣伝することだとし、通信と新聞、放送を通じて祖国統一の５大方針を内外に広く宣伝し、平壌市をはじめ全国各地で祖国統一の３大原則と５大方針を支持し、北南共同声明を反故にした南朝鮮傀儡集団を暴露、糾弾する大衆集会を広範に行うようにした。

総書記は祖国統一の５大方針にある大民族会議の開催を統一問題解決の重要なカギと見なし、これを実現するための主動的な対策を立てるようにした。

祖国統一民主主義戦線中央委員会は1973年７月の第59回拡大会議で大民族会議を早急に開催する問題を討議し、南朝鮮のすべての

政党・社会団体と各階層の人民、すべての海外同胞団体と同胞に送るアピールを採択した。

朝鮮労働党、朝鮮民主党、天道教青友党は1973年11月、南朝鮮の民主共和党、新民党、民主統一党、統一革命党に、南と北の各階層の人民と各政党・社会団体の代表で構成される大民族会議の速やかな開催を提案する手紙を送った。こうした措置は南朝鮮の各階層の人士と政党・社会団体の支持と共感を呼び起こした。そうして祖国統一の気運はさらに盛り上がり、南朝鮮人民はいうまでもなく、在日同胞をはじめ海外同胞も祖国統一をめざす闘争に立ち上がるようになった。

金正日総書記は祖国統一の３大原則と５大方針の実現に有利な国際的環境をつくりだすための活動に深い関心を払った。そして、世界の広範な人民の間で、祖国統一の３大原則と５大方針に対する支持と連帯を強化するための積極的な外交攻勢を展開するようにした。その結果、1973年９月に開かれた第４回非同盟諸国首脳会議をはじめ多くの国際会議や国際機構の会議では祖国統一の３大原則と５大方針を積極的に支持する決定や宣言、決議を採択して発表した。

総書記はまた、国連などの対外活動舞台を積極的に利用して祖国統一に有利な国際的環境をつくりだすための主動的な活動を展開するようにした。

1973年９月にはニューヨークに共和国の国連常駐代表部が開設され、祖国統一に有利な国際的環境をつくりだすための闘争に新たな転換の契機が開かれた。

総書記は第28回国連総会に参加するわが国の代表団に、祖国統一

の障害の一つである「国連韓国統一復興委員団」を解体させることと、南朝鮮を占領している「国連軍」の撤去問題を国連安保理事会にかけて、拒否権を行使しようとする敵の策動を破綻させるために積極的に活動するようにさせた。同時に、朝鮮の統一は祖国統一の３大原則と５大方針によって実現されるべきであるという主張を強く掲げていくようにした。

1973年10月に開かれた第28回国連総会では初めて共和国代表の参加のもとに朝鮮問題が上程され、討議された。そして金日成主席が示した祖国統一３大原則の正当性が再確認され、南朝鮮に対するアメリカの内政干渉の道具である「国連韓国統一復興委員団」を即時解体するという決議案が採択された。

金正日総書記の賢明な指導のもとに、祖国統一勢力は各面から強化され、それに依拠して祖国統一の基本綱領を実現するための闘争が強力に展開されることによって、国の自主的平和統一の明るい展望と有利な環境が開かれるようになった。

第９節　対外活動に新たな転換をもたらすために

金正日総書記は対外活動に新たな転換をもたらすための活動を賢明に指導した。

まず、わが党の対外活動の基本的使命とそれを実現するための方途を明確に示した。

1964年10月23日と1965年４月に対外活動部門の幹部に行った談話をはじめ多くの機会に、わが党の対外活動の基本的使命は金日成

主席の偉大さと指導の賢明さを全面的に宣伝することであると述べた。そして、この基本的使命に即して対外活動に新たな転換をもたらすための課題と方途を示した。

金日成主席の偉大さとチュチェ思想の宣伝を対外宣伝の基本とし、対外関係の幅を広げて新興諸国との関係を強化することをわが党の対外活動の重要な課題とした。そして、対外活動部門の活動家は高い政治的資質と多方面的で豊富な知識、気高い風格を備えなければならないと強調した。

対外活動に新たな転換をもたらすための活動を賢明に指導した金正日総書記は、金日成主席の対外活動を積極的に補佐した。

1965年４月、金日成主席のインドネシア訪問を補佐する日々、寸時の休息もとらず、主席が示した新興諸国との団結を強化する方針を貫徹するよう関係者たちを指導した。随行員たちに主席の対外活動を補佐するうえで提起される問題について教え、自ら主席の活動路程を先に踏んでぬかりない安全対策を立てた。

総書記は映画と対外芸術公演活動を通じて対外宣伝を強化することに大きな力を注いだ。

1965年３月、映画による対外宣伝で提起される諸問題を明らかにし、1970年代に入っては芸術団を西欧諸国と新興諸国へ派遣して公演活動を行わせた。その結果、チュチェ思想を信奉し、大いに学ぼうとする世界の革命的人民の熱意は著しく高まった。

世界各国の数多くの社会活動家や学者はチュチェ思想とその具現である朝鮮の実践的経験を学ぶため朝鮮を訪れ、それぞれの国でさまざまな方法でチュチェ思想を体系的に研究し、積極的に普及した。

世界のいくつもの国に「金日成同志の著作出版委員会」「金日成同志の著作出版印刷所」といった専門出版機関が設けられ、各国の出版・報道機関で金日成主席の著作を翻訳出版し、『チュチェ思想』といった題号の定期刊行物を発刊した。そして多くの国に「金日成図書館」「普天堡図書館」などが開設され、金日成主席の著作の普及活動が進められた。また、多くの国に金日成主席の革命思想、チュチェ思想を研究、普及するためのグループが数多く組織された。

1969年、マリで初の「金日成同志の著作研究グループ」が組織され、それについで同年末までに20余カ国に「金日成同志の革命思想研究グループ」「金日成同志のチュチェ思想研究グループ」など多様な名称を持った数十の研究グループが組織された。これには政界、社会各界、言論・出版界の知名の人士や教授、博士をはじめ各階層の人士が網羅された。

金日成主席の革命思想、チュチェ思想に関する研究討論会も活発に行われた。日本をはじめ各国でチュチェ思想に関する全国的な討論会がたびたび開かれ、それは次第に地域的、大陸的範囲から全世界的規模に拡大されていった。

金正日総書記は国の対外関係を拡大、発展させるため、まず新興諸国との友好･団結の強化を対外活動の基本的方向としてとらえていくようにした。

1965年５月９日、対外活動部門の活動家への談話『新興諸国との友好・団結を強化しよう』で、新興諸国との友好・団結を強化するうえでの原則的問題を具体的に示した。

そして、多くの新興諸国が網羅されている非同盟運動は帝国主義

の支配と従属に反対し､民族の独立を守ろうとするこれらの国の人民の共通の志向と要求を反映している進歩的運動であり､一つの独自の政治勢力として国際舞台に登場しているとし､自主の道へ進もうとする時代の潮流を反映しているこの運動は遠からず歴史発展の偉大な推進力になるであろうと確信した。

総書記は､新興諸国との友好･団結を強化することに力を注ぐよう強調した。

金正日総書記は次のように述べている。

「新興諸国との活動を強化するのは、現段階におけるわが党の対外活動の重要な方針の一つです。これまでわが国は対外関係において、社会主義諸国の枠内からそれほど踏み出していませんでしたが、これからは新興諸国との関係発展に大きな力を入れなければなりません」

総書記は､新興諸国との友好･団結を強化するためには国々の間の相互関係の原則を順守し､それらの国の人民の闘争を積極的に支持声援し、経済・文化面での協力と交流を活発にし、革命闘争と建設事業においてわが国が積んだ経験を広く宣伝すべきだと教えた。そして朝鮮を訪れる新興諸国の経済･社会各界の人士たちに、自力更生して新しい社会を建設したわが国の経験を具体的に説明し､自分の力で自国の革命を進めるうえでの原則的問題についても説き明かした。

総書記は反帝反米闘争を強化し､朝鮮革命に有利な国際的環境をつくりだすことにも大きな力を注いだ。

この時期、ベトナム、ラオス、カンボジア人民の反米救国闘争をはじめ､アジア諸国での反帝反米闘争と民族解放のためのアフリカ

諸国人民の闘争、キューバをはじめラテンアメリカ諸国の反米闘争に対する私心なき支持声援と連帯を強化することに多くの力を注ぐようにした。

一方、世界の多くの国との連係を強め、国際機構にも積極的に進出することに深い関心を向けた。

特に北欧及び一連の西欧資本主義諸国と貿易関係をはじめ経済実務的関係を結んで発展させ、それらの国の進歩的な政党、社会団体との連係を強化するための対外活動を展開し、その関係を次第に国家関係へと拡大していくよう指導した。

新興諸国との友好・団結が強化され、国の対外関係の幅が著しく広がり、1950年代までは対外関係において社会主義諸国の範囲からさほど抜け出していなかった朝鮮は、1960年代末に37カ国、1970年代中期に至っては60以上の国と大使級の外交関係を結び、100余の国と経済・文化交流を交わし、百数十の国際機構に加入して活動するようになった。

第４章　全社会の金日成主義化を実現するために

（1974年２月～1980年10月）

第１節　金日成主席の後継者として推戴、全社会の金日成主義化綱領を宣布

領袖の偉業を継承することは､労働者階級の革命偉業の遂行において提起される重大な問題である。

領袖の後継者問題を正しく解決できなければ革命と建設を台なしにしてしまうということは､１世紀を超える国際共産主義運動の歴史が示している深刻な教訓である。

朝鮮人民は､革命偉業継承の問題を解決することが切実な要求となっていた歴史的な時期に、金正日（キムジョンイル）総書記を金日成（キムイルソン）主席の後継者として推戴した。

学生時代から主席を補佐し、党中央委員会の指導員、課長を経て副部長、部長、書記の重責を担って活動する過程でそなえた優れた品格と資質、党と革命の前に築き上げたその業績により、全党と全人民が総書記に尊敬と欽慕の念を抱いていた。総書記の業績の偉大さを実生活を通じて体得した全党員と人民は､総書記を人民の指導者として限りなく欽慕し仰ぎ慕った。

総書記を主席の唯一の後継者として戴くことは、1960年代から総書記の指導を受ける過程で全党員と人民の切々たる願いとなり、

1970年代の初めには押しとどめることのできない時代の流れとなった。

朝鮮人民は総書記を「親愛なる指導者」とたたえて絶対的に信頼し、高く仰ぐとともに、限りない尊敬と欽慕の念をこめた頌歌をつくって歌った。また、党中央委員会と文学・芸術部門をはじめ多くの部門の活動家が総書記の教えに従って活動を展開する気風を確立した。

こうした中、全国の党組織と政権機関、行政・経済機関、勤労者団体、人民軍、人民保安機関、科学・教育・文化・出版・報道機関、工場、企業、協同農場から、総書記を主席の後継者として推戴することを願う数多くの請願書、手紙が党中央委員会に寄せられた。特に、朝鮮革命の第１世代である抗日革命闘士たちの願いは一層切々たるものであった。

1974年２月13日、朝鮮労働党中央委員会第５期第８回総会では、全党と全人民の一致した意思と念願を反映して、総書記を党中央委員会政治委員会委員に選出するとともに、主席の唯一の後継者として推戴した。

全国の人民は、総書記を主席の唯一の後継者として推戴したことを民族の一大慶事として盛大に祝った。全国各地の党及び勤労者団体組織は祝賀会を催し、総書記に全的に運命を託し、総書記の指導のもとにチュチェの革命偉業、先軍革命偉業をあくまで継承し達成していく決意をこめた誓書を採択した。抗日の老闘士たちも、主席に忠誠を尽くしたように変わることなく総書記に忠誠を尽くす決意を固めた。

金正日総書記は金日成主席の後継者として推戴された後、主席

の革命思想を科学的に定式化し、それに基づき全社会の金日成主義化綱領を宣布した。

総書記は主席の革命思想を科学的に定式化することを自らの崇高な使命と見なし、それを実現するため早くから思索と探究を重ねてきた。党中央委員会で活動を始めた当初、従来の労働者階級の革命思想史を主体的立場に立って全面的に分析、総括したうえで、執務室ではもちろん、現地指導の道でも主席の革命思想を定式化するため思索と著述を続けた。

1971年９月に両江（リャンガン）道を現地指導した時も、昼は中央や道の幹部と仕事について協議し、夜は思索と著述に心血を注いだ。９月４日には茂浦（ムポ）の釣り場で主席の革命思想を定式化するため思索と探究にふけり、活動家たちに『金日成同志の革命思想はその尊名と結びつけてのみ呼ぶことのできる独創的な思想である』と題する談話を行った。この談話で、今では確信を持って金日成同志の偉大な革命思想をその尊名と結び付けて科学的に定式化し、世に宣布することができるようになった、わたしは近い将来、金日成同志の革命思想、チュチェ思想を金日成主義と定式化して世に宣布し、金日成主義の旗を時代の先頭に立って高く掲げていくつもりだ、と述べた。

1973年の夏にも、総書記は主席の革命思想をその尊名と結び付けて定式化するという自らの鉄の意志を今一度表明した。

総書記は1974年２月19日に発表した著作『全社会を金日成主義化するための党の思想活動の当面のいくつかの課題について』で、主席の革命思想を金日成主義と定式化して宣布した。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成主義は一言で言ってチュチェの思想、理論及び方法の体系です。言いかえれば、チュチェ思想とそれによって明らかにされた革命と建設に関する理論と方法の全一的な体系です。人類の思想史で初めて発見された偉大なチュチェ思想を真髄とし、それに基づいて革命理論と指導方法が全一的に体系化されているところに、金日成主義が従来の労働者階級の革命理論と区別される特徴があります。金日成主義こそは、われわれの時代、チュチェ時代の革命の真の指導思想、指導理論、指導方法です」

金正日総書記は主席の革命思想を金日成主義と定式化したうえで、全社会の金日成主義化はわが党の最高綱領であると指摘した。

全社会の金日成主義化を党の最高綱領として宣布した後、総書記はその本質的内容について次のように述べている。

「全社会を金日成主義化するということは、金日成同志の偉大な革命思想、金日成主義を唯一の指導指針として朝鮮革命を前進させ、金日成主義に基づいて共産主義社会を建設し完成していくことを意味します。言いかえれば、全社会を金日成主義化するということは、社会の全構成員を金日成同志に限りなく忠実な真の金日成主義者にし、金日成主義の要求どおりに社会を徹底的に改造して共産主義の思想的要塞と物質的要塞を占領することです」

総書記は全社会の金日成主義化が党の最高綱領となる根拠は、まずこのスローガンに党の最高目的がはっきりと示されているからであり、またこのスローガンに党の最高目的を実現するための基本的方途が明示されているからであると述べた。

総書記は、全社会の金日成主義化で提起される問題とそれを解決するための原則的方途を示した。

全社会を金日成主義化するためには、党員と勤労者に対する唯一思想教育と革命教育を強化して社会の全構成員を熱烈な金日成主義者にし、経済、文化など社会のすべての分野を金日成主義の要求どおりに改造するとともに、党を強化し、党の活動において根本的な転換をもたらさなければならない。

全社会の金日成主義化綱領によって、党の最高綱領が盛り込むべき根本的内容とその必須の構成部分、党綱領作成の理論的・方法論的基礎が革新された。

第２節　全党を金日成主義化し、党の基礎を固めるために

金正日総書記は、朝鮮で革命偉業継承の問題が解決され、全社会の金日成主義化が前面に押し出された革命発展の要求に即応して、全党を金日成主義化し、党の基礎を固めるために心血を注いだ。

1974年８月２日、全国党組織活動家講習会での結語『党活動を根本的に改善し、全社会の金日成主義化を力強く推し進めよう』で、全党を金日成主義化するという党建設の方針を打ち出し、全党金日成主義化の革命的本質と根本原理、基本的方途を示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「全党を金日成主義化するということは、すべての党員を金日成主義の精鋭分子にし、党建設と党活動をあくまで金日成

同志の思想と理論、方法に基づいて行うことを意味します。これは、わが党の創立とともに始まった党の金日成主義化を全面的に完成することであり、わが党を完全無欠な金日成主義党にすることです」

全党を金日成主義化するための党建設の根本原則は、党内に唯一思想体系と唯一的指導体制を確立することであり､その基本的方途は､全党を幹部化し､党の活動体系と活動方法において新たな転換をもたらすことである。

金正日総書記は全党の金日成主義化を賢明に導いた。

まず､党の唯一思想体系を確立する活動をさらに深化発展させることに大きな力を傾けた。

全党と全社会の金日成主義化の要求に即応して党の唯一思想体系を確立する活動を党活動の基本としてとらえ､さらに深化させるため、総書記は1974年４月14日に行った演説『全党と全社会に唯一思想体系を一層しっかり確立しよう』で、党の唯一思想体系を確立する活動の総体的課題と､それを実現するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

また､全党幹部化の方針を打ち出し､それを貫徹して党の隊伍を質的にさらに強化するよう導いた。

そのために、幹部と党員を政治的、思想的にしっかり鍛えることに第一の関心を払い、学習と党生活、実践を密接に結びつけ、思想教育を強化して彼らを革命的世界観で武装させるとともに､党内に革命的な党生活気風と規律を確立するようにした。同時に、党勢拡大において党の原則を守って党隊伍の純潔性を保障するようにした。そして、党員の技術・文化水準と実務的資質を高め、特に組織

能力を養うことに大きな関心を払った。

総書記は、党の活動体系と活動方法において新たな転換をもたらすよう導いた。党の活動体系を改善するうえで、各級党委員会が党活動において党規約の要求を厳しく守り、特に職能を合理的に作成し、それに基づいて活動を正規化、正常化するようにした。

総書記は全党に整然とした下部指導体系を確立するため、党活動家が下部に出向く体系を確立し、一定の期間下部で活動した後、戻って再武装、再作戦することを制度化するようにした。

総書記は各部署間、各課間の提携作戦と共同作戦を強化するようにした。

新たな党活動体系を確立した後、総書記は咸鏡（ハムギョン）南北道をはじめ地方の党組織の活動を現地で指導し、この体系が大きな生命力を発揮するよう導いた。そうして、短期間に全党金日成主義化の要求に即応して整然とした党活動体系が確立され、党中央の意図と方針が即時に下部の党組織に伝達され、正確に貫徹されるようになった。

総書記は党の活動方法と作風を根本的に改善するよう導いた。

1976年１月１日に行った演説『今年の党活動でとらえていくべきいくつかの中心的課題について』で、すべての活動家が金日成主義指導理論で武装し、金日成主席が創造した活動方法、金日成的活動方法を積極的に見習い具現することを党の活動方法と作風を正す基本的方途として提示し、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法の要求を具現するようにした。これとともに、党活動家の政治・実務水準を高めるための活動も力強く繰り広げるようにした。

金正日総書記はチュチェ偉業の継承のための党の基礎を固めることに心血を注いだ。

総書記はすでに、党中央委員会で活動を始めた1960年代の中ごろから1970年代の前半にかけて、党の基礎を固める準備を進めた。1969年８月15日、党中央委員会の活動家への談話『党の組織的・思想的基礎を固めるために』で、党の基礎構築の重要性を明らかにし、文学・芸術部門と人民軍の活動を指導しながら、これらの部門で党の基礎構築のモデルを創造した。また、1974年２月１日と1976年10月９日、1977年３月１日をはじめ多くの機会に、党の基礎を強固に築くという方針を示した。

総書記は、党の基礎を強固に築くためには、党員と勤労者の間で忠誠心を培う教育を強化し、党の中核を育成し、党内に一糸乱れず行動する革命的規律を確立しなければならないと述べた。

党の基礎を強固に築くために、総書記はまず幹部陣容をしっかりと固めるようにした。そのために、幹部の選抜と配置において主席と党に対する忠誠心を基本的表徴とし、これに実務的表徴を結びつける原則を堅持させるとともに、幹部陣容を絶えず強化し、老、壮、青を組み合わせる原則を守り、特に若くて清新な人を登用するようにした。一方、整然とした幹部教育システムを確立し、党組織が幹部の教育を綿密に行い、党幹部養成機関を通じて幹部を将来を見通して育成するようにした。

総書記はまた、主席の革命思想、チュチェ思想で全党を武装させるための唯一思想教育を強力に繰り広げるようにした。1978年12月６日の党中央委員会責任幹部協議会での演説『発展する現実の要求に即応して党の宣伝・鼓舞活動を改善、強化するために』で、何よりもチュチェ思想の原理で武装させるための教育活動を強化すべきであると述べた。そして、すべての幹部と党員、勤労者を

チュチェ思想の原理で武装させるための思想教育を、主席と党の著作と文献を基本教材にして行うようにした。

総書記は、党活動において唯一的指導体制を確立するための活動を精力的に指導した。

党活動で提起されるすべての原則的で重要な問題を党中央に集中させ、党中央の唯一的結論によって処理する強い規律を確立するとともに、全党に党の路線と方針をあくまで貫徹する革命的気風を打ち立てるよう導いた。また、1975年６月の党中央委員会責任幹部会議で、党の唯一的指導体制を確立するための活動を具体的な方法論に基づいて段階別に着実に展開すべきであると指摘した。

一方、総書記は、各級党組織の機能と役割を全面的に高め、革命と建設の各分野で党の唯一的指導を強化するよう導いた。1979年４月28日の党中央委員会責任幹部協議会で党の指導体系を確立するという方針を示し、幹部と党員の党組織観念を高め、党生活を強化して、革命と建設全般に対する党の指導をしっかり保障するためのたたかいを力強く推し進めるようにした。

そうして、1970年代のチュチェ偉業の継承のための党の基礎構築では大きな成果がもたらされ、党はいつにもまして組織的、思想的に強化され、その指導的役割が高まるようになり、これは全社会を金日成主義化するための確固たる保証となった。

第３節　全軍を金日成主義化するために

金正日総書記は、全社会を金日成主義化するうえで全軍を金日成

主義化することに大きな意義を付与し､それを実現するために心血を注いだ。

1975年１月１日、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部への談話『全軍を金日成主義化しよう』で、全軍の金日成主義化を軍建設の総体的任務と宣言し、それを実現するための課題と方途を示した。

総書記は、全軍を金日成主義化するということは、すべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な真の金日成主義者にし、軍建設と軍事活動をあくまで金日成主義に基づいて行うことにより、人民軍を完全無欠な領袖の軍隊、党の軍隊にすることを意味すると述べた。

総書記は、全軍を金日成主義化するための課題と方途を示した。

全軍を金日成主義化するためには、そのための党の政治活動を力強く推し進め､人民軍に対する党の指導体系を確立しなければならないと述べた。また、人民軍の幹部陣容をしっかりと固め、全軍を金日成主義化するための活動を段階と目標を正しく定めて、将来を見通して推し進めなければならないと指摘した。

金正日総書記は、「全軍を金日成主義化しよう！」というスローガンのもとに人民軍を不敗の革命武力にするために精力を傾けた。

全軍を金日成主義化するため、総書記はまず、人民軍に対する党の指導体系を確立することに力を入れた。

1977年８月29日、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部への談話『現段階において人民軍の党政治活動で提起されるいくつかの問題』で、人民軍の党政治活動で基本は党の指導体系を確立することであると述べた。そして同年８月には、総政治局に対する党中央

委員会の指導を行い、全般的な党政治活動体系を整備し、すべての活動を党の唯一的指導のもとに行うようにした。また、人民軍の幹部陣容を党と領袖に対する忠誠心が強く、能力があり、軍人としての気質を備えた人で固めるようにするとともに、幹部に対する教育に力を入れて、彼らが一生変わることなく党と領袖を銃剣をもって支えていくようにした。特に、人民軍の指揮メンバーのための党講習を契機に指揮メンバーの党性をさらに鍛え、全軍に党の指導に従う革命的気風を確立するようにした。

総書記は人民軍の後続幹部の育成にも深い関心を払い、チュチェの軍建設の偉業を代を継いで成し遂げていくことのできる新しい世代の若い幹部を多数育成するようにした。

総書記はまた、人民軍党委員会第６期第20回拡大総会を契機に党の指導体系を確立する活動をさらに深化させるようにした。

全軍を金日成主義化するため、総書記は、軍人に対する政治・思想教育を強化することに大きな力を入れるよう導いた。

総書記は、人民軍軍人の間で忠誠心を培う教育を強化するようにした。1976年１月１日の党中央委員会、朝鮮人民軍総政治局の幹部への談話で、人民軍に「金日成同志のために一命を賭して戦おう！」というスローガンを提示し、忠誠心を培う教育を原理化、通俗化して、このスローガンが軍人の確固たる信念、意志となるようにした。

総書記は、抗日革命烈士と祖国解放戦争（朝鮮戦争）の時期の英雄戦士の忠誠心の模範を見習うための教育を深化させるようにした。1979年12月、人民軍の指揮メンバーの間で抗日革命闘士の呉仲洽（オ ジュンフプ）同志に見習う運動を活発に繰り広げることについて述べた。

総書記は、呉仲洽同志が示した司令官の金日成同志の命令に対する絶対性と無条件性、鉄の規律性と強い組織性、几帳面な部隊管理はすべての人が見習うべき模範であるとして、呉仲洽同志に見習う運動を党の活動としてとらえていくようにした。また、1976年10月２日の朝鮮人民軍総政治局長との談話『人民軍で英雄李寿福(リスボク)に見習う運動を力強く展開するために』で、英雄李寿福の党と領袖に対する忠誠心、熱烈な愛国心、比類ない犠牲的精神と英雄主義を大いに見習うべきだと指摘した。

総書記は映画を通じて忠誠心を培うことにも大きな意義を付与した。

総書記は人民軍内で革命伝統教育を強化することに深い関心を払い、「訓練も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」というスローガンのもとに、人民軍がチュチェの革命伝統を全面的に継承し発展させるようにした。

総書記は、最初の革命武力が創建された1932年４月25日を人民軍創建日として慶祝するよう指示する一方、すべての人民軍将兵が4・25革命精神を大いに見習うようにした。これとともに、軍人の間で革命戦跡と革命史跡の踏査を通じた教育を強化するようにした。

総書記は革命教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育を強化し、人民軍軍人が高い革命意識と階級意識、社会主義祖国への熱烈な愛情とそれを鉄壁のように守るという強い自覚を持つようにした。

総書記は、人民軍内の政治・思想活動の方法を改善し、すべての宣伝・鼓舞手段を適切に利用するよう導いた。

1977年１月９日の朝鮮人民軍総政治局の責任幹部への談話『抗日遊撃隊式政治活動方法を具現するために』で、人民軍で抗日遊撃隊式政治活動方法を具現すべきであると指摘した。そして、同年11月の朝鮮人民軍第７回扇動員大会が人民軍内の政治･思想教育活動を一段と盛り立てる契機となるようにし、1979年２月には、朝鮮人民軍軍団（軍種、兵種）、師（旅）団政治部宣伝扇動部長会議及び講習会の参加者に『人民軍内の宣伝・鼓舞活動を改善、強化するために』と題する書簡を送り、政治・思想活動の古い枠を徹底的に克服するようにした。また、人民軍内のすべての党組織と宣伝活動家が抗日遊撃隊式方法を具現し、宣伝・鼓舞活動を一層力強く、斬新かつ着実に行うようにし、特に人民軍内のすべての宣伝･鼓舞活動を火線での宣伝、鼓舞活動に切り換えるようにした。

総書記は、全軍に軍人教育のための整然とした放送システムを確立し、人民軍の放送が党と領袖に対する忠誠心を培う有力な手段となるようにするとともに、人民軍内の出版･報道活動と人民軍協奏団の活動を精力的に指導し、全軍の金日成主義化を推し進めるうえで大きな威力を発揮するようにした。また、教育、講演、鼓舞をはじめ人民軍内の宣伝･鼓舞システムを党の意図どおりに軍人の心の琴線に触れ、実効が現れるように運営して、思想活動に新たな改善をもたらすようにした。

金正日総書記は、全軍の金日成主義化の要求に即応して人民軍を軍事技術的に強化するために精力を傾けた。

人民軍の指揮官の指揮能力を高めるため、彼らが抗日武装闘争と祖国解放戦争の経験を深く研究、体得する一方、外国の戦争経験も主体的な観点に立って研究するようにした。また、彼らの軍事的識

見を広めるのに必要な設備や映画資料を送った。

総書記は、人民軍の軍事組織体系と作戦指揮体系を国の実情と現代戦の要求に即応して改編し、部隊の指揮・管理の水準を高める一方、1979年12月に各級参謀部の役割を強めるための対策を講じて人民軍の指揮体系全般を強化した。のみならず、指揮の迅速さと正確さを保障できるように指揮通信手段を近代化するという課題を示し、それを実現するためのあらゆる措置を講じた。

総書記は、人民軍軍人の軍事技術的資質を高めることに大きな力を入れるよう導いた。

軍事訓練がすべての軍人を金日成主席が創造したチュチェの戦法と百発百中の射撃術、豊かな軍事技術知識と屈強な体力の所有者に育て上げる方向で行われるよう、その方向と内容を明示した。また、現代戦の要求に即応して部隊の機動能力を高めることに特別な関心を払い、各部隊と区分隊の機動演習を発案し、その準備と進行の全過程を精力的に指導した。

総書記は、人民軍の武力装備をさらに近代化することにも心血を注いだ。1979年９月10日、軍需工業を発展させて人民軍の武力装備を改善するうえでの原則的問題を明示し、それを実現するためのたたかいを力強く繰り広げるようにした。

そして、チュチェの戦法の要求と国の実情に即して武力装備を絶えず改善、完成し、戦闘技術機材の近代化をさらに推進するようにした。特に、軍人の体質と国の地形条件に合った、軽くて簡便かつ実用的で威力のある、高性能の近代的な武器をつくることに深い関心を払った。また、軍需工場を現地で指導し、武器の生産で提起される問題を一つ一つ解決した。

金正日総書記は、全軍の金日成主義化の要求に即応して人民軍内で大衆運動を力強く繰り広げるようにした。

1975年12月21日の朝鮮人民軍総政治局長との談話『人民軍で３大革命赤旗獲得運動を力強く繰り広げるために』で、全軍に３大革命赤旗獲得運動の火を点じて活発に繰り広げるようにし、1979年５月の初めには、人民軍は３大革命赤旗獲得運動を綿密に手配して力強く繰り広げるべきだと指摘し、そのための具体的な対策を講じた。

総書記は、人民軍が３大革命赤旗獲得運動を他のあらゆる形態の大衆運動と密接に結びつけて進めるよう導いた。人民軍が３大革命赤旗獲得運動を以前から展開していた赤旗中隊獲得運動と結びつけ、絶えず深化させるようにした。また、呉仲洽同志に見習う運動、隠れた英雄の模範を見習う運動など、さまざまな大衆運動を３大革命赤旗獲得運動と密接に結びつけて力強く推し進めるようにした。

第４節　各階層の広範な大衆を党のまわりに固く結束するために

金正日総書記は、全社会の金日成主義化の要求に即応して各階層の広範な大衆を党のまわりに固く結束するための活動を力強く推し進めた。

総書記は全社会の金日成主義化のための大衆との活動方針を新たに示した。1974年８月２日、著作『党活動を根本的に改善、強化し、全社会の金日成主義化を力強く推し進めよう』で、大衆との活動の総体的課題と一貫した方針を示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日、大衆との活動も全社会を金日成主義化するという党の最高綱領に従ってさらに深化されなければなりません。大衆との活動の総体的課題は、各階層の大衆をみな教育、改造して熱烈な革命家、栄えある金日成主義者にし、彼らが金日成主義の旗のもとにあくまで断固とたたかうようにすることにあります」

大衆との活動において党が堅持している一貫した方針は、ごく少数の敵対分子を徹底的に孤立させる一方、広範な大衆を最大限に獲得して党と領袖のまわりに固く結束することである。

総書記は、各階層の大衆との活動を改善、強化する方途を全面的に明示した。各階層の大衆との活動を強化するためには、党活動家が革命的大衆観点を持ち、党の大衆路線にしっかり依拠して活動し、活動家の活動方法と活動作風を改善し、具体的な方法論に基づいてこの活動を一つ一つ着実に展開しなければならないと指摘した。

総書記は、広範な大衆を党のまわりにしっかり結束するため、党組織が大衆との活動を階層別の特性に応じて深化させるようにした。

まず、労働者、農民との活動を強化するようにした。

革命の指導階級である労働者階級を全社会の革命化、金日成主義化の先鋒部隊、手本として押し立て、党組織が労働者の隊伍をしっかり固め、彼らの間で学習と組織生活、革命実践を通じた思想的修養と鍛錬を絶えず強化するようにした。そして、農民、知識人との活動もその特性に応じて絶えず深化させ、彼らを熱烈な金日成主義者に育て上げるようにした。

総書記は､大衆に対する教育活動を対象の特性に応じてさまざまな形式と方法で積極的に行うようにした｡

総書記は､大衆との活動において勤労者団体の役割を強めることにも深い関心を払った｡

各級党組織が勤労者団体の活動に深い関心を払い､勤労者団体がその特性に応じて同盟員に対する教育体系を確立し､思想教育活動をさまざまな形式と方法で行うようにした｡そして､勤労者団体が同盟員の組織生活体系を単一化し､同盟員の間に自覚的かつ革命的な組織生活気風を確立するようにした｡また､党組織が大衆との活動において勤労者団体の自立性を高めることに力を入れるようにした｡

こうして､各階層の大衆との活動が改善され､勤労者団体の役割が強まるにつれて､革命隊伍は全社会の金日成主義化の要求に即してさらに強化された｡

第５節　チュチェの革命伝統を全面的に継承し発展させるために

金正日総書記は､全社会の金日成主義化の要求に即応してチュチェの革命伝統を全面的に継承し発展させるために心血を注いだ｡

金正日総書記は次のように述べている｡

「われわれは､金日成同志が抗日革命闘争の時期に築いた輝かしい革命伝統を断固擁護し､代を継いで継承し発展させなければなりません」

金日成主席が築いた栄えある革命伝統は朝鮮労働党と朝鮮革命の歴史的根源であり、その代をつなぐ血筋であり、チュチェの革命偉業達成のための万代の礎である。

金正日総書記はチュチェの革命伝統を全面的に継承し、発展させるため、1974年３月、「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」というスローガンを打ち出した。

生産を抗日遊撃隊式に行うということは、金日成主席に限りなく忠実であった抗日遊撃隊員が発揮した自力更生の革命精神と革命的活動気風をもって与えられた革命任務を無条件にあくまで遂行するということであり、学習を抗日遊撃隊式に行うということは、厳しく複雑な環境のもとでも学習を中断することなく地道に行った抗日遊撃隊員の革命的学習気風を見習い、学習を第一の革命任務と見なして絶えず地道に行うということである。また、生活を抗日遊撃隊式に営むということは、金日成主席と革命のために誉れ高く生きるという信念と志操を持ち、革命家らしくすべての生活を健全かつ質素に営んだ抗日遊撃隊の生活気風を見習い、政治的生命を第一の生命とし、すべての生活を革命的、文化的に、かつ質素に営むということである。

総書記は、生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に行う方途を示した。それは、勤労者に対する革命伝統教育を強化し、すべての活動を抗日遊撃隊員のように行う全社会的気風を確立することであるとした。

金正日総書記は、「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」というスローガンのもとに革命伝統を全面的に継承し発展させるための活動を精力的に指導した。

総書記は､党員と勤労者を党の革命伝統で武装させることに力を入れた。

まず､すべての勤労者が革命伝統に対する正しい立場と態度を持ち、それを堅持するよう教育することに深い関心を払った。

総書記は、1976年10月22日、党中央委員会責任幹部会議で行った演説『党の政治的・思想的統一と純潔性を代を継いで固守しよう』で、革命伝統にどう対するかは党と革命に対する態度に関する根本問題であるとし、党の革命伝統を断固擁護し、継承し発展させていくよう正しく教育すべきであると指摘した。

次に、革命事績事業に根本的な転換をもたらした。

総書記は､わが国で革命事績事業は党が直接指導した時から転換がもたらされ､1970年代に革命戦跡と革命史跡を発掘、考証して整備する活動を大々的に行ったが､あの時に全国的規模で多くの革命戦跡と革命史跡を建設したと述べている。

総書記は革命事績資料の収集に力を入れた。

1974年３月、関係部門の活動家に主席の革命事績資料を収集、整理する事業を深化させるべきだと述べ､1974年と1975年に咸鏡北道を現地指導した際､革命事績資料の発掘と収集において堅持すべき原則的問題を明示した。そして、1976年に革命事績資料を収集、整理する整然としたシステムを打ち立て､1977年には革命事績資料を永久保存するためのさまざまな措置を講じた。また、主席の革命事績を全面的に発掘、収集、整理する事業を全党的・全国家的事業として強力に推し進めるようにした。そうして、革命事績の発掘、収集では大きな成果がもたらされ、革命伝統教育をさらに深化、発展させるための強固な土台が築かれた。

総書記は革命事績資料の収集とともに、革命戦跡と革命史跡、革命博物館、革命事績館をより立派に整備する活動も積極的に推進した。党中央委員会第４期第15回総会後、総書記は革命戦跡と革命史跡を整備する事業を直接担当し、1970年代からこの事業を一層強力に推し進めた。

総書記は、主席の革命活動を示す革命事績を基本にして原状を復元することを革命戦跡・革命史跡建設の基本原則とし、建設を積極的に推し進めた。そして、党創立30周年を迎えて、王在山（ワンジェサン）、君子里（クンジャリ）、金亨稷（キムヒョンジク）郡の革命史跡建設を精力的に指導し、特に王在山革命史跡地の建設を大々的に推し進めた。

総書記は、王在山革命史跡地の建設で基本をなす大記念碑の形成をはじめ史跡地建設の正しい方向と方途を示し、具体的な対策を講じるとともに、1974年５月と1975年３月、10月の３度にわたって建設を現地で指導して工事における難問を解決し、建設者の生活に深い関心を払った。そうして、王在山革命史跡地は１年４カ月の間に立派に建設された。

ついで総書記は三池淵（サムジヨン）革命戦跡地の建設を精力的に指導した。

早くから三池淵一帯を革命伝統教育の拠点として立派に整備する構想を練ってきた総書記は、茂山（ムサン）地区戦闘勝利40周年を迎えて三池淵革命戦跡地を整備することを提唱し、数度にわたって指示を与えた。

特に1976年７月の初めに、現地で三池淵に建てる主席の銅像をはじめ大記念碑の形成に関する指示を与え、1977年４月29日には三池淵大記念碑の形成図案を再度検討し、三池淵大記念碑を思想的・芸術的内容だけでなく、規模においても世界的な大記念碑にするため

の問題を明示した。そうして、わずか２年余りの間に大規模な三池淵革命戦跡地が建設された。

総書記は、革命戦跡、革命史跡の建設とともに、以前から推進してきた革命博物館と革命事績館の建設を引き続き力強く推し進め、各道の革命事績館をそれぞれの道に秘められている事績を基本として、地方の特性に応じて建設するようにした。

総書記は、革命伝統教育の体系と方法を発展する現実の要求に即して改善することに大きな力を注いだ。

まず、全党に整然とした革命伝統学習体系を確立し、革命伝統教育をさまざまな形式と方法で掘り下げて行うようにした。

そして、全国各地にある「金日成同志革命思想研究室」の管理・運営を改善するためのさまざまな措置を講じた。1974年５月には咸鏡北道先峰(ソンボン)郡内の各研究室を見て回り、研究室の運営体系と方法を合理的なものにし、研究室を通じた革命伝統教育を強化するための具体的な方途を示した。

総書記は、出版・報道手段と文学・芸術作品を通じた革命伝統教育を強化することに深い関心を払った。

革命伝統を内容とする図書と教育資料を出版するための積極的な対策を講じ、特に主席の革命活動史を全面的に収録した総合回想記をはじめ各種の回想記、抗日武装闘争の時期の経験資料を多く出版するようにした。そして、新聞、放送などあらゆる宣伝手段を利用して抗日武装闘争の時期の革命業績を幅広く深く解説、宣伝する活動を力強く推し進め、革命伝統をテーマにした革命映画や小説、歌などの文芸作品をより多く創作、普及するようにした。

総書記は、革命戦跡と革命史跡、革命博物館と革命事績館の踏査

及び参観を通じた革命伝統教育を強化することに大きな力を注いだ。革命伝統教育の一形式として「革命の千里の道」踏査行軍を提唱し、青少年が「学びの千里の道」「解放の千里の道」踏査行軍を定期的に行うようにした。

「革命の千里の道」踏査行軍は、金日成主席が幼少の身で強い向学の念と祖国解放の大志を抱いて踏破した不滅の道程に沿って行われる葡坪（ポピョン）――万景台（マンギョンデ）間の踏査行軍である。

総書記は1974年に初の「学びの千里の道」踏査行軍を組織し、主席が「解放の千里の道」を歩んでから50周年に当たる1975年には１万人余の規模で「解放の千里の道」踏査行軍を行うようにした。そして、1975年８月から「革命の千里の道」の国家定期踏査を組織し、全国の青少年・学生を「革命の千里の道」踏査行軍に計画的に参加させるようにした。

金正日総書記は、「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」というスローガンをすべての勤労者が活動と生活に具現するよう導いた。

総書記は、全党と全社会に抗日遊撃隊式活動気風、生活気風を打ち立てるための宣伝・鼓舞活動を強力に繰り広げ、勤労者が「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」という党のスローガンを心に受け止め、それを活動と生活に具現していくようにした。そして、抗日遊撃隊の革命的活動気風と方法を具現するよう導いた。

総書記は、『党政策の貫徹において革命的気風を確立するために』（1977年11月８日）、『党の政策を無条件にあくまで貫徹するために』（1978年５月25日）と題する著作で、すべての党員と勤労者は金日成主席の命令、指示を無条件にあくまで実行した抗日遊

撃隊員に見習い、主席の指示と党の政策を無条件に貫徹する革命的気風を発揮しなければならないと強調した。そして、すべての党員と勤労者が社会主義建設において自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮し、すべての仕事を大規模に展開し、積極的かつ大胆に推し進めて、与えられた革命課題を短期間に立派に遂行するようにした。

総書記は、抗日遊撃隊式の学習気風と方法を具現するため、抗日革命闘争の時期に創出されて大きな生命力を発揮した抗日遊撃隊式学習方法を積極的に取り入れ、この学習方法を今日の社会主義の現実に即して発展させた問答式学習コンテストを1975年から全社会に一般化させた。また、「全党が学習しよう！」という党のスローガンを掲げ、すべての党員と勤労者が、戦闘と行軍が続く困難な状況のもとでも学習を中断せずに生活化した抗日遊撃隊員の学習気風を見習い、学習を生活化、習性化し、いつどこにあっても学習する革命家となるよう導いた。

総書記は抗日遊撃隊式生活気風を確立することに深い関心を払い、1975年５月の党中央委員会書記、部長、副部長協議会をはじめ多くの機会に、全社会に革命的生活気風を打ち立てる活動を力強く推し進めるべきであると指摘した。

特に、党員と勤労者が組織生活を強化して政治的生命を輝かせ、国の経済管理をより一層几帳面に行う主人らしい生活気風を確立し、生活を文化的かつ質素に営み、いつも革命的に働き生活するようにした。

こうして、全社会に抗日遊撃隊の革命精神と気迫がみなぎり、革命と建設のすべての分野で革命伝統が全面的に継承され発展するようになった。

第６節　思想、技術、文化の３大革命の深化発展、３大革命赤旗獲得運動の創造

金正日総書記は、全社会の金日成主義化偉業実現の基本的方途である３大革命をさらに深化発展させるために心血を注いだ。

思想、技術、文化の３大革命をさらに深化発展させるため、総書記は、1975年11月に「思想も、技術も、文化もチュチェの要求どおりに！」という新しいスローガンを提示した。

思想、技術、文化をチュチェの要求どおりに改造するということは、人間改造、自然改造、社会改造を徹底的にチュチェの思想、理論、方法どおりに行うということを意味する。

思想をチュチェの要求どおりに改造するということは、社会の全構成員をチュチェ型の革命家、真の金日成主義者にするということである。これは、全社会の金日成主義化を実現するうえでの第一の課題である。

技術をチュチェの要求どおりに改造するということは、人々を骨の折れる労働からも完全に解放し、彼らに自主的で創造的な生活を保障する技術にするということである。これは、搾取と抑圧から解放された勤労者を自然の束縛からも解放するための重要な政治的課題である。

文化をチュチェの要求どおりに改造するということは、社会の全構成員を文化・技術水準が高い文化の主人、技術の主人にし、人民的で革命的な真の社会主義的文化を建設するということである。こ

れは、社会の全構成員を全面的に発達した人間に育て上げ、彼らの文化的需要を充足させるための重要な課題である。

この革命的スローガンの根本的要求は、思想、技術、文化を改造するための革命闘争においてチュチェ思想の要求を具現することによって、国家と社会の主人としての人民大衆の地位をしっかり保障し、主人としての彼らの役割を最大限に強めることである。

金正日総書記は、「思想も、技術も、文化もチュチェの要求どおりに！」というスローガンのもとに、思想、技術、文化の３大革命をさらに深化発展させるためのたたかいを力強く推し進めた。

まず、金日成主席が提唱した３大革命グループ運動を深化発展させることに大きな力を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「３大革命グループは思想・技術・文化革命の遂行を指導するために組織されたものであり、３大革命グループ運動は党が直接掌握し指導する運動です」

金日成主席が提唱した３大革命グループ運動は、政治・思想上の指導と科学技術上の指導を結合し、上部が下部を助け、勤労人民大衆を奮起させて思想、技術、文化の３大革命を推し進めていく新しい形式の指導方法である。

総書記は、３大革命グループ運動をすべての部門に拡大し、それに対する整然とした指導体系を確立した。

1974年に３大革命グループを調整配置し、工業と農業の重要な部門だけでなく、建設、運輸など人民経済の各部門に派遣するという画期的な措置を講じた。ついで、科学・教育部門をはじめ各部門に３大革命グループを派遣するようにした。その結果、1975年に至り、

３大革命グループ運動は全国のすべての部門、すべての単位を包括し、党あげての事業として一層活発に繰り広げられるようになった。

総書記は、1974年２月に工業部門と農業部門の３大革命グループの活動を党中央委員会が統一的に掌握、指導するよう措置を講じ、1975年３月には、中央から道、市、郡に至るまで３大革命グループ総合室を３大革命グループ指揮部に改編し、３大革命グループの活動をより着実に指導できるようにした。また、1976年にはグループの活動を総括する制度を新たに設け、グループの活動を掌握、統制する合理的な指導体系を確立した。

総書記は、３大革命グループの陣容をしっかりと固め、彼らの政治・実務水準を絶えず高めるよう導いた。1975年に３大革命グループの陣容を毎年、金日成総合大学、金策（キムチェク）工業大学（当時）をはじめ各大学と党幹部養成機関の卒業生で固めるようにした。

総書記は、３大革命グループのための種々の講習会を催すとともに、３大革命グループの責任者に助言も与え、党中央委員会政治委員会と国の重要な会議にも３大革命グループを参加させた。また、３大革命遂行のモデルケースを多くつくり、そこで３大革命グループのための模範講習を催すとともに、３大革命展示館を建設し、全国のグループにそれを見学させるようにした。

総書記は、３大革命グループがその本務である思想、技術、文化の３大革命に対する指導を強めることに力を入れるよう導いた。1974年５月、３大革命グループが本務である思想・技術・文化革命に対する指導に力を入れるよう活動方向を正した。また、1976年２月には３大革命グループ中央指揮部の活動家に、３大革命グループは３大革命赤旗獲得運動を正しく指導し積極的に後押しするとと

もに、党組織と力を合わせて３大革命を一層力強く推し進めるべきであると述べた。

総書記は、３大革命グループ運動に対する全党と全社会の関心を高めるようにするとともに、３大革命グループの活動と生活に深い関心を払った。

1974年８月、党組織と党活動家が３大革命グループの活動に関心を払い、彼らの活動を積極的に助けるとともに、出版・報道手段を通じて３大革命グループ運動の宣伝を強化するようにした。そして、1976年12月には道党責任書記協議会で、各党組織が３大革命グループ運動を党活動の主要な構成部分と見なし、この運動の発展に深い関心を払うようにと強調し、その年だけでも数度にわたって３大革命グループの活動に関する指示を与えた。また、３大革命グループが収めた成果を高く評価し、彼らを激励した。

金正日総書記は、思想、技術、文化の３大革命をさらに深化発展させるため、３大革命赤旗獲得運動を提唱し、賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは金日成同志の意を体して、以前チョンリマ作業班運動を起こしたように、今日、社会主義建設のすべての部門で３大革命赤旗獲得運動を繰り広げることにしました」

総書記は、「思想も、技術も、文化もチュチェの要求どおりに！」というスローガンのもとに３大革命赤旗獲得運動を展開することを提唱し、そののろしを上げた。

1975年11月の党中央委員会責任幹部協議会で、新たな高い形態の大衆運動である３大革命赤旗獲得運動を提唱した。それに応えて、同年12月の初めに工業部門では検徳(コムドク)鉱山が、農業部門では青山(チョンサン)協

同農場がのろしを上げた。そして、全国のすべての部門、すべての単位で検徳鉱山と青山協同農場の呼びかけに応える大衆集会が開かれた。こうして、３大革命赤旗獲得運動の炎は１カ月余りの間に工業、農業、交通運輸、科学、教育、保健医療などすべての部門に燃え広がり、全社会的な大衆運動として急速に拡大した。

総書記は、1976年１月１日に行った演説『今年の党活動で力点を置くべきいくつかの中心的課題について』で、３大革命赤旗獲得運動を展開するうえでの原則的問題を明示した。

まず、３大革命赤旗獲得運動の本質と中心的課題、重要な特徴を明らかにした。

３大革命赤旗獲得運動は、速度戦、思想戦の原則を具現し、人々の思想改造と経済・文化・国防建設における集団的革新運動を有機的に結合して力強く推し進めることによって、社会主義建設を最大限に促進する新しい大衆運動である。この運動の中心的課題は、思想革命、技術革命、文化革命を全面的にさらに促進することである。この運動の重要な特徴は、全社会の金日成主義化の要求に即して思想革命を力強く展開して社会の全構成員を熱烈な金日成主義者にするための高い形態の大衆的思想改造運動であり、工業化が完成し社会主義建設がより高い段階に入った新たな現実の要求を反映した高い形態の大衆的技術改造運動であり、完全に勝利した社会主義社会の建設が日程にのぼっている革命発展の新たな段階に展開される高い形態の大衆的文化改造運動であるということである。

総書記は、３大革命赤旗獲得運動を力強く展開するための方途を示した。総書記は、その段階を正しく設定し、段階別の課題を明確に定め、総括と評価を的確に行わなければならないと述べた。そし

て、３大革命赤旗獲得運動を常に重要な党の活動としてとらえ、この運動に対する党の指導を強化するようにした。

そのために、３大革命赤旗獲得運動を党活動の重要な構成部分と見なし、この運動が提起した課題を遂行することに力を集中するとともに、党員の組織・思想生活に対する指導もこの運動と密接に結びつけて行うようにした。特に、３大革命赤旗獲得運動を指導するうえで３大革命グループを大いに押し立て、この運動に対する指導を党委員会の活動としてとらえていくようにした。

総書記は、３大革命赤旗獲得運動を大衆自身の事業にするための組織・政治活動を強化するよう導いた。

党員と勤労者に３大革命赤旗獲得運動の意義と重要性を広く解説、宣伝し、広範な大衆をこの運動に決起させるための思想動員活動を積極的に行うようにした。また、1976年６月に３大革命赤旗獲得運動に関する指導書を下達し、それを実行するための全党的な討議を行うようにし、同年11月には全党的な経験交換会と模範講習を催し、すべての部門、すべての単位がこの運動をより高い水準で力強く展開するようにした。

そして、出版・報道手段を通じて３大革命赤旗獲得運動が収めた貴重な成果と経験を広く紹介、宣伝し、『労働新聞』で忠誠心に関する紙上討論を行ってこの運動を強力に推進するようにした。

総書記は、隠れた英雄の模範を見習う運動を提唱し、この運動を３大革命赤旗獲得運動と密接に結びつけて力強く推し進めるよう導いた。

金日成主席は1979年10月、いかなる名誉や報酬も望まず、かげひなたなく、他人の評価を気にせず、ただ党と革命、祖国と人民の

ためにすべてを捧げてきた隠れた英雄たちを探し出し､みなが彼らの模範を見習うべきだと述べた。

総書記は､1979年10月７日に道党責任書記協議会で行った演説と1980年１月８日に党中央委員会責任幹部協議会で行った演説で､隠れた英雄の模範を見習う運動を提唱し､この運動を党の重要な方針として打ち出した。隠れた英雄の模範を見習う運動は、社会の全構成員を模範的事実で感化して党と領袖に限りなく忠実な革命家に育て上げ、彼らの革命的熱意と創造的積極性を発揮させて、社会主義建設で一大高揚を起こすための大衆運動である。

総書記は、隠れた英雄の模範を見習う運動は全社会の金日成主義化が前面に押し出されている革命発展の新たな高い段階の要求にかなった大衆運動であるとして､すべての党組織がこの運動を力強く推し進めるようにした。

党機関紙をはじめ種々の出版･報道手段を通じて隠れた英雄の模範を広く紹介、宣伝し、党組織がそれに関する会読会や学習を行うとともに、党機関紙で隠れた英雄の気高い思想的・精神的品格を見習うための紙上討論を広範に行うようにした。一方、各級党組織が隠れた英雄の模範を見習う運動を力強く展開するための討議を行い、組織・政治活動を綿密に行うようにし、1980年１月には党中央委員会書記局の決定｢隠れた英雄の模範を見習う運動をさらに深化発展させるために｣を下達し、この運動を党委員会の活動としてとらえ、力強く推し進めるようにした。そして、党組織がこの運動を３大革命赤旗獲得運動と密接に結びつけて推進するようにした。こうして､隠れた英雄の模範を見習う運動は大きな生命力と牽引力を発揮し、急速に拡大した。

金正日総書記の賢明な指導のもとに思想、技術、文化の３大革命がさらに深化発展することにより、人民の思想・精神生活と経済・文化建設のすべての分野に新たな前進がもたらされ、全社会の金日成主義化偉業の促進に大きく寄与した。

第７節　「70日間戦闘」を力強く展開、自力更生の旗のもとに社会主義経済建設を推進、われわれの方式で生きるという戦略的方針を提示

金正日総書記は、全社会の金日成主義化の要求に即して社会主義経済建設を強力に推進するために心血を注いだ。

金日成主席は革命発展の要求を深く洞察し、1974年２月の党中央委員会第５期第８回総会で社会主義大建設の方針を打ち出した。社会主義大建設の方針は、６カ年計画を繰り上げて遂行し、近い将来に鋼鉄、非鉄金属、石炭、電力、セメントの生産をはじめ社会主義経済建設の10大展望目標を達成することにより、全社会の金日成主義化を促進するための経済建設綱領であった。

金正日総書記は金日成主席の遠大な構想を体し、社会主義大建設を力強く推し進めるための活動を指導した。

総書記は、以前映画革命と歌劇革命を指導する過程で得た経験に基づき、1974年２月、社会主義建設のすべての部門で速度戦を展開するという方針を示した。総書記は、速度戦はすべての活動を電撃的に推し進める社会主義建設の基本戦闘形式であり、革命的な活動展開原則であると述べた。また、速度戦の基本的要求は、すべての

力を総動員して仕事を最大限に速めるとともに、その質を最高のものにすることであると述べた。そして、速度戦を力強く展開するためには、思想革命を確固として優先させ、技術革命を強力に推進して絶えず新技術を導入し、正しい組織・指導活動を裏打ちしなければならないと述べた。

総書記は、速度戦の方針を具現して社会主義大建設を推し進めるために精力を傾けた。

まず、「70日間戦闘」を提唱し、それを輝かしい勝利へと導いた。総書記は、社会主義大建設戦闘が始まった初年から速度戦の要求を具現するため、経済建設を指揮する政務院（今日の内閣）の委員会、部の党組織と活動家の責任感と役割を強めなければならないと指摘し、さまざまの必要な措置を講じた。

ところが、この年の経済建設は原料と資材の不足、輸送難など多くの困難が伴ったうえに、活動家の消極的な活動態度がわざわいして、第3・4半期が終わるころになっても年間計画を遂行するめどが立たず、６カ年計画の遂行にも重大な影響を及ぼしていた。

金日成主席は、1974年10月３日の党中央委員会政治委員会で、人民経済計画の遂行状況を具体的に確かめ、どんなことがあっても年間計画を必ず遂行しなければならないと述べた。

総書記は、主席の指示どおりに経済活動における困難を克服し、1974年の人民経済計画を無条件に遂行するため、「70日間戦闘」を提唱した。

1974年10月５日、総書記は党中央委員会の活動家たちに「70日間戦闘」を行うべきだと述べた。そして10月９日には、党中央委員会及び政務院の責任幹部、道党委員会責任書記の協議会で行った演説

『全党が奮起して「70日間戦闘」を力強く繰り広げよう』で、「70日間戦闘」の目的と中心的課題、その遂行方途などを明示し、全党、全国、全人民を「70日間戦闘」へと奮い立たせた。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは、今回の『70日間戦闘』の手配を綿密に行い、初めから気を緩めることなく力強く推し進めて、どんなことがあっても勝利に導かなければなりません」

総書記は10月下旬から「70日間戦闘」を行うようにし、それを成功裏に進めるため、中央集権的な戦闘指揮体系を確立し、強力な指導陣容を整えることに深い関心を払った。

中央から各道、市、郡と工場、企業に至るまで「70日間戦闘」指揮部を設けて整然とした指揮体系を確立し、中央指揮部が戦闘を統一的に掌握し作戦する参謀部の役割を果たすようにした。また、党及び政務院指導グループをはじめ「70日間戦闘」グループを組織して各道と人民経済の重要部門、単位に派遣し、中央と地方の責任幹部が生産現場に出向いて戦闘を指揮するようにした。

総書記は、「70日間戦闘」で速度戦の方針を具現するため、思想戦を強力に展開し、これに綿密な仕事の手配を裏打ちするようにした。1974年11月２日、「70日間戦闘」で勝利を収めるためには困難に立ち向かう屈強な攻撃精神を持たなければならないと述べ、何よりも「70日間戦闘」中央指揮部のメンバーがこうした精神を持って戦闘の指揮に当たるようにした。

そして、「70日間戦闘」勝利の鍵を思想の啓発に見いだし、党員と勤労者の主席と党に対する忠誠心を強め、彼らが主席の教えと党の方針貫徹において無条件性の精神を発揮するようにすることに

重点を置いて思想教育を積極的に行い、あらゆる宣伝・鼓舞手段を総動員し、それを戦闘の基本的方向に集中して生産鼓舞攻勢を展開するようにした。また、大衆の創造的熱意を最大限に発揮させるようにした。

総書記は採掘工業、輸送、輸出の問題を解決することを「70日間戦闘」のキーポイントと見なし、それに力を集中させた。

採掘工業、鉄道運輸、輸出部門に指導陣容と宣伝・鼓舞陣容を集中的に派遣する一方、採掘工業を盛り立てるため、探鉱と掘進、はく土作業を先行させ、炭鉱、鉱山に能率的な採掘設備を集中的に供給し、運搬のコンベヤー化と空中ケーブル化を推進するようにし、不足している労働力の問題も解決した。また、輸送問題を解決するため、鉄道指令指揮体系を確立し、集中輸送を強化し、輸送の手配を綿密に行って貨車の回帰日数を短縮し、車両の修理と生産を速めるようにした。そして、輸出品の生産を急速に増やし、その輸送を円滑に保障し、貿易港の貨物通過能力と保管能力を高めるための措置を講じた。一方、全党、全国、全人民が採掘、鉄道運輸、輸出部門を積極的に支援するようにした。

総書記は「70日間戦闘」を勝利に導くため、各期間の戦闘方向と方途を示し、毎日全国の戦闘状況を確かめて必要な対策を講じた。また、信川（シンチョン）、海州（ヘジュ）など各地域と載寧（チェリョン）鉱山、苔灘（テタン）鉱山などの戦闘単位を訪ね、活動家の戦闘指揮状況、生産状況、生産保障及び給養活動状況に至るまでつぶさに確かめ、懸案を解決した。

総書記の卓越した、かつ洗練された指導と不眠不休の精力的な活動により、「70日間戦闘」期間に300人近くの勤労者が労働英雄称号を授与され、15万人の革新者が国家叙勲の栄誉に浴し、数多くの

勤労者が朝鮮労働党員の栄誉を担った。こうして、「70日間戦闘」は勝利に終わり、社会主義大建設では目覚しい成果がもたらされた。

「70日間戦闘」の過程で新しいチョンリマ速度、「70日間戦闘」速度が創造され、工業生産は戦闘以前に比べて1.7倍に高まり、1974年の工業生産総額は前年比17.2％増となった。そうして、遂行があやぶまれていた年間計画は超過遂行され、６カ年計画を繰り上げて遂行できる確固たる展望が開かれ、速度戦の新時代が開かれた。

人民は「70日間戦闘」を通じて、金正日総書記の指導に従えば、いかなる困難も乗り越えて勝利を収めることができるということを確信し、党の指導に忠実に従うという鉄石の信念を持つようになった。

1975年２月15日、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会（当時）は、金正日総書記に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与するという政令を採択した。

総書記は「70日間戦闘」で収めた成果に基づき、党創立30周年までに６カ年計画の主要な課題を繰り上げて遂行するための新たな戦闘を正しく指導した。

1975年１月の党中央委員会責任幹部会議で、主席の新年の辞を心に受け止めて新たな戦闘を展開し、10月10日までに年間計画を完遂し、６カ年計画の主要な課題を繰り上げて遂行することによって、党創立30周年を勝利者の大祝典として輝かせるという方針を提示し、それを貫徹するための準備と組織・政治活動を周到に行うようにした。

総書記は、新たな戦闘を成功裏に進めるためには３大革命路線を堅持し、政治、経済、文化の各分野でそれを具現しなければならな

いとして、新たに３大革命指導グループを各道と主要な工場、企業に派遣し、３大革命中央指揮部を設けた。そして、「70日間戦闘」で生産的一大高揚を起こしたその勢いで年初から生産を正常化するよう積極的な措置を講じるとともに、２月を新たな戦闘の準備期間と定め、万全の準備を整えるようにした。

総書記は、大衆を新たな戦闘へと立ち上がらせるため、勤労者の間に主席の新年の辞と1975年２月の党中央委員会第５期第10回総会の決定書、党創立30周年に際する党中央委員会のスローガンを浸透させ、全国各地で生産鼓舞活動を活発に繰り広げるようにした。

同時に、高揚した勤労者の革命的熱意を技術革命の遂行へと導き、金属工場をはじめ重工業部門の重要な工場、企業における全面的オートメ化と採掘工業部門における採掘設備と運搬設備の大型化、高速化を積極的に推し進めるようにした。また、「速度戦青年突撃隊」を組織して、経済建設の突破口を開くうえで青年が先駆的役割を果たすようにした。

総書記は、新たな戦闘を成功裏に遂行するため、社会主義建設の基本部門で革命的高揚を起こすよう導いた。

まず、生産の最初の工程である採掘工業を盛り立て、特に非鉄金属鉱物の生産において革新を起こすことに力を入れた。

検徳鉱山で新たな生産的高揚を起こすため、総書記は、全国がこの鉱山を積極的に支援するようにし、強力な指導陣容と生産鼓舞陣容を派遣するとともに、科学者、技術者を送って技術革命の遂行を助けるようにした。また、1975年７月１日、検徳鉱山の事業を現地で指導し、この鉱山に投資を集中する問題、大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインを設け、設備管理を強化し、坑指揮体系を確立す

るなど技術革命を進め、思想革命を力強く展開し、生産文化と生活文化を確立する問題、給養活動を改善する問題をはじめ、鉱山の事業を発展させるうえで提起される問題をすべて解決した。

総書記は、輸送部門が３化輸送方針（パイプライン化、ベルトコンベヤー化、空中ケーブル化）を貫徹するよう導いた。

オートメ化された黄海（ファンヘ）製鉄所により多くの鉱石を送るため、殷栗（ウンリュル）鉱山の大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインの建設を提唱し、西海に数千メートルの大型長距離ベルトコンベヤーを設けるよう指導した。そして、1975年６月23日には完成したベルトコンベヤー輸送ラインを見て回り、殷栗鉱山の大型長距離ベルトコンベヤーは自力更生の偉大な産物だと高く評価した。また、金策製鉄所――茂山鉱山間の大型長距離精鉱輸送パイプの建設をはじめ、運搬のパイプライン化、空中ケーブル化を推進するために力を傾けた。

総書記は、農業部門が穀物生産計画を遂行するよう精力的に指導した。

1975年１月、社会主義農村テーゼを貫徹するためのたたかいで党組織の役割を強めるようにするとともに、多くの協同農場を訪ね、チュチェ農法の要求どおりに農業を科学的、技術的に営むよう導いた。また、農業の機械化、化学化を推進するため、トラクターを量産し、１万数千台の田植機と数千余台の稲刈機を生産して農村に送るようにし、1975年７月には興南（フンナム）肥料連合企業所を訪ね、肥料の増産に取り組むよう励ました。こうして、党創立30周年までに６カ年計画の主要な課題を遂行するという奇跡が生まれた。

金正日総書記は、自力更生の革命的旗のもとに第２次７カ年計画を遂行するためのたたかいを正しく指導した。

第２次７カ年計画は、人民経済の主体化、近代化、科学化を推し進めて社会主義の経済的基盤をさらに強化し、人民生活を一段と向上させることを基本課題としていた。

総書記は、新しい展望計画の遂行に取りかかった初日の1978年１月１日、党中央委員会の責任幹部に行った演説『自力更生の革命的スローガンを高く掲げ、全党、全人民を立ち上がらせて第２次７カ年計画を期限前に遂行しよう』で、自力更生の革命精神を強く発揮することを第２次７カ年計画遂行のための党活動の総体的方針として提示した。

そして、自力更生の道だけが革命の最終的勝利を得る道であり、われわれにはこれ以外の道はないとし、自力更生の革命精神を強く発揮して第２次７カ年計画を期限前に遂行しなければならないと述べた。

また、自力更生の革命的旗のもとに新しい展望計画を確実に遂行するためには、勤労者に対する思想教育を強化し、すべての党組織が経済的課題の遂行に重点を置いて党活動を行わなければならないとした。そして、主席の教示と党の政策を無条件に貫徹する革命的気風を確立し、増産と節約運動を強化し、全社会に革命的に活動し生活する気風を打ち立てなければならないと述べた。

総書記は、新しい展望計画を遂行するためのたたかいを力強く展開するよう導いた。

そのために、すべての勤労者を第２次７カ年計画の遂行へと立ち上がらせるための組織・政治活動を綿密に行うようにした。

1978年１月の党中央委員会第５期第16回総会で、総書記は、すべての党員に送る党中央委員会の手紙を採択して下達するとともに、

手紙を貫徹するための全党的な討議を着実に行い、すべての党員と勤労者を経済建設へと奮い立たせるようにした。同時に、第２次７カ年計画の膨大な課題を確実に遂行するため、経済活動に対する党の指導を強化し、特に党活動を経済活動と密着させるようにした。

また、1978年５月29日の道党責任書記協議会で行った演説『全党が発奮して「100日間戦闘」を力強く展開するために』と題する演説を行い、「100日間戦闘」を成功裏に進めるための課題と方途を示し、すべての党組織が大衆を「100日間戦闘」へと奮い立たせるようにした。

総書記の指導により「100日間戦闘」は成功裏に遂行され、第２次７カ年計画遂行の突破口が開かれた。

これに基づき、総書記は新しい展望計画の重要な課題を遂行するためのたたかいを正しく導いた。

まず、石炭の生産を増やすことに優先的な力を入れた。

1978年11月の党中央委員会責任幹部協議会で、炭鉱で探鉱と掘進、はく土作業を先行させ、炭鉱設備を大型化、近代化、高速化し、坑内作業の総合的機械化を積極的に推し進めるようにした。特に、安(アン)州(ジュ)地区炭鉱を改造・拡張して総合的機械化のモデルケースにすることに大きな力を入れ、人民経済のすべての部門が安州地区炭鉱を積極的に支援するようにした。のみならず、炭鉱労働者の生活条件と給養活動にも深い関心を払い、安州地区に短期間に文化的な炭鉱労働者の都市を建設するようあらゆる措置を講じた。

総書記は、鉄道運輸を発展させるために精力を傾けた。

そのために、1977年に行った「輸送革命200日間戦闘」を1978年の年初から再度展開するようにし、それを成功裏に進めるために鉄

道局と鉄道分局、鉄道工場に指導グループを派遣した。また、輸送事業を発展させる問題について討議した党中央委員会第５期第18回総会が開かれた直後の1979年７月に5・18無事故・定時・牽引超過輸送運動を提唱し、鉄道運輸部門で増大する人民経済の輸送の需要を満たすための大衆的革新運動を積極的に展開するようにした。

そして、鉄道の電化に第一義的な意義を付与し、吉州（キルチュ）―恵山（ヘサン）間、新成川（シンソンチョン）―大同江（テドンガン）間の電化をはじめ鉄道の電化工事を力強く推し進めるよう導く一方、運輸手段と設備を重量化、オートメ化し、車両・機械工業を主体的に発展させるようにした。また、数多くの駅を訪ねて、駅の建設や鉄道の運行と近代化、制度と規律の確立で提起される問題を明示し、鉄道従事者を励ました。そうして、鉄道運輸部門ではかつてない革新が起こり、輸送難が解決された。

総書記は、主席が確立したテアンの事業体系を貫徹して経済管理を改善することに大きな力を入れた。

テアンの事業体系の要求どおりに企業管理を行うため、1979年１月、モデル工場をつくるよう指示し、その対象として降仙（カンソン）製鋼所（当時）をはじめ７つの工場を選定した。そして、モデル工場の模範を助長する一方、その企業管理の経験を関係部門に一般化させるための活動を行うようにした。

そして、テアンの事業体系の要求どおりに人民経済計画事業をさらに改善するため、計画部門の活動家が主席が構想し意図する問題を適時に反映して科学的で革新的な計画を立てるようにし、国の財政管理を強化するため、実践を通じてその生命力がすでに実証された日別生産・財政総括制度を人民経済のすべての部門、すべての単位で取り入れることにより厳格な財政規律を確立するようにした。

総書記は人民生活の向上にも深い関心を払った。

人民の物質・文化生活水準を高めるため、軽工業の発展に大きな力を入れた総書記は、1979年に重点的に解決すべき一般消費財生産の10大目標を定め、この目標を成功裏に遂行するよう導いた。また、既存の軽工業部門の工場をフル稼働させ、生産工程と生産方法の近代化、科学化を推進し、新しい工場の建設を第６回党大会までに終え、その運営を正常化するようにした。

首都の住民によりよい生活条件をもたらすため、楽園（ラクウォン）通りに一挙に3000世帯の高層住宅を建設し、次いで環状線通りをそっくり取り壊し、そこに蒼光（チャングァン）通りを建設するようにした。また、近代的な平壌（ピョンヤン）産院や蒼光院、万寿台（マンスデ）芸術劇場、大城山（テソンサン）遊園地をはじめ数多くの文化・厚生施設と情緒生活基地を整えるようにした。

このほかにも、国際親善展覧館、平壌――元山（ウォンサン）間道路をはじめチュチェ時代の記念碑的建造物を建設するよう導いた。

総書記は、1978年12月25日の党中央委員会責任幹部協議会で行った演説『党の戦闘力を高めて社会主義建設に新たな転換をもたらそう』と、1979年12月19日の党中央委員会の責任幹部への談話『われわれの方式で生きていくという党の戦略的方針を貫徹しよう』で、われわれの方式で生きていくという方針を提示し、それを貫徹するための課題と方途を示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「『われわれの方式で生きよう！』、まさにこれが今日わが党が強く打ち出している戦略的スローガンです」

総書記は、われわれの方式で生きようというスローガンの本質的内容を明示した。

われわれの方式で生きていくというのは、まず、自分の信念に従って思考し行動するということである。言いかえれば、他人の信念、他人の言動をまねるのではなく、確とした主体的立場と観点に立ち、主席の教示と党の意図どおりに思考し行動するということである。

われわれの方式で生きていくというのはまた、すべてのことを朝鮮革命と朝鮮人民の利益、朝鮮の実情に即して解決するということである。それは、革命の具体的環境と条件、人民の志向と要求に即して路線と政策を打ち立て、革命と建設を進めるということであり、他国の経験を受け入れる場合もうのみにするのではなく、朝鮮の実情と好みに合わせて改造し変革して創造的に受け入れるということである。

われわれの方式で生きていくというのはまた、すべてのことを自分の力で解決するということである。それは、いかなる問題であれ他人に依存するのではなく、自分自身が責任を持ち、自分の労力と資源、自分の技術によって解決することを意味する。

総書記は、われわれの方式で生きていくための具体的な課題を示した。

われわれの方式で生きていくためには、まず、主席の教示と党の方針を無条件に貫徹することに重点を置いて党活動を積極的に展開し、特に、自力更生の革命精神を強く発揮しなければならない。

また、党の戦闘力を高めることに大きな力を入れて、必勝不敗の革命的党にしなければならない。

また、党員と勤労者に対する思想教育を強化し、彼らを主席の革命思想、チュチェ思想で武装させなければならない。

金正日総書記がわれわれの方式で生きていくという戦略的方針

を示すことにより、朝鮮労働党と朝鮮人民はチュチェ思想が指し示す道に沿って社会主義建設をさらに強力に推進することができるようになり、朝鮮革命の陣頭にはチュチェの旗、民族自主の旗、自力更生の旗が一層力強くはためくようになった。

第８節　社会主義文化建設の各分野で新たな高揚を起こすために

金正日総書記は、全社会の金日成主義化の要求に即して社会主義文化建設の各分野で新たな高揚を起こすよう導いた。

総書記は、教育科学事業を深化発展させるために精力を傾けた。

金日成主席は1977年９月５日、党中央委員会第５期第14回総会で『社会主義教育に関するテーゼ』を発表した。総書記は、このテーゼを貫徹することを、全社会の金日成主義化の要求に即して社会主義教育を改善強化するための根本問題と見なした。

総書記はまず、全党と全人民を教育テーゼの貫徹へと奮い立たせた。

1977年10月、活動家たちに、社会主義教育テーゼを読んで行政実務的対策を講じればすむと考えては絶対ならない、社会主義教育テーゼを実現するためには思想転換をしなければならないと述べた。

思想転換を起こして全党と全人民を教育テーゼの貫徹へと奮い立たせるため、全国的に教育テーゼを支持し貫徹するための大衆大会と集会を盛大に催し、教育テーゼに関する集中的な教宣活動を行うようにした。

特に、幹部の間で思想転換を起こすため、1977年10月から道・市・郡党拡大総会を開くようにした。そして、各級党組織が教育事業に対する関心を高め、党としての指導を強化し、毎年９月５日を契機に教育テーゼの貫徹状況を総括することを制度化するようにした。

また、教育部門の活動家を教育テーゼ貫徹の先頭に立たせるため、1978年９月の末から10月の初めにかけて１万5000余人規模の全国教育者大会を開き、この大会が教育者にとって教育テーゼ貫徹のための一大思想転換の契機となるようにした。

総書記は、全社会の金日成主義化の要求に即応して教育の内容と方法を全面的に改善するよう導いた。

1978年６月、人民学校（当時）と高等中学校（当時）の教案を検討して、その改善方向と方途を示し、普通教育部門の授業内容を更新するようにした。そして、新たな発展段階に入った朝鮮革命の要求と現代科学技術の発展趨勢に即して、高等教育部門の教科書の内容を全面的に改作し完成するための措置を講じた。

また、開発授業法を具現し、理論教育と実践教育、教育と生産的労働を正しく結びつけるようにするとともに、それに必要な設備と条件を十分に整えるようにした。

総書記は、教員の水準を高め、学生・生徒の間に革命的学習気風を確立することを教育テーゼ貫徹のキーポイントと見なし、これに大きな力を注いだ。

各級学校の教員の政治・実務水準を一段と高めることを３大革命赤旗獲得運動の中心的課題の一つと見なしてこれに力を入れ、教員の見聞を広めるために見学、参観を広く行うようにした。一方、

1978年６月と８月に、教育部門では学習第一主義のスローガンを高く掲げ、学校では学習本位、成績本位に進むべきであると指摘し、成績優秀な学生・生徒と学級、学校を押し立て、学習を基本として学生・生徒を評価するようにした。

総書記は国の科学技術を発展させるために精力を傾けた。

1975年９月、各分野の科学者、技術者で「7・1科学者・技術者突撃隊」を編成して検徳鉱山の科学技術上の懸案を解決させ、次いで各工場、企業に科学者・技術者突撃隊を派遣するようにした。こうした成果に基づき、1978年２月17日には各分野の専門知識を持つ科学者で「２月17日科学者突撃隊」（当時）を編成して人民経済各部門の重要対象に派遣する措置をとった。また、科学者と現場の技術者、技能工で「5・19技術革新突撃隊」を編成し、技術革新運動を大衆運動として一層力強く繰り広げるようにした。その後、この突撃隊が科学技術革命の遂行において主席への忠誠心をより強く発揮することを期待して、突撃隊の名称を「4・15技術革新突撃隊」と改めた。

こうした措置により、科学研究活動と集団的技術革新運動が密接に結びつき、科学技術の発展に一大飛躍がもたらされた。

総書記は、科学技術の発展を正しく指導するための整然とした活動体系を確立した。

政務院の委員会、部と工場、企業に科学技術を担当する機構・職制を新設し、その役割を強めるとともに、科学研究活動を党が担当して指導する体系を確立し、科学研究活動に対する指導を党委員会の活動とするようにした。そして、科学者、技術者の陣容をしっかりと固め、彼らにより立派な科学研究条件をもたらすことにも大

きな力を入れた。

金正日総書記は、文学・芸術を全社会の金日成主義化の要求に即してさらに深化発展させるために心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「…文学・芸術部門の活動家は、金日成同志と党に対する強い忠誠心を持ち、革命的な文学・芸術作品をより多く創作することによって、全社会の金日成主義化に大いに寄与しなければなりません」

1974年６月１日の党中央委員会及び文化芸術部（当時）責任幹部協議会で行った演説で、全社会の金日成主義化の要求に即して文学・芸術部門の活動をさらに発展させるための課題と方途を示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

総書記は、社会主義の現実が求める文学作品の創作で革新を起こすよう導いた。

1974年12月６日の党宣伝活動家への談話で、全社会の金日成主義化偉業の遂行に入った現実が求める革命的な文学作品をより多く創作すべきであると指摘し、1978年１月には、小説文学部門に新たな変革をもたらすため、数年内に100編の長中編小説を創作するための措置を講じた。そして、作家が政治的見識と創作的技量を高め、現実体験を積み重ねるようにするとともに、小説と詩の創作で提起される思想的・芸術的問題を随時検討し、細心な指導を与えた。

特に、1979年７月21日、革命小説の創作で提起される歴史的事実と芸術的虚構の問題について述べ、1980年１月８日には、朝鮮作家同盟第３回大会の参加者に『発展する現実の要求に即して作家の政治的見識と創作的技量を一段と高めよう』と題する書簡を送

り、文学の使命と進むべき道を明示した。

　こうして、朝鮮文学史上重要な意義を持つ叢書『不滅の歴史』の中の長編小説『苦難の行軍』『白頭山の麓』と、長編小説『春』『大地をうるおす』『平壌時間』をはじめ多くの文学作品が創作され、勤労者を革命的世界観、領袖観が確立したチュチェ型の革命家に育て上げるのに大いに寄与した。

　総書記は、全盛期を迎えたチュチェの芸術をより高い段階に引き上げるために心血を注いだ。

　1975年５月６日、党中央委員会及び文化芸術部門の活動家に行った演説『われわれのチュチェの芸術をさらに発展させるために』で、芸術をより高い段階へと発展させる方向と方途を示し、創作家と芸術家を絶え間ない創作的高揚へと奮い立たせた。

　総書記は、映画革命で収めた成果を打ち固めながら映画の制作に革新をもたらすよう導いた。

　まず、革命映画を制作することに深い関心を払った。

　1975年に、劇映画に初めて主席が登場する革命映画『燃える炎』を制作することを提案した。そして、1975年12月と1977年４月に映画の制作を指導しながら、主席の革命的家庭を取り扱う映画で、格式化を避け、偉大な人間の生活を芸術的にリアルに描き、作品のスタイルに合わせて主席を描く問題など、革命映画制作の指針を与えた。

　そうして、『燃える炎』が革命映画として完成し、次いで『司令部を遠く離れて』『白頭山（ペクトゥ）』が制作され、革命映画の開花期が開かれた。

　総書記は、革命映画とともに多様な現実を主題とした映画を制作することにも深い関心を払って具体的な指導を与え、劇映画『こ

の地の果てまで』『無名の英雄』をはじめ、教育的意義が大きい多くの映画を制作するようにした。

総書記は、演劇革命を起こすよう賢明に導いた。

1972年11月７日、国立演劇団の作家、芸術家会議での結語『チュチェの時代にかなった新しい革命演劇を創作するために』で、演劇革命を起こしてわれわれの時代にかなった新しい革命演劇を創作するという方針を提示した。そして、革命の時代に奉仕する新しい演劇をつくりだすためには、戯曲の創作からはじまって俳優のせりふや演技に至るまで革命を起こさなければならないと指摘した。また、観客が舞台での俳優の動作ではなく、生きた人間の動作が見られるように立体性を保障し、朝鮮式の新しい演劇形式を創造しなければならないと強調した。

総書記は、主席が創作した『城隍堂（ソンファンダン）』を舞台化することから演劇革命を起こすようにした。そして、1977年11月４日と1978年６月14日をはじめ数度にわたって創作活動を指導し、創作家に原作の「種子」を把握させるとともに、創作の方向を示して、原作の思想的・芸術的特性を遜色なく再現できるよう導いた。こうして、1978年８月に『城隍堂』式革命演劇が完成した。

総書記は、歌劇革命で収めた成果を打ち固めながら歌劇芸術を絶えず発展させていくようにした。

1974年９月４日から６日にかけて行った文学・芸術部門の創作家への談話『歌劇芸術について』で、歌劇革命で収めた成果と経験を分析、総括し、それに基づいてチュチェの歌劇理論を全面的に集大成した。そして、歌劇革命で守るべき原則を示し、歌劇台本、歌劇音楽、歌劇舞踊、歌劇舞台美術、歌劇舞台形象など、歌劇芸術

を発展させるうえで提起されるすべての理論的･実践的問題を科学的に解明した。

完璧なチュチェの歌劇理論を打ち出した総書記は、革命歌劇『明るい太陽のもとで』をはじめ多くの歌劇作品を創作するよう導き、革命歌劇『血の海』の公演の高い思想的・芸術的水準を保つようにした。

総書記は、音楽と舞踊、美術の創作活動も精力的に指導した。

1975年５月に党中央委員会及び文化芸術部門の活動家に行った演説で、音楽と舞踊作品の創作に根本的転換をもたらし、チュチェの芸術をさらに発展させる方向と方途を示し、創作家と芸術家を新たな創作戦闘へと奮い立たせた。そして、舞台芸術部門で音楽舞踊総合公演を奨励し、その内容と形式を絶えず改善していくようにした。また、1978年６月には万寿台創作社を訪ね、主席の形象化と美術作品の創作に引き続き大きな力を入れるよう指示し、朝鮮画『白頭山の日の出』を大傑作につくりあげ、その模範を一般化させて朝鮮画の創作、美術作品の創作に新たな転換をもたらすようにした。

総書記は、出版・報道活動に革命的転換をもたらすために精力を傾けた。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日、わが党の出版物と通信、放送には、全社会の金日成主義化を促進し、社会主義大建設を力強く推し進めるべき重大な課題が提起されています。この重大かつ栄誉ある課題を立派に遂行するためには、新聞革命、報道革命、出版革命の炎をさらに燃え上がらせなければなりません」

1974年５月７日の朝鮮記者同盟中央委員会第３期第５回全員会

議拡大会議での結語『わが党の出版・報道手段は全社会の金日成主義化に寄与する強力な思想的武器である』で、出版・報道部門で一大革命を起こすという方針を打ち出した。

総書記は、出版・報道手段の基本使命と任務は、社会の全構成員を真の金日成主義者にし、社会を金日成主義の要求どおりに改造し、ひいては世界革命の勝利を達成することに大いに寄与することであると指摘した。そして、出版・報道手段がその歴史的使命を果たすための根本原則と、新聞革命、報道革命、出版革命の炎をさらに燃え上がらせるための課題を具体的に提示した。

総書記は、出版・報道活動において革命的転換をもたらす鍵を党機関紙の改善に見いだし、『労働新聞』における社説革命から新聞革命を起こし、それを手本にして出版・報道部門で革命の炎が燃え上がるようにした。

また、報道革命の火の手をあげるため、通信報道分野では、報道の政治的水準を高めることに重点を置きながら通信報道を公式化し、情勢のニュースを迅速かつ正確に処理し、対外通信を強化するようにし、放送報道分野では、放送音楽を抜本的に改善することに重点を置き、放送編集活動全般と放送話術、テレビ放送の画面において革新を起こすよう導いた。こうして、出版・報道活動には革命的転換がもたらされ、出版・報道手段は金日成主義出版・報道手段としての真面目を備え、その戦闘的使命をより立派に果たすようになった。

金正日総書記は、全社会の金日成主義化の要求に即して保健医療、スポーツを発展させ、社会主義的生産文化、生活文化を確立することに精力を傾けた。

総書記は1974年４月、保健医療部門の責任幹部への談話で、チュチェの医学を基本にして人民保健医療事業を発展させるための課題を示し、その実現をめざすたたかいを精力的に指導した。

党の予防医療方針を貫徹するため、衛生知識の宣伝と衛生防疫活動を改善強化し、種々の疾病と公害を未然に防止することに力を入れ、医師区域担当制をさらに強化するようにした。

総書記は、医療サービスに革命的転換をもたらすことに深い関心を払った。

医療従事者に対する教育活動を強化し、彼らが革命的同志愛と人間への真心のこもった愛情を持って患者の治療に当たるようにするとともに、高麗（コリョ）治療法を広く受け入れるよう対策を立てた。

総書記は、朝鮮の医科学技術を世界の発展趨勢に即応して急速に発展させることにも大きな力を注いだ。

医学科学院をはじめ科学研究機関をさらに強固に築き、それに対する整然とした指導体系を確立するようにした。そして、数度にわたって、科学研究活動を強化し、外国との科学技術交流を活発に行って先進医科学技術を大いに受け入れるべきであると指摘した。また、医学教育の質を一段と高め、医療従事者の間に学習気風を確立して水準を高めるようにした。

総書記は、スポーツの発展に深い関心を払った。

スポーツの大衆化方針を貫徹するため、スポーツに対する社会的関心を高め、すべての勤労者をスポーツ活動に積極的に参加させるための措置を講じた。そして、1979年４月には「９～10月人民体力検定月間」を新たに制定し、同年６月には「模範スポーツ郡創造運動」を提案し、大衆スポーツ活動を一層活発に繰り広げるように

した。また、全国青少年・学生種目別スポーツ競技大会を伝統化して学校のスポーツ活動を発展させるようにした。

総書記は、大衆スポーツとともに専門スポーツと国防体育の発展に大きな力を入れた。

思想戦、闘志戦、速度戦、技術戦の方針を提示し、朝鮮人の体質に合った主体的な戦術体系を確立し、訓練を強化して、すべての種目を世界的水準に引き上げるようにした。特に、サッカー、ボクシング、女子バレーボール、射撃、卓球などの種目を発展させるために精力的な指導を行い、国際競技で優秀な成績を収めるよう導いた。

そして、スポーツを科学的に発展させるため、体育大学の教育活動を強化する一方、各道に体育専門学校を設けるようにした。また、スポーツ技術協会とスポーツ科学研究所の役割を強めてスポーツ科学技術を発展させ、スポーツ部門の物質的・技術的土台を近代化するようにした。

総書記は、社会主義的生産文化と生活文化を確立することにも力を注いだ。

1975年７月１日の咸鏡南道及び検徳鉱山の幹部への談話で、工場、鉱山で労働者階級の生産文化と生活文化を創造し、それを都市と農村に普及させるという方針を提示した。

1975年７月、検徳鉱山を訪ねた総書記は、検徳の労働者は生産だけでなく、人々の思想を改造し技術を革新し、社会主義的生産文化と生活文化を確立するうえでも全国の模範となり先頭に立つべきだと述べた。

そして、検徳鉱山に宣伝カーや吹奏楽器などの文化娯楽器具を送るとともに、鉱夫たちの仕事と生活に気を配り、すべての問題を

解決した。こうして、検徳の労働者は生産文化と生活文化を確立するうえで全国の先頭に立ち、全国各地の工場、企業、協同農場は検徳の模範を見習うようになった。

総書記は1978年８月、工場、企業の党組織と３大革命グループ、勤労者団体組織が生産文化を確立するために力を傾けるようにした。

総書記は、人々の社会文化生活を改善するようはからった。そのために、人々が服装をはじめ身だしなみを整え、勤労者に文化的な生活を十分に保障し、社会秩序と公衆道徳をきちんと守るよう導いた。また、都市と農村をより美しく整備し、勤労者が古い生活習性をなくし、社会主義的生活様式を確立するようにした。

金正日総書記の賢明な指導により、勤労者の全般的な文化・技術水準が高まり、全社会にチュチェの革命的文化がみなぎるようになった。

第９節　祖国統一勢力を強化し、在日朝鮮人運動を発展させるために

1970年代の中ごろ、金正日総書記は内外の情勢を科学的に分析したうえで、祖国の統一をめざす活動を賢明に指導した。

このころ、アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味の一層露骨化する新たな戦争挑発策動と民族分断永久化策動のため、祖国統一の前途には重大な障害がもたらされていた。

アメリカ帝国主義は、1975年にベトナム戦争で惨敗を喫して東

南アジアから追い出されると、南朝鮮を自国の「前線防衛地域」と宣言して核兵器を大々的に搬入する一方､侵略兵力を大幅に増強し､作戦指揮体系を改編した。そして､1976年からは北侵をねらった核試験戦争であるチーム･スピリット合同軍事演習を開始し、毎年エスカレートさせる一方、同年８月には「板門店（パンムンジョム）事件」を起こして情勢を極度に緊張させた。

南朝鮮傀儡一味はアメリカ帝国主義の筋書どおりに、ありもしない「南侵の脅威」を喧伝して北南の対決を鼓吹する一方、ようやく実現した北南の対話を破綻させた。のみならず、軍事境界線上の東西240余キロの区間の南側地域に民族分断の象徴であるコンクリート障壁を築くという反民族的犯罪行為を働いた。

そのため、朝鮮の北南関係は7・4北南共同声明発表以前の状態に逆戻りし､朝鮮半島にはいつ何時戦争が起こるか分からない緊張した情勢が生じた。

金正日総書記はこうした情勢の要求を深く洞察し、祖国統一の主体的革命勢力を最大限に強化するために心血を注いだ。

1975年２月16日の指示と、1975年５月２日の党中央委員会書記、部長、副部長協議会で行った演説『現情勢の要求に即して革命勢力を打ち固め、党活動をさらに改善強化するために』で、祖国統一の主体的勢力を強化するという課題を提示し､それを実現するためのたたかいを賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれはあくまでもわれわれの主体的勢力に依拠すべきであり、自力でアメリカ帝国主義を追い出して祖国を統一しなければなりません。そのためには、われわれの主体的革命勢力

を最大限に強化しなければなりません」

北半部の革命勢力を強化するため、総書記は、まず政治勢力を打ち固めることに関心を払い、同時に軍事力と経済力を強化するために力を注いだ。

南朝鮮でも祖国統一勢力が急速に成長した。

南朝鮮人民は「金日成主義研究会」をはじめ多くの研究組織をつくり、研究討論会や実践討論会を活発に行った。また、さまざまな形態の合法的団体と非合法的団体を組織した。南朝鮮人民は、1977年から進めてきた反ファッショ民主連合戦線の結成を支持する署名運動を発展させて階層別の新しい闘争組織をつくり、各階層の大衆を組織的に結束する活動を積極的に推進した。その結果、1978年７月に連合戦線形態の反ファッショ民主主義闘争組織である「民主主義国民連合」が結成された。この組織は1979年３月に名称を「民主主義と民族統一のための国民連合」と改め、その規模を拡大した。

総書記は、海外同胞を祖国統一のための一つの勢力として結束するようにした。海外に多くの代表団と芸術団を派遣し、海外同胞の間で祖国統一への熱望を呼び起こすとともに、祖国を訪問する海外同胞との活動に力を入れるようにした。

こうして、北アメリカと西ヨーロッパ在住の海外同胞の間で統一熱気が高まり、祖国統一のための闘争組織を結成する活動が力強く繰り広げられた。

アメリカと西ヨーロッパ、北ヨーロッパ在住の海外同胞は祖国統一のための闘争団体を組織し、これに多くの海外同胞を加入させた。また、世界各国の海外同胞は1977年８月、東京で広範な海外同

胞の統一的組織体である「民主民族統一海外韓国人連合」を結成した。総聯（在日本朝鮮人総聯合会）と海外同胞組織は、大衆集会やデモ、署名運動、講演会、声明発表など、さまざまな形式と方法で祖国統一を早めるための宣伝活動と大衆闘争を力強く繰り広げた。

総書記は、祖国統一偉業に対する国際連帯を強めるよう導いた。

朝鮮労働党の自主的祖国統一方針の正当性と、アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味の反統一策動の本質を積極的に解説、宣伝するようにした。また、国連の舞台を通じてアメリカ帝国主義の民族分断策動を打ち砕き、祖国統一に有利な国際的環境をもたらすよう導くとともに、世界的規模で祖国統一偉業を支持する連帯運動をさらに拡大発展させるようにした。

こうして、祖国統一の実現に有利な国際的環境がもたらされた。

世界の多くの国と地域で朝鮮の自主的平和統一を支持する連帯組織が結成された。1977年６月に「朝鮮の自主的平和統一のための国際連絡委員会」が組織されたのをはじめ、70余カ国で「朝鮮人民との連帯委員会」「朝鮮統一支持委員会」などが組織されて活動を行った。1980年に連帯組織の数は250余に達した。

1977年２月と1978年11月にはベルギーのブリュッセルと日本の東京で、朝鮮の自主的平和統一を支持する第１回、第２回世界大会が開かれた。これらの大会は、祖国の統一をめざす朝鮮人民のたたかいに対する国際連帯運動をさらに強化する重要な契機となった。

朝鮮の統一を支持する国際連帯運動は世界的規模で急速に組織化されただけでなく、その規模がかつてなく拡大した。1979年４月21日から12月31日まで世界的規模で展開された「アメリカ軍の南朝鮮からの撤退を求める国際的な署名運動」には、128カ国と31の国

際機構及び地域機構の無慮10億8000万人が参加した。

総書記は、1977年１月、幅広い北南対話を実現するための主動的な提案を行うようにし、その実現のために精力を傾けた。

1977年１月25日、共和国北半部の諸政党、社会団体は連席会議を開き、南朝鮮の諸政党、社会団体と各階層の人民、海外同胞に北南政治協商会議を招集することを呼びかける手紙を採択した。北南政治協商会議招集方案は内外の全幅の支持と歓迎を受けた。

にもかかわらず、南朝鮮傀儡一味は統一より「平和の定着」の方が緊急な問題であると強弁し、「訪問外交」「招請外交」を繰り広げてこれを妨害した。

こうした状況下で、祖国統一民主主義戦線中央委員会は1979年１月23日の声明を通じて、全民族大会招集のための双務的及び多務的予備会談を開くことを提案し、共和国政府は1979年１月31日の朝鮮中央通信社の声明を通じて、民族の和解と対話に有利な雰囲気をつくりだすための主動的な措置として、２月１日から北半部の全地域で相手方に対する誹謗を一切中止することを内外に宣言した。そして、祖国統一民主主義戦線中央委員会は２月５日に再び声明を発表し、北と南の接触と対話を実現するための予備的協議機構である民族統一準備委員会を設けることを提案し、そのための北南連絡代表の接触を２月20日に板門店で持つことを提起した。

しかし、南朝鮮傀儡一味は北南連絡代表の接触を人為的な障害と大規模の軍事演習騒ぎによって破綻させた。

総書記は、1979年に朴正熙（パクチョンヒ）逆徒が射殺された「10月事件」のため南朝鮮傀儡一味の支配体系が麻痺状態に陥った時にも、「合作、団結、統一によって民族の活路を開こう」と題する『労働新聞』の

社説を発表して、全民族の団結した力で統一の扉を開くことを呼びかけるようにし、1980年１月には再び、北南間の多務的及び双務的接触を持つことを呼びかける手紙を南朝鮮の各政党、社会団体の人士と当局の責任ある地位にある人物に送るようにした。そうして、北南双方の総理接触を実現するための実務代表の接触が持たれることになった。

しかし、新たに登場した南朝鮮傀儡一味は「以北との統一など考えてはならない」として、南朝鮮全域に「非常戒厳令」を布く一方、北南の総理接触のための実務代表の接触まで破綻させた。

北南対話は実現しなかったが、対話の全過程は全民族の平和統一への熱望をさらに高めた。

アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味の反統一策動に激怒した南朝鮮人民は民主化闘争に立ち上がり、ついに1980年５月、光州（クァンジュ）で蜂起を起こした。光州人民蜂起には労働者、農民、青年学生など30余万の各階層の人民が参加し、闘争は全羅（チョンラ）南道の17の市、郡に拡大した。光州市を完全に掌握し、10日間も武器を取って勇敢に戦った光州人民蜂起は、民主主義を実現するためのアジア人民の近代闘争史に例を見ない最大規模の激烈な武装抗戦であった。

金正日総書記は、在日朝鮮人運動を発展させるために精力を傾けた。

1970年代の中ごろ、総聯には、祖国の現実に歩調を合わせて在日朝鮮人運動を新たな高い段階へと発展させるべき課題が提起されていた。1974年２月の総聯第10回全体大会は総聯が金日成主義の旗を掲げて進むことを明示し、1977年９月の総聯第11回全体大会は総聯の金日成主義化を総聯事業の総体的綱領として宣言した。

総書記は、総聯のすべての活動を同胞大衆の教育に集中するようにした。

総聯は行政的組織ではなく大衆的政治団体であるとし、総聯は対人活動、同胞大衆の教育に活動の重点を置いて思想教育の内容を深化させ、大衆教育の体系と方法を改善すべきだと述べた。

総書記は特に総聯の教育事業に深い関心を払い、新しい世代の教育に力を入れるよう導いた。総聯の民族教育発展のために教育援助費と奨学金を毎年定期的に送るようにし、教育の質を高め、物質的条件を整えるための対策を立てた。

そうして、総聯のすべての学校に金日成主席の贈り物として大(テ)同(ドン)江と朝鮮東海、西海の魚類の標本、白頭山の木々の標本、鉱物標本、動物の剥製など数多くの視覚教材が送られ、朝鮮大学校には朝鮮歴史博物館と自然博物館が設立された。これは青少年の教育に大いに役立った。

総書記は、総聯の活動家と同胞が社会主義祖国をしばしば訪問するようにした。

総聯の活動家と同胞を重要な記念日や祝日に祖国に呼び寄せたり大きな会議に参加させ、定期的に祖国を訪問するようにさせた。そして、1979年８月からは短期祖国訪問事業を行うよう対策を立てた。また、祖国訪問期間に海外同胞が革命戦跡や革命史跡、大記念碑的建造物を参観し、主席の偉大さと社会主義祖国の貴重さを深く体得できるようあらゆる条件を整えた。

金正日総書記の賢明な指導によって、在日朝鮮人運動は金日成主義の旗のもとに新たな高い段階へと発展するようになった。

第10節　反帝・自主勢力を強化するために

金正日総書記は、国際舞台で反帝・自主勢力を強化するために心血を注いだ。

総書記は、チュチェ思想の宣伝活動を世界的規模で展開することに大きな力を入れた。

1970年代の後半、出版物によるチュチェ思想の宣伝活動は大きな成果を収めた。金日成主席の多くの著作が翻訳、出版されて対外に普及され、主席の革命活動史を収録した図書やチュチェ思想について解説した図書が大々的に発行、普及された。また、朝鮮労働党の革命伝統、朝鮮における社会主義建設の成果をはじめ、チュチェ思想を具現することによって得た成果と経験を紹介する各種の図書が発行、普及された。

総書記は、世界各国で行われている主席の著作を翻訳、出版、紹介する活動を助けるよう導いた。

世界の各地域では進歩的団体と出版界の人士が主席の著作翻訳委員会や出版委員会を設け、毎年膨大な部数の著作を出版、普及していた。主席の著作は1978年には71万6000部が発行され、79カ国の487の出版物、５億9000万部に掲載された。1980年には20余カ国語で297万余部が発行され、百数十カ国で700余種の新聞と出版物に掲載された。

総書記は、チュチェ思想の信奉者との活動に力を入れるよう導いた。世界各国のチュチェ思想信奉者の活動を学術的に積極的に助

けるとともに､各国のチュチェ思想研究代表団が朝鮮に来てチュチェ思想を学べるようにした。

世界各国ではチュチェ思想の信奉者が急増し、多くのチュチェ思想研究組織がつくられ､チュチェ思想の研究･普及活動は世界的規模で組織化された。

1970年代の後半に至り、世界のほとんどの国でチュチェ思想を研究する組織がつくられ、少なからぬ組織がその名称を「金日成主義研究グループ」「金日成主義研究委員会」と改めた。そして、多くの国で党と政府の関心のもとにチュチェ思想研究全国委員会が結成され､研究活動が全国的規模で組織化された。研究組織の成員構成においても新たな変化が起こり､政界、言論界、学界の人士と抗争部隊の闘士、青年学生だけでなく､党と政府の高位級人士から労働者、農民に至るまで各階層の人々が参加するようになった。

チュチェ思想の研究・普及活動が世界的規模で活発化するに伴って､地域的及び国際的な常設機関が創設され､チュチェ思想を解説、宣伝する数多くの定期刊行物が発刊された。

1978年２月にラテンアメリカチュチェ思想研究所が、同年４月には日本の東京に事務局を置くチュチェ思想国際研究所が、1980年９月にはアジア地域チュチェ思想研究所がそれぞれ創設された。そして、チュチェ思想の信奉者とチュチェ思想研究組織によって『チュチェ思想研究』『金日成主義研究』『自主性』『自主の旗』など、さまざまな名称の数多くの定期刊行物が発行された。

チュチェ思想研究組織によってチュチェ思想に関する国際討論会が世界的規模で活発に行われた。

1974年10月にトーゴでチュチェ思想に関する国際討論会が開か

れたのを皮切りに、1976年９月にはマダガスカルで、1977年９月には朝鮮で、そして1979年４月にはインドで世界的規模のチュチェ思想討論会が開かれた。

討論会では、チュチェ思想の研究で得た成果と経験が分析、総括され、チュチェ思想の偉大さと独創性が科学的、理論的に深く論証され、チュチェ思想を具現するうえで提起される原則的問題について広範な意見が交換された。

チュチェ思想に関する国際討論会は、チュチェ思想の研究・普及活動を深化発展させるのに大きく貢献した。チュチェ思想の研究は学術的な認識の段階を超えて、革命実践の指針を探求する段階に入った。多くの国の党と政府の高位級人士がチュチェ思想の研究・普及活動に参加し、チュチェ思想を政策作成の基礎とした。

金正日総書記は、反帝・自主勢力の団結を強めるために心血を注いだ。

総書記は、非同盟運動の自主的発展のための対外活動を力強く繰り広げるよう精力的に指導し、まず、朝鮮が非同盟運動に参加するようにした。

共和国政府は、非同盟諸国調整委員会のメンバー17カ国に金日成主席の特使や外交部（当時）代表団を派遣するなど、積極的な外交活動を展開した。そうして、1975年８月、ペルーの首都リマで開かれた非同盟諸国外相会議で朝鮮は満場一致でこの運動の正式の参加国となった。

総書記は1976年３月とその後の数度にわたって、非同盟諸国が自主性を堅持し、非同盟運動全般の利益を優先させながら意見の相違や紛争問題を団結の原則に立って解決していく問題、非同盟諸国

の統一団結を第一とし、これにすべてを服従させる問題、非同盟諸国の会議で複雑さを招きかねない問題を上程しない問題をはじめ、非同盟運動の統一団結を強めるための活動原則と規範を示した。

総書記は、朝鮮が初めて参加する第５回非同盟諸国首脳会議に大きな意義を付与し、そのための国家準備委員会を設け、その活動を国の関心のもとに進めるようにした。

そうして、1976年８月、スリランカのコロンボで開かれた第５回非同盟諸国首脳会議は成功裏に行われた。会議では、主体的立場と観点に立って今の時代を評価し、非同盟運動の役割を強め、反帝反植民地主義闘争を強化するといった課題を示した基本文書と、朝鮮労働党の祖国統一方針を支持する決議が採択された。

総書記は、帝国主義者の分裂・離間策動のため一部の非同盟諸国間に紛争が起こり、この運動の発展に大きな障害がもたらされていた時期に開かれる1978年の非同盟諸国外相会議と1979年の第６回非同盟諸国首脳会議を成功させるための積極的な対策を立てるようにした。

1978年７月には非同盟諸国外相会議に関する朝鮮労働党と共和国政府の原則的立場を、1979年７月には第６回非同盟諸国首脳会議に関する朝鮮労働党と共和国政府の原則的立場を、朝鮮労働党中央委員会政治委員会・朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会合同会議に関する報道に盛り込んで明らかにするようにした。

非同盟諸国外相会議、首脳会議に関する朝鮮労働党と共和国政府の原則的立場は、非同盟運動の分裂を防ぎ、統一を実現するのに大きく寄与した。第６回非同盟諸国首脳会議で、朝鮮民主主義人民共和国はこの運動の調整委員会のメンバーに選出された。

総書記は、非同盟諸国との友好・協力関係を発展させるよう導いた。

非同盟諸国との友好・協力関係を発展させることの重要性を深く洞察した総書記は、党中央委員会の責任幹部たちに非同盟諸国との団結と協力を強めることに大きな力を入れるよう指示し、数度にわたって非同盟諸国との政治・経済・文化交流を深めるうえでの具体的な問題について述べた。

総書記の指示に従い、党と共和国政府は非同盟諸国と党及び政府代表団をはじめ、さまざまな代表団の交流を活発に行った。

金日成主席の特使が1978年に４カ国、1980年に12カ国に派遣され、党及び政府代表団と多くの代表団、芸術団がアジア、アフリカの数多くの国を訪問した。そして、1976年から1986年10月までの間に非同盟諸国の26カ国の党首、元首をはじめ数多くの党及び政府代表団と経済・文化代表団が朝鮮を訪れた。

代表団の交流過程に、友好・協力関係を新たな段階に発展させるための種々の条約、協定が締結された。

朝鮮労働党と共和国政府は、非同盟諸国の経済建設、教育・文化建設、国防建設など新社会の建設を誠心誠意援助した。

実例をあげれば、1970年代の末までにマリ、ベニン、ガイアナ、モザンビーク、マダガスカル、ブルンジなど21カ国で、中小規模の灌漑工事をはじめ農業の物質的・技術的土台を築くための建設事業を支援した。また、タンザニア、ギニア、マダガスカル、シリア、モザンビーク、イエメン・アラブ共和国など多くの国に農業や教育、芸術、スポーツの専門家を派遣し、経済や文化など各部門の活動を援助した。

非同盟諸国との相互往来と接触の強化、種々の条約及び協定の締結、新社会の建設に対する積極的な協力はそれらの国の自主的発展に大いに寄与するとともに、友好・協力関係を発展させ、非同盟運動の団結と威力をさらに強めた。

総書記は反帝・自主勢力の団結を強めるため、国際共産主義運動を自主時代の理念に即して発展させることに深い関心を払った。

1979年１月１日、党中央委員会の責任幹部たちに、国際共産主義運動が自主の道を揺るぎなく進むようにするためには、各国の党と人民があらゆる支配と従属に反対し、自主性を断固擁護し、すべての国の党が自主性の原則に基づく相互関係の規範を厳守しなければならないと述べた。

また、1976年３月13日と1980年１月６日をはじめ多くの機会に、朝鮮労働党の自主的な対外政策を擁護、貫徹し、支配主義的策動に抗してたたかわなければならないと指摘し、その実践的模範を示すようにした。そして、兄弟党間の意見の相違を速やかに解消し、自主性に基づく団結を図るために極力努力し、世界各国の共産党、労働者党との連帯を強めるよう導いた。

朝鮮労働党と共和国政府は総書記の指導のもとに、自主性の原則に基づいて対外活動を積極的に繰り広げた。

朝鮮労働党と共和国政府は1977年と1978年だけでも、多くの社会主義国の党首、元首と数多くの党及び政府代表団を招いた。そして、1978年には30余の代表団を80余回にわたって、1979年には40余の代表団を70余回にわたって社会主義諸国に派遣した。また、ヨーロッパの資本主義諸国をはじめ世界各国の共産党、労働者党との往来と接触を活発に行い、自主の道を進むための彼らのたたかいを

積極的に支持声援した。

金正日総書記の精力的な指導により、1970年代の後半に朝鮮労働党と共和国政府の対外的威信は一段と高まった。そうして、朝鮮労働党第６回大会が開かれるまでに103カ国と大使級外交関係を結んで政治・経済・文化協力を深め、150余の国際機構に加入して反帝・自主のための活動を繰り広げた。

第５章　全社会の金日成主義化をさらに促進するために

（1980年10月～1989年12月）

第１節　朝鮮労働党第６回大会を勝利者の大会とするための活動を指導、全社会の金日成主義化をさらに促進するための課題を提示

金正日（キムジョンイル）総書記は朝鮮労働党第６回大会を勝利者の大会、党と革命発展の新たな里程標をもたらす歴史的な大会にするため精力的な活動を展開した。

1979年12月の朝鮮労働党中央委員会第５期第19回総会では、翌年の10月に朝鮮労働党第６回大会を招集することが決定された。朝鮮労働党第６回大会は総書記が朝鮮労働党の指導者として初めて催す大会であり、党を強化発展させるうえで画期的な転換をもたらすべき歴史的な大会であった。

金正日総書記は次のように述べている。

「各党組織は党と革命発展において新たな里程標を示すことになる歴史的なわが党第６回大会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるための闘争を力強く繰り広げなければなりません」

総書記は1980年１月８日、朝鮮労働党中央委員会責任幹部協議会で行った演説『第６回党大会を迎えて党をさらに強化し、革命と建

設で新たな高揚を起こそう』で、朝鮮労働党第６回大会を迎えて党を強化し、革命と建設で新たな高揚を起こすための課題を示し、高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって党大会を迎えるよう全党員と勤労者を奮い立たせた。

総書記は、第６回党大会を高い政治的熱意をもって迎えるための活動に優先的な力を注いだ。

そのために、党の隊伍をしっかり固め、広範な大衆を金日成(キムイルソン)主席と党のまわりに固く結束する一方、党員と勤労者に対する思想教育活動を強化して、彼らが党と領袖に対する限りない忠誠心を持ち、チュチェの革命偉業の達成のために断固たたかうようにした。

総書記は、第６回党大会を輝かしい勤労の成果をもって迎えるためのたたかいを精力的に指導した。

1980年の初めから社会主義建設のすべての部門で革命的大高揚の炎を燃え上がらせるようにし、同年６月には1980年度の人民経済計画を党大会開催までに完遂するための「100日間戦闘」を提唱し、それを勝利に導いた。

「100日間戦闘」に入る前に、中央と各道・市・郡に「100日間戦闘」指揮部を設け、有能な活動家を戦闘指揮部と指導グループに組み入れ、国の人的・物的・技術的潜在力を総動員するようにした。また、６月の末には党中央委員会のスローガンと電文指示を示達し、党の組織・政治活動の総力を「100日間戦闘」の成功のために集中させるようにした。

こうして、全国のすべての部門、すべての単位で、党中央委員会のスローガンと電文指示に呼応して「100日間戦闘」を力強く繰り広げるための勤労者の決起集会が開かれ、７月１日から歴史的な

「100日間戦闘」が始まった。

総書記は「100日間戦闘」期間に100回余りの指示を与え、多くの単位の活動を現地で指導し、戦闘の過程で生じる問題を解決した。総書記の賢明な指導によって全国的に「100日間戦闘」の課題は超過遂行され、戦闘期間の工業生産は前年同期に比べ142％に増大した。

総書記は「100日間戦闘」とともに「党大会製品」の生産戦闘を推し進めた。

1980年６月中旬、莫大な資金を一般消費財の生産に振り向け、数百種の一般消費財を含む膨大な量の「党大会製品」の生産戦闘を手配するとともに、生産に必要な原料と資材を優先的に供給するようにした。

「党大会製品」生産戦闘現場では連日奇跡と革新が起こり、生産目標はわずか３カ月間で110.4％で超過遂行された。こうして、全国の商店には「党大会製品」が山と積まれ、人民は第６回党大会を大きな喜びのうちに迎えることになった。

総書記は、第６回党大会を輝かしい勤労の成果をもって迎えるため、平壌(ピョンヤン)産院と蒼光(チャングァン)院、蒼光通りを記念碑的建造物として建設するよう導いた。

総書記は、朝鮮労働党第６回大会と党創立35周年慶祝行事が最高の水準で行われるよう深い関心を払った。

総書記は、党大会の文書を最高の水準で準備することに優先的な力を注いだ。

党の性格と指導思想、革命伝統と最高目的、党建設と党活動の原則など、数多くの問題を新たに明文化した党規約の改正草案を作成するようにし、それを完成させた。そして、党大会に提出するすべ

ての文書と代表たちの討論が高い政治的・思想的水準で準備されるよう細かに指導した。

総書記は、朝鮮労働党第６回大会と党創立35周年慶祝行事を盛大に準備するよう導いた。

そのために、党大会はもとより大衆示威行進や大マスゲーム、祝賀夜会などの慶祝行事を最高の水準で大規模に行うという、大胆にしてスケールの大きい作戦を展開し、すべての行事が党と領袖のまわりに固く結束した統一団結の威力と党と人民の組織性、規律性を誇示する大政治行事となるよう細かな指示を与えた。

1980年10月10日、首都平壌では歴史的な朝鮮労働党第６回大会が開催された。大会には、全国の党組織から選出された6000名の代表とオブザーバー、そして大会を祝うために訪朝した118カ国の177の党及び政府代表団と代表、各界の人士が参加した。

金日成主席は大会の報告で総括期間に３大革命を遂行するうえで得た成果と経験を総括し、全社会のチュチェ思想化を朝鮮革命の総体的任務として宣布し、それを実現するための課題と遂行方途を示した。

大会で金正日総書記は、全党と全人民の一致した意思と念願によって党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会書記、党中央軍事委員会委員に選出された。

朝鮮労働党第６回大会を契機に朝鮮革命は新たな高い段階に入ることになり、朝鮮人民は金正日総書記の指導のもとに全社会の金日成主義化を実現するための歴史的偉業を促進することができるようになった。

金正日総書記は全社会の金日成主義化を促進するための課題を

提示した。

1980年12月３日、党中央委員会及び平壌市党委員会責任幹部協議会で行った演説『党組織のいくつかの課題について』と、1981年４月３日、道党責任書記協議会で行った演説『道・市・郡党委員会の課題』で、党大会の決定に呼応して全社会の金日成主義化をさらに促進するための課題を提示した。

まず、党活動を革命発展の要求に即して深化発展させなければならないと指摘した。

総書記は、党活動を革命発展の要求に即して深化発展させるうえでの重要な問題は、金日成同志の教示と党の方針を無条件に貫徹する革命的気風を打ち立て、党の基礎固めを引き続き強力に推し進めることであり、党員と勤労者に対する思想教育活動をさらに強化することであるとした。

総書記は、隠れた英雄の模範を見習う運動を深化発展させなければならないとし、隠れた英雄の模範を見習う運動を、隠れた英雄が発揮した党と領袖に対する忠誠心を見習うことに主眼を置き、革命課題の遂行と密接に結びつけて幅広く進めるべきであると強調した。

総書記は、３大革命グループ運動をさらに深化発展させなければならないとし、党活動家が３大革命グループ運動に対する観点を正し、変化した現実に即して指導体系と指導方法を絶えず改善し、各級党委員会の責任幹部がグループ員の教育に深い関心を払って彼らが３大革命の前衛、闘争の旗手としての役割を果たすようにしなければならないと指摘した。

総書記が提示した課題は、あらゆる難関を克服して第６回党大会

が示した困難かつ膨大な課題を確実に遂行し、全社会の金日成主義化をさらに促進するうえでの指導指針となった。

第２節　金日成主席の生誕70周年を迎えて主席の不滅の革命業績をとわに輝かせるために

朝鮮人民は、朝鮮労働党第６回大会が示した課題を実現するために奮闘している時に金日成主席の生誕70周年を迎えることになった。

金日成主席の70星霜の長きにわたる革命的生涯と活動は、主席が朝鮮革命と世界の自主化偉業を輝かしい勝利の道に導き、時代と歴史の前に偉大な業績を築き上げた栄光に満ちた歴史であった。それゆえ、朝鮮人民と世界の革命的人民は金日成主席に対する限りない尊敬と欽慕の念を抱き、主席の生誕70周年を大慶事として迎えることを願っていた。

金正日総書記は朝鮮人民と世界の革命的人民の意思と願いを体し、金日成主席の生誕70周年を意義深く迎えるために心血を注いだ。

総書記は、金日成主席の革命業績を子々孫々に伝えることに優先的な力を入れた。

総書記は、金日成主席の著作を出版し、主席の革命業績を盛り込んだ図書と記録映画をつくることを、主席の偉大さを子々孫々に伝え、広く宣伝するための最も重要な問題と見なし、これに優先的な力を注いだ。

主席の革命思想が集大成された『金日成著作集』を主席の生誕

70周年に際して20巻まで発行するという目標を打ち出し、主席の革命活動を示す写真と親筆を挿入して編纂、発行するよう絶えず指導した。

そして、『チュチェの思想、理論、方法に関する偉大な領袖金日成同志の教示』（抜粋）を主席の生誕70周年記念図書として出版するようにした。

また、『偉大な領袖金日成同志の革命活動史』と『偉大な領袖金日成同志の伝記』（１～３巻）の編纂の全過程を細かに指導し、『チュチェの光のもと創造と建設の40年』（１～５巻）、『チュチェ思想の偉大な勝利』（１～３巻）をはじめ多くの革命伝統教育図書と記念図書を出版するようにした。それとともに、主席の革命活動史と革命業績を盛り込んだ記録映画と革命映画、長編小説をつくるよう導いた。

総書記は、金日成主席の革命業績をとわに伝え、輝かせるための大記念碑的建造物の建設を精力的に指導した。

総書記はまず、チュチェ思想塔と凱旋門を時代の大記念碑として立派に建設するようにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「チュチェ思想塔と凱旋門を立派に建設すべきです。

チュチェ思想塔と凱旋門を建設するのは、人民を革命的に教育し、金日成同志の偉大さを子々孫々に伝えるための重要な事業です」

総書記は、金日成主席の生誕60周年を迎えた1972年４月から主席の革命思想と業績をたたえ、とわに伝える大記念碑を建てる構想を練り、1979年３月には、主席の生誕70周年を迎えて平壌にチュチェ

思想塔と凱旋門を建てることを提唱した。同年10月12日と31日にはチュチェ思想塔と凱旋門の形成図案を検討し、位置の選定から規模や形式、内容はもちろん細部の要素に至るまで最高の水準で形成するよう具体的な指示を与えた。

1979年11月21日、党中央委員会政治委員会ではチュチェ思想塔と凱旋門の建設工事を全党、全国、全人民的な事業として進めるという決定書が採択され、党と国家の責任幹部からなるチュチェ思想塔及び凱旋門建設中央指導委員会が設けられた。そして、平壌市をはじめ各道で党員突撃隊が組織されて大記念碑の建設工事に当たることになり、工事を支援するための社会的運動が広範に繰り広げられた。

総書記は大記念碑を最高の水準で建設するため、1980年だけでも13回にわたって指示を与え、何度も建設現場を訪ねて指導した。

党員突撃隊員と支援者は突撃戦を展開して工事を早め、全国の人民と南朝鮮の人民、海外同胞と世界の革命的人民は記念碑の建設に真心を尽くした。こうして、チュチェ思想塔と凱旋門は1982年４月に除幕された。

総書記は、金日成競技場などの大記念碑的建造物も最高の水準で建設するよう導いた。

金日成主席は次のように述べている。

「金正日同志はいつも、わたしに喜びを与えるために心を砕いています。彼はわたしの70歳の誕生日を前にして、わたしにかかわる事績資料をくわしく調べ、わたしが久しい前から構想してきた問題のうち実現されていないものを探し出し、それを一つ一つ実現させました」

首都平壌に近代的な競技場や図書館、アイススケート・リンク、

遊園地などを建てることは、金日成主席が以前から構想してきた問題であった。

総書記は1981年７月、主席が歴史的な凱旋演説を行った牡丹峰（モランボン）競技場（当時）を近代的に改造、拡張するための措置を講じ、自分の40歳の誕生日に当たる日（1982年２月16日）にも現地を訪れ建設工事を指導した。そうして、改造拡張工事は着工後４カ月で完了し、牡丹峰競技場は「金日成競技場」と改称された。

総書記はまた、人民大学習堂とアイススケート・リンク、万景台（マンギョンデ）遊園地を最高の水準で建設するよう導いた。

こうして、金日成主席の不滅の革命業績を子々孫々に伝える貴重な財産が築かれ、70歳の誕生日を迎える主席に大きな喜びと満足を与えることができるようになった。

総書記は、全国の子どもと生徒・学生、世帯に主席の贈り物を与えることを提案し、この事業を精力的に指導した。人民経済各部門で贈り物製品の生産に必要な原料、資材、石炭、電力を優先的に提供し、原材料の輸送に飛行機や大型貨物船まで利用する措置を講じた。そして、1981年10月には贈り物製品の見本を見て改善策を講じ、すべての世帯に贈り物が行き渡るようにした。

金正日総書記は、金日成主席の生誕70周年慶祝行事を、主席の偉大さと業績をたたえ、とわに輝かせる大政治祭典として執り行うために心血を注いだ。

総書記は、党中央委員会政治局決定書「偉大な領袖金日成同志の誕生70周年をわが党と祖国の歴史にとわに輝く民族最大の慶事として迎えるために」を採択して、全人民が主席の生誕70周年を盛大に祝うための準備に取り組むようにした。

そして、記念講演会、科学討論会、図書・写真・美術展覧会、映画鑑賞会が高い水準で行われるよう深い関心を払った。特に、主席の生誕70周年記念全国チュチェ思想討論会を盛大に開催するようにし、1982年３月31日には討論会に論文『チュチェ思想について』を寄せて、主席の革命思想、チュチェ思想を広く宣伝するうえで新たな転機を開いた。

総書記は音楽舞踊叙事詩とマスゲームを創作、公演するようにした。

すでに1978年11月に音楽舞踊叙事詩『栄光の歌』を創作することを提案し、数度にわたってその創作活動と試演会を指導し、主席の70年にわたる革命活動史を集大成し、生き生きとした芸術的絵巻として見せるようにした。

1980年10月に、主席の生誕70周年に際して形式も新しく水準も一層高いマスゲームを創作すべきだとし、同年12月には、チュチェ思想を創始し、朝鮮革命を勝利の道に導く過程で築き上げた主席の業績を高い水準で描き出すようにと指示した。そして、1982年２月にはマスゲームのタイトルを『人民は金日成主席をたたえます』とし、その「種子」と思想・主題の内容を鮮明にした。

こうして、5000人の芸術家による音楽舞踊叙事詩『栄光の歌』と、５万人の青少年・学生によるマスゲーム『人民は金日成主席をたたえます』が記念碑的傑作として完成され、成功裏に公演された。

総書記は、主席の生誕70周年慶祝中央報告集会と祝賀夜会も盛大に催すようにした。

まず、中央報告集会の報告が主席の70年の革命活動史全般を包括し、その革命業績を深く反映するよう細かに指導した。また、祝賀

夜会の形式を大衆舞踊と芸術公演を結合した新しいものにし、広場の照明、器具の設置、俳優の衣装に至るまで具体的な指示を与えた。

こうして1982年４月14日、首都平壌では中央報告集会が開かれ、翌15日には金日成広場をはじめ市内の各広場で祝賀夜会が催され、各地方でも多彩な慶祝行事が執り行われ、民族最大の祝日を意義深く祝った。

総書記は、主席の生誕70周年を国際的な大政治祭典として盛大に祝うため、世界各国から多くの代表団を招いて慶祝行事に参加させるようにした。

世界の進歩的人民は主席の生誕70周年を意義深く祝うため、自国で各種の行事を催すと同時に、主席に直接祝意を表すため朝鮮を訪問することを希望していた。

そうして、主席の生誕70周年慶祝行事は14人の国家首班、副首班、首相と９人の党首、37人の特使をはじめ、世界５大陸118カ国の226の代表団と代表、著名な各界の人士1049人の参加のもとに執り行われた。

総書記は、世界各国の芸術家による祝賀公演も盛大に行うようにした。訪朝を希望する世界各国の芸術家を招き、合同公演に彼らが望む演目をすべて入れるようにした。

こうして４月15日、万寿台（マンスデ）芸術劇場では金日成主席の臨席のもとに世界各国の芸術団と朝鮮の芸術家の合同公演が盛大に行われ、これはその後、「４月の春親善芸術祭典」として伝統化された。

金日成主席の生誕70周年を祝う行事は世界各国でも多彩に催された。

インドの首都ニューデリーではチュチェ思想に関する国際討論

会が盛大に催され､多くの国でチュチェ思想に関する研究集会や討論会が開かれた。また、世界の５大陸と各地域、各国で祝賀大会、祝賀報告会、祝賀集会、記念集会、記念講演会、祝賀宴、祝賀芸術公演、写真展示会、映画鑑賞会などの行事が催され、数多くの記念図書が出版され、各種報道・出版物には特集が組まれた。そして主席には、世界79カ国の国家元首をはじめ、130カ国の各界の人士から3500余の親書、祝電、祝賀の手紙が、121カ国から数千点の贈り物が寄せられた。

このように金正日総書記の深い関心のもとに、金日成主席の生誕70周年慶祝行事は主席の不滅の革命業績と希世の偉人としての姿を誇示する人類共通の大政治祭典として盛大に執り行われた。

第３節　金日成主義を深化発展させるための思想・理論活動を展開、著作『チュチェ思想について』を発表

金正日総書記は、精力的な思想・理論活動によって金日成主義をより一層深化発展させ、自主時代の指導思想としてさらに輝かせた。

金日成主席は次のように述べている。

「わたしは朝鮮革命の要請と新しい自主時代の人民の志向を反映してチュチェ思想を創始し、それを指針として革命と建設を指導してきましたが、チュチェ思想の原理を総合し体系化することについては別段考えませんでした。この問題は、金正日

同志によって立派に実現されました。彼はチュチェ思想の根本原理と真髄をなす内容を深く研究したうえで、わが党の指導思想をチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系として定義づけました」

金日成主席は以前から、外国の多くの元首や政界をはじめ各界の人士からチュチェ思想に関する本を書いて世界の人々に贈ってほしいと請われていた。

主席は1972年９月、日本の『毎日新聞』記者の質問に対する回答『わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内対外政策のいくつかの問題について』をはじめ外国人との談話で、チュチェ思想の出発点と創始の経緯、本質と指導原則など、チュチェ思想の原理的問題について解答を与えたが、チュチェ思想の原理を総合的に体系化することは先に延ばしてきた。

1980年代の初めに至り、チュチェ思想は朝鮮革命の実践において巨大な生命力を発揮していただけでなく、その科学的真理性と時代性、独創性と革命性、普遍性により世界の進歩的人民の間で大きな共感を呼び、急速に伝播していた。

すでに1970年代の中ごろからチュチェ思想を全一的に総合、体系化することを重大な思想・理論的課題と見なし、精力的な思想・理論活動を続けてきた総書記は、主席の生誕70周年を迎えてこの問題を解決することを決意した。

総書記は、第６回党大会の決定を貫徹するために精力を傾けながらも、チュチェ思想の原理を体系化し、理論的に定立するために思索と探究を深めるとともに、これを集大成した論文を執筆することに心血を注いだ。

こうして、論文『チュチェ思想について』は主席の生誕70周年を控えて完成された。

総書記は、主席の生誕70周年記念全国チュチェ思想討論会の最終日である1982年３月31日、討論会に論文『チュチェ思想について』を寄せた。

この論文で総書記はチュチェ思想の構成体系を明示した。

チュチェ思想は、哲学的原理と社会・歴史原理、そしてそれを具現するための指導的原則を基本構成部分とする全一的な思想・理論体系である。

論文で総書記はチュチェ思想の各構成部分の思想・理論的内容を明示し、整然と体系化した。

まず、チュチェ思想の哲学的原理を解明した。

金正日総書記は次のように述べている。

「チュチェ思想は人間を本位にして哲学の根本問題を提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明らかにしました」

総書記は、チュチェ思想の哲学的原理は世界における人間の地位と役割を解明した人間本位の哲学的原理であり、それは人間に対する新たな哲学的解明に基づいていることを明らかにし、人間は自主性、創造性、意識性を持つ社会的存在であるという主体的見解をより一層深化発展させた。

そして、チュチェの哲学的世界観が新たな哲学的原理に基づき、世界が人間によって支配され改造されるという見解と、人間の利益から出発し、人間の活動を基本にして世界とその変化発展に対応する観点と立場を明らかにしていることを論証した。

総書記はついで、チュチェ思想の社会・歴史原理の重要な原理を科学的に体系化し、その思想・理論的内容をより一層深化発展させた。総書記は、チュチェ思想の社会・歴史原理の重要な原理は、人民大衆は社会・歴史の主体であるという原理、人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史であるという原理、社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動であるという原理、革命闘争において決定的役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想・意識であるという原理であることを明らかにし、その具体的な内容と要求、真理性と独創性を論証した。

総書記はまた、チュチェ思想の指導的原則を全面的に体系化して明らかにした。

総書記は、チュチェ思想の指導的原則は自主的立場を堅持するという原則、創造的方法を具現するという原則、思想を基本にとらえるという原則からなっていることを明らかにし、その思想・理論的内容を整然と論述した。

論文『チュチェ思想について』を読んだ金日成主席は、金正日同志はわたしの革命思想を久しい前にチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系として定式化し、論文『チュチェ思想について』でチュチェ思想の哲学的原理と社会・歴史原理、指導的原則を基本論題とし、それを科学的、理論的に解明することによって、わたしの革命思想がチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系であることを全面的かつ完璧に論証したとして、これまで多くの哲学論文を読んで評価を下したが、満点の出来だと評価した論文は金正日同志のこの論文が初めてだ、金正日同志は希世の哲学者だと語った。

論文『チュチェ思想について』は、思想や政見、体制や信教、

言語や風習を異にする世界の人民の間で絶対的な共感と賛辞を呼び起こし、大陸と大洋を越えて全世界に急速に普及された。論文発表後、１年足らずの間に90余カ国の雑誌、新聞がこの論文の全文または詳細な要旨を掲載し、単行本も144カ国に普及された。そして、多くの国で研究討論会や講演会が開かれた。

金正日総書記は論文『チュチェ思想について』を発表した後、金日成主義をより一層深化発展させるために精力的な思想・理論活動を展開した。

1983年５月３日に発表した論文『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』、1986年７月15日の朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話『チュチェ思想教育における若干の問題について』、1987年９月25日の朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話『反帝闘争の旗をさらに高く掲げ、社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう』、1987年10月10日の朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話『チュチェの革命観を確立するために』など、数多くの著作を執筆、発表した。これらの著作で総書記は、新しい思想と理論によって金日成主義をさらに発展させ豊富にし、その正当性と独創性、生命力を論証した。

総書記はチュチェ思想の原理的内容をさらに深化発展させた。

総書記はチュチェの哲学的世界観の独創性と優越性を解明し、チュチェの社会・歴史観、革命観の原理的内容をさらに深化発展させた。特に歴史の主体に関する理論をさらに深化発展させ、革命の主体についての独創的な理論を打ち出した。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命の主体は領袖、党、大衆の統一体です」

革命の主体に関する理論はチュチェの社会•歴史原理において核をなす。

総書記は、社会的政治的生命体における領袖、党、大衆の地位と相互関係を明らかにした。

人民大衆は、党の指導のもとに領袖を中心に組織的、思想的に結束することにより、不滅の自主的な生命力を持つ一つの社会的政治的生命体をなす。

社会的政治的生命体において、領袖は最高頭脳であり生命活動を統一的に指揮する中心であり、党は領袖を中心に組織的、思想的に強固に結合した人民大衆の中核部隊として、自主的な生命体の中枢をなす。個々人は、党組織を通じて領袖と組織的、思想的に結合してこそ不滅の社会的政治的生命を持つことができる。

領袖、党、大衆は一つの生命に結合して運命をともにする社会的政治的生命体であるため、その間には助け合い、愛し合う革命的信義と同志愛の関係が生まれる。

総書記は革命の主体を新たに解明することによって、チュチェの革命観と人生観に関する理論を全面的に深化発展させた。

チュチェの革命観は、革命の主人が持つべき革命に対する主体的な観点と立場である。

総書記は、革命観を確立するうえで革命の対象を把握することも必要であるが、革命の主体に対する正しい立場と観点を持つことが重要であるとして、革命観を確立するためには領袖観、組織観、大衆観から正しく打ち立てなければならず、革命観は道徳観によって裏打ちされなければならないと指摘した。結局、チュチェの革命観を確立するためには、革命的な領袖観、組織観、大衆観、道徳観を

ともに体得しなければならない。

チュチェの革命観で基本をなすのは革命的領袖観である。それは、革命の主体をなす社会的政治的集団の中心がこの集団の最高頭脳である領袖であるからである。革命的領袖観を確立してこそ革命的な組織観、大衆観、道徳観を正しく打ち立てることができるのである。

総書記は、チュチェの革命観を揺るぎない信念とするには、それが人生観化されなければならないとして、チュチェの人生観の本質的特性を科学的に解明した。

総書記は、チュチェの革命理論を新たな思想・理論的財産としてより一層深化発展させた。

まず、共産主義建設において堅持すべき戦略戦術的原則に関するチュチェの革命理論をさらに発展させ豊富にした。

総書記は、共産主義社会を建設するためには必ずその思想的要塞と物質的要塞を占領しなければならないということを論証し、思想、技術、文化の３大革命は社会主義建設の全過程で一貫して堅持すべき戦略的路線であるということを明らかにした。そして、新たな高い段階の革命実践の要求に即して思想・技術・文化革命を深化発展させるための具体的な課題と方途を示した。

また、社会主義建設で提起される数多くの理論的・実践的問題に科学的解答を与えた。

総書記は、労働者階級の党、国家及び勤労者団体建設に関する理論を全面的に発展させ豊富にして、革命発展の新たな要求に即して革命の主体をさらに強化し、その威力を最大限に高めることのできる進路を明示するとともに、革命武力建設、経済建設、文化建設な

ど社会主義建設のすべての分野、すべての部門の理論も一層発展させ豊富にした。そして、祖国統一と全国的範囲における民族の自主権確立に関する理論、主体的な海外朝鮮人運動に関する思想もより一層発展させた。また、世界革命に関するチュチェの理論をさらに発展させ豊富にした。

総書記は、帝国主義に反対し、世界の自主化を促進することを世界革命の戦略的課題として提示した。

帝国主義に反対し、世界を自主化するためのたたかいの主体は、社会主義諸国と国際共産主義運動、植民地民族解放運動、非同盟運動、世界平和運動など、すべての反帝・自主勢力である。

世界のすべての反帝・自主勢力は、帝国主義者のあらゆる分裂・離間策動を粉砕し、思想と体制、信教の違いをこえて反帝・自主の旗のもとに固く団結して、帝国主義を滅亡させ、自主的な新しい世界を創造するためのたたかいを力強く繰り広げなければならない。

総書記は、チュチェの指導方法に関する理論を全面的に発展させ、革新した。

総書記は、革命と建設に対する指導体系において労働者階級の党を嚮導的力量、人民政権を強力な武器、勤労者団体を党の頼もしい援助者と規定し、党の指導的機能と役割を強め、社会主義建設に対する革命的指導を実現するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

そして、革命と建設に対する指導における革命的指導方法の問題の重要性を明らかにし、革命的指導方法の基本的要求は革命的大衆路線を貫徹することにあることを論証するとともに、金日成的活動方法を具現して幹部の活動方法と作風を改善するうえでの原則

的問題を全面的に明らかにした。

金正日総書記の偉大な思想・理論的業績があったがゆえに、朝鮮労働党と朝鮮人民は、金日成主義の革命的旗印を高く掲げて、チュチェの革命偉業達成のためのたたかいを一層力強く推し進め、全世界的規模で自主化の偉業を促進することができた。

第４節　党の基礎構築を完成し、朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党としてさらに強化発展させるために

金正日総書記は、チュチェの革命偉業をしっかり継承し、全社会の金日成主義化をあくまで完成するため、党をさらに強化することに心血を注いだ。

金正日総書記は党の基礎構築を完成するために力を尽くした。

党の基礎構築を完成することは、1980年代に入って党と革命発展の合法則的要求となっていた。

1970年代にチュチェ偉業継承のための党の基礎構築が強力に推進されて、革命と建設に対する総書記の指導がしっかり保障されるようになり、広範な人民大衆が党のまわりに固く結束し、総書記に対する全人民の信頼はさらに高まった。党の基礎構築で得た成果は、1980年代に党の基礎構築を完成するための確固たる保証となった。

総書記は1980年12月３日、党中央委員会及び平壌市党委員会責任幹部協議会で行った演説『党組織のいくつかの課題について』と、1981年４月３日、道党責任書記協議会で行った演説『道・市・郡党委員会の課題』で、党の基礎構築を引き続き強力に推進すると

いう方針を提示した。

総書記は、党の基礎構築を引き続き強力に推進するためには、先を見通して幹部陣容を固め、党内に強い規律を確立し、党員の組織観念を高め、党生活を強化し、党員と勤労者の間で党への忠実性を培うための教育活動を強化しなければならないと指摘した。

総書記は、党の基礎構築を完成するための活動をより積極的かつ着実に進めるようにした。

まず、先を見通して幹部陣容を固めることに優先的な力を注いだ。

そのために、党への忠実性を基本とし、党中央の指導に忠実に従う政治的・思想的覚悟の強い前衛闘士で幹部陣容を固めた。また、老、壮、青を組み合わせる原則に基づき、先を見通して幹部陣容を固めるようにした。

総書記は党幹部養成事業を改善強化することにも大きな関心を払い、1981年６月、全国党幹部養成機関の教員講習会の参加者に送った書簡『党幹部養成事業を改善するためのいくつかの課題』で、学生を金日成主義精鋭分子に育て上げることを党幹部養成機関の基本任務、党の基礎構築のための重要な問題として提起し、それを実現するうえで提起される原則的問題を明らかにした。そして、各級党組織が養成対象を正しく選抜するようにし、党幹部養成機関で教育の質を一段と高めて学生を金日成主義精鋭分子に育て上げ、党への忠実性を高めることに主眼を置いて現職の幹部の再教育と講習会を高い水準で行うようにした。

総書記は、党内に一糸乱れず行動する規律を確立し、幹部と党員の党生活を強化するようにした。

そのために、すべての党組織と幹部と党員が党事業と党活動、革

命闘争と建設事業で提起される原則的問題を党に報告し、その結論に従って処理する活動秩序と規律を厳守するようにした。また、1982年に全党的に行われた新しい党員証の授与を契機に党生活の水準を一段と引き上げ、党組織が党生活を着実に指導するようにした。

総書記は、幹部と党員の間で党への忠実性を培うための活動を強力に推し進めた。

1981年10月、「80年代の金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）になろう！」というスローガンを提示し、党員と勤労者の間で、朝鮮革命の黎明期における青年共産主義者の金日成主席への絶対的な忠誠心を見習う運動をさまざまな形式と方法で力強く繰り広げるようにした。そして1982年２月27日、党中央委員会の責任幹部に、すべての幹部は金策（キムチェク）同志の忠誠心を見習うべきだと強調した。領袖決死擁護の典型である金赫、車光秀、金策同志に見習う運動は全党的に展開され、すべての幹部と党員、勤労者が党への忠実性を革命的信念、信義とする真の革命家として育っていった。

総書記は、党員と勤労者の間で、革命偉業の遂行における領袖とその後継者の地位と役割、党の偉大さを深く体得させるための教育活動をさまざまな形式と方法で集中的に行うようにした。

1980年代の前半、金日成主席の革命偉業を代を継いで継承、達成するための党の基礎構築の歴史的課題は立派に実現された。

党の基礎構築が完成することにより、朝鮮では領袖の後継者問題、革命偉業継承における根本問題が完全に解決され、朝鮮労働党を永遠にチュチェ型の革命的党として強化発展させるための確固たる保証がもたらされた。

金正日総書記は、朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党としてさらに強化発展させるために精力を傾けた。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党をチュチェ型の革命的党に一層発展させるのは、あらゆる難関を克服し、チュチェの革命偉業を完成するための決定的保障である」

総書記は1982年10月17日に発表した著作『朝鮮労働党は栄えある「トゥ・ドゥ」の伝統を継承したチュチェ型の革命的党である』をはじめ多くの著作で、わが党をチュチェ型の革命的党としてさらに強化発展させるうえで提起される理論的･実践的問題を解明した。

まず、チュチェ型の革命的党としてのわが党の革命的性格と本質的特徴を明確に規定した。

金正日総書記は次のように述べている。

「実にわが党はチュチェ思想を指導的指針として建設され活動する党、全党に唯一思想体系が確立され、チュチェ思想に基づいて鉄の統一、団結を成し遂げた党、人民大衆との血のかよったつながりを保ち、彼らの役割を強めてチュチェ革命偉業の完成をめざしてたたかう党、栄えあるチュチェ型の革命的党である」

総書記は、党をチュチェ型の革命的党としてさらに強化発展させるうえで提起される原則的問題を明らかにした。

まず、社会主義偉業の遂行において党を絶えず強化し、その指導的役割を強める必要性を明らかにするとともに、全党のチュチェ思想化を党建設の根本問題として打ち出し、それを実現するための課題を示した。

そして、全党に唯一思想体系を確立する活動を絶えず深め、チュチェの伝統を固守し汚れなく継承しなければならないと指摘した。また、党の統一団結を代を継いで固守し、さらに強化するとともに、すべての党員をチュチェ型の革命家としてしっかり鍛え、全党に金日成的活動方法を確立しなければならないとした。

総書記は、党をチュチェ型の革命的党としてさらに強化発展させるため、党の指導思想であるチュチェ思想で党員と勤労者を武装させることに優先的な力を注いだ。

1986年７月15日、朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話『チュチェ思想教育における若干の問題について』で、発展する現実の要求に即してチュチェ思想教育を深化させるうえで提起される原則的問題を明らかにし、その活動を賢明に指導した。

そのために、党員と勤労者にチュチェ思想の原理、特に革命の主体についての正しい認識を持たせることに深い注意を払い、著作『チュチェ思想教育における若干の問題について』の全党的な学習を行うようにした。そして、『労働新聞』『勤労者』をはじめ多くの出版物に革命の主体の原理を深く、分かりやすく解説した文章を掲載するようにした。

また、党と領袖に対する忠実性を培う教育、党政策教育、階級的教育、革命伝統教育、社会主義的愛国主義教育など、すべての思想教育活動をチュチェ思想の基本原理と結びつけ、革命の主体を強化することに方向づけて着実に行わなければならないとした。

総書記は、党の統一団結の純潔性を守り強化発展させることに大きな力を入れた。

1985年１月26日の朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話『一

心団結の旗を高く掲げて進もう』、1986年１月３日、朝鮮労働党中央委員会の責任幹部に行った演説『党と革命隊伍の強化発展と社会主義経済建設の新たな高揚のために』をはじめ多くの著作で、党の統一団結、一心団結の特徴と威力を明らかにし、党の統一団結を代を継いで固守し、強化発展させるための課題と方途を示した。

総書記は党の統一団結をさらに強化するために、党組織が抗日革命闘争の時期に青年共産主義者、抗日革命闘士によって築かれた領袖を中心とする統一団結、一心団結の伝統を代を継いで継承していくための教育活動を強化するようにした。そして、幹部と党員が統一団結を阻害する些細な傾向も黙過せず、強くたたかうようにすることに深い注意を払った。また、幹部と党員を党の反分派闘争の経験で武装させ、彼らが党の統一団結を断固固守し、代を継いで強化発展させるようにした。

党の統一団結を代を継いで固守し継承、発展させるための活動が強力に展開された結果、党の統一団結は金日成主席と金正日総書記を中心とする最も強固で、かつ威力ある一心団結となった。

総書記は、全党に革命的な党風を確立するための運動を強力に推し進めた。

党風とは、党を建設し、革命と建設を指導する歴史的な道程で形成され強固になる党の気風であり、党の組織・思想生活の過程で発現する党生活気風、党活動の過程で発現する党活動気風をいう。

総書記は、党の基礎構築の歴史的偉業が実現し、全党をチュチェ思想化するためのたたかいが深化している現実的条件に即して、革命的党風を確立するためのたたかいを新たな高い段階で推進した。

1988年１月10日の朝鮮労働党中央委員会責任幹部会議で「全党

に革命的党風を確立しよう！」というスローガンを提示し、それを実現するための課題と方途を示した。また、1989年８月には党中央委員会書記局特別指示文を各級党組織に下達し、それを実行するための活動を偏向を犯すことなく行うようにした。

党風確立のための各級党組織の会議は、幹部と党員の党と領袖への忠実性をさらに高め、古い活動方法と作風を根絶することに重点を置いて行われた。こうして、党内に革命的な党活動気風と党生活気風が確立され、党の戦闘力がいつにもまして強化された。

総書記は、党の栄えある革命伝統を断固擁護し、汚れなく継承し発展させていった。

まず、革命烈士陵と愛国烈士陵を革命伝統教育の拠点として立派に整えるよう導いた。

1982年10月、革命烈士陵の改作形成試案を見て革命烈士陵の改造・拡張に関する具体的な方向と方途を示し、党中央委員会書記局指示書を下達して革命烈士陵の改造・拡張工事が全党的、全国家的な事業として進められるようにするとともに、党員突撃隊をはじめとする建設陣容を整えた。そして、1984年６月と11月をはじめ数度にわたって建設現場を訪ね、工事を指導した。

革命烈士陵とともに愛国烈士陵の建設にも深い関心を払った総書記は1984年４月、愛国烈士陵を建設することを提案し、烈士陵の位置から陵に安置する対象に至るまで細かな指示を与えた。

こうして、1985年10月、革命烈士陵は子々孫々に伝わる記念碑的建造物として改造、拡張され、1986年９月、愛国烈士陵は立派に完成された。

総書記は、白頭（ペクトゥ）山地区をはじめ国内の広い地域で抗日革命闘争の

時期の秘密根拠地と革命的スローガンを記した樹木、革命遺跡・遺物を全面的に発掘し、原状のまま保存するようにした。

総書記は、白頭山密営を発掘して原状に復することに優先的な力を注いだ。

金日成主席の指示どおりに小白水(ソベクス)谷の集中踏査を手配して白頭山密営の跡を探し出すようにした総書記は、密営を原状に復するために建設陣容と資材、設備を優先的に送るようにし、建設者の生活条件の保障に至るまで具体的な対策を立てた。こうして、白頭山密営は原状に復元され、1987年２月に公開された。

1988年８月18日、白頭山密営を訪れた総書記は、白頭山密営地区を整備するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

総書記は、全国的規模でスローガンを記した樹木と秘密根拠地を全面的に発掘して原状に復するようにした。

1987年５月初、白頭山密営の周辺で革命的スローガンを記した樹木を発見したという報告を受けた総書記は、その発掘作業を全国的な規模で行うべきであると指摘し、1988年８月末には、樹木に記されたスローガンを肉眼で見られるようにする技術を開発するよう指示した。

こうして、見えなくなったスローガンを試薬で見えるようにする技術が開発され、発掘作業が全国の各道・市・郡・区域で全党的な大衆あげての事業として進められ、数多くの革命的スローガンを記した樹木と秘密根拠地が発掘された。

総書記は、党の革命伝統を思想・理論的に擁護するために力を尽くした。1989年３月、党の革命伝統を思想・理論的に擁護するための原則的問題を提示した総書記は、革命伝統を断固擁護し広く宣伝

し、革命歴史資料の発掘作業を大々的に行うようにした。

1980年代に、チュチェの革命伝統を擁護し、立派に継承し発展させるためのたたかいを通じて、抗日の革命伝統を万代に伝える貴重な革命の財産がもたらされた。

第５節　人民軍の強化、党の軍指導体系の全面的確立

1980年代に入り、金正日総書記は人民軍を強化発展させることに重点を置き、国防力全般をさらに強化していった。

金正日総書記は、全軍に党の指導体系を確立することに心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは人民軍内に党の指導体系を確立する活動をさらに深化させなければなりません。人民軍内に党の指導体系を確立することは、金日成同志が切り開いたチュチェの革命偉業がわが党によって継承されている現段階において軍建設の核心だと言えます」

総書記は、1983年３月９日の金日成軍事総合大学の政治部長との談話『有能な軍事指揮幹部を育てるために』、1982年６月12日の朝鮮労働党中央委員会軍事委員会に参加した朝鮮人民軍の指揮メンバーへの談話『人民軍を金日成同志の軍隊、党の軍隊としてさらに強化発展させよう』、1988年２月11日の『新たに任命された朝鮮人民軍総参謀長との談話』など多くの著作で、全軍に党の指導体系を確立するための課題を提示し、それを貫徹するための

たたかいを推進した。

総書記は､人民軍で党の指導体系を確立するための思想教育活動を強化するようにした。

1981年２月中旬､人民軍内での党への忠実性教育をほかの部門とは異なり、ストレートに、強力に行うようにし、人民軍内の党組織と政治機関が軍人大衆の間で､党の指導についての原理教育と党の偉大さについての教育をさまざまな形式と方法で深化させるようにした。

1982年１月２日、朝鮮人民軍総政治局の副局長との談話『党の唯一的指導体系を確立するための活動をさらに深化させるべきである』で、全軍が党の指導にあくまで忠実に従うようにするための思想教育活動をさらに深化させるべきであるとして､人民軍内で記念講演会､徳性発表会などを教育的意義を持たせて行うとともに､出版物や文学･芸術作品を通じて党の偉大さと業績について広く宣伝することにより、軍人が心から党に従い、慕うようにした。

また､軍人の間で忠実性の生きた手本による教育を発展する現実の要求に即して行い、すべての人民軍将兵を「80年代の金赫」に育て上げるようにした。

総書記は､全軍に党の指導体系を確立するための新たな活動体系と秩序を打ち立てた。

1982年６月12日、金日成主席は白頭山麓の三池淵（サムジヨン）で歴史的な党中央軍事委員会を招集し、全軍に金正日総書記の指導体系を一層強く確立するための措置を講じた。

この会議で主席は、現在、金正日同志が人民軍を党の立場から指導しているが､軍事的にも直接指導するようにしなければならな

い、金正日同志が最高司令官の地位において人民軍を指導するのは代を継いで続けられる革命武力建設の合法則的過程であり、時代の発展の要求であるとして、軍建設と軍事活動において提起されるすべての問題を金正日同志に集中させ、その結論に従って処理する強い規律を確立しなければならないと述べた。

その後、総書記は、人民軍の政治・軍事活動に対する党の指導を実現するために、総政治局と総参謀部の活動体系、掌握・報告体系を新たに確立した。

1985年３月、発展する現実の要求に即して、軍隊内の党政治活動で提起されるすべての問題を朝鮮人民軍総政治局が直接報告し、結論に従って処理する活動体系と秩序を確立した。

また、総参謀部を通じた掌握・報告体系を新たに確立するための対策を立て、総参謀部が下部単位の各級参謀部をしっかり固め、それを通じて全軍を掌握、指揮するようにした。

総書記は、全軍に党組織観念に基づく革命的軍紀を確立し、軍・政連携を強めるようにした。

そのために、人民軍の指揮メンバーが党組織観念に基づく軍紀について正しい認識を持つようにするとともに、人民軍内の党組織と政治機関の機能と役割を強め、その活動権威を保障するようにした。そして、指揮官と軍人の組織観念を高め、組織・思想生活を強化するとともに、党の方針と決定、指示を無条件に受け入れ、あくまで貫徹する革命的気風を確立するようにした。

また、人民軍で軍・政連携を実現して、軍事幹部と政治幹部が党の指導に忠実に従うようにすることにも深い関心を払い、軍・政連携において政治幹部が模範となり、さまざまな形式と方法で教育活

動を強化するようにし、特に1987年２月10日、朝鮮人民軍の指揮メンバーに行った演説『人民軍で軍・政連携を強めるために』で、軍・政連携において軍事幹部と政治幹部が堅持すべき原則的問題を明らかにした。

こうして、全軍に党組織観念に基づく軍紀が確立し、軍・政連携が実現することにより、軍建設と軍事活動に対する総書記の構想と意図がより徹底的に実現されるようになった。

金正日総書記は、人民軍の軍事技術的威力を強化し、戦闘準備を完成するために力を尽くした。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命偉業に対する階級敵の挑戦が強まれば強まるほど、われわれは革命的武力をさらに強化し、戦争準備をさらに整えなければなりません」

総書記は、発展する現実の要求に即して、指揮メンバーの軍事技術的水準と指揮能力を高めることに大きな力を入れるようにした。

指揮メンバーの実務水準を高めるため軍事講習に大きな意義を付与し、1981年の軍事講習が高い水準で行われるよう対策を立て、1982年９月には指揮官、参謀部のメンバーの講習を軍種、兵種別に行うよう措置を講じた。その後、指揮メンバーが講習を通じて軍事的水準と指揮能力を系統的に高めることができるよう、数度にわたって具体的な対策を立てた。また、指揮メンバーの軍事理論と科学技術水準を高めるため、軍事科学討論会や戦術研究討論会など、さまざまな研究討論会を広く催し、軍事図書の出版・普及活動を着実に行うようにした。

総書記は、指揮官を育成する軍事学校の教育活動を改善すること

に深い関心を払った。

各級軍事学校が近代軍事科学技術の発展趨勢に即して教育内容と方法を絶えず改善して教育の質を一段と高めるようにし、軍事学校に対する判定検査を定期的に行うようにした。そして、1982年と1987年には各級軍事学校の教員大会を開き、軍事教育活動における優れた成果と経験を一般化させる措置も講じた。

総書記は戦闘訓練をさらに強化するようにした。

そのために、1980年代に入って人民軍に「訓練も戦闘だ！」というスローガンを提示し、全軍に革命的訓練気風を確立するようにした。

総書記は、戦闘訓練を朝鮮式の戦法と訓練方法に基づいて主体的に行うことに優先的な力を注いだ。

1981年の春、ある連合部隊の戦術演習方案を検討した際、既成の理論と観念にとらわれ、発展する現実を正しく反映していない欠陥を是正し、既成の軍事理論と戦法に対して創造的な態度を持たなければならないと指摘した。そして、1981年８月には、朝鮮の現実と現代戦の特性にかなった新しい戦法を研究、完成するのを助けるため、戦闘経験の資料を出版、普及させる措置を講じた。

また、1984年１月には、種々の戦闘規定と教範をチュチェの戦法と現代戦の要求に即して改め、訓練方法を絶えず研究、完成し、それに基づいて戦闘訓練を主体的に行ううえで提起される具体的な問題を科学的に解明した。

総書記は、戦闘訓練を実践の雰囲気の中で着実に行うことにも深い関心を払った。

1982年４月、ある戦術訓練場を訪ねた総書記は、軍人は銃砲の音

を聞きながら胆力を養うべきだとして、実践訓練を重ねるようにと指示した。

総書記は、人民軍の武力装備の近代化を高い水準で実現することに大きな力を入れた。総書記は、人民軍の武力装備の近代化を、国の自然地理的条件と工業の発展水準、現代戦の特性に即して機動力と打撃力を高めることに主眼を置いて実現するよう対策を立て、これを賢明に指導した。また、武力装備の近代化を自立的軍需工業に依拠して実現していくようにした。

こうして、1980年代に人民軍の軍事装備の近代化水準は全般的に一段と高まり、人民軍はいかなる現代戦にも対処できる必勝不敗の強兵として強化発展した。

総書記は、人民軍の基本戦闘単位である中隊を強化することに力を注いだ。

1982年12月、中隊長、中隊政治指導員を助けるための中隊指導グループ活動を繰り広げることを提案し、1983年１月には中隊指導グループを選抜して各中隊に派遣するようにし、その優れた経験を一般化させるため全軍的な経験交換会も催した。特に、1984年１月、朝鮮人民軍中隊指導グループ会議を開くようにし、同月14日には会議の参加者に書簡『中隊指導グループ活動を力強く繰り広げて人民軍の中隊をさらに強化しよう』を送り、中隊指導グループが中隊を政治的、軍事的に強化するうえで大きな役割を果たすようにした。

また、中隊長、中隊政治指導員の役割を強めるため、1985年９月、朝鮮人民軍指揮官及び政治幹部大会を招集し、大会に臨席して、中隊長、中隊政治指導員が人民軍の基本戦闘単位である中隊を強化するうえでその責任と役割を十分に果たすよう強調した。

総書記は、人民軍内に鉄の軍律を確立することを戦闘力強化のキーポイントと見なし、軍律強化のための旋風を巻き起こすようにした。

1981年６月、人民軍内で軍律を強化するための課題を提示し、そのための思想教育活動を行うようにし、全軍に抗日遊撃隊式部隊指揮・管理方法を具現するための運動を強力に推し進めた。そして、軍律強化のための全軍的な社会主義的競争を行うようにし、1984年１月には軍人の軍務生活を組織、指揮するうえで指針となる10大中隊管理準則まで作成して下達した。この過程で人民軍軍人の軍律に対する自覚が高まり、部隊の指揮・管理方法が改善され、軍律の強化では革命的転換がもたらされた。

1980年代に人民軍に対する金正日総書記の指導体系が全面的に確立され、人民軍の軍事技術的威力が強化されることにより、人民軍は不敗の党軍として一層強化発展した。

第６節　人民政権を強化し、勤労者団体の活動と大衆との活動をさらに改善するために

1980年代に、金正日総書記は党と大衆を結びつける人民政権と勤労者団体の役割を強め、大衆との活動をさらに改善することに心血を注ぎ、革命の主体を一段と強化した。

金正日総書記は人民政権を強化するために力を尽くした。

金正日総書記は次のように述べている。

「労働者階級の革命偉業、社会主義・共産主義偉業を最後ま

で完遂するためには、人民政権を絶えず強化しなければならない」

人民政権は、人民大衆の自主的権利と利益の代表者であり、人民大衆を社会主義偉業の遂行へと立ち上がらせる政治組織である。

総書記は、人民政権の主権的機能と役割を強めることに大きな力を入れた。

人民政権の主権的機能を高めるため、総書記は主権機関内に党の指導体系を確立するようにした。

そのために、人民会議と人民委員会で金日成主席と党が提示した政策的課題を貫徹する革命的気風を確立するようにした。そして、各級人民委員会があらゆる活動工程と契機を通じて、幹部と勤労者の間で党と領袖に対する忠実性教育を強化し、彼らを党の方針の貫徹へと立ち上がらせることに力を入れるようにした。

人民政権の主権的機能を高めるため、総書記は国家の指導・管理体系をさらに改善、強化するようにした。

すべての国家機関と国家活動全般に対する主権的指導を強化することができるよう、国家主権の最高指導機関である中央人民委員会に新しい機構を設け、政治的・実務的能力を備えた人で幹部陣容を固めるとともに、中央人民委員会が地方主権機関と司法・検察機関を掌握、指導する整然とした活動体系を確立した。そして、道・市・郡人民委員会が当該地域内の行政・経済機関に対する主権的指導と監督・統制を強化するための措置を講じた。

総書記は、人民政権の順法生活指導機能をさらに高めて全社会に革命的順法気風を確立するようにした。

全社会の金日成主義化が強力に推進されている発展する現実の

要求に即して、人民政権機関が社会主義順法生活に対する指導を強化するため、1982年12月15日、著作『社会主義順法生活の強化について』を発表した。

この著作で総書記は、社会主義順法生活の本質と特徴、社会主義順法生活を強化することの必要性、社会主義建設における法の地位と役割、革命的順法気風確立の基本的要求と実現方途、順法生活の指導における原則的問題を全面的に明らかにした。

総書記は、社会主義順法生活を強化するうえで人民政権機関がその機能と役割をさらに強めるようにした。

総書記は、人民政権機関が勤労者に対する順法教育を強化することに優先的な力を注いだ。

そのために、順法教育の単位を定め、それに対する指導を各級人民委員会に担当させた。そして、当該単位の責任幹部で順法教育担当者の陣容を固め、1982年２月には全国順法解説員熱誠者会議を催し、順法教育において順法解説員の役割を強めるようにした。また、咸鏡(ハムギョン)南道北青(プッチョン)郡を順法教育のモデルケースとし、その経験を全国に一般化させた。

総書記は模範順法郡称号獲得運動を提唱し、平安(ピョンアン)南道平原(ピョンウォン)郡をこの運動のモデルケースとし、その経験を一般化させた。この過程で勤労者の順法意識が一段と高まり、国家社会生活のすべての分野で規律と秩序が確立された。

総書記は、人民政権機関が社会主義法規を制定、完成し、順法生活に対する指導と法的統制を強めるようにした。

そのために、人民政権機関が金日成主席の示した法制定方針に基づき、順法生活の強化に必要な法規範と規定を制定、完成するこ

とに力を入れる一方､社会主義順法生活指導委員会の機能と役割を強めて、法の執行に対する点検・監督と違法行為に対する制裁を的確に行うようにした。また、社会安全機関と司法・検察機関が国の法秩序を確立し、公民の権利と人民の生命、財産を法的に守る活動を責任を持って行うようにした。

総書記は人民政権の経済組織者としての機能を高めるよう導いた。

そのために、人民政権機関が地方工業に対する指導を強め、その水準を一段と引き上げるようにした。そして、国家予算を人民経済計画とかみ合わせて立てて確実に実行し、市、郡の政権機関の機能と役割を強めて地方予算制を正しく実施するようにした。また、人民政権機関が人民の食生活の改善を重要な問題としてとらえ､これを責任を持って解決するようにした。

こうして、1980年代に人民政権は革命と建設の武器、真の人民の政権としてさらに強化され､チュチェの社会主義偉業の遂行においてその使命と任務を立派に果たすようになり､共和国政権に対する人民の信頼はいつにもまして高まった。

金正日総書記は、勤労者団体の活動をさらに改善、強化するために精力を傾けた。

青年を党の頼もしい青年前衛として育てることに重点を置いて青年同盟の活動を強化し発展させることに優先的な力を入れた総書記は、まず、青年同盟の活動に対する党の指導を強めるための措置を講じた。

1981年に、党中央委員会から道・市・郡党委員会に至るまでの各級党委員会に青年活動を指導する新しい活動体系を確立し、1981

年７月には道・市・郡党委員会青年事業部（当時）の活動家講習会を催し、７月13日、講習会の参加者に『青少年活動に対する党の指導を一層強化するために』と題する書簡を送った。

総書記は、朝鮮社会主義労働青年同盟（社労青　現在の金日成社会主義青年同盟）第７回大会が社労青を党に限りなく忠実な青年前衛の組織として強化発展させるうえで画期的な転機となるようにした。

朝鮮労働党第６回大会の決定を貫徹するための勤労者団体の大会の中で最初に社労青第７回大会を開くようにし､大会の準備を具体的に指導した。

そして、大会を迎えて「朝鮮労働党の頼もしい青年前衛になろう！」「朝鮮の革命偉業に限りなく忠実な青年前衛になろう！」というスローガンを提示するとともに、社労青に「青年前衛」という栄誉ある称号を与え、1981年10月、金日成主席とともに社労青第７回大会に臨席し、大会の活動を指導した。

社労青第７回大会後、総書記は青年同盟を組織的、思想的にしっかり固めることに深い関心を払った。

青年同盟の幹部陣容を覇気のある有能な中核で固め、彼らの政治・実務水準を絶えず高め、同盟員の間で組織生活を強化して、青年同盟組織を生気はつらつとした戦闘的な青年組織として発展させるようにした。また、青年同盟組織が、すべての青年が金赫、車光秀をはじめとする青年共産主義者のように､党と領袖への忠実性を革命的信念､信義とするための忠実性教育とチュチェ思想の原理教育、革命伝統教育、反修正主義教育、社会主義的愛国主義教育、社会主義道徳教育をさまざまな形式と方法で力強く繰り広げるよ

うにした。

総書記は､社会主義建設の実践を通じて青年を党の頼もしい青年前衛として育てるようにした。

そのために､青年が社会主義経済建設の最も骨の折れる部門で先鋒隊、突撃隊の役割を果たすようにするとともに、青年突撃隊運動と青年分組運動を高い段階へと発展させるようにした。

こうして、社労青第７回大会以後、百数十万人の青年が人民経済の骨の折れる部門に進んで進出し､数多くの青年突撃隊員が北部鉄道の工事現場、検徳（コムドク）鉱業総合企業所（当時）の改造・拡張工事現場などの重要対象建設の現場で青春の英知と勇猛心を余すところなく発揮した。

総書記は、職業同盟をはじめ勤労者団体の活動を改善、強化するよう導いた。

まず、朝鮮職業総同盟第６回大会、朝鮮農業勤労者同盟第７回大会、朝鮮民主女性同盟第５回大会を開き、各大会が朝鮮労働党第６回大会の決定を貫徹するうえで勤労者団体の機能と役割を強める重要な契機となるようにした。

また､党組織が勤労者団体を党の指導に限りなく忠実な戦闘的な組織にすることに深い関心を払った。

総書記は、勤労者団体に対する党の指導を強めるための措置を講じ、特に1985年４月下旬、全国党勤労者団体事業部の活動家講習会を催し、講習会の参加者に『勤労者団体の活動に対する党の指導を強化するために』と題する書簡を送り、講習会が勤労者団体の活動に対する党の指導を実現するうえで新たな転機となるようにした。

勤労者団体の幹部陣容を固めることに大きな意義を付与した

総書記は、党に限りなく忠実で、労働で鍛えられ、大衆の信望が厚く、実務能力のある人を幹部に登用するとともに、彼らの政治・実務水準を絶えず高めるようにした。

総書記はまた、勤労者団体が本務を正しく遂行するようにすることにも深い関心を払った。

勤労者団体の本務は、広範な大衆を教育改造して党のまわりに結束し、彼らを革命闘争と建設事業に立ち上がらせることである。

総書記は、勤労者団体組織が各時期に提示される党の思想活動方針に基づき、同盟員に対する思想教育活動を対象の水準と特性に応じてさまざまな形式と方法で斬新に行うようにした。そして、同盟員の間に自覚的で革命的な組織生活気風を確立することに主眼を置いて同盟組織生活に対する指導を強化し、初級団体の機能と役割を強めるようにした。また、勤労者団体組織が党の経済政策の宣伝と生産鼓舞活動を力強く繰り広げ、種々の大衆運動を着実に展開して、同盟員を社会主義建設へと立ち上がらせるための活動を深化させるようにした。

総書記はまた、勤労者団体の自立性を高めることにも深い関心を払った。勤労者団体の活動家に金日成主席の教えと党の政策をそのつど伝達、浸透させ、思いきって仕事を任せ、活動条件を整えて、勤労者団体がその活動を能動的かつ創意的に行うようにした。

こうして、1980年代に勤労者団体の活動が改善、強化されることにより、各階層の広範な大衆を党と領袖のまわりに固く結束し、彼らを党政策の貫徹へと立ち上がらせるうえで新たな転換がもたらされた。

金正日総書記は、大衆との活動をさらに深化発展させることに

心血を注いだ。

大衆との活動を絶えず深化させることは、党と大衆の一心団結を強固にし、革命の主体を一段と強化するための重要な要求である。

総書記は、大衆路線を貫徹するための全党的な一大旋風を巻き起こすよう導いた。そのために、党活動家のための講習会を催し、彼らを党の大衆路線で武装させるようにした。この過程で、大衆との活動で生じた偏向が是正され、党の仁徳政治が具現されるようになった。

総書記は、大衆との活動で収めた成果を打ち固め、さらに深化させた。1986年１月、党組織が革命発展の新たな要求に即して大衆との活動を引き続き深化させるという課題を提示し、具体的な措置を講じた。総書記は党活動家の間で党の大衆活動方針を反復学習して深く体得させ、大衆との活動で偏向を犯さないよう導いた。

総書記の信頼により、祖国解放戦争（朝鮮戦争）の時期、敵の謀略によって数十年間も汚名を着せられていた平安北道龍川（リョンチョン）郡の多くの人が汚名をすすぎ、その遺族には烈士証が授与された。

金正日総書記の指導により、大衆との活動では根本的な転換がもたらされ、全人民が心から党を母の懐として信頼し慕うようになり、革命隊伍の一心団結は一層強固なものになった。

第７節　「80年代速度」によって社会主義経済建設で新たな高揚を起こし、人民生活をさらに向上させるために

金正日総書記は、朝鮮労働党第６回大会の決定に呼応して社会

主義経済建設で新たな高揚を起こすためのたたかいを指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは全党、全国、全人民を奮起させ、社会主義経済建設で新たな高揚を起こさなければなりません」

総書記は、社会主義経済建設で新たな高揚を起こすため「80年代速度」創造運動を力強く繰り広げるよう導いた。

1982年６月８日の党中央委員会責任幹部協議会で、社会主義経済建設で今一度新たな大高揚を起こすべきであると述べ、同年７月23日の党中央委員会の責任幹部との談話『党組織は、「80年代速度」を創造するための組織・政治活動を着実に行うべきである』と８月13日をはじめ多くの機会に、「80年代速度」を創造するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

「80年代速度」創造運動は、チョンリマ（千里馬）の大高揚の時期に朝鮮人民が発揮した革命精神を受け継ぎ、速度戦の原則を全面的に具現して、1980年代の社会主義経済建設で一大高揚を起こすための大衆的進軍運動であった。

「80年代速度」創造運動の基本的要求は、チョンリマの大高揚の時期のその気勢、その気迫をもって奮闘することであり、高い目標を掲げ、非常に速い速度で進みながら最上の質を保障することである。

総書記は「チョンリマの大高揚の時期の勢いで『80年代速度』を創造しよう！」というスローガンを打ち出し、全党と全人民を「80年代速度」創造運動に立ち上がらせるための組織・政治活動を強化することに力を注いだ。

1982年７月９日、総書記の示した方針を心に受け止めた金策製鉄

所（当時）の労働者は集会を開いて、「80年代速度」創造運動の先鋒隊になる決意を表明し、全国の勤労者に社会主義経済建設で大高揚を起こすことを呼びかけた。これにこたえて、降仙（カンソン）の労働者や青山（チョンサン）里の農民をはじめ全国の勤労者が「80年代速度」創造運動に立ち上がった。

総書記は1982年10月と11月に全国青年熱誠者会議とチョンリマ運動先駆者大会を開いて、全人民を新しい速度の創造へと立ち上がらせるとともに、党組織が大衆を「80年代速度」創造運動に立ち上がらせるための宣伝・鼓舞活動を積極的に繰り広げるようにした。

総書記は、検徳鉱業総合企業所（当時）第３選鉱場の建設で「80年代速度」のモデルを創造するよう導いた。

1982年６月、150万トンの非鉄金属生産課題の遂行で重要な意義を持つ検徳鉱業総合企業所第３選鉱場の建設を立体戦の方法で行って期限前に完成するという方針を提示し、強力な建設指揮部を設け、建設陣容を固めるとともに、全党、全国、全人民が第３選鉱場の建設を積極的に支援するようにした。

こうして、共和国創建35周年をひかえて、第３選鉱場の建設工事は計画を大幅に繰り上げてわずか１年で立派に完了し、この過程で「80年代速度」のモデルが創造された。

総書記は、「80年代速度」創造運動を人民経済各部門に拡大、発展させるよう導いた。

総書記は、石炭工業、電力工業、金属工業、電子工業、自動化工業、建材工業、化学工業、農業など、人民経済の主要部門で「80年代速度」創造運動の炎を燃え上がらせて第２次７カ年計画を確実に遂行し、10大展望目標実現のための画期的な局面を開いていくよ

うにした。

総書記は特に、人民経済の近代化を実現するうえで決定的意義を持つ機械工業を発展させることに力を注いだ。

1984年５月と10月に龍城（リョンソン）機械連合企業所と楽元（ラクウォン）機械工場（当時）を現地指導し、１万トンプレス、大型酸素分離機をはじめ近代的な機械設備をより多く製作する課題を与えた。また、金日成主席の発案した1985年６月の工作機械の子生み運動を人民経済の各部門、各単位で強力に展開して、大型工作機械、特殊工作機械などの工作機械を量産し、その質を一段と高めるようにした。

総書記は、西海（ソヘ）閘門の建設で「80年代速度」の威力を余すところなく誇示するよう導いた。

1981年５月、西海閘門の建設工事を人民軍に任せることにした総書記は、大立体戦の方法で工事を進めるよう指示するとともに、全国をこの工事に立ち上がらせるための大規模な作戦を展開した。

総書記は1983年４月と1984年４月、1985年９月に閘門の建設現場を訪ね、工事の基本的方向を示し、工事に新しい工法を導入するよう指示するとともに、工事の速度を速めるための方向と方途を示した。

こうして、人民軍軍人をはじめ建設者は、大規模の西海閘門の建設工事をわずか５年で完了するという奇跡を生み出した。西海閘門の完成は「80年代速度」創造運動の結実であり、新たな飛躍の速度、「80年代速度」の威力を誇示した驚異的な出来事であった。

総書記の指導のもとに人民経済のすべての部門で「80年代速度」創造運動が力強く展開されることにより、社会主義経済建設で新たな高揚が起こり、1980年代を代表し輝かせる「80年代速度」が創造

された。「80年代速度」創造運動の炎の中で、膨大な第２次７カ年計画が成功裏に遂行され、国の経済力は一段と強化された。

総書記は、社会主義経済建設で引き続き革命的高揚を起こすため、全党と全人民を第３次７カ年計画の遂行に立ち上がらせた。

金日成主席が提示した第３次７カ年計画（1987～1993）は、第６回党大会が打ち出した社会主義経済建設の新たな展望目標を実現するための経済建設綱領であった。

総書記は1988年２月20日の党中央委員会政治局会議で、共和国創建40周年に際して全党員に党中央委員会の手紙とスローガンを送るようにし、各級党組織はこの手紙とスローガンに呼応して「200日間戦闘」を展開すべきだと述べた。

「200日間戦闘」は、社会主義建設のすべての部門で革命的高揚を起こして第３次７カ年計画遂行の突破口を開き、共和国創建40周年を勝利者の大祝典として迎えるための張り合いのある戦闘であった。

総書記は、「200日間戦闘」の勝利を保障するため、全党的かつ全社会的な雰囲気をつくるための組織・政治活動を繰り広げるようにするとともに、整然とした指揮体系を確立し、強力な指導陣容を派遣した。特に1988年５月、「すべての人が英雄のように生き、たたかおう！」というスローガンを提示し、党員と勤労者を英雄的闘争へと奮い立たせた。

総書記は、「200日間戦闘」の主要攻略部門は基本建設であるとして、戦闘期間に動力基地、金属工業基地、化学工業基地、光復（クァンボク）通り、北部鉄道などの重要対象建設を強力に推進しながら、すべての工場、企業で生産を正常化して国家計画を間違いなく遂行するよ

うにした。

そして、「200日間戦闘」期間に、平壌市、慈江道（チャガン）、平安北道、咸鏡北道をはじめ全国の人民経済各部門を現地指導し、全党員と勤労者を新たな生産的高揚へと奮い立たせた。

「200日間戦闘」期間に人民経済のすべての部門で大きな生産的高揚が起こり、世人を驚嘆させる「200日間戦闘速度」が創造された。工業生産は前年同期の122％増となり、特に基本建設が強力に推進されて共和国創建以来最高の実績をあげた。電力生産と石炭生産も共和国創建以来、最高の水準に達した。こうして、第３次７カ年計画遂行の突破口が開かれた。

総書記は、今一度「200日間戦闘」を展開して、社会主義経済建設で引き続き高揚を起こすようにした。

1988年９月、共和国創建40周年を迎えて全国英雄大会を開催し、大会で、「200日間戦闘」を通じて高まった気勢をいささかも緩めることなく、今一度「200日間戦闘」を展開することを全人民に呼びかけるようにした。

総書記は、全人民を今一度「200日間戦闘」に総動員するため、発展する現実の要求に即して党組織の指導的機能と戦闘力を高める一方、党、国家、経済機関の幹部が生産現場に出向いて大衆政治活動と生産の指揮を行うようにした。

また、新たな「200日間戦闘」期間にも重要対象建設に引き続き力を集中し、生産の指揮を周到に行って必要な原料と資材を十分に供給し、電力と石炭、鉄鋼材の生産を増やして人民経済のすべての部門で生産を正常化するようにした。そして、1988年11月の党中央委員会第６期第14回総会で、技術革命と社会主義経済建設を推進す

るうえでカギとなる工作機械工業と電子工業、自動化工業を速やかに発展させるための画期的な措置を講じた。

新たな「200日間戦闘」期間に、人民経済の主体化、近代化、科学化の水準を高めるのに寄与する500余の対象建設が完了し、人民経済の各部門で高い生産計画が成功裏に遂行された。

２度の「200日間戦闘」を通じて生産と建設で再び高揚が起こり、第３次７カ年計画が推進される中、安州（アンジュ）地区炭鉱連合企業所、茂山（ムサン）鉱山連合企業所、金策製鉄連合企業所など多くの工場、企業が改造、拡張され、チョンリマ製鋼連合企業所５月18日大型鍛造工場をはじめ工場、企業の建設が完了し、自動機械・機具の生産で大きな前進が遂げられた。

そうして、第３次７カ年計画遂行の確固たる保証がもたらされた。

総書記は、チュチェの社会主義経済管理システムを擁護するために心血を注いだ。

まず、幹部が経済の管理・運営において主体的立場と革命的原則を堅持することに優先的な力を入れた。1986年７月15日の党中央委員会の責任幹部への談話で、集団主義に基づく社会主義的方法を具現することについて述べた。そして、幹部の間でチュチェの経済管理システムと方法の本質と優越性を深く認識させるための思想教育を強化するようにした。

経済に対する指導と管理を改善し、集団主義の原則を具現することに深い関心を払った総書記は、工業部門でテアンの事業体系を具現するよう導いた。

総書記は、主席の意図通りに、新たに設けられる道行政・経済指導委員会の体系と連合企業所の体系が優越性を発揮するよう具体

的な措置を講じた。そして、種々の形態の連合企業所を合理的に組織し､連合企業所の体系がその優越性を十分に発揮するよう独立採算制を正しく実施するようにした。

総書記は、農業の管理･運営において集団主義の原則を守るよう導いた。

1986年５月と11月の党中央委員会書記局会議と党中央委員会責任幹部への談話で､農業を社会主義制度本来の要求に即して集団主義的方法で管理、運営する原則を堅持するよう強調した。そして、集団主義の原則を具現した分組管理制と作業班優遇制を正しく応用し、その優越性と生命力を発揮させるための措置を講じた。

金正日総書記は1980年代に、人民の物質・文化生活を向上させるために精力を傾けた。

1984年２月16日の党中央委員会責任幹部協議会で行った演説『人民生活をさらに向上させるために』、1989年１月５日の党中央委員会の責任幹部への談話『全社会に文化・情操生活気風を確立するために』などで、人民の物質・文化生活を一段と向上させる方針を提示した。

これらの著作で総書記は、人民生活を一段と高めるためには、農業生産を増やし水産業を発展させて人民の食の問題をより円滑に解決し、軽工業を発展させ、人民へのサービス活動を改善し、住宅を大々的に建設しなければならないとして､そのための課題と方途を示した。また、全社会に文化･情操生活気風を確立して、すべての勤労者に文化的生活を営ませるという課題を提示した。

総書記は、人民の物質･文化生活をさらに向上させるため、人民の食の問題を解決することに優先的な力を注いだ。

人民生活の問題を解決するうえでの基本は､農業と水産業を発展させて人民の食の問題を円滑に解決することである。

総書記は、社会主義農村テーゼを貫徹することに力を傾け、農業を立派に営んで農業生産を増やすよう導いた。

そのために、農業部門への投資を大幅に増やして、農業の総合的機械化と化学化を高い水準で実現するとともに､海面干拓と新しい土地開墾運動を力強く展開して耕地面積を増やすようにした。一方、毎年チュチェ農法の大講習会を催し、適地適作、適期適作の原則を守り､科学的な施肥方式と育種体系を確立して穀物生産を引き続き高めるようにした。また、党の農業第一主義の方針に従い、全国が農業部門に対する支援を強化するようにした。

総書記は水産業部門にも関心を払い、漁船を近代化、万能化し、科学的な漁労方法を広く取り入れて漁獲高を増やすとともに､加工技術を高めて人民に栄養価の高い魚とその加工品を十分に生産､供給するようにした。

総書記は軽工業の発展のために力を尽くした。

まず、全党、全国、全人民を軽工業を発展させるための運動に立ち上がらせ､幹部が軽工業の発展に対する正しい観点と立場に立って軽工業製品の生産を手際よく指揮するようにした。

1984年３月31日の軽工業部門責任幹部協議会と同年４月１日のアルファ化米工場への現地指導において､軽工業を発展させるための課題と方途を再度具体的に示した。また､1984年４月15日と1985年２月16日には､党中央委員会と政務院の責任幹部に､人民生活について責任を負う立場に立って軽工業を発展させるための運動を推し進めるべきであると述べた。そして、多くの機会に、幹部は軽

工業の発展に対する観点と立場を正し、経済組織活動を綿密に行うべきであると強調した。

総書記は、第13回世界青年学生祭典を機に、全人民が軽工業製品の生産を増やし、品質を高めるために立ち上がるようにし、1989年６月の党中央委員会第６期第16回総会で、軽工業発展３カ年計画を立て、その実現に向けて全党、全国、全人民を動員するための対策を講じた。

総書記はまた、軽工業部門の工場を近代化し、生産を正常化し、一般消費財の品目を増やし品質を高めるために力を傾けた。

そのために、紡織工業、食品加工業、日用品工業、製靴工業をはじめ軽工業の各部門に近代的なモデル工場をつくり、それを一般化させて軽工業部門の工場の近代化を推進するようにした。そして、軽工業部門の工場をフル稼働させて生産を高い水準で正常化するとともに、化学工業に力を入れて、ビナロンをはじめとする化学繊維や合成樹脂、苛性ソーダ、炭酸ソーダなど各種の軽工業用原料を十分に生産、供給するようにした。また、中央と各道には軽工業製品見本館を、各市・郡と工場には軽工業製品見本室を設け、安価で実用的な見本品を手本にして一般消費財の品目を増やし、品質を高めるための運動を活発化させるようにした。

総書記はまた、一般消費財の生産を大衆あげての運動として力強く繰り広げるよう導いた。

そのために、中央工業の企業に生活必需品を生産する分工場や職場、作業班を大々的に設ける一方、1983年８月には、種々の形態の家内作業班を広く組織、運営し、そこで得た貴重な経験を全国に一般化させるようにした。特に1984年８月３日、平壌市の軽工業製品

展示場を見て回り、内部の潜在力と可能性を引き出して、各種の生活必需品の生産を大衆運動として繰り広げるよう指示し、「８月３日一般消費財」生産運動の端緒を開いた。

そして、党組織がこの運動に深い関心を払い、積極的に後押しするようにした。また、1986年５月13日には平壌市平川（ピョンチョン）区域の模範を全国に一般化させるよう指示し、1989年５月には「８月３日一般消費財」生産模範郡（市・区域）称号獲得運動を展開するよう指示した。

大衆的な一般消費財生産運動が力強く展開された結果、「８月３日一般消費財」の生産は中央軽工業、地方工業とともに一般消費財の生産において重要な位置を占めるようになり、軽工業の発展を促した。

総書記は、人民へのサービス活動の改善を図った。

商品供給の改善に深い関心を払っていた総書記は、1984年４月の平壌市内の商店への指導と同年８月３日の商業部門の責任幹部への談話において、住民への商品供給を改善するうえで提起される課題を示し、商品供給で新たな転換をもたらすべきだと述べた。

総書記は、商品供給において党が一貫して堅持している方針である注文制を徹底させるとともに、農村や炭鉱、鉱山など骨の折れる部門の勤労者に優先的に商品を供給するようにした。また、商店網を合理的に配置し、その物質的・技術的土台を強固に築くとともに、商店への商品供給システムを確立するようにした。

総書記は公共給食事業と便益サービス事業の改善にも深い関心を払い、平壌市と主要な都市に総合食堂と専門食堂をたくさん設け、きちんと管理、運営するとともに、料理の質を一段と高め、原材料

を円滑に供給するようにした。一方、平壌市に総合的な便益サービス基地である蒼光院を建設し、それを手本にして各道都と郡機関所在地に蒼光院式便益サービス基地を築き、この部門の従事者の技術・技能水準を高めて種々の便益サービスの質を改善するよう導いた。

人民へのサービス活動を改善するうえでサービス部門従事者のサービス精神を高めることの重要性を洞察した総書記は、1988年４月20日の党中央委員会の責任幹部への談話『サービス部門従事者のサービス精神の向上のために』で、サービス部門従事者のサービス精神を高めるうえで提起される問題を明示し、サービス部門従事者の間で人民への献身的奉仕精神を高めるための教育活動を強化しなければならないと述べた。そして、人民の生活上の便宜を最大限に図る原則に基づき、サービスの手配りと方法を絶えず改善するようにした。

総書記は、人民の住宅問題を円滑に解決するために力を尽くした。

まず、近代的な建材生産基地を築くようにした。1984年４月末の党中央委員会の責任幹部協議会で、セメント工場、製鋼工場、部材工場、シリカリチート・レンガ工場などの建材生産基地を築く課題を提示し、それを実現するために精力的な指導を続けた。

こうして、わずか数年の間に祥原（サンウォン）セメント工場が建設され、安州、枇峴（ピヒョン）、咸興（ハムフン）などに生産能力の大きなシリカリチート・レンガ工場が建てられ、スラグ気泡ブロック工場、アルミサッシュ工場など多くの新しい建材生産基地が築かれた。

人民の住宅問題を円滑に解決するため、総書記はまた、平壌市で大規模な住宅建設を進めるよう導いた。

そのために、1980年代に入って蒼光通りに近代的な住宅を建て、次いで平壌市の中心部に紋繡(ムンス)通りや安商宅(アンサンテク)通り、ポドゥナム通り、チョンリマ通り（第２段階）などの住宅街を建設するようにした。

特に、1980年代の後半に光復通りの建設によって首都の面貌を一新させ、住宅問題の解決において画期的な転換をもたらした。そうして、1989年に万景台地区に一つの都市に匹敵する光復通りが生まれた。

総書記は、光復通りの建設に次いで、1989年11月の初め、金日成主席の生誕80周年をひかえて統一(トンイル)通りと光復通り第２段階の建設を基本とする５万世帯の住宅建設を発案し、それを強力に推進するようにした。また、全国のすべての地方都市と農村でも住宅を大々的に建設するようにした。

総書記は、全社会に文化・情操生活気風を確立することに大きな力を注いだ。

全社会に文化・情操生活の条件を十分に整えることに優先的な関心を払った総書記は、幹部が文化・情操生活に対する正しい認識を持ち、この活動の先頭に立つよう導くとともに、1984年３月末には新しい出退勤制度を確立し、勤労者の労働と休息、文化・情操生活に変革をもたらすための十分な条件を整えた。そして、東平壌大劇場、青年中央会館、メーデー・スタジアムをはじめ文化・スポーツ施設を大々的に建設し、公園や遊園地、遊戯場、遊泳場などをよく整える一方、娯楽用器具専門商店や記念品商店などを設け、勤労者の文化・情操生活に必要な手段を生産、販売するようにした。

全社会に文化・情操生活気風を確立するため、総書記はまた、人々が楽天的で感情豊か、文化的で衛生的かつ道徳的な生活を送ること

にも深い関心を払った。こうして、人民の文化・情操生活には根本的な転換がもたらされ、全社会に豊かな情操と高尚な道徳、楽天的で文化的な生活気風がみなぎるようになった。

第８節　社会主義文化建設の成果を打ち固めるために

1980年代に入り、金正日総書記は社会主義文化建設における成果を打ち固めるために力を尽くした。

金正日総書記は、教育事業のさらなる発展のために心血を注いだ。

1984年７月22日、全国教育家熱誠者会議の参加者に送った書簡『教育事業をさらに発展させるために』で、教育事業をさらに発展させる方針を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは革命発展の新たな要求に即して教育革命を起こし、学校教育事業を全般的に改善し教育の質を一段と高めて、新しい世代を有能な革命的人材に育て上げ、われわれの教育が国の科学技術の発展と社会主義経済建設によりよく貢献するようにしなければなりません」

この書簡で総書記は、チュチェ思想の根本原理に基づき、社会主義教育の本質は人間を有力な存在に育て上げる人間改造事業であると規定した。そして、全般的11年制義務教育の質を高め、技術者、専門家の養成事業を改善し、全社会のインテリ化を促進する問題をはじめ、教育事業をさらに発展させるための課題とその遂行方途を示した。

総書記はまず、中等一般教育の質を高めることに第一の関心を払った。

そのために、平壌第１高等中学校（当時）をモデルケースに仕立て上げ、それを一般化させるようにした。

1980年10月、総書記は平壌第１高等中学校を建てることを発議し、これを積極的に推進した。そして、1984年４月28日には完成した同校を現地指導し、基礎教育を強化するためのモデルをつくり、それを一般化させて中等一般教育に質的変化をもたらし、優れた才能を持つ生徒を系統的に育成するようにと指示した。また、教育部門責任幹部協議会で行った演説『平壌第１高等中学校をモデルスクールとして整えるために』で、平壌第１高等中学校を英才養成基地として整え、それを全国に一般化させるようにと指摘し、その後、各道に近代的な教育施設を備えた第１高等中学校（当時）を建て、英才教育に力を入れるようにした。

こうして、平壌市と各道都に近代的な第１高等中学校が新設されて英才教育が行われ、次いで、全国のすべての高等中学校の教育水準を第１高等中学校の水準に引き上げるための運動が展開された。

中等一般教育の質を高めるため、総書記は教育の内容を正しく定め、教育学的過程を正確に経て、教育方法を抜本的に改善するようにした。

また、1987年２月に「7・15最優等賞」を制定し、その獲得運動を繰り広げて、全国のすべての高等中学校の生徒の間に学習気風を確立するようにした。

中等一般教育の内容と方法が根本的に改善され、教育の質が一段と高まることにより、高等教育の質的水準を向上させ、教育事業全

般に新たな転換をもたらす確固たる保証が取り付けられた。

総書記は、発展する現実の要求に即して高等教育部門で技術者、専門家の養成事業を改善することに深い関心を払った。

まず、金日成総合大学をよく整えて教育の質を高めるため、1984年９月に金日成総合大学の事業をさらに改善するという党中央委員会政治局の決定書を採択して確実に実行するようにし、これに基づき、全国のすべての大学で教育の科学理論水準と物質的・技術的土台を金日成総合大学の水準に引き上げるための運動を展開するようにした。そして、有能な科学者、技術者をより多く育てるために各大学の養成規模を拡大し、多くの単科大学と高等専門学校を新設するようにした。また、工場大学、農場大学、漁場大学を急速に拡大し、その教育水準を向上させる一方、テレビ放送大学を創設し、その運営を正常化することにより、働きながら学ぶ教育システムをさらに発展させるとともに、人民大学習堂の役割を強めるようにした。

総書記は教育事業をさらに発展させるため、1988年３月の党中央委員会第６期第13回総会で教育事業に革命的転換をもたらす問題を討議するようにし、全党と全人民を総会の決定の貫徹に立ち上がらせた。

こうして、国の全般的教育水準は新たな高い段階に達し、20代、30代の博士をはじめ数多くの有能な科学者、技術者が育ち、教育は全社会のインテリ化を視野に納めるようになった。

金正日総書記は、国の科学技術を高い段階へと発展させるために力を傾けた。

1985年８月３日に党中央委員会の責任幹部に行った演説『科学

技術をさらに発展させるために』をはじめ多くの著作で、国の科学技術の発展方向とそれを実現するための課題を示した。

そして、われわれは科学技術分野で収めた成果に満足することなく、国の科学技術を新たな高い段階へと発展させるために奮闘しなければならないと指摘した。

また、国の科学技術を発展させるうえで重要な課題は、原料、燃料、動力問題を解決し、機械設備の近代化で提起される科学技術上の問題を解決し、人民経済各部門の生産技術工程と生産方法、経営活動を新たな科学技術的土台の上に引き上げるための研究を強化し、基礎科学を発展させ、新しい科学技術分野を開拓することであるとし、その具体的な方途を示した。

総書記はまず、国の科学技術を新たな高い段階へと発展させるための積極的な措置を講じた。

1986年２月の党中央委員会第６期第11回総会と1988年３月の党中央委員会第６期第13回総会、1988年11月の党中央委員会第６期第14回総会などで、国の科学技術の発展問題を討議するようにし、電子工学、生物学、熱工学をはじめ重要な科学部門を急速に発展させ、国の科学技術全般を世界的水準に引き上げるための対策を立てた。

そして、1986年３月には全国学位・学職所有者会議を、1988年10月には全国発明家大会を開催し、1986年からは毎年全国科学技術祭典を催して、科学者、技術者の責任感と役割を最大限に強めるようにした。

また、幹部が科学技術に対する観点を正し、全社会に科学重視の気風を確立するための組織・政治活動を綿密に行うようにするとともに、科学技術発展展望計画を正確に作成、実行し、科学研究活動

に対する国の投資を増やすようにした。

次に総書記は､科学研究活動を国の経済発展にとって切実な問題を解決することに主眼を置いて行うよう導いた。

科学技術発展の課題を正しく設定し､その実行に対する指導と統制を強化するため、総書記は、1983年５月、関係部門の幹部と有能な科学者､技術者を参加させて部門別に年間及び展望科学技術発展課題を集団で審議し､各時期に政策的に重要な問題として提起される科学技術上の問題を解決するための仕事の手配を綿密に行うようにした。そして、1984年７月には、全国の科学者、技術者を国家的見地から正しく動員するため、研究課題を統一的に与え、研究成果に対する国家的な審議及び導入システムと秩序を厳格に確立するようにした。

また、科学者・技術者突撃隊活動を積極的に展開して、人民経済を主体化、近代化、科学化するうえで切実に提起される科学技術上の問題を解決し､新しい科学技術上の成果の生産への導入を一層強力に推し進めるようにした。特に､科学技術発展の世界的趨勢に即して､電子工学をはじめ重要な科学部門を全面的に発展させることに力を集中するよう導いた。

総書記はまた､外国の先進技術を積極的に取り入れることにも深い関心を払った。世界の科学技術の発展趨勢をいち早く知り、外国の科学技術上の成果を広く取り入れるため、総書記は、先進諸国と科学技術の交流を活発に行うようにした。こうして、1980年代に国の科学技術を高い水準に引き上げるうえで大きな前進を遂げた。

金正日総書記は、チュチェの文学・芸術をさらに発展させるために精力を傾けた。

1981年３月31日に全国作家･芸術家熱誠者大会の参加者に送った書簡『チュチェの文学・芸術をさらに発展させるために』と、1986年５月17日の文学･芸術部門の活動家への談話『革命的文学・芸術作品の創作で新たな高揚を起こそう』で、文学・芸術をより高い水準に引き上げる課題と方途を具体的に示した。

総書記は、文学･芸術をさらに発展させるためには、チュチェの革命偉業の遂行に寄与する思想性･芸術性の高い文学･芸術作品をより多く創作し、映画、歌劇、演劇をはじめ文学・芸術のすべての分野で革新を起こさなければならないと指摘した。

そして、文学･芸術部門に提起されている課題を成功裏に遂行するため、作家、芸術家と文学・芸術部門のすべての活動家は金日成同志のチュチェの文芸思想と党の文芸方針で武装し､それを貫徹し､文学･芸術部門における党の業績を固守し、さらに輝かせることを第一としてすべての活動を展開しなければならないと強調した。

総書記は、文学･芸術をより高い水準に引き上げるため、文学作品の創作で新たな転換をもたらすよう導いた。

小説文学を開花､発展させることに第一の意義を付与した総書記は、叢書『不滅の歴史』をはじめ領袖形象化作品の創作活動を推し進める一方、1978年から開始した「長・中編小説100編創作戦闘」を締めくくり、次いで1984年から５年を期間とする新たな「長・中編小説100編創作戦闘」を展開するようにした。

こうして、1980年代に叢書『不滅の歴史』のうち抗日革命闘争時期編の創作が15編をもって完成し、長編小説『光り輝く朝』『1950年の夏』『廃墟の中から』『鉄の信念』『青春頌歌』『熱い心』『冶金基地』など、思想性・芸術性の高い作品が多数創作された。

詩文学の発展にも深い関心を払った総書記は、『主席に従って千万里、党に従って千万里』『われらの信念は一つ』『とわにこの道を行かん』をはじめ、多様な主題の歌詞や詩も数多く創作するようにし、児童文学も子どもの年齢的・心理的特性に即してさらに発展させるよう導いた。

総書記は、映画革命の成果を打ち固めることに力を注いだ。

まず、革命映画の創作に第一の関心を払った。1970年代に得た成果と経験に基づき、総書記は、映画で領袖の形象化をより高い段階へと発展させ、主席の革命活動史を全面的に描くことを革命映画創作の重要な課題として提起した。

総書記の精力的な指導のもとに、主席の革命活動史を描いたシリーズ革命映画『朝鮮の星』と『民族の太陽』が創作、完成された。

総書記は、主席の革命的家庭を描いた革命映画である『親衛戦士』『青松』『革命戦士』なども立派に創作するよう導いた。

革命映画の制作とともに、思想性・芸術性の高い多様な主題の映画制作にも深い関心を払った総書記は、劇映画『郡党責任書記』『月(ウォル)尾(ミ)島』『ただひとすじに』『その日の誓い』などの制作活動を指導して完成させ、これを機に映画の制作で新たな高揚をもたらした。

映画制作を発展させるため、総書記は、映画制作に対する党の指導を強化し、映画人の技量を絶えず高めるとともに、オープン・セット街を建設し、それを総合的な映画制作基地として築くよう導いた。

総書記は、舞台芸術を新たな高い段階へと発展させることにも大きな力を注いだ。

演劇革命の成果を固守し拡大発展させるため、名作である『血

噴万国会議』『娘からの手紙』『３人１党』『慶祝大会』などを『城隍堂（ソンファンダン）』式の革命演劇にする活動を指導して完成させ、演劇の開花期を開いた。そして、こうした成果に基づき、1988年４月20日の文学・芸術部門の活動家への談話『演劇芸術について』で、チュチェの演劇理論を全面的に体系化し、深く解明した。

歌劇革命の成果を固め発展させるため、総書記は1983年１月、原作を代を継いで保存するシステムを確立し、多くの総譜や台本をつくる措置を講じた。また、民族歌劇『春香（チュンヒャン）伝』の創作活動を指導し、人民の民族的情緒と感情にかなった民族歌劇創造の新たな境地を開いた。

総書記は、音楽芸術を高い段階へと発展させることに深い関心を払い、数多くの名曲を創作するとともに、過去に創作された優れた作品も時代的美感に即して作り直すようにした。特に電子音楽を発展させるため、1985年６月４日にポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルを組織し、細かに指導して、主体性が確立した人民的な現代電子音楽のモデルを創造した。

総書記は、舞踊芸術分野において現代的な舞踊作品を多く創作する一方、民俗舞踊を広く発掘して時代の美感に即して創作、完成させるとともに、チュチェの舞踊表記法をつくりだすよう導いた。

早くから舞踊表記法の構想を練ってきた総書記は、1970年代の初めに舞踊表記法を作成することを発案し、舞踊表記法研究チームを結成した。そして、1978年11月30日の党中央委員会の責任幹部及び舞踊表記法研究部門の活動家への談話『チュチェの舞踊表記法を完成するために』をはじめ、数度にわたって研究チームの活動を指導した。こうして、1987年２月に朝鮮式の子母式舞踊表記法が完

成を見た。

総書記は音楽舞踊叙事詩の創作活動を細かに指導し、1982年に音楽舞踊叙事詩『栄光の歌』を、1987年に5000人の大公演『幸福の歌』を、1989年には７万人の大公演『祝典の歌』を創作、完成させ、舞台芸術の開花期をもたらした。

総書記は、チュチェのサーカスの演目をより多く創作し、その水準を絶えず高めて、朝鮮のサーカス芸術を世界に誇りうるサーカスにした。

総書記は、文学・芸術活動を大衆化することに深い関心を払った。

1982年11月15日に全国文学通信員熱誠者会議の参加者に送った書簡『文学・芸術活動を大衆化する党の方針貫徹で文学通信員の役割を強めよう』で、全国の芸術化を文学・芸術活動の大衆化の高い目標として打ち出し、それを実現するために奮闘努力する課題を提示した。

文学・芸術活動を大衆化し全国を芸術化するため、総書記は、大衆文学創作活動の中核である文学通信員の役割を強めるとともに、大衆文学創作活動に対する指導を作家同盟あげての活動、全作家の活動に切り換えるよう導いた。そして、1982年に文学通信員のための「６月４日文学賞」を制定し、彼らが創作した優秀な作品に授与するようにした。

また、文学・芸術サークル活動、機動芸能宣伝隊活動などの大衆芸術活動に広範な大衆を参加させ、文学・芸術普及システムを一層整然と確立し、勤労者の間で大衆文化普及活動を活発に繰り広げるようにした。そして、全国労働者芸術サークル祭典、全国農業勤労者芸術サークル祭典をはじめ階層別の芸術サークル祭典や勤労者

の歌謡コンクールなどをしばしば催すようにした。

金正日総書記の指導のもとに、1970年代に全盛期を迎えた文学・芸術は、1980年代に今一度飛躍的発展を遂げ、チュチェの文学・芸術の威力を示威し、全社会の金日成主義化偉業の促進に大きく貢献した。

第９節　高麗民主連邦共和国創立方案を実現し、在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすために

1980年代に入り、祖国統一のためのたたかいにおける最も重要な課題は高麗民主連邦共和国創立方案を実現することであった。

金日成主席が朝鮮労働党第６回大会で打ち出した高麗民主連邦共和国創立方案は、自主、平和統一、民族大団結の３大原則に基づき、朝鮮の現実的条件に即して祖国の統一を実現する最善の方途を示した統一憲章である。

高麗民主連邦共和国創立方案は、北と南が相手側に現存する思想と体制をそのまま容認する基礎のうえで、双方が同等に参加する民族統一政府を組織し、そのもとで北と南が同等の権限と義務を持ち、それぞれ地域自治制を実施するという統一方案である。北と南に現実に相異なる思想と社会体制が存在している状況のもとで、一方が食ったり食われたりすることなく、国の統一を公正に、平和的方法で早く実現する最も現実的かつ合理的な方途は、二つの体制をそのままにして、北と南が連合する方法で一つの統一国家を形成することである。

金正日総書記は、主席が提示した高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために心血を注いだ。

まず､高麗民主連邦共和国創立方案の正当性と現実性を広く宣伝するようにした。

総書記は、金日成同志が示した高麗民主連邦共和国創立方案をはじめ､わが党の祖国統一方針の正当性を巧みな方法で積極的に宣伝し、内外のすべての朝鮮同胞がわが党の統一方案を支持し、祖国統一のための愛国の道にこぞって立ち上がるようにしなければならないと指摘した。

1980年10月と12月をはじめ多くの機会に、総書記は、高麗民主連邦共和国創立方案の宣伝を強化すべきだとし､内外の朝鮮同胞の間で高麗民主連邦共和国創立方案を広く宣伝するようにした。

そのために、党機関紙、政府機関紙をはじめ多くの出版物が連邦国家創立方案と統一国家の10大施政方針に関する報道と反響資料を集中的に掲載する一方、新聞、放送を通じてその正当性を解説するようにした。そして、第６回党大会の決定を貫徹するための勤労者団体の大会や主要な記念報告会などの政治的行事でも､新たな祖国統一方案を実現することを重要な問題として提起し､積極的な宣伝攻勢を繰り広げるようにした。

また､さまざまな形式と方法で世界の広範な人民に朝鮮労働党の新たな祖国統一方案の公明正大さを宣伝するようにした。

総書記は､連邦国家創立の前提条件を整えるために精力を傾けた。北南間の民族的和解と団結を図り、朝鮮半島の緊張を緩和し、戦争の危険を除くことは､北と南が連合して一つの連邦国家を創立するための基本前提である。

総書記はまず、北南間の民族的和解と団結の雰囲気をつくるために大きな力を注いだ。

1984年９月、総書記は南朝鮮の水害被災民に肉親の情のこもった救援物資を送り、民族的和解と団結の新局面を開いた。

南朝鮮では、1984年８月末から９月初めにかけての豪雨により一挙に20万7000余人の罹災民が出た。総書記は直ちに、共和国赤十字会の名義で南朝鮮の水害被災民に救援物資を送るという決定を発表するようにした。そして、莫大な量の救援物資を短期間に最高の水準で準備するためのスケールの大きい作戦を展開し、細かな指示を与えて、救援物資の受け渡しが円滑に行われるよう導いた。

こうして、国土分断以来約40年にして初めて、５万石の米、50万メートルの織物、10万トンのセメントと大量の医薬品が南朝鮮の水害被災民に届けられた。これを機に北南間に対話の雰囲気が生まれて北南経済会談の道が開かれ、1985年５月には北南赤十字会談が12年ぶりに再開され、祖国解放40周年を契機に北南間に赤十字芸術団及び故郷訪問団の相互訪問が実現し、北南国会会談のための予備接触とスポーツ会談が行われた。これは、分断の障壁に往来の突破口を開き、全民族的規模で祖国統一への熱望を一段と高めた。

総書記は、金日成主席が提唱した北南の当局者を含む諸政党・社会団体の代表と各界の人士が参加する北南連席会議と北南の指導的人士による政治協商会議の開催を実現するための積極的な措置を講じた。そして、平壌を訪れた南朝鮮の「全国民族民主運動連合」顧問の文益煥（ムンイクファン）牧師や「全国大学生代表者協議会」の代表など統一の使節を温かく迎えて称揚するようにし、民族の和解と祖国統一の気運を一層盛り上げた。

次に総書記は、朝鮮半島の緊張を緩和し、祖国統一の平和的環境をつくるためのたたかいを積極的に推進するようにした。

金日成主席は、朝鮮半島の緊張を緩和し、恒久平和を保障するため、朝鮮停戦協定を平和協定にかえ、北南間に不可侵宣言を採択することを目的とする朝鮮とアメリカ、南朝鮮の３者会談や北南高位級政治・軍事会談の開催など、合理的な提案を示した。

総書記は主席が示した平和的提案を実現するため、まず３者会談開催の提案を実現するための措置を講じるようにした。

1984年１月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会と最高人民会議常設会議の合同会議は、朝鮮とアメリカ、南朝鮮の３者会談の開催を呼びかけ、その旨をしたためた手紙をアメリカ政府とソウル当局に送った。そして、1985年４月の最高人民会議第７期第４回会議は、最高人民会議と南朝鮮の「国会」との会談を開き、不可侵宣言を発表することを提議する手紙を南朝鮮の「国会」に送り、国際平和年である1986年には、朝鮮半島で戦争の危険を防ぎ、鋭い軍事的対峙状態を緩和するための一連の措置を講じた。

北南間の対話が行われる期間、一切の軍事演習を中止するという提案、朝鮮半島に非核地帯、平和地帯を設けるという提案、15万人の朝鮮人民軍軍人を平和的建設に参加させるという重大措置などは、緊張を緩和し、平和統一の前提条件を整えるための朝鮮労働党と共和国政府の誠意ある努力の現れであった。

総書記はまた、北南高位級政治・軍事会談の開催と軍縮の提案を実現するための措置を講じるようにした。

1987年１月から３月にかけて、朝鮮民主主義人民共和国の政務院総理と人民武力部長は共同名義で４回にわたって北南高位級政

治・軍事会談の開催を提案する手紙を南朝鮮の「国務総理」と「国防長官」に送り、会談の早期開催を求めた。そして、共和国政府は1987年７月に声明を発表して大規模の段階的兵力縮小を提案し、12月末までに朝鮮人民軍の各軍種、兵種から10万人の将兵を除隊させて社会主義建設場に進出させる措置を講じた。また、1988年11月には平和保障４原則と包括的な平和方案を提示した。

祖国統一の平和的環境をつくり、緊張を緩和するための朝鮮労働党と共和国政府の措置と真摯な努力は、内外で絶対的な支持と歓迎を受けた。

総書記は高麗民主連邦共和国創立方案を実現するため、民族大統一戦線を形成することに精力を傾けた。

全民族的な統一戦線の形成を促進するため、総書記は、北と南、海外の人士で構成される民族共同の協議機構を設置することを構想し、これに関する合理的な提案を行うようにした。

1980年11月に平壌で招集された共和国北半部の諸政党・社会団体連席会議は、北と南、海外の各党、各派、各階層の適当な数の代表からなる高麗民主連邦共和国創立準備委員会のような民族共同の協議機構を設置するための予備会議を開くことを提議する手紙を採択し、南朝鮮と海外の各階層の人士に送った。

準備委員会設置の提案は、内外の各界の人士の積極的な支持と歓迎を受けた。しかし、南朝鮮の当局者だけはこの提案を誹謗中傷し、手紙を受け取った人の大半を公職から追放しただけでなく、さまざまな「罪」をかぶせて弾圧し、逮捕、投獄した。

総書記は、南朝鮮当局者の反民族的・分裂主義的策動を暴露、断罪する一方、南朝鮮と海外で団結できるすべての愛国的民主勢力を

広く包容するようにした。

これに応じて、1981年８月、祖国統一民主主義戦線中央委員会は声明を発表し、南朝鮮当局者である全斗煥（チョンドゥファン）一味を除き、祖国の統一を志向する北と南の諸政党･社会団体の代表と海外同胞が参加する民族統一促進大会の招集を提議し、1982年２月、祖国平和統一委員会は、祖国統一のための協商機構として北と南、海外の人士の100人連合会議の招集を提案し、その参加対象者名簿を発表した。こうして、南朝鮮と海外では連合会議招集のための政治運動が活発に繰り広げられた。

総書記は、全民族的な統一戦線の形成を促進するため、北と海外同胞との連帯を実現することに大きな力を注いだ。

北南間の幅広い統一対話がまだ行われていない状況のもとで、北と海外の連帯実現は民族大統一戦線形成の突破口となった。総書記は、平壌を訪ねる海外同胞人士が北と海外の連帯を実現するうえで先駆的な役割を果たすよう、連共統一の道に導いた。

そうして、同胞社会の中間政治勢力と良心的な各界の人士、学界、宗教界の人士はもちろん、民族自主を志向する右翼人士も連共合作の道を歩むようになり、彼らは海外同胞を自主統一と民族大団結へと立ち上がらせるうえで大きな役割を果たした。

海外の民主人士の間で連共、連北の気運が高まると、総書記は、海外同胞との対話と協商を拡大するよう導いた。そして、1981年11月、オーストリアの首都ウィーンでは国土分断以来36年にして初めて、祖国統一のための北と海外同胞のキリスト教信者の第１回の対話が成功裏に行われ、1982年12月にはフィンランドの首都ヘルシンキでより大きな規模で第２回の対話が開催された。これは、内外の

同胞の和解と連合を図り、祖国の自主的平和統一を促進するうえで重要な契機となった。

高麗民主連邦共和国創立方案を実現するための海外同胞の愛国運動は日本をはじめアメリカとオーストラリア、ヨーロッパ諸国で急速に拡大し、海外で民族の団結のための基礎が築かれた。

こうして、1984年12月には北と海外同胞の汎同胞大会が開かれ、非常設協議体として「祖国統一のための民族連合」が結成された。「祖国統一のための民族連合」の結成は、北と海外同胞との統一戦線の実現であり、民族大統一戦線の形成を促進するための基礎となった。

総書記は、全民族的な統一戦線を形成するため、金日成主席が提案した北南連席会議の招集を実現するための実際的な措置を講じるようにした。そうして、1988年１月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、政務院、諸政党・社会団体は合同会議を開き、北と南の当局者を含む社会団体の代表と各界の人士が参加する北南連席会議の招集を提案する手紙を南朝鮮の諸政党・社会団体と個々の人士に送り、北南連席会議北側準備委員会を構成した。

北南連席会議招集の提案は内外で大きな反響を呼び、積極的な支持と歓迎を受けた。特に南朝鮮では、統一問題の解決において民衆が主体とならなければならないという主張が強まり、統一問題の解決に直接参与しようという各階層の人民の要求が日ごとに高まった。

祖国統一に対する全朝鮮人民の志向が高まり、統一の主体的勢力がいつにもまして強まるにつれて、総書記は、北と南、海外の統一運動団体の代表と各界の愛国人士が参加する汎民族大会を開くためのたたかいを力強く推し進めるようにした。

そうして、1989年７月に平壌で招集された内外同胞の祖国統一促進大会では、祖国解放45周年に当たる翌年の1990年に板門店（パンムンジョム）で祖国統一のための8・15汎民族大会を開催することにした。

民族大統一戦線を形成するためのたたかいが力強く展開されることにより、祖国統一のための民族の主体的勢力を強化し、統一運動を全民族的規模に拡大発展させるうえで新たな転機がもたらされた。

1980年代に高麗民主連邦共和国創立方案を実現するためのたたかいが強力に繰り広げられることにより、祖国統一運動では新たな高揚が起こった。

金正日総書記は、在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすために心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日、総聯をめぐる主・客観的情勢は大きく変わり、こうした情勢は総聯にとってその活動のすべての分野で新たな革命的転換をもたらすことを切実に求めています」

1980年代に入って、在日朝鮮人運動は新たな発展への転換期を迎えた。この時期、在日同胞の間では世代の交替がなされ、日本で生まれ育った２世、３世の同胞が圧倒的多数を占め、彼らが在日朝鮮人運動の主役として登場するようになった。また、商工人が総聯の基本大衆をなしていた。

総聯の活動環境にも大きな変化が生じていた。総聯に対する日本政府の分裂策動が一層強まる一方、日本と南朝鮮の癒着関係が深まるにつれて、総聯組織を破壊し、在日朝鮮人運動を瓦解させようとする南朝鮮の反動勢力の策動もかつてなく悪辣さを増していた。

総聯の変化した環境と現実は、新しい世代の同胞、同胞商工人との活動をより一層強化し、総聯のチュチェ思想化をさらに力強く推し進めていくことを求めていた。

総聯の変化した環境と在日朝鮮人運動発展の合法則的要求を深く洞察した総書記は、1986年９月15日の党中央委員会の責任幹部への談話『発展する現実の要求に即して総聯の活動をさらに改善強化するために』で、総聯はチュチェ思想を指導思想とするチュチェ型の海外同胞組織であるとし、総聯のチュチェ思想化は総聯が恒久的に堅持していくべき戦略的目標であると述べた。また、変化した現実に即して総聯の活動に新たな転換をもたらすための課題と方途を示した。

総書記は、在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすため、まず総聯の幹部陣容を固めるよう導いた。

総書記は、変化した現実に即して幹部陣容を革新するとともに、幹部の教育と後続幹部の養成に力を入れるようにした。そして、総聯の活動に生涯を捧げている老幹部を大事にして押し立て、彼らが引き続き中核的役割を果たすよう導いた。

総書記は、広範な同胞大衆を組織に結束し、彼らに対する思想教育を強化することに大きな力を注ぐようにした。

総書記は、同胞商工人を総聯の基本大衆、在日朝鮮人運動の主力部隊として押し立て、彼らの愛国衷情を発揚することにも深い関心を払った。そして、総聯の幹部の間で革命的信念の教育を強化するとともに、在日同胞に朝鮮民族第一主義の精神と祖国への献身的奉仕精神を植えつけることに重点を置いて祖国愛、民族愛の教育を着実に行うようにした。

総書記は、同胞の民主主義的民族権利を擁護し、祖国の社会主義建設と自主的平和統一のための愛国運動を力強く繰り広げるよう導いた。

総書記は、同胞の人権と企業権、生活権、教育権を擁護し拡大することは総聯の重要な任務であるとし、広範な同胞大衆を立ち上がらせて引き続き力強くたたかうようにした。そして、新しい「愛国栄誉旗獲得運動」を力強く展開して、総聯の愛国事業に新たな転換をもたらすよう導いた。

金正日総書記の指導のもとに、総聯はチュチェの海外同胞組織のモデルとして一層しっかり固められ、在日朝鮮人運動には新たな革命的転換がもたらされた。

第10節　世界の自主化を促進するために

1980年代に至って、自主性の力強い潮流が世界のすべての大陸を席巻し、国際舞台では革命勢力と反革命勢力、反帝・自主勢力と支配勢力との闘争が一層先鋭化した。

帝国主義への植民地的従属から脱した数多くの国の人民が自主の道に沿って前進し、反帝・自主をめざす人民の革命闘争は日ごとに高揚していた。反面、支配圏を維持、拡大しようとする帝国主義者の干渉と侵略策動は一層悪辣さを増していた。特にアメリカ帝国主義者は、社会主義諸国を内部から瓦解させるための策動をいつにもまして強化し、発展途上諸国に対する侵略と略奪、戦争策動に狂奔していた。

世界の政治舞台におけるこうした変化の過程と時代の要求を深く洞察した金日成主席は、1982年４月14日に朝鮮労働党中央委員会・朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議合同会議で行った施政演説『全社会のチュチェ思想化をめざす人民政権の任務』で、全世界を自主化するという方針を提示した。

主席の高志を体した金正日総書記は、1983年５月３日、カール・マルクス生誕165周年及び没後100周年に際して発表した論文『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』で、世界の自主化を促進することは人類共同の闘争課題であるとし、それを実現するためのたたかいを指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「マルクスによって切り開かれた労働者階級の革命偉業を完成させるうえで当面する重要な課題は、帝国主義に反対し、世界の自主化を促進することである」

全世界を自主化するということは、すべての国と民族がいかなる列強や支配主義勢力にも従属したり服従することなく、自らの自主的発展が保障された世界を建設することを意味する。

金正日総書記は、反帝・自主勢力の団結と協力を強めるために心血を注いだ。

世界を自主化するためのたたかいで主体は反帝・自主勢力であり、その威力は団結にある。帝国主義者が互いに結託し合って、連合した勢力として社会主義と世界の進歩的人民に反対している状況のもとで、世界のすべての反帝・自主勢力が固く団結してたたかうことは一層切実な問題となっていた。

総書記は、社会主義諸国の団結を強めることに優先的な力を注

いだ。

総書記は、1984年５月16日から７月１日にかけての旧ソ連及び東欧社会主義諸国訪問をはじめ、主席の社会主義国の党及び国家指導者との対外活動を立派に補佐するようにし、社会主義諸国の統一団結を強化する重要な契機にならしめた。

また、1984年７月の党中央委員会第６期第９回総会で、世界のすべての進歩的政党、社会団体、革命組織との連係と接触を強化し、団結を固める課題を提示し、党代表団の往来を活発化させるための対策を立てた。

そうして、朝鮮労働党はさまざまなクラスの党代表団を世界各国に派遣する一方、世界各国の政党の指導者と代表団を招いて友好関係を深め、連係を強めた。1985年の１年間だけでも朝鮮労働党代表団は70余回にわたって外国を訪問して諸政党との活動を行い、90余の外国の党代表団が朝鮮を訪問した。

総書記は、非同盟運動を強化発展させることに大きな力を注いだ。

そのためにまず、この運動の統一と団結を強めることに深い関心を払った。

1980年代に入って、非同盟諸国を離間して各個撃破し、非同盟運動を内部から瓦解させようとする帝国主義者の策動は一層悪辣になった。

総書記は前述の著作『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』で、非同盟諸国は非同盟運動の根本原則を厳守し、完全な平等と内政不干渉の原則に基づいて政治的に固く団結し、経済的に緊密に協力しなければならないと指摘した。

また、非同盟諸国首脳会議を控えて、非同盟運動の統一と団結を

強化するという朝鮮労働党の原則的立場を明らかにした朝鮮労働党中央委員会政治局･朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会の合同会議に関する報道を発表するようにした。1983年２月と1986年６月、1989年６月に発表された合同会議の報道を通じて明らかにされた朝鮮労働党の原則的立場は、複雑な情勢のもとで非同盟運動の統一と団結を強化することに寄与した。

総書記は、非同盟運動の多くの会議で朝鮮代表団がこの運動の統一と団結のために積極的な活動を展開するよう導いた。そのために、1980年代に３度開催された非同盟諸国首脳会議をはじめ重要な会議に参加する朝鮮代表団の活動方向を具体的に示した。

朝鮮代表団は、非同盟諸国の各会議でこの運動を強化発展させるうえで提起される原則的な問題について討議し、共同の戦略を立てることに力を集中するよう真剣な努力を傾注した。朝鮮代表団の積極的な活動は、反帝・自主の旗のもとに非同盟運動加盟国の団結を強化することに大いに寄与した。

総書記は、非同盟運動を強化発展させるために南南協力を拡大発展させるよう導いた。そのために、朝鮮で開催される南南協力に関する多くの国際会議が南南協力の実現を促進する重要な契機となるようにした。

そうして、平壌では1981年８月に食糧・農業増産に関する非同盟及びその他発展途上諸国の討論会が開かれ、次いで1982年５月には非同盟諸国ニュース・プール調整委員会第７回会議、1983年９月には第１回非同盟及びその他発展途上諸国の教育・文化相会議、1987年６月には南南協力に関する非同盟諸国閣僚級特別会議などが成功裏に開催された。これらの会議は、非同盟諸国と発展途上諸国が

経済的自立を成し遂げ､南南協力を発展させるための実際的な方途を討議し、新たな里程標をもたらした歴史的な会議となった。

総書記は､南南協力を拡大発展させるため､非同盟諸国の農業発展のために積極的な援助を与えるようにした。

1981年８月にアフリカ諸国の農業発展のための農業科学研究センターを設立する課題を提示し､タンザニア､ギニアなど多くの国に農業科学研究所や試験農場を設けるよう対策を立てた。また､マリ、ベニン、イエメン民主人民共和国（当時）、ガイアナなどの30余の灌漑工事に専門家を派遣し､設備や資材を送るとともに､多くの国に技術者､専門家を派遣し､朝鮮で農業技術者を養成するようにした。

総書記は、南南協力を拡大発展させるため、党及び国家建設、工業、教育、保健医療、文学・芸術など多くの分野で新興諸国を助けるようにした。そうして、共和国政府は80余カ国と経済協力、技術交流関係を結び、数十の対象に援助を与えた。また、多くの国に多数の専門家を派遣し、党及び国家建設、経済管理、民族文化建設、医療奉仕事業などを誠心誠意助けた。

金正日総書記は、世界の平和愛好人民の反帝共同闘争を強化するために精力を傾けた。

総書記は､アメリカをはじめ帝国主義者の侵略と戦争策動に反対し､世界の平和と安全を守るためのたたかいを力強く展開するよう導いた。そのために、帝国主義者の侵略と戦争策動を阻止し、平和を守るうえで提起される原則的問題を明らかにした。

1983年５月３日に発表した著作で､すべての反帝・自主勢力は反米統一戦線を形成してアメリカ帝国主義に集団的攻撃を加え､帝国

主義者の軍備拡張と戦争準備策動を阻止し､他国にあるアメリカ帝国主義の軍事基地を撤廃し､アメリカ軍と核兵器などの大量殺りく兵器を撤収し、軍事ブロックを解体し、世界各地域に非核地帯・平和地帯を設置、拡大しなければならないと指摘した。

また、1987年９月25日の党中央委員会の責任幹部への談話『反帝闘争の旗をさらに高く掲げ、社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう』で、現代帝国主義の実体とその運命に対する正確な認識を持って、反帝的立場を堅持し、世界のすべての反帝・自主勢力が固く団結して反帝闘争を力強く展開しなければならないと述べた。

総書記は、世界の平和愛好人民を反帝・反戦・反核・平和擁護運動へと立ち上がらせることに力を注いだ。

そのために、1983年５月、平壌で開かれる世界ジャーナリスト大会が世界の平和愛好人民を反帝共同闘争へと立ち上がらせる重要な契機となるよう、対外活動を立派に行うようにと指示した。そうして、1983年７月に平壌で開催された世界ジャーナリスト大会は、118カ国､17の国際機構の169の代表団と代表の参加のもとに成功裏に行われた。

総書記は、世界の平和愛好人民の反帝・平和擁護運動を鼓舞激励するための対外活動を積極的に繰り広げるよう導いた。

こうして､朝鮮労働党は1981年３月に朝鮮を訪問した日本社会党代表団と会談を行い、東北アジア地域における非核・平和地帯設置に関する共同宣言を発表した。そして、1984年９月に再度訪朝した日本社会党代表団との会談で、アジア地域の諸政党・社会団体が連合して全人民的反核運動を大々的に展開し、アメリカと日本、南朝

鮮の３角軍事同盟結成策動に反対する両党の共同闘争を強化することにした。また、1986年９月には朝鮮半島における非核・平和のための国際会議を招集し､会議を成功させるために積極的な活動を行った。

朝鮮労働党と共和国政府は､インド洋を平和地帯にするためのインドをはじめこの地域の諸人民のたたかい、カリブ海地域を平和・自主・開発地帯にするためのこの地域の諸人民のたたかい、東南アジア地域を非核地帯にするためのこの地域の諸人民のたたかいなど、帝国主義の侵略と戦争策動に反対し、自主、独立、平和のためにたたかう世界各国人民の反帝･平和運動を全力をあげて支持声援した。

総書記は、第13回世界青年学生祭典を反帝連帯、平和と友好の大祭典にするよう導いた。

平壌祭典が徹底した反帝祭典、特色ある祭典となるよう、総書記は、反帝的性格を固守し具現するようにした。

そのために、反帝連帯、平和と友好を平壌祭典の理念とし、祭典の反帝的性格を明白にするようにした。そして、1988年10月12日、党中央委員会の責任幹部への談話『現代と青年の任務』を発表し、帝国主義者の妨害策動を粉砕し､平壌祭典がその理念を固守するよう導いた。

また､数度にわたって関係部門の活動家に会って、平壌祭典の反帝的性格を固守するための積極的な活動を繰り広げるよう具体的な指示を与えるとともに、祭典の行事が催される場所を見て回り、行事のすべての面に祭典の崇高な理念を具現すべきだと指摘した。

総書記は､平壌祭典を祭典史上最高のモデル祭典にするため精力

を傾けた。

そのために、祭典国家準備委員会を設置し、祭典の準備を全党的、全国家的、全人民的な事業として進めるようにした。また、祭典の準備で主体性を確立して祭典を徹底的に朝鮮式に行うとともに、開幕・閉幕セレモニーと「朝鮮の日」のイベントをはじめ、すべての行事を高水準の特色あるものにするよう導いた。

こうして、第13回世界青年学生祭典は1989年７月１日から８日にかけて平壌で盛大に催された。祭典には、180カ国の1245の青年・学生組織と64の国際機構及び地域機構の代表１万6000余人、90カ国、470余人の名誉ゲスト、数多くの国の観光団のメンバー、海外同胞が参加した。祭典には南朝鮮の「全国大学生代表者協議会」の代表も参加し、祭典を一層意義あるものにした。

総書記は主席とともに開幕・閉幕セレモニーに臨席し、５大陸の青年学生を励ました。

平壌祭典は、世界の青年学生と革命的人民の反帝闘争を新たな高揚へと導いた歴史的な祭典であり、朝鮮革命の国際連帯をさらに強める重要な契機となった。

金正日総書記の指導のもとに世界の自主化を実現するためのたたかいが強力に展開されることにより、反帝・自主勢力は一段と強化され、世界革命は自主の軌道に沿って力強く前進するようになった。

第６章　人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守するために
（1990年１月～1994年７月）

第１節　社会主義偉業を固守し前進させるための思想・理論活動を展開

1990年代の前半、金正日（キムジョンイル）総書記は、社会主義の偉業を固守し前進させるために精力的な思想・理論活動を展開した。

金正日総書記は次のように述べている。

「あらゆる敵との熾烈な闘争の中で社会主義を擁護し発展させるためには、時代と革命発展の要請に即応して労働者階級の革命思想と理論をさらに発展させ、完成しなければなりません」

1980年代末から1990年代初めにかけて、人民の自主偉業、社会主義の偉業は帝国主義者と反動勢力の悪辣な挑戦に直面した。一部の社会主義国は改革、改編の旋風を巻き起こして社会主義を急速に変質させ、資本主義復活の道を進んだ。そうして、ソ連と東欧諸国で社会主義が次々と崩壊し、資本主義が復活するという異常事態が発生し、これを奇貨として帝国主義者と反動勢力は社会主義の「終末」について喧伝し、社会主義の理念をこきおろした。

社会主義建設が深化するにつれて、従来の労働者階級の革命思想と理論、特に社会主義建設理論の制約性も一層顕在化した。

こうした情勢の要求を深く洞察した金正日総書記は、1990年５月

30日と12月27日に党中央委員会の責任幹部に行った演説『社会主義の思想的基礎に関する諸問題について』『わが国の社会主義はチュチェ思想を具現した朝鮮式の社会主義である』と、1991年５月５日の党中央委員会の責任幹部への談話『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』など多くの著作で、朝鮮式社会主義の本質的特徴と優越性、その不抜の威力の源泉を明らかにした。

総書記はまず、朝鮮の社会主義は偉大なチュチェ思想を思想的基礎としている独特な社会主義であることを論証した。

社会主義は労働者階級の革命思想に基づく社会であり、社会主義の発展はその基礎となる思想・理論の科学性、革命性、現実性によって保証される。朝鮮の社会主義は、最も科学的で革命的な労働者階級の革命思想、チュチェ思想に基づく独特な社会主義である。朝鮮の社会主義はチュチェ思想に基づいているがゆえに、帝国主義者と反動勢力のいかなる圧力や妨害にも動揺することなく、勝利の道を確信を持って前進している。

総書記は次に、朝鮮式社会主義の優越性を明らかにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「朝鮮式社会主義の根本的優越性は、人間中心の社会、すべてを人間を中心に考え、人間に奉仕させる社会だというところにあります。朝鮮式社会主義の優越性は、人間中心の思想であるチュチェ思想によって規定される優越性です」

総書記は、朝鮮の社会主義は人間本来の要求を最も立派に具現している優れた社会主義であることを明らかにした。自主性、創造性、意識性は社会的人間の本源的属性であり、集団主義は社会的集団の中でのみ自己の運命を切り開いていける社会的人間本来の要求で

ある。朝鮮式社会主義は、チュチェ思想によって明らかにされた、こうした社会的人間本来の要求を最も立派に具現している優れた社会主義である。

総書記は､朝鮮の社会主義は人民大衆に自主的で創造的な生活を真に保障する最も優れた社会制度であることを明らかにした。

政治生活と経済生活、思想・文化生活は社会生活の基本分野をなし､勤労人民大衆が社会生活のこれらの分野で自主的権利と創造的能力をどれほど高い水準で享受し発揮するかは､社会の進歩性と優越性を評価する重要な尺度となる。

チュチェ思想に基づく朝鮮の社会主義の優越性は､単に国家主権と生産手段の主人が人民大衆であるというところにのみあるのではなく、政治生活、経済生活、思想・文化生活の各分野で人民大衆に自主的で創造的な生活を実質的に保障するというところにある。まさにここに、資本主義的生活に比べた社会主義的生活の優越性、物質中心の世界観に基づいて建設した他国の社会主義に比べた朝鮮式社会主義の最大の優越性がある。

次に総書記は､朝鮮の社会主義の不抜性と永遠の生命力を明らかにした。

社会主義社会を前進させる主体は人民大衆であるが､人民大衆は党と領袖のまわりに一つに固く団結してこそ革命の自主的な主体としての役割を果たし､社会主義建設を成功裏に遂行することができる。社会主義制度が確立したからといって、全社会の一心団結がひとりでに実現するわけではない。人民大衆に正しい指導思想と科学的な戦略戦術を提示し、彼らを意識化、組織化する事業は労働者階級の卓越した領袖と党によってのみ遂行される。卓越した領袖と

洗練された党の指導を受けることによって、全人民が党と領袖のまわりに一つの思想、一つの意志で固く結束した領袖、党、大衆の一心団結が実現し、この一心団結は社会主義の不抜性の源泉、社会主義の永遠の生命力となる。

総書記は、1992年１月３日の党中央委員会の責任幹部への談話『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』で、一部の国で社会主義が挫折した原因とその教訓、社会主義建設で朝鮮労働党が堅持している総路線を全面的に明らかにした。

まず、一部の国で社会主義が挫折した原因を解明し、それから得られる教訓を詳細に分析した。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会主義を建設していた一部の国で社会主義が挫折した根本的な原因は、一言でいって、社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解していなかったために、社会主義建設における主体の強化と主体の役割の向上の問題を基本としてとらえることができなかったところにあります」

社会主義社会は人民大衆が主人となった社会であり、一つに統一団結した人民大衆の創造力によって発展する社会である。人民大衆が主人としての高い自覚と能力を持ち、同志として団結してたたかうところに、あらゆる搾取社会と区別される社会主義社会の本質があり、社会主義社会の発展を促す原動力がある。そのため、人間改造を優先させて革命の主体を強化し、大衆の革命的熱意と創造力を最大限に発揮させて主体の役割を強めることが、社会主義建設を成功裏に推進する根本的な方法となる。しかし、社会主義を建設していた一部の国の党はこの真理を正しく理解していなかったため、革

命の主体を強化しその役割を強めることをおろそかにした。まさにここに社会主義が挫折した根本的な原因がある。

総書記は、一部の国で社会主義が挫折した原因はまた、社会主義と資本主義の質的な差異に目を向けず、一貫して社会主義の根本原則を堅持しなかったところにあると指摘した。

人民大衆の自主的要求と利益を擁護し具現することは、社会主義建設において一貫して堅持すべき根本原則である。人民大衆の自主的要求と根本的利益に合わせて社会主義を建設するためには、労働者階級の党を組織的、思想的に強化し、革命と建設に対する党の指導を確固と保障し、社会主義政権の機能と役割を絶えず高めるとともに、社会主義的所有を固守し発展させ、帝国主義と断固たたかわなければならない。しかし、かつて社会主義を建設していた一部の国は、社会主義建設の途上に横たわる一時的な難関を前にして動揺し、帝国主義者の圧力に屈し、やがて革命的原則を譲歩し放棄するようになったため、結局は社会主義の挫折と資本主義の復活をもたらした。

総書記は、一部の国で社会主義が挫折した今一つの原因は、社会主義国の党同士の関係において、自主性に基づく国際連帯を強めなかったところにあると指摘した。

自主性に基づいて団結、協力し、国際連帯を強めながら自主性を堅持することが、社会主義国の党同士の関係において守るべき基本原則である。

総書記は、一部の国で社会主義が挫折した原因を全面的に分析したうえで、歴史的経験は、社会主義に対する確信と正しい指導思想を持って革命の主体を絶えず強化し、いかなる環境のもとでも社会

主義の原則を固守し、自主性に基づく同志的団結と協力を強めていく時、社会主義偉業は勝利の道を前進するが、そうしない時には紆余曲折と挫折を免れないことを示していると指摘した。そして、これは人類が社会主義へ進む過程で得た深刻な教訓であると述べた。

総書記は次に、社会主義建設に関する朝鮮労働党の総路線とその正当性を解明した。

総書記は、人民政権を強化し、その機能と役割を絶えず高め、思想、技術、文化の３大革命を徹底的に遂行することが、金日成（キムイルソン）主席が打ち出した社会主義建設の総路線であると定義づけた。

そして、社会主義建設の総路線は、チュチェ思想を具現して社会主義偉業を達成し、人民大衆の自主性を完全に実現する道を明らかにした科学的で革命的な路線であると指摘した。また、この路線は朝鮮の社会主義建設に立派に具現されており、その正当性と生命力は実践を通じて実証されていることを論証した。

総書記は、社会主義を誹謗中傷する敵のあらゆる詭弁の不当性と、それを粉砕して社会主義偉業をあくまで達成するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

1993年３月１日、総書記は、朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に『社会主義に対する誹謗は許されない』と題する談話を発表した。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会主義を『全体主義』『兵営式』『行政命令式』と非難するのは、途方もない詭弁である」

総書記は、社会主義を「全体主義」だと非難する敵の詭弁の不当性をあばいた。

全体主義はもともとファッショ独裁者の政治理念として奉仕したものである。ひところヒトラーやムッソリーニのようなファッショ独裁者は、欺瞞的な「国家社会主義」のスローガンを掲げ、民族全体または国家全体のためにはいかなる労働運動も階級闘争も容認してはならないとして、勤労人民大衆の基本的な民主的自由と権利まで抹殺し、前代未聞の野獣じみた暴圧的政治を実施した。

全体主義の反動的本質は、個人は全体に服従すべきだという美名のもとに、反動的支配階級の貪欲な利益のために勤労人民大衆の利益を犠牲にすることにある。敵が持ち出した全体主義の全体というのは勤労人民大衆全体ではなく、ごく少数の特権階層を意味した。にもかかわらず、人民大衆があらゆるものの主人となっている社会主義を「全体主義」だと非難するのは、つまるところ、人民大衆の要求を反映した最も進歩的な理念をファッショ支配層の反動的な理念と同一視する途方もない詭弁である。

総書記は、社会主義を「兵営式」だと非難する反動的詭弁の不当性をあばいた。

社会主義は人間本来の要求を反映した最も進歩的な思想であり、社会主義制度は人民大衆に自主的で創造的な生活を思う存分享受させる最も先進的な制度である。人民大衆の自主性、創造性、意識性を抑制するのは社会主義制度ではなく、勤労人民が資本の奴隷となっている資本主義制度なのである。したがって、社会主義を「兵営式」だと中傷するのは、白を黒と言う反社会主義者の悪宣伝である。

総書記は、社会主義を「行政命令式」だと非難する詭弁の不当性を明らかにした。

概して、行政命令式の管理方法は、搾取社会で特権階級の要求を強権をもって押し付ける古い支配方法である。社会主義社会では、国家と社会の主人となった人民大衆が管理においても主人の地位を占め、主人としての役割を果たしている。かつて社会主義を建設していた一部の国で現れた行政命令式管理方法は、社会主義社会の本性から生じたのではなく、搾取社会から受け継がれた遺物である。したがって、社会主義を「行政命令式」だと非難するのは、まったく理屈に合わない詭弁である。

この著作で総書記は次に、社会主義偉業を固守し、あくまで達成するうえで提起される重要な原則的問題を明らかにした。

総書記は、社会主義偉業を擁護しあくまで達成するためには、社会主義思想を絶えず発展させて完璧なものにし、それを人民大衆にしっかりと体得させ、彼らが社会主義を確固たる信念とするようにしなければならないと指摘した。

そして、社会主義偉業を固守し、絶えず輝かしていくためには、人々が社会主義を守ることを道徳的義務と見なすようにしなければならないと述べた。

また、社会主義偉業を擁護しあくまで達成するためには、労働者階級の党と国家が社会主義建設を立派に進めて、その優越性を強く発揮させることに力を集中させなければならないと強調し、社会主義社会の本質的な優越性を強く発揮させるための具体的な方途を示した。

次いで総書記は、社会主義を固守するためには、社会生活の各分野で集団主義の原則を具現しなければならないと指摘した。

社会主義を「全体主義」「兵営式」「行政命令式」だと誹謗中傷

するあらゆる反社会主義的悪宣伝は、結局、社会主義的集団主義を中傷し、ブルジョア個人主義を賛美するものである。それゆえ、社会生活の各分野で個人主義に反対し、集団主義の原則を具現することは、社会主義偉業を固守しあくまで達成するための重要な方途となる。

金正日総書記は1990年代前半の数年間の思想・理論活動を通じて、一時、胸の痛む失敗と挫折を経ていた社会主義運動を新しい思想的基礎の上で一日も早く立て直し、社会主義偉業を高揚へと導くことに大いに寄与した。

第２節　金日成主席の生誕80周年を朝鮮民族と人類共同の大政治祝典として輝かせるために

金正日総書記は、金日成主席の生誕80周年を大政治祝典として盛大に、意義深く慶祝するために心血を注いだ。

1992年は、主席の生誕80周年と総書記の生誕50周年に当たる年であった。この年を迎えて、主席の誕生日とともに総書記の誕生日も民族最大の祝日として盛大に祝おうとする朝鮮人民の熱望はいつにもまして高まった。

主席は、こうした人民の切々たる願いを汲み取り、1992年２月７日、総書記の誕生日である２月16日を民族最大の祝日として制定するという中央人民委員会の政令を裁可した。しかし、主席だけを永遠に高く仰ごうとする総書記がかたくなに差し止めたため、その政令は発表されず、それから３年後の1995年２月になってようやく公

布された。

主席は生誕50周年を迎える総書記に贈る頌詩『光明星（クァンミョンソン）賛歌』をつくり、贈り物を準備した。

主席から頌詩と贈り物を受け取った総書記は、今後、革命により一層忠実であることを心に誓った。そして、主席の厚い信頼と期待にこたえるため、主席だけを高く仰ぐ決意を新たにし、２月16日を機に計画されていた国家的な慶祝行事を取り止めさせ、ただ主席の生誕80周年を民族最大の祝日、人類共同の大慶事として盛大に祝うことに全力を集中するようにさせた。

総書記は、主席の生誕80周年を機にチュチェ思想の偉大さについての宣伝を積極的に行うよう導いた。

まず、勤労者の間でチュチェ思想の偉大さと生命力をより深く認識させるための宣伝活動を集中的に行うようにした。そして、首都平壌（ピョンヤン）で全国チュチェ思想討論会と各部門別の討論会を政治思想的及び科学理論的に高い水準で開催するようにした。また、主席の著作を全面的に収録した『金日成全集』（第２巻～第５巻）を発行するとともに、チュチェ思想の独創性と真理性、生命力を深く認識させるための学習や講演、出版・報道宣伝を集中的に行うようにした。

一方、総書記は、チュチェ思想の信奉者によって世界各地で開かれるチュチェ思想に関する国際討論会の準備を誠心誠意助けるよう導いた。そうして、インドのニューデリーでは「世界の自主と平和に関するチュチェ思想国際討論会」（２月８日～９日）が、日本の東京では「現代とチュチェ思想に関する国際討論会」（４月６日～８日）が盛大に開催され、50余カ国で討論会が開かれた。また、

チュチェ思想について解説した数多くの雑誌、ブレティンが出版、普及された。

総書記は、主席の革命活動史と革命業績を後世に伝え、解説、宣伝するための活動に力を傾けた。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志の生誕80周年を契機に、金日成同志の栄光に輝く革命活動史と不滅の業績を広く宣伝して、朝鮮人民の民族的誇りと自負を高める一方、世界各国の人民に金日成同志の偉大さをよく知らせるべきです」

主席の不滅の業績をとわに輝かせるため、総書記は、革命史跡に主席の銅像を建てるとともに、主席の現地指導事績碑や標識碑を建て、主席の親筆を刻んだり親筆命題碑を建てるようにした。

そうして、1992年４月15日（主席の誕生日）を迎えて降仙（カンソン）に主席の銅像が建てられ、革命事績館が開設された。また、金剛山（クムガンサン）と妙香山（ミョヒャンサン）に「金剛山　金日成」「妙香山は天下第一名山　金日成」といった主席の親筆が刻まれ、西海（ソヘ）閘門―信川（シンチョン）―康翎（カンリョン）―甕津（オンジン）水路の入り口には主席の親筆命題碑が建てられた。

総書記は、主席の偉大さと業績を収録した図書を大々的に編纂、発行するようにした。

そのために、主席が執筆した回顧録『世紀とともに』（第１部抗日革命編　第１巻、第２巻）とともに、『抗日革命闘士の手記』をはじめ革命伝統教育資料や革命活動史学習資料、徳性図書、部門別の指導史などを出版するようにした。

一方、樹木に記された革命的スローガンの学習、白頭山（ペクトゥサン）地区革命戦跡地をはじめ全国各地の革命戦跡と革命史跡の踏査、朝鮮革命

博物館をはじめ革命博物館と革命事績館の参観を通じた偉大性教育も強化するようにした。

総書記は、主席の生誕80周年を機に社会主義建設のすべての部門で新たな高揚を起こすよう導いた。

そのために、1991年10月12日の党中央委員会政治局会議で「全党員に送る手紙」を採択し、各級党組織がこの手紙についての討議を高い政治的熱意の中で行うようにした。

1992年１月１日の党中央委員会の責任幹部への談話では「金日成同志の生誕80周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えよう！」というスローガンを打ち出し、人民大衆の革命的熱意に依拠して生産と建設で一大高揚を起こすよう導いた。

総書記は、電力と石炭の生産を増やし、鉄道運輸を発展させることに全力を集中するようにさせた。そうして、４月の祝日（金日成主席の誕生日、４月15日）を機に東平壌（トンピョンヤン）火力発電所の１号ボイラーが稼動を開始し、石炭工業部門では数多くの坑道が新たに建設されて数百万トンの石炭を増産できるようになり、新興（シンフン）――赴戦（プジョン）湖畔、球場（クジャン）――香山（ヒャンサン）間の鉄道電化工事が完工した。

総書記は、主席の生誕80周年を機に数多くの大記念碑的建造物を建て、新しい工場、企業の操業を開始させるようにした。そうして、一つの都市に匹敵する統一（トンイル）通りの建設工事と首都の路面電車化工事（第１、第２段階）が完工して竣工式が行われ、平壌――開城（ケソン）間道路が開通し、愛国テレビ組み立て工場をはじめ数多くの工場、職場が操業を開始した。

総書記は、４・15贈り物製品の生産戦闘を成功裏に行うよう導いた。

総書記は、主席の生誕80周年を迎えて、主席の名義で全国のすべての託児所、幼稚園の子どもと児童・生徒・学生に新しい服を、すべての労働者、事務員には作業服を、農民には作業用防寒着と防寒靴を送ることを提案した。そのために、軽工業部門の生産潜在力を総動員するようにさせるとともに、贈り物製品の生産状況を仔細に確かめ、必要なあらゆる措置を講じた。

そうして、主席の生誕80周年を機に、主席の贈り物が全国のすべての子どもと児童・生徒・学生と勤労者に伝えられた。

1992年４月13日、人民の一致した志向と念願を反映して、朝鮮労働党中央委員会と党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は、金日成主席に朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を授与するという決定を採択、発表した。

総書記は、主席の生誕80周年に際して催されるすべての行事が最も意義深く、盛大に行われるよう細かな指示を与えた。

総書記の細かな関心と精力的な指導のもとに、金日成主席生誕80周年慶祝中央報告集会と祝賀公演、祝宴、大マスゲーム『金日成主席を戴くわが国』、祝賀夜会などすべての行事が盛況裏に行われた。

主席の生誕80周年慶祝行事は、７カ国の国家元首、23の政府代表団、60余人の党首、副党首を含む高位級党代表団をはじめ、130余カ国の420余の代表団の参加のもとに盛大に行われた。そして、世界各国の政界をはじめ各界の人士が主席に贈り物や祝電、祝賀の手紙を寄せた。世界各国から寄せられた祝旗と贈り物は1480余点に上った。

一方、首都平壌では50余カ国の80余の芸術団、代表団の参加のもとに、第10回４月の春親善芸術祭が盛大に行われた。

また、40余カ国で60余の祝賀準備委員会が組織され、多彩な行事が催された。多くの国で主席の尊名を各単位に冠する命名式や名誉称号授与式、祝賀集会、祝宴、記念講演会、映画鑑賞会などが行われた。百数十カ国で催された各種行事は2500回以上に上った。

総書記は、このたびの政治大祭典は、人民に偉大な領袖を戴いているという大きな栄光と喜びを与え、世界の革命的人民に社会主義の勝利の信念を抱かせた歴史的な出来事であったと指摘した。

金正日総書記は、主席の偉大さと革命業績を全面的に解明した。

主席の生誕80周年を慶祝した直後の1992年４月17日、総書記は、党中央委員会の責任幹部への談話『敬愛する領袖金日成同志の偉大な功績を輝かしていこう』を発表した。

この談話で総書記は、傑出した偉人としての品格を備えている主席の偉人としての姿と主席の功績を科学的に分析し、全面的に体系化した。

総書記は、主席は偉人としての品格と資質を最も崇高な高さで体現している傑出した偉人であると指摘した。

そして、主席は非凡な思想的・理論的英知を身につけた偉大な思想家・理論家であり、卓越した指導力を身につけている偉大な指導者であり、人民をこよなく愛する崇高な徳性を備えた人民の真の領袖であることを全面的に解き明かした。

総書記は、主席が人民のために積み上げた功績は、人民に自己の運命を立派に切り開いていく指導思想を与えたことであり、人民大衆の運命を責任を持って見守るチュチェ型の政治組織を築いたこ

とであり､人民の自由と幸せを守る真の人民の革命武力を建設したことであると指摘した。そして､朝鮮人民を自主性の強い革命的人民に育てたことであり､人民大衆中心の朝鮮式社会主義を建設したことであり､チュチェの革命偉業を代を継いで立派に継承､達成する保障をもたらしたことであると述べた。

そして､主席の功績を一つとしておろそかにせず全面的に継承していくのが党の確固たる意志であるとし､主席の革命業績を継承､発展させてチュチェの革命偉業を代を継いで立派に達成しなければならないと強調した。

第３節　党の指導的役割を強め､
全社会の一心団結を強化するために

1990年代の前半､金正日総書記は､党を組織的､思想的に強化し､その指導的機能と役割を強め､全社会の一心団結を強めるために心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命と建設の成否は､党をいかに強化し､党の指導的役割をいかに高めるかにかかっています」

金正日総書記は党を組織的､思想的に強化し､その指導的機能と役割をさらに強めるためにまず､党内活動に力を入れて､党の隊伍を組織的､思想的に強化することに深い関心を払った。

そのために､革命の指揮メンバーである幹部陣容を固めることに第一の関心を払い､各級党組織が幹部の選抜､配置を党の原則に基

づいて行うとともに、幹部の革命化を引き続き強力に推し進めるようにした。特に、すべての幹部が党と運命をともにし、党の思想と指導に忠実に従う真の革命家として自らを鍛えるよう導いた。

総書記は、党の隊伍全般を強化することに精力を傾けた。

そのために、すべての党員が信念と意志の化身である英雄李仁模（リインモ）のように党への忠誠心を変わることなく胸に秘め、率先して党の指導に従うようにする教育を絶えず深化させた。また、党員の党生活を強化し、彼らがみな高い党組織観念を持って党生活に自発的に誠実に参加するようにした。

総書記は発展する現実の要求に即して、党員と勤労者の間で党の革命思想で武装させる思想教育活動をより積極的に行うよう導いた。

そのために、党と領袖への忠誠心を信念化、良心化、道徳化、生活化することに重点を置き、党と領袖の偉大性教育、社会主義制度の優越性についての教育、朝鮮民族第一主義の教育、革命伝統教育、階級的教育を思想教育活動の基本としてとらえていくようにした。また、思想教育活動を対象の特性と水準に応じて行うとともに、講演、学習問答、出版物や放送による教育など、さまざまな形式と方法を合理的に組み合わせて行うようにした。特に、思想教育活動で反証資料を利用した対比教育を多く行い、党員と勤労者の間に見られる美挙を見習うための模範による感化教育を強化することに深い関心を払った。

総書記はまた、党の基層組織である党細胞を強化することに大きな力を傾けた。

そのために、党細胞を党と領袖に限りなく忠実な細胞にするため

の活動を積極的に推し進めるようにした。

1990年11月、党の指導に忠実に従うことを誓ったある党細胞の党員たちの手紙を受け取った総書記は、彼らに直筆の返書を送り、この細胞を忠誠の党細胞のモデルとして押し立て、この細胞を見習うための運動を繰り広げるよう導いた。

1991年５月、総書記は、党史に前例のない大きな規模で朝鮮労働党第１回細胞書記大会を開催するようにし、党細胞の機能と役割を強め、忠誠の党細胞づくりの転機を開いた。

総書記は、大会の参加者に送った書簡『党細胞を強化しよう』で「すべての党細胞を忠誠の細胞にしよう！」というスローガンを打ち出し、忠誠の党細胞づくりを党組織の中心的課題としてとらえ、党をあげてこの事業を強力に推し進めるようにした。そして、1994年３月末から４月初めにかけて朝鮮労働党第２回細胞書記大会を開き、党細胞の強化と忠誠の党細胞づくりで得た貴重な成果と経験を広く一般化させるようにした。この過程で数多くの忠誠の党細胞が生まれ、党の基層組織である党細胞が全面的により一層強化された。

総書記はまた、党活動で古い活動方法と作風を一掃することに深い注意を向けた。

特に、「人民に奉仕する！」というスローガンを示し、党活動家が人民の忠僕として大衆の中に深く入り、彼らと生死、苦楽をともにし、人民のために献身する気風を確立するよう導いた。

総書記は、1994年５月24日に党中央委員会の責任幹部への談話『革命発展の要請に即して幹部を徹底的に革命化するために』を発表し、党の意図を体して幹部を革命化する活動を偏向を犯すこ

となく引き続き推し進めるようにした。そうして、党活動家の活動方法と作風に転換がもたらされ、党の指導的権威が一段と高まり、党に対する大衆の信頼はますます厚くなった。

金正日総書記は、全社会の一心団結をさらに強めるために精力を傾けた。

1992年１月１日の党中央委員会の責任幹部への談話『党活動を強化して朝鮮式社会主義をさらに輝かそう』で、全社会の一心団結をさらに強めるための綱領的課題を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「『一心団結の威力によって朝鮮式社会主義をさらに輝かそう！』、これが現在わが党が示している戦闘的スローガンです」

この談話で総書記は、帝国主義者と反動勢力のあらゆる挑戦を退け、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守し輝かす最も強力な武器はほかならぬ一心団結であり、一心団結は朝鮮革命の生命であり、あくまでとらえていくべき旗じるしであるとし、党組織は全社会の一心団結をより一層強めることに党活動の中心を置き、これを絶えず深化させるべきであると強調した。

総書記は、すべての党員と勤労者が指導者に対する清らかな忠誠心を持つようにすることに主眼を置き、広範な大衆を党のまわりに結束するための活動を深化させるようにした。

大衆を党のまわりに結束するうえで、革命家の遺児と戦没者及び敵に虐殺された人の遺族、英雄、戦傷栄誉軍人、参戦老兵の役割を強めることに特に重要な意義を付与した総書記は、彼らが党と領袖を守り戴くうえで常に隊伍の旗手となるよう導いた。

そして、各級党組織が大衆との活動を党活動、対人活動の重要な

内容の一つとしてとらえ、革命家の遺児と戦没者、敵に虐殺された人の遺族が自分の階級的立場を忘れることなく、革命の先の世代のように生き、たたかうよう教育する一方、戦傷栄誉軍人と参戦老兵を大いに押し立て、彼らの活動と生活を見守るようにした。また、1992年10月には全国烈士遺族大会、1993年７月には全国老兵大会を開催し、彼らが党と領袖の指導に従ううえで中核的役割を果たすようにした。

総書記は、労働者、農民、知識人との活動を対象の特性に応じて深化させるようにし、特に、社会主義が挫折した多くの国の教訓を踏まえて知識人との活動を強化することに大きな力を傾けた。

1990年９月20日、党中央委員会の責任幹部に行った演説『革命と建設におけるインテリの役割をさらに高めよう』で、新たな情勢の要求に即して知識人との活動を強化する課題を提示し、それを実現するための活動を指導した。

総書記は、知識人の間で革命的領袖観を確立するための思想教育と組織生活を強化し、実践を通じて革命的に鍛えるための活動を不断に深化させるようにした。そして、1992年12月に朝鮮知識人大会を開催し、党と領袖のまわりに一心団結した知識人の誇らかな姿を全世界に示威し、すべての知識人が党と最後まで運命をともにする決意を固めるようにした。

総書記は、青年・学生を党のまわりに結束するよう導いた。

まず、青年を重視し、彼らを党と領袖に忠実な青年前衛として鍛えることに第一の関心を払った。

青年運動における金日成主席の業績を輝かせ、全社会に青年重視の気風を確立するため、総書記は199１年１月、主席が朝鮮共産

主義青年同盟を結成した日である８月28日を青年デーとして制定するようにした。

そして1991年８月26日、初の青年デーを迎える全国の青年と青年同盟の活動家に書簡を送り、「青年は党と領袖に限りなく忠実な青年前衛となろう！」というスローガンを提示した。また、青年がこのスローガンのもとにチュチェ思想を確固たる信念とし、いかなる環境のもとでも党と領袖を守り、党と領袖の指導に忠実に従い、党の路線と政策を貫徹する先鋒隊、突撃隊となるよう導いた。

総書記は1993年２月に社労青第８回大会を開催し、大会が党に限りなく忠実なチュチェの革命偉業の継承者の大会として盛大に行われるよう導いた。

総書記は、社労青組織が青年の間で党と領袖への忠実性を培う教育、革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育を引き続き強化するとともに、特に青年がブルジョア思想に染まらないよう深い関心を払うようにした。また、青年の間で組織生活を強化し、彼らが労働や国防などの実践を通じて自らをさらに革命的に鍛えていくようにした。

総書記は、党員と勤労者の間に社会と集団のためにすべてを捧げる気風を確立することにも深い関心を払った。

総書記の愛と信頼の政治により、党員と勤労者の間で人々の感動を呼ぶ行いが続出した。

総書記はこうした行いを広く紹介、宣伝するようにし、彼らに感謝と直筆の手紙を送った。そして、1993年12月に全国共産主義美風先駆者大会を開催し、この大会を機に人民の間に見られる美風を見習う運動を新たな高い段階に発展させるよう導いた。

こうして、全国が「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という集団主義の原則に基づく一つのむつまじい大家庭として固く団結し、全社会の一心団結がより一層強まった。

金正日総書記は、チュチェの党建設理論をさらに深化発展させた。

1990年代初めの数年の間にも、『朝鮮労働党は朝鮮人民のすべての勝利の組織者であり導き手である』『チュチェの党建設理論は労働者階級の党の建設において堅持すべき指導指針である』『革命的党建設の根本問題について』など多くの著作を発表し、チュチェの党建設理論を新たな高い段階へと深化発展させた。

総書記はこれらの著作で、従来の労働者階級の党建設理論の制約性とチュチェの党建設理論の独創性、正当性を科学的に解明した。

従来の労働者階級の党建設理論は唯物史観に基づいて展開されているので、党の思想建設の原則をはじめ多くの問題を十分に解明することができなかった。また、個々の国での党建設偉業が主に国際的中央によって指導されていた当時の時代的制約性のため、各国の共産主義者が自主的に党を建設する道を示すことができなかった。のみならず、実践的経験の不足と未熟性のため、政権党建設理論をはじめ党建設で提起される原則的な問題を全面的に解明することができなかった。

総書記は、従来の労働者階級の党建設理論の制約性を解明したうえで、金日成主席が示したチュチェの党建設理論はチュチェ思想に基づいて展開された最も科学的で革命的な党建設理論であり、相異なる革命段階と闘争条件における党のすべての活動経験が全面的に集大成されている党建設理論であることを論証した。

総書記はまた、チュチェの党建設理論の正当性と生命力は、党建

設の歴史的経験と党の指導のもとにもたらされた朝鮮革命の輝かしい勝利と成果によって全面的に証明されており、国際共産主義運動の教訓によっても証明されていると指摘した。

総書記は、党の指導は社会主義偉業の生命線であるという貴い真理を解明した。

総書記は、党の指導が社会主義偉業の生命線であるのは、それが社会主義偉業の主体を強化しその役割を強める決定的保証であり、正しい闘争戦略と戦術に基づいて社会主義偉業を前進させる根本条件であり、社会主義偉業遂行の全過程で革命的原則を一貫して堅持し具現するための必須の要求であるからであると指摘した。

総書記は、労働者階級の党を時代の要求にかなった真のチュチェの革命的党として建設するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

チュチェ思想を指針として党建設と党活動を進めることについて強調し、党を勤労人民の大衆的な党として建設すること、党内で思想と指導の唯一性を確保すること、党の統一団結を強化すること、思想を基本に党を強固にすること、全社会の思想の一色化を実現すること、全社会に対する政治的指導をしっかりと実現すること、革命的大衆路線を具現することをチュチェの革命的党建設における重要な原則的問題として提起した。そして、労働者階級の党はその発展において継承性を確実に保障しなければならないと指摘した。

金正日総書記の指導のもとに、党を強化し、その指導的役割を強め、全社会の一心団結を強めるためのたたかいが力強く繰り広げられることにより、革命の主体がより一層強固になり、労働者階級の党建設偉業と社会主義偉業は新たな発展の道に入ることになった。

第４節　人民軍の強化と軍事重視の社会的気風の確立、革命武力建設偉業の輝かしい継承

金正日総書記は、人民軍軍人と全人民の一致した願いにより革命武力の首位に推戴された。

総書記を革命武力の首位に推戴することは、久しい以前からの人民軍軍人と人民の一致した意思であり願いであった。総書記の軍事的資質と品格に魅せられ、その建軍業績に感服した人民軍将兵と人民は、総書記を「傑出した軍事の英才」「卓越した軍事戦略家」「鋼鉄の総帥」としてたたえていた。

革命武力建設における輝かしい業績により、総書記は、すでに1980年10月の朝鮮労働党第６回大会で党中央軍事委員会委員に、1990年５月の最高人民会議第９期第１回会議で朝鮮民主主義人民共和国国防委員会第１副委員長に選出されていた。それ以来、革命武力と国防力を強化する事業には新たな転換がもたらされていた。しかし、1990年代初めの情勢は革命武力を政治的、軍事的にさらに強化することを切実に求めていた。

1991年12月24日、党中央委員会第６期第19回総会が招集された。

金日成主席はこの総会で、金正日総書記を朝鮮人民軍最高司令官に任命することを提議した。会議の参加者は、万雷の拍手と万歳の喊声をもって賛同の意を表した。

総書記は、党と国家、革命武力の建設を導く過程で成し遂げた業績により、1992年４月20日に朝鮮民主主義人民共和国元帥の称号を

授与され、1993年４月９日には最高人民会議第９期第５回会議で朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に選出された。

これは、革命武力の強化発展と国防力強化のための事業をより高い段階で強力に推進できるようにした重大な政治的出来事であった。

金正日総書記は、人民軍を強化し、軍事を重視する社会的気風を確立するために心血を注いだ。

1992年２月４日の党中央委員会の責任幹部への談話『人民軍を強化し、軍事重視の社会的気風を確立するために』をはじめ多くの機会に、国防力を強化するための課題と方途を示し、それを実現するために力を尽くした。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力としてさらに強化するため、全軍に革命的軍紀を確立することに第一の関心を払った。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民軍では最高司令官の命令、指示を無条件に実行する革命的軍紀を確立することが大切です」

以前から全軍に革命的軍紀を確立することに深い関心を払っていた総書記は、最高司令官の重責を担った後、革命武力建設の新たな発展段階の要求に即して、全軍に革命的軍紀を確立することを第一の課題として提起し、これを強力に推進した。

まず、人民軍の指揮メンバーが軍紀確立に関する党の意図を深く認識し、その先頭に立つよう導いた。1993年10月に人民軍の主要指揮メンバーに軍紀確立の重要性を強調し、革命的軍紀確立の本質的内容について述べた。

総書記は、革命的軍紀を確立するうえで何よりも重要なのは人民軍内に確固たる命令指揮系統を構築することであるとし、その基本

は全軍が最高司令官の命令一下、一糸乱れず行動するようにすることであると指摘した。

総書記は、人民軍内に革命的軍紀をより一層確立するため、1993年12月に全軍に革命的軍紀を確立するための対策を立て、翌年の１月末にはその間、多くの成果を収めたことに満足の意を表し、人民軍はただ最高司令官に忠実であり、最高司令官の命令を絶対、無条件に実行する原則を守ることを鉄則とすべきであると指摘した。

こうして、人民軍内には最高司令官の命令を無条件に受け止め、あくまで実行する革命的軍紀が確立された。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力としてさらに強化するため、人民軍の幹部陣容をしっかりと固め、その政治的・実務的水準を一段と高めることに大きな力を傾けた。

まず、人民軍の幹部陣容全般を戦争に対処する観点に立ってさらに固めるようにした。そのために、人民軍の幹部として、党と領袖に対する忠誠心を信念化、良心化、道徳化、生活化した真の革命家、現代戦の種々複雑な状況を的確に処理できる若くて有能な人を選抜して、人民軍の幹部陣容全般を固めるようにした。

総書記はまた、人民軍の指揮メンバーの党性を鍛え、軍事的資質を高めるための活動を引き続き力強く推し進めるよう導いた。この活動で総書記が最も大きな意義を付与したのは、人民軍指揮官のための党の講習であった。

総書記は、1970年代の末から行われており、実生活を通じてその優れた点が証明された人民軍指揮官のための党の講習を、彼らの党性鍛錬に重点を置き、部隊の指揮・管理能力を高める方向で着実に行うようにした。

また、党の講習とともに、指揮官の軍事的資質と部隊の指揮・管理水準を高めるための軍事講習会や戦争経験研究討論会、戦術研究討論会などをしばしば催すようにした。そして、1990年代前半の数年の間にも、全軍的な中隊長大会や中隊政治指導員大会、指揮官・政治幹部大会などを開催し、優秀な指揮官の活動経験を適時に全軍に一般化させるようにした。

総書記はまた、軍事教育の質を一段と高めることにも深い関心を払った。

人民軍の中核を育成する各級軍事学校の教育内容と方法を発展する現実の要求に即して絶えず改善するとともに、軍事教育事業の直接の担当者である教員の責任感と役割を強めるようにした。特に、1992年10月には各級軍事学校の教員大会を開催し、軍事教育事業で得た成果と経験を適時に広く一般化できるようにした。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力としてさらに強化するため、軍人に対する政治・思想教育を強化するようにした。すべての軍人が領袖の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊としての本分を果たすことができるように、軍人に対するチュチェ思想教育をさらに強化する一方、敵の反社会主義的策動、特に思想的・文化的浸透策動が日増しに悪辣になっている実情に即して、人民軍内で社会主義の信念教育を積極的に行うようにした。

総書記はまた、思想教育の形式と方法を絶えず改善するよう導いた。人民軍内の思想教育では、軍人の特性に応じて口頭宣伝、直観宣伝、芸能宣伝などを効果的に組み合わせて行い、特に文学・芸術作品と出版・報道手段による教育に大きな力を入れるようにした。そして、すべての教育活動を軍隊にふさわしく簡便で機動的かつ戦

闘的に行い、90年代最初の英雄である金光哲（キムグァンチョル）と８兄弟軍官（将校）をはじめ軍人の典型を見習うための模範による感化教育を積極的に行うようにした。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力としてさらに強化するため、軍人の間で政治活動と戦闘訓練を強化するようにした。

まず、チュチェの訓練観に関する思想を示し、新しい訓練の原則を規定した。チュチェの訓練観は、革命武力の主人であり革命戦争の直接の担当者である軍人大衆を中心に据えて訓練に対する観点と態度である。

チュチェの訓練観を確立するということは、訓練を革命戦争勝利の重要な保証と見なし、訓練に一意専心するのを軍人の真の生きがいとすることを意味する。総書記は、政治活動と戦闘訓練において具現すべき主体性、政治・思想性、戦闘性、科学性の４大原則を打ち出した。

総書記は、チュチェの訓練観に基づいて政治活動と戦闘訓練を着実に行うよう導いた。軍人の間で「訓練も戦闘だ！」というスローガンを引き続き高く掲げ、チュチェの訓練観を確立するためのたたかいを力強く推し進めることによって、全軍に毎日、毎週訓練綱領を間違いなく遂行する革命的訓練気風を確立するようにした。また、５大訓練方針の要求に即して、すべての軍人がチュチェの戦法を体得し、百発百中の射撃術、屈強な体力と鉄の規律を身につけることに主眼を置いて戦闘訓練を行い、訓練を実戦の雰囲気の中で着実に行うようにした。

特に、訓練を直接組織し指導する教官の責任感と役割を強めるため、教官の講習会や会議も大きな規模で行うようにした。また、1994

年の飛行隊の総出動訓練をはじめ全軍的意義を有する大規模の訓練を何度も組織し、訓練の全過程を細かに指導した。こうして、政治活動と戦闘訓練の質が一段と高まり、その過程ですべての将兵が「一当百」のつわものとしてさらに鍛えられた。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力としてさらに強化するため、中隊を強化することに引き続き大きな力を傾けた。

人民軍の基本戦闘単位であり全軍強化の鍵となる中隊を政治的、思想的に打ち固め、中隊の戦闘準備を現代戦の要求に即して完了することは、総書記が軍隊の指導を始めた当初から非常に重視してきた問題であった。

1990年代に入ってからもこの問題に深い関心を払っていた総書記は、1991年を人民軍中隊の強化において新たな転換の年にすることにし、全軍的な中隊長大会と中隊政治指導員大会、士官長大会を開催するようにした。

こうして、同年10月中旬には朝鮮人民軍士官長大会が、11月中旬には朝鮮人民軍中隊長大会が、そして12月下旬には朝鮮人民軍中隊政治指導員大会が平壌で開催された。

総書記は人民軍をさらに強化するため、全軍近代化の方針をより高い水準で実現するよう導いた。

武力装備の近代化をさらに促進するため、総書記は、国防科学の研究と軍需工業の発展に優先的な力を注ぐとともに、軍需工業部門の労働者と人民軍軍人が集団的技術革新運動を力強く繰り広げるようにした。

また、軍事陣地の近代化をより高い水準で実現するため、既存の陣地を現代戦の要求に即してより堅固に、かつ近代的に築く一方、

新しい界線の防御工事を適時に立派に完了するよう全軍を奮起させた。こうして、人民軍の戦闘準備をさらに整え、全国土の要塞化を新たな高い段階に引き上げることができるようになった。

総書記の指導により、人民軍は最高司令官に限りなく忠実な強兵となった。革命武力の不抜の威容は、金正日総書記を最高司令官に戴いて初めて行われた朝鮮人民軍創建60周年慶祝閲兵式と祖国解放戦争（朝鮮戦争）勝利40周年慶祝閲兵式で余すところなく誇示された。

総書記は、軍事を重視する社会的気風を確立するよう導いた。

人民軍を愛し積極的に支援することを確たる社会的気風にするため、軍隊を愛し助けた行いを新聞や放送、出版物を通じて広く紹介、宣伝するとともに、人民軍支援活動で模範を示した幹部と勤労者を全国共産主義美風先駆者大会に参加させ、彼らの模範を広く一般化させるようにした。

総書記は、軍民一致の伝統的美風を発揚するための新たな大衆運動を発案し、それを深化させるよう導いた。こうして、人民軍を肉親のように愛し大事にし、積極的に助ける社会的気風がいつにもまして高く発揮されるようになった。

総書記は、除隊軍人、戦傷栄誉軍人との活動に深い関心を払うよう導いた。

そのために、除隊軍人、特に除隊軍官を社会的に大いに押し立て、住宅をはじめ生活条件を適時に、十分に整えるようにした。

また、戦傷栄誉軍人を愛し尊敬し、生活上些細な不便や困難も感じないように積極的に助けるようにした。そして、戦傷栄誉軍人のつれあいとなって彼らのために尽くしている人たちを重要な国家

行事に参加させて高く評価し、彼らの行いを広く紹介、宣伝するようにした。こうして、戦傷栄誉軍人を愛し尊敬し助けることが社会の気高い道徳的気風となり、戦傷栄誉軍人や参戦老兵の息子、娘となり革命同志となって彼らの活動と生活を見守る青年や、愛する息子、娘を戦傷栄誉軍人と結婚させる幹部と勤労者が増えていった。

総書記は、人民軍留守家族を社会的に大いに押し立て、彼らの模範を広く紹介、宣伝するようにした。また、人民軍創建記念日をはじめ重要な記念日に幹部が祖国防衛模範家庭、軍人家庭を訪ねて励まし、生活上の問題を責任をもって解決するようにした。

こうして、青年の間に祖国の防衛を最も栄誉ある神聖な義務と見なす観点が確立し、人民は息子、娘を祖国防衛の前哨に立たせることを最も崇高な愛国と見なすようになった。

金正日総書記を革命武力の首位に戴くことによって、人民軍は党と領袖に限りなく忠実な無敵必勝の強兵となり、全社会に軍事を重視する気風が確立し、国防力はさらに強化された。

第５節　社会主義経済・文化建設を推進するために

金正日総書記は、社会主義経済建設を強力に推進することを朝鮮式社会主義をさらに輝かせるための重要な課題として提示し、これに大きな力を傾けた。

1990年代に至り、朝鮮の社会主義経済建設は大きな難関にぶつかった。

社会主義市場の崩壊により社会主義諸国と結んでいた長期・短期

貿易協定はほとんど履行されなくなり、それまで行われていた経済協力も不振状態に陥り、それは朝鮮の社会主義経済建設に少なからず悪影響を及ぼした。一方、アメリカとその追随勢力は、多くの国における社会主義の崩壊を奇貨に朝鮮を孤立させ圧殺しようと政治・軍事圧力を加えるとともに、経済封鎖策動をいつにもまして強化した。

こうした国際的環境と経済的難関に対処して、金日成主席は1990年の新年の辞と同年１月の党中央委員会第６期第17回総会で、いかなる環境のもとでも自分の力で生きていけるように国の経済的自立性をさらに強める方向で経済構造を完備するための措置を講じ、社会主義建設で今一度新たな革命的大高揚を起こすよう呼びかけた。

総書記は主席の意を体して、全党、全軍、全人民を党中央委員会第６期第17回総会の決定を貫徹するためのたたかいに立ち上がらせた。

1990年１月、各級党組織が主席の新年の辞と党中央委員会第６期第17回総会の決定を貫徹するための討議を行うようにした。また、あらゆる宣伝・鼓舞力量と手段を総動員して全国に新たな革命的大高揚の炎を燃え上がらせるための思想活動を行うようにした。

総書記は、1990年代の新たな革命的大高揚を起こすために、全国的な人民経済部門別会議を意義深く開くようにした。

1990年２月末には全国生産革新者大会を、３月には機械工業部門と金属工業部門の熱誠者会議を開催し、これを機に人民経済の各部門で「90年代の速度」創造運動を力強く繰り広げ、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮して社会主義建設のすべての部門で新たな

高揚を起こすようにした。そして、同年４月には全国青年熱誠者大会を開催し、青年を90年代の社会主義大進軍に立ち上がらせた。

総書記は、人民生活の向上を1990年代初めの社会主義経済建設の中心的課題として打ち出し、その実現のために心血を注いだ。

1990年１月１日の党中央委員会及び政務院の責任幹部への談話『党活動と社会主義建設に転換をもたらし、1990年代を輝かそう』で、人民生活を一段と向上させることを社会主義経済建設の中心的課題として提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「今日、経済活動において力を入れるべき最も重要な問題は、人民生活を速やかに向上させることです」

1990年代の経済建設構想に基づき、総書記は、既存の自立的重工業の土台が効果を発揮できるようにすることに引き続き力を入れるとともに、軽工業と農業、住宅建設に主力を傾注するようにした。

総書記は、軽工業を引き続き発展させるための対策を講じた。

まず、重工業部門の工場、企業の建設を一部調整し、軽工業部門への投資を増やすようにした。そして、既存の工場、企業の生産を正常化し、新しい近代技術を積極的に取り入れて、人民生活に切実に必要な各種の製品をより多く生産するようにした。

軽工業の発展に画期的な転換の契機をもたらすため、総書記は、1990年６月に全国軽工業大会を開催し、大会の参加者に『軽工業革命を立派に遂行するために』と題する書簡を送った。

この書簡で総書記は、軽工業の発展に転換をもたらすためのたたかいの本質と意義を明らかにし、それを遂行するための基本課題と方途、党組織の任務など、軽工業発展に関する党の方針を貫徹する

うえでの理論的・実践的問題を明示した。

その後も、総書記は軽工業の発展に深い関心を払った。

1992年４月４日、主席の生誕80周年に際して生産された軽工業製品を見た際の経済部門の責任幹部への談話『軽工業を発展させ、経済管理研究事業に力を注ぐために』で、軽工業部門が収めた成果を高く評価し、食品加工業をはじめ軽工業の発展に引き続き大きな力を入れるべきだと指摘した。特に、1992年５月、党中央委員会の指示書「全党、全国、全人民が総がかりで党の軽工業革命方針を貫徹するために」を下達し、軽工業部門に党の指導グループを派遣して軽工業の発展を促すようにした。

総書記は農業の発展に大きな力を入れた。

総書記は、水の問題を解決することを農業部門の最も重要な課題の一つとして提起し、1990年代に入って、西海閘門――温泉（オンチョン）第２段階水路工事、西海閘門――信川――康翎――甕津水路工事、南江（ナムガン）――ミル原水路工事、礼成江（レソン）――延白（ヨンベク）原水路工事をはじめ、膨大な労力と資材、資金を要する西海岸一帯の数百里に及ぶ水路工事を全党、全軍、全人民が総がかりで短期間に完了するようにした。そうして、穀倉地帯の田畑に水を十分に送る灌漑システムがさらに整った。

1990年３月の末、総書記は江東（カンドン）郡烽火（ポンファ）里に降雨式畑地灌漑のモデルをつくり、全国のすべての協同農場に一般化させるようにした。

総書記は、農業の機械化、化学化の水準をさらに高め、地力を高めるための事業を大衆あげての運動として力強く繰り広げ、農業をチュチェ農法の要求どおりに科学的、技術的に営むことによって、不利な自然・気候条件を克服し、毎年多くの穀物を収穫できるよう

にした。

総書記は、より多くの住宅を建設し、日ごとに高まる人民の要求に即して都市運営事業を改善するよう導いた。

首都の住民の住宅問題を解決するため、主席の生誕80周年までに平壌市に５万世帯の住宅を建設するという課題を提示し、それに必要な設備や資材、労力を適時に提供し、全党、全国、全人民が平壌市の住宅建設を積極的に支援するようにした。こうして、主席の生誕80周年を迎えて一つの都市に匹敵する統一通りが建設され、首都の各地に住宅が建てられ新宅への引っ越しが行われた。

総書記は、平壌市だけでなく、すべての道がそれぞれの実情に応じて都市と農村に多くの住宅を建設して、増大する住宅の需要を充足させるようにした。

都市運営事業を改善することに深い関心を払った総書記は1992年９月、全国都市運営部門活動家講習会を開催し、講習会の参加者に『発展する現実の要請に即して都市運営事業をさらに改善しよう』と題する書簡を送った。

総書記は書簡で、社会主義社会における都市運営事業は、人民に自主的で創造的な生活を円滑に保障する奉仕事業であり、国の貴重な財貨をしっかりと保護、管理し、次の世代に譲り渡す有意義な事業であるとし、発展する現実の要請に即して都市運営事業をさらに改善するための課題と方途を具体的に示した。

書簡で提示された課題を実行するため、総書記は、集団的な都市運営システムを確立する一方、都市運営部門従事者の陣容を固め、彼らの責任感と役割を強め、都市運営部門の技術者養成事業を強化し、都市運営事業に対する監督、統制を強めるようにした。また、

都市運営部門の勤労者を社会的に大いに押し立てるようにした。

総書記は、革命的経済戦略を貫徹するためのたたかいを力強く繰り広げるよう導いた。

金日成主席は1993年12月の党中央委員会第６期第21回総会で、今後３年間を調整期とし、この期間に経済建設で農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義の方針を貫徹して人民生活を一段と向上させるという、革命的経済戦略を打ち出した。

総書記は1994年３月１日の党中央委員会の責任幹部への談話『党の革命的経済戦略を貫徹しよう』で、革命的経済戦略の本質と要求、その遂行方途を明示し、それを実現するための組織・政治活動を強力に展開するようにした。総書記は、各級党組織と幹部が大衆の中に深く入って、党の革命的経済戦略とそれを打ち出した党の意図を分かりやすく解説し、それを貫徹するうえで絶対性、無条件性の革命的気風、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮させるための宣伝・鼓舞活動を繰り広げ、綿密な仕事の手配を裏打ちするようにした。

こうして、調整期の初年である1994年に農業と軽工業、対外貿易部門で大きな成果を収め、人民経済の先行部門でも生産的高揚が起こった。

総書記は、チュチェの社会主義経済管理理論を全一的に体系化し、それを立派に具現するようにした。

1991年７月１日、創立45周年を迎える人民経済大学の教職員、学生に送った書簡『チュチェの社会主義経済管理理論で武装しよう』で、社会主義経済管理の基本原理と原則、社会主義経済管理システムの本質的特徴と優越性、その具現方途、社会主義経済管理

の基本方法を全一的に体系化し、科学的に解明した。

総書記は、チュチェの経済管理理論を経済管理実践に立派に具現させることに深い関心を払った。

経済幹部をチュチェの経済管理理論で武装させることに第一の関心を払い、経済管理の中堅幹部を育成する人民経済大学の教育活動をさらに強化する一方、チュチェの社会主義経済管理システムを擁護、貫徹するための研究と宣伝活動を強化し、チュチェの経済管理理論に反するあらゆる要素を徹底的に克服するようにした。

また、1990年９月に全国財政・銀行部門活動家大会を、1993年９月には全国資材供給部門活動家大会と全国価格部門活動家大会を開催し、チュチェの経済管理理論を具現する過程で得た貴重な成果と経験を一般化させるようにした。

金正日総書記は、社会主義文化建設を促進するために心血を注いだ。

総書記は、科学技術をさらに発展させるための事業に大きな力を入れた。

金正日総書記は次のように述べている。

「科学技術を発展させることが、現段階においては社会主義偉業を固守し、人民大衆中心の朝鮮式社会主義をさらに輝かせるうえで切実な問題となっています」

1991年10月、総書記は全国科学者大会を開催し、大会の参加者に『科学技術の発展に新たな転換をもたらそう』と題する書簡を送った。

総書記は書簡で、国の科学技術を近い将来に世界の先進レベルにまで引き上げようというのが党の確固たる決心であるとし、科学技

術を発展させるための展望目標と当面の課題､その遂行方途を明示した。

国の科学技術を発展させるため、総書記は、1991年から新しい科学技術発展３カ年計画を遂行するために奮闘するようにし､この期間に重要な科学技術部門を新たな高い段階に発展させ､最新の科学技術による人民経済の近代化を極力推進することを中心的課題としてとらえていくようにした。そして、科学研究部門に対する国家の投資を増やし、研究条件をよく整え、科学研究活動に対する党の指導を強化するための措置を講じるとともに､科学研究活動に大きな功労のあった科学者を押し立て､彼らを社会的に尊敬し優待する気風を確立することによって、科学者、技術者が国の科学技術を発展させるうえで自己の責任と役割を果たすようにした。

総書記は､チュチェの文学･芸術を発展させることに引き続き大きな力を入れるよう導いた。

総書記は､文学･芸術革命とその成果を強化発展させる過程で得た成果と経験に基づき､チュチェの文芸理論を全面的に深化発展させた。1990年代初めの１、２年の間にも、『舞踊芸術論』（1990・11・30）、『音楽芸術論』（1991・７・17）、『美術論』（1991・10・16）、『チュチェの文学論』（1992・１・20）を発表し、チュチェの文芸理論を映画と歌劇､演劇だけでなく､舞踊や建築芸術、音楽、美術、文学など、文学・芸術のすべての分野を包括する完璧な文芸理論にした。

総書記は、文学・芸術作品の創作で新たな革新を起こすよう導いた。

1991年５月23日、歌謡『平壌が一番だ』をもってシリーズ劇映画

をつくるよう指示し、その制作を精力的に指導して、わずか１年の間に『民族と運命』(第１部～第７部) をつくりあげるようにした。そして、制作を開始して１年になる1992年５月23日、文学・芸術部門の幹部及び創作家、芸術家への談話『シリーズ劇映画「民族と運命」の創作成果を踏まえて、文学・芸術建設に新たな転換をもたらそう』を発表した。

この談話で総書記は、シリーズ劇映画『民族と運命』が収めた思想的・芸術的成果とその大きな認識的・教育的意義を高く評価し、その成果を踏まえて映画の続編を引き続き高い水準で創作し、映画芸術、文学、舞台芸術、美術など文学・芸術のすべての分野に新たな転換をもたらすという課題を提示した。

こうして、映画芸術部門では1990年代前半にシリーズ劇映画『民族と運命』（第１部～第30部）が朝鮮映画の顔として創作され、劇映画『若い参謀長』『母は狩人だった』『ありがたい乙女』など現実を主題とした作品が数多く創作された。

総書記は、音楽芸術の主体的な発展にも深い関心を払った。

1990年２月25日の音楽芸術部門の責任幹部への談話『人民に愛唱される革命的な音楽作品を創作しよう』、1990年６月21日のポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルの芸術家の独唱会に参加した幹部、創作家への談話『ポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルの芸術家の芸術的技量を見習うことについて』、1993年11月13日の党中央委員会の責任幹部への談話『民族音楽を現代的美感に合わせて発展させるために』をはじめ多くの機会に、音楽芸術を主体的に発展させるための課題と方途を明示し、それを実現させるために精力を傾けた。

そうして、1990年代前半に歌謡『平壌が一番だ』をはじめ多くの時代の名曲が創作、普及され、民謡をはじめとする民族音楽遺産が大々的に発掘、普及された。また、革命の各年代に創作され、人民の間で広く歌われた時代の名曲を現代的美感に合わせて新たに編曲して種々の音楽形式にし、それを普及させる活動が活発に繰り広げられることにより、民族音楽を発展させるうえで大きな成果がもたらされた。

総書記の指導により、1990年代前半に文学・芸術は、映画と音楽芸術だけでなく、文学、舞踊、美術、サーカス芸術、建築芸術などすべての分野にわたって新たな発展を遂げ、それは、日ごとに高まる人民の文化的需要を充足し、朝鮮の社会主義の思想的・文化的陣地を堅固にするうえで大きな役割を果たした。

総書記は、民族文化遺産を正しく継承し発展させることにも大きな力を注いだ。

勤労者を朝鮮民族第一主義の精神で武装させるうえで民族文化遺産の正しい継承、発展が持つ意義を深く洞察した総書記は、朝鮮民族の悠久の歴史を示す遺跡・遺物を大切にし、それをきちんと保存、管理し、民族の誇りに満ちた歴史と英知に富む伝統を輝かせるよう導いた。

1993年にも数度にわたって、朝鮮民族の始祖王である檀君（タングン）についての研究を深化させるよう強調し、檀君が神話中の人物ではなく、実在した歴史的人物であることが実証され、主席が檀君陵の改修を指示した後は、その指示を実行するための事業全般を掌握し、陣頭指揮を取った。

そうして、檀君陵は民族の始祖王の陵にふさわしく改修され、は

なはだしく歪曲、抹殺されていた民族の悠久の歴史を取り戻し、輝かしい文化と愛国の伝統を代を継いで輝かせていくことができるようになった。

総書記は、人民保健医療事業を改善することにも深い関心を払った。

1992年７月22日の保健医療部門の責任幹部への談話『人民保健医療事業の改善で提起される若干の問題』で、朝鮮の社会主義保健医療制度の優越性をさらに強く発揮させることに主眼を置いて人民保健医療事業を発展させ、予防医療活動に新たな転換をもたらさなければならないと述べ、それを実現させるために力を注いだ。

まず、党の予防医療方針を貫徹するため、衛生防疫活動を大衆的運動として繰り広げるとともに、女性と子どもの健康管理に深い関心を払い、さまざまな病気にかからないように予防医療対策に万全を期するようにした。そして、歯科医療部門を発展させ、癌性疾患の予防医療に大きな力を注ぐとともに、全国各地にある鉱泉や温泉、鉱泥土などの天然手段を医療に活用する対策を立て、人民がそれをいつでも利用できるようにした。

また、医科学技術を速やかに発展させるため、世界の医学発展趨勢をよく知り、先進技術を取り入れて一般化させ、保健医療部門が専門科を速やかに発展させるようにした。

こうして、国の経済状況が困難であったにもかかわらず、人民保健医療事業は人民の健康増進に大きく寄与した。

第６節　アメリカ帝国主義の核査察騒動を粉砕し、国の自主権と朝鮮式社会主義を守るために

1990年代に入って、朝鮮を孤立させ圧殺しようとするアメリカの策動は極に達した。

金正日総書記は次のように述べている。

「昨年、アメリカ帝国主義者は社会主義のとりでであるわが国を孤立させ圧殺するため、核査察問題を口実に『チーム・スピリット』合同軍事演習を繰り広げ、反社会主義・反共和国策動をかつてなく強化しました。そのため、わが国にはいつ戦争が起こるか分からない一触即発の危機が生じ、わが党と人民は社会主義を守るか否かという厳しい情勢に直面することになりました」

旧ソ連及び東欧諸国における社会主義の挫折と資本主義の復活を奇貨として、アメリカは朝鮮を孤立させ圧殺するための攻勢をいつにもまして強めた。アメリカはありもしない核開発疑惑問題、核査察問題を執拗に持ち出し、それを朝鮮を国際的に孤立させる手段として利用しようとした。

朝鮮は、南朝鮮からアメリカの核兵器を撤去させ、朝鮮に対するアメリカの核の脅威を取り除き、朝鮮半島を非核地帯にする目的で、すでに1985年12月に核拡散防止条約に加盟していた。しかし、アメリカは核保有国は非核保有国を核兵器で威嚇してはならないという条約上の義務を履行せず、朝鮮に対する一方的な核査察圧力騒動

を狂乱的に繰り広げた。

金正日総書記は、アメリカ帝国主義の不当な核兵器開発疑惑騒動を粉砕するためのたたかいを賢明に導いた。

1991年５月中旬、党中央委員会の関係部門の責任幹部に、ソ米間の和解が成立した後も、アメリカが南朝鮮に1000余の核兵器を配備している目的とその危険性、そしてそれを正当化するためにありもしない朝鮮の核開発能力について云々し、核査察問題を執拗に持ち出してくる魂胆を余すところなく暴露すべきであると述べた。

総書記の指示に基づき、同年６月10日、朝鮮半島の核問題発生の根源とそれが解決されない理由、核問題に関する立場を明らかにした朝鮮の各政党・団体の連合声明が新聞や通信、放送を通じて一斉に報道された。

連合声明は発表されるやいなや、世界中で支持を受けた。連合声明の発表後１カ月足らずの間に、90余カ国の数多くの政党、社会団体と個々の人士が連合声明を支持する400余の声明、談話を発表し、記者会見、放送演説、デモなどが行われた。

1991年６月、朝鮮は、アメリカが朝鮮に核拡散防止条約に基づく保障措置協定の速やかな締結を要求していることに対処して、アメリカが保障措置協定締結に関する朝鮮の要求条件を受け入れるよう強く要求した。

共和国政府は、保障措置協定が締結されていない責任は全的に、核保有国としての条約上の義務を守っていないアメリカにあることを明らかにする一方、朝鮮が保障措置協定を締結し、それに基づく核査察を受け入れることができるよう、アメリカは南朝鮮から核兵器を撤去し、朝鮮に対する核の脅威を取り除き、核兵器を使用し

ないという法的拘束力を持つ安全保障を行うべきだとする立場と正々堂々たる要求を内外に明らかにした。

こうして1991年９月17日、アメリカは、他国に配備されている自国の短距離戦術核兵器を撤去する用意があると宣言するとともに、南朝鮮傀儡に「南朝鮮に核兵器はもはや存在しない」という「核兵器不在宣言」を発表させた。

こうした情勢のもとで、共和国政府は、南朝鮮の「核不在」が確認されたら保障措置協定に署名し、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の手続きを踏んで核査察を受け入れる準備ができているという立場を今一度明らかにした。

そうして、朝鮮に対する核査察とアメリカの核兵器の撤去は別個の問題だと言い張るアメリカの主張は通じなくなり、朝鮮の核保障措置協定問題とアメリカの核兵器撤去の問題は不可分の関係にあることが明白になった。

アメリカは自国が南朝鮮に核兵器を配備したことを認め、朝米協商を通じて朝鮮半島の核問題を解決するとの朝鮮の提案を容れ、朝米高位級協商に臨まざるを得なくなった。

総書記は、朝米高位級会談で朝鮮の原則的立場を貫くよう導いた。

1992年１月22日、ニューヨークで開かれた朝米高位級会談で、朝鮮代表団は会談の主導権を握り、朝鮮を核で威嚇せず、チーム・スピリット合同軍事演習を中止することを強く要求し、アメリカはこれに応じざるを得なかった。

金正日総書記は、アメリカの特別査察騒動を粉砕し、国の自主権と朝鮮式社会主義を守るための銃声なき決戦を賢明に導いた。

朝米高位級会談でアメリカが朝鮮を核で威嚇せず、チーム・スピ

リット合同軍事演習を中止することを確約したので、朝鮮は会談直後の１月30日にＩＡＥＡと核保障措置協定を締結し、数度にわたる特定査察を受けた。その過程で朝鮮の核施設は核開発とは無関係であることが明白になった。

にもかかわらず、アメリカは朝鮮の一般の軍事対象に対する特別査察を要求した。

共和国政府は、一般の軍事対象に対する査察の要求は朝鮮と戦争状態にあるアメリカの策動によるもので、これにＩＡＥＡが介入した深刻な政治的・軍事的問題であり、これを許せば、朝鮮のすべての軍事対象を開放する第一歩となると主張した。そして、もし軍事対象に対する不当な査察措置を講じるなら、それ相応の自衛的措置をとることになるだろうと言明した。

アメリカは1993年１月26日、チーム・スピリット合同軍事演習を再開すると威嚇し、２月25日にはＩＡＥＡ理事会で特別査察を強要する不当な決議を採択させ、政治的・軍事的圧力を強めた。

そうして、朝鮮にはいつ何時戦争が起こるか分からない一触即発の危機が生じた。

アメリカ帝国主義の反革命的攻勢に革命的攻勢をもって対抗するため、総書記は、敵が挑発的なチーム・スピリット合同軍事演習を開始するのと時を同じくして、1993年３月８日、朝鮮人民軍最高司令官命令第0034号「全国、全人民、全軍に準戦時状態を宣布することについて」を下達した。

この命令で総書記は、もしアメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味が新たな戦争を起こすならば、朝鮮人民と人民軍は党と領袖のため、血潮をもって勝ち取った人民大衆中心の朝鮮式社会主義のため、最

後まで戦って侵略者に殲滅的打撃を与え、英雄朝鮮の尊厳と栄誉を今一度とどろかせるであろうと厳かに宣言し、敵は共和国の寸土、一木一草をもみだりに侵すことができないことをはっきり知るべきであると警告した。

朝鮮人民は準戦時状態へ移行せよとの最高司令官の命令に従い、各自の持ち場で勤労の偉勲を立てるとともに、人民軍を物心両面にわたって支援した。人民軍軍人は、命令が下れば党と領袖のために、祖国と人民のために一命をなげうって戦うという決死の覚悟を固め、祖国の前哨を固守した。

最高司令官命令第0034号が下達された４日後の３月12日、民族の自主権と国家の最高利益を守るため、核拡散防止条約（ＮＰＴ）から脱退するという政府声明が発表された。

ＮＰＴ脱退声明が発表されると、世界の各界と報道機関は「地球上のすべての核爆弾を爆発させても北朝鮮のこのたびの声明の威力には及ばないだろう」「北朝鮮の政治思想的、軍事的力の誇示」「アメリカに真っ向から立ち向かう国は北朝鮮しかない」「大勢を意のままに変える金正日指導者の指導力は全世界を揺るがした」と評した。

こうしてアメリカはチーム・スピリット93合同軍事演習を期日を繰り上げて中止し、ＩＡＥＡは特別査察の要求を撤回せざるを得なかった。そして、朝米協商を通じて朝鮮半島の核問題を解決するという朝鮮の提案にアメリカが応じることにより、朝鮮半島の核問題を国際化しようとしたアメリカの企図は破綻し、朝米政府間会談が開かれることになった。

総書記は、朝米政府間会談で自主的立場と原則を堅持するよう導

いた。

1993年６月２日から11日にかけてニューヨークで開かれた第１ラウンドの会談では、歴史上初めて朝米間の共同声明が発表された。

共同声明は、核兵器を含む武力を使用せず、そうした武力をもって威嚇もしないこと、全面的な保証適用の公正性保障を含む朝鮮半島の非核化、平和と安全を保障し、相手方の自主権を相互に尊重し、内政に干渉しないこと、朝鮮の平和的統一を支持することなどの諸原則において合意を見たと内外に宣言した。

第２ラウンド朝米会談は、同年７月14日から19日にかけてジュネーブで開かれた。総書記はこの会談で、ニューヨーク共同声明で合意を見た諸原則、特に核兵器を含む武力を使用しないという原則を再確認し、核問題解決のためのより主動的な提案を行い、それを貫徹するよう導いた。

朝鮮は会談で、自国の黒鉛減速炉と関連核施設を軽水炉に替えるという提案を行った。アメリカ側もこの提案を歓迎し、朝鮮とともに軽水炉提供の方途をさぐる用意があると明言した。

第２ラウンドの会談後、アメリカは、第３ラウンドの朝米会談を開くためには、朝鮮がＩＡＥＡの査察を受け入れ、北南対話を再開しなければならないという前提条件を持ち出し、会談の開催を引き伸ばした。

共和国政府は、アメリカが第３ラウンド会談開催の前提条件として持ち出している全面査察の要求と２カ所の軍事施設に対する特別査察の要求を一蹴し、政府の原則的立場を明らかにした1994年１月31日づけの外交部スポークスマンの声明を発表した。

声明は、アメリカが約束を破るならば、朝鮮もこれ以上アメリカ

との約束にとらわれないだろう、アメリカが朝米会談を拒否するなら、あえて会談を行うつもりはないという立場を表明し、アメリカが何か他の方途を選択するなら、朝鮮もそれに応じた方途を選択するであろうと厳かに宣言した。

朝鮮の断固たる立場に気をそがれたアメリカは会談に臨まざるを得なかった。

こうして、1994年８月５日からジュネーブで開かれた第３ラウンドの朝米会談では、朝鮮半島の核問題解決のための朝米基本合意書が採択され、同年10月20日には、アメリカ大統領クリントンがその履行を誓約する保証書簡を金正日総書記に寄せた。クリントンは保証書間で、金正日総書記に大統領のあらゆる権限を行使して朝米基本合意書を履行することを確約した。

第７節　祖国統一運動を全民族的運動として拡大発展させるために

1990年代の前半、金正日総書記は、祖国統一運動を全民族的運動として拡大発展させ、祖国統一の画期的局面を開くために心血を注いだ。

金正日総書記は、内外の同胞が民族の和解と団結を成し遂げるよう導いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「祖国統一のためのたたかいにおいてわが党が堅持している一貫した立場は、他国に依存するのでなく、朝鮮民族自身が責

任を持ち、民族の力を合わせて祖国の統一を実現するというものです」

総書記は、金日成主席の民族大団結の思想を具現し、民族の和解と団結の雰囲気をつくりだすために力を傾けた。

まず、スポーツ分野で北と南の協力、交流を図るようにした。1990年９月、中国で開かれた第11回アジア競技大会では北と南の共同応援が実現し、これを機に民族の統一への熱気はかつてなく高まった。こうした環境のもとで、総書記は、平壌とソウルで北と南の統一サッカー競技を行うようにした。

そうして、同年10月、全民族の大きな関心の中、北南統一サッカー競技が平壌とソウルで成功裏に行われた。

統一サッカー競技の際の双方の合意により、板門店（パンムンジョム）では、第41回世界卓球選手権大会と第６回世界ユースサッカー選手権大会に北と南が単一チームとして出場することに関する北南スポーツ会談が再び開かれた。

会談を控えて総書記は活動家たちに、なんとしても単一チームをつくって民族の団結した力を全世界に示威し、民族の統一への熱気を一段と盛り上げるべきだと述べた。

こうして、民族分断以来初めて北南単一チームである「コリア」チームが構成され、1991年４月24日から５月６日にかけて日本の千葉で開催された第41回世界卓球選手権大会と、同年６月にポルトガルのリスボンで開催された第６回世界ユースサッカー選手権大会に出場して、民族の統一の意志を全世界に示威し、内外同胞の統一への熱望をさらに盛り上げた。

総書記は、芸術分野においても北と南、海外の同胞の協力と交流

を深めるようにした。

そのために、「汎民族統一音楽会」を盛大に催し、北と南、海外の芸術家の間で民族の和解と団結の雰囲気をより一層盛り上げるようにした。

北と南、海外の同胞の音楽会を催す問題が提起された時、総書記は、芸術家が集まって歌を歌うだけでは統一を実現するという民族の念願に合致しないとして、その名称を「汎民族統一音楽会」とするようにと述べた。

そうして、「汎民族統一音楽会」は1990年10月18日から23日にかけて平壌で、平壌音楽団とソウル伝統音楽演奏団、それにアメリカ、カナダ、ドイツ、旧ソ連、中国、日本などからの15の海外同胞音楽家代表団の参加のもとに盛大に行われた。

これは、北と南、海外のすべての芸術家と同胞の間で不信と誤解、対決意識を解消し、民族の和解と団結の雰囲気をつくり出すうえで重要な契機となった。

総書記は、汎民族統一音楽会についで「90送年統一伝統音楽会」を催すことにし、民謡と民族楽器を基本として演目を編成し、それに応じて民族声楽と民族器楽を専門にする芸術家で音楽団を構成するようにした。

そうして、「90送年統一伝統音楽会」は1990年12月９日から12日にかけてソウルで、北と南の全人民の大きな期待と関心のもとに開催された。

1990年代の最初の１、２年の間に活発に行われたスポーツと芸術分野における協力と交流は、全民族の統一への熱望をさらに強めるとともに、数十年間存在していた北南間の不信と対決意識を解消し、

和解と団結の雰囲気を盛り上げるうえで重要な役割を果たした。

総書記は、全民族的な統一運動を組織化、体系化することに大きな力を注いだ。

1990年代に入って、より幅広い統一協商を実現して祖国の統一を一日も早く成し遂げようという北と南、海外の同胞の志向はかつてなく高まり、こうした現実は、統一のための対話と協商をさらに強化し、祖国統一のための全民族的運動を組織化、体系化することを切実に求めていた。

総書記は、内外同胞の間で日ごとに強化されている祖国統一運動を組織化する活動に深い関心を払った。

1990年８月15日、板門店では解放後45年にして初めて、北と南、海外の統一運動団体と各階層の代表の参加のもとに「祖国の平和と統一のための汎民族大会」が盛大に開催され、同じ時刻に同じ案件をもってソウルでも汎民族大会が開かれた。

大会では、祖国の自主的平和統一のための連帯共同闘争を強化し、統一愛国勢力連合の拡大をめざして積極的にたたかうという趣旨の決議文が採択された。これは事実上、祖国統一のための全民族的連合戦線が結成されたも同然であった。

第１回汎民族大会後、総書記は、常設の汎民族統一戦線組織を結成するためのたたかいをさらに強化するよう導いた。そうして、1990年11月、ベルリンで北と南、海外の３者実務会談が開かれ、全民族的な統一愛国勢力の連合組織として「祖国統一汎民族連合」（汎民連）が結成された。また、1992年８月15日には板門店で「祖国統一汎民族青年学生連合」（汎青学連）が結成された。

総書記は、汎民連と汎青学連を固め、その役割を絶えず強めて祖

国統一運動を整然と体系化するよう導いた。

汎民連北側本部はその組織体系を短期間に完備し、海外本部も各地域本部組織を拡大強化し、数多くの海外同胞を組織的に結束した。汎民連南側本部結成準備委員会も組織結成のためのたたかいを積極的に推し進めた。

汎民連はまた、その綱領と規約について合意を見、1993年12月にその発効を宣言した。汎青学連も北と南、海外に整然とした組織体系を整えていった。

こうして、汎民族的な統一運動組織である汎民連と汎青学連の組織がしっかりと固められ、その積極的な活動によって、毎年汎民族大会をはじめ統一行事が全民族の大きな関心のもとに催されることになった。

この過程で北と南、海外の３者連帯、連合がさらに強まり、民族の和解と団結の雰囲気は日ごとに高まった。

総書記は、北南高位級会談が民族の和解と団結の新たな転機となるよう導いた。

1990年代に入って、かつてなく高まった全民族の統一への熱望を無視できなくなった南朝鮮当局が朝鮮との統一対話に応じることにより、1990年９月から北と南の総理を団長とする高位級会談が開始され、1991年12月の第５回北南高位級会談で「北南間の和解と不可侵及び協力・交流に関する合意書」が採択され、ついで「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」について合意が成立した。

金正日総書記は、全民族大団結10大綱領の旗印のもとに、祖国統一の画期的局面を開くために心血を注いだ。

1990年代に入って、アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡は情勢を極度

に緊張させ、共和国孤立・圧殺策動をさらに強化した。1993年の春にはかつてなかった緊張した政治・軍事情勢が生じた。

このように情勢が緊張していたにもかかわらず、金日成主席は同年４月に開かれた最高人民会議第９期第５回会議で、全民族の一致した統一の意志を反映して作成した『祖国統一のための全民族大団結10大綱領』を発表した。

総書記は、全民族大団結10大綱領の宣伝を集中的に行うようにした。

党機関紙、放送をはじめあらゆる通信・報道手段と出版物が、全民族大団結10大綱領の内容と正当性、それに対する各階層の内外の同胞と世界各国の政界をはじめ各界の反響資料を集中的に紹介、宣伝した。また、全民族大団結10大綱領を支持する大衆大会や大衆集会のニュース、各政党・社会団体の声明や談話の内容を集中編集した。こうして、内外の全朝鮮民族が全民族大団結10大綱領を心に受け止め、それを実現するためのたたかいに立ち上がった。

総聯（在日本朝鮮人総聯合会）の活動家と在日同胞は、同年６月から８月にかけて日本各地で10大綱領支持30万名署名運動を繰り広げ、32万4000余名の署名を集めた。そして、同胞青年学生は1200キロ大行進を行った。また、総聯傘下の多くの同胞が民団系や組織に加入していない同胞、帰化した同胞、南朝鮮往来者の中に深く入り、主席と総書記の崇高な民族大団結の思想と民族愛について広く解説、宣伝した。

こうして、北と南、海外のすべての同胞が主席の提示した全民族大団結10大綱領を民族の唯一の統一大綱として受け入れ、世界の多くの国の党及び国家首班と各界の人士が支持と連帯の声をより一

層高めるようになった。

総書記は､全民族大団結10大綱領の旗印のもとに内外同胞の民族的団結を実現するために精力を傾けた。

1993年10月12日から23日にかけて東京と大阪で､民族分断48年にして初めて北と南､海外の同胞美術家の統一美術展が全同胞の大きな関心のもとに開かれた。

統一美術展に参加した同胞美術家たちは10月16日､東京で､自主､平和統一、民族大団結の原則に基づいて国の統一を成就し、思想と理念､体制の違いを超えて和解と団結をめざして共同で努力するという趣旨の共同声明を発表した。

この時期、日本で開かれた「第４回祖国の平和統一と宣教に関するキリスト教徒東京会議」「第４回アジアの平和と女性の役割に関する国際討論会」をはじめ、多くの統一祝典及び国際会議でも全民族大団結10大綱領を支持する声が沸き上がった。

総書記は､全民族大団結10大綱領の旗印のもとに祖国統一の画期的局面を開くことになる北南最高位級会談を成功させるために心血を注いだ。

民族の統一熱気が高まっていた1990年代中ごろの有利な情勢は、祖国の統一を早めるためのより積極的な措置を講じることを切実に求めていた。そうして、1993年10月から北南最高位級特使交換のための実務代表団の接触が始まり､翌年の６月28日には板門店で最高位級会談のための双方の副総理級予備接触が行われた。予備接触では､７月25日から27日にかけて平壌で北南最高位級会談を開くという合意書が採択された。

総書記は､北南最高位級会談が祖国統一の画期的局面を開く決定

的な契機となるようにするため、会談の準備に心血を注いだ。会談を成功させるため、総書記は会談に関する多くの文書に残らず目を通して完成させた。

主席は、生涯を終える数時間前にも会談に関する文書を検討して「金日成　1994・7・7」としたため、総書記と会談に関する重要な問題について討議した。

しかし、北南最高位級会談を間近に控えて金日成主席の急逝という民族最大の痛恨事に見舞われたため、それは実現を見なかった。

5000年の朝鮮民族史上最大の痛恨事に見舞われ、1990年代の北南最高位級会談は実現しなかったが、そのために金日成主席と金正日総書記が注いだ心血、その道で残した業績は、歴史の地―板門店に建てられた主席の統一親筆碑とともに子々孫々に伝えられるであろう。

第８節　平壌宣言の旗のもとに
社会主義運動を再建するために

金正日総書記は、陣痛と紆余曲折を経ていた社会主義運動を新たな基礎の上で再建し、社会主義偉業を高揚へと導くために心血を注いだ。

アメリカをはじめ帝国主義者の反社会主義策動と現代社会民主主義者の背信行為により、ソ連と東欧諸国で社会主義が挫折し、資本主義が復活した。こうした情勢下で、世界の革命的党と人民の耳目は、変わることなく社会主義の旗を高く掲げて進む社会主義朝鮮

に注がれた。

1992年１月３日、金正日総書記は著作『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』を発表した。

総書記は著作で、世界の社会主義運動が解明を待ち望んでいる問題である一部の国における社会主義の挫折の原因と教訓、社会主義建設を指導する党が一貫して堅持すべき総路線を明示した。

世界の革命家と進歩的人民は総書記のこの著作を「信念と勇気を与えてくれる生命水」「社会主義建設の百科全書」「社会主義建設の大綱」だとして、総書記を「思想と政治の大家」「人類の未来を照らす輝かしい太陽」だとたたえた。

総書記は、金日成主席の生誕80周年を祝って開かれるチュチェ思想国際討論会に重要な意義を付与し、それがチュチェの社会主義偉業の正当性と不抜の威力を認識させる重要な契機となるようにした。

総書記は活動家たちに、討論会では世界の人民の共通の関心事となっている問題についてチュチェ思想の原理に基づいて分科別に理論的に深く討論し、人々が社会主義に対する古い概念を捨て、チュチェ思想が具現されている朝鮮の社会主義の優越性をよく理解できるようにすべきであると述べた。

1992年４月、東京で開かれた「現代とチュチェ思想に関する国際討論会」は、世界の革命家と進歩的人民にチュチェ思想の正当性と真理性、それが具現されている朝鮮式社会主義の必勝不敗性を深く認識させる重要な契機となった。

総書記は、主席の生誕80周年慶祝行事に社会主義をめざしてたたかう世界の革命的党の代表をより多く参加させるようにした。1991

年11月20日、総書記は代表団招請の総体的方向を示すとともに、国別、対象別の招請対象を一つ一つ定めた。

特に、世界の社会主義運動に新たな活力を与えるため、社会主義が挫折した国の進歩的党の代表団をはじめ、反帝・自主を志向する世界各国の党代表団を多く招くようにした。

そうして、世界の多くの国の社会主義的政党の代表団が平壌宣言が採択されることになる平壌を訪れ、主席の誕生80周年慶祝行事に参加することになった。

朝鮮側は、世界各国から訪れた革命的党の代表団との双務的・多務的接触を活発に行い、総書記の著作『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』の思想的・理論的内容を積極的に解説、宣伝するとともに、彼らがチュチェ思想が具現されている朝鮮の社会主義の現実をより多く見ることができるように手配した。

各国の党首と党の代表は一致して、『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』に盛り込まれている思想を反映した共同の闘争綱領を発表することを提起した。こうして、1992年４月20日、平壌では「社会主義偉業を擁護し前進させよう」と題する平壌宣言が採択、発表された。

平壌宣言は、一部の国で社会主義が挫折した原因を正確に分析し、資本主義に比べた社会主義の本質的優越性と社会主義勝利の歴史的必然性を科学的に論述した。また、社会主義偉業を擁護し前進させるため、各国の党は自らの力量を打ち固め、いかなる環境のもとでも自主性と革命的原則を堅持し、社会主義の旗を引き続き高く掲げて進み、社会主義偉業の遂行においてすべての進歩的政党間の団結と連帯を強めるという共同の闘争課題を明示した。

平壌宣言は、社会主義の真理性と正当性、その最終的勝利の必然性を明らかにし、社会主義の理念に忠実であろうとする強力な勢力が存在していることを世界に宣布することによって、社会主義は依然として生きており前進していることを誇示した。また、世界の進歩的人民に社会主義偉業勝利の確たる信念を与えた。

平壌宣言が発表された後、世界の革命的党はこの宣言を「新しい共産党宣言」「国際共産主義運動の新たな出発を告げる歴史的文書」「革命的党が進むべき行動方向を規定した指導指針」などと評価し、これに次々と署名した。そうして、平壌宣言に署名した党の数は採択当初は70だったものが、2012年４月には289に増えた。

金正日総書記は、平壌宣言に基づき社会主義運動を再建するための世界の革命的党と人民のたたかいを積極的に支持声援するようにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党は今後とも人民大衆の自主偉業、社会主義偉業の勝利をめざして、世界のすべての革命的な党と強く団結して積極的に協力し、朝鮮革命と世界革命に対して担っている聖なる使命と責任を果たすであろう」

総書記は、朝鮮労働党創立47周年に当たる日に著作『革命的党建設の根本問題について』を発表し、革命的な党を再建し、社会主義を再生させるためにたたかう各国の革命家を心から助けるよう導いた。

総書記の遠大な構想に基づき、1991年と1992年にも朝鮮労働党代表団が世界各国に派遣された。

総書記は、世界各国の革命的な党の首班が朝鮮を訪れて金日成

主席と会見することができるようにした。

世界の社会主義運動が試練にさらされ､帝国主義者の狂乱的な反社会主義攻勢が強まっていた時､朝鮮労働党は敵の挑戦を断固粉砕し､社会主義の理念と革命的な党の正当な偉業を積極的に擁護した。

ヨーロッパの資本主義国の共産党、労働者党をはじめ、多くの国の革命的な党の首班が朝鮮を訪れてチュチェ思想が具現されている真の社会主義の姿を目の当たりにし、金日成主席の貴重な教えを受けた。

総書記は､社会主義運動の再建をめざしてたたかう多くの国の革命的な党の首班に会って助言を与えた。

特に､社会主義の再生をめざしてたたかう世界各国の政党との活動に深い関心を払った。ヨーロッパの社会主義が崩壊した後、総書記は数度にわたって活動家たちに､それらの国の党との活動に力を入れて彼らをよく助けるべきだと述べ､多くの国の政党の党首に会って彼らを励ました。

1992年４月にはある国の党書記長に会い､社会主義の再生をめざして困難なたたかいを続けているその党に対する朝鮮労働党の全的な支持声援を確約するとともに、記念写真を撮り、晩餐会まで催した。

彼は、金正日総書記はわが党にこのうえなく貴重な教えを与えてくれたとして、心から感謝の意を表した。そして、金正日総書記は実に偉大な指導者であり､限りなく謙虚でおおらかな気質の持ち主で、無限の人間愛と度量を備えた偉人であるとほめたたえた。

これは､総書記と会見したすべての革命的な党の首班と革命家の一致した心情であった。

総書記は対外活動部門の活動家たちに、今や各国の共産党、労働者党を押し立て支持声援する党はわが党しかないとして、外国の党代表団が訪れたら彼らに温かく接し、共同声明も採択してきずなを強め、大いに励ますべきだと述べた。

1993年７月の戦勝40周年慶祝行事をはじめ重要な行事の際、総書記は、社会主義運動の再建をめざしてたたかっている外国の党首班を幹部壇の前列につかせるようにした。そうして、社会主義が挫折した国をはじめ多くの国の左翼政党の代表団が朝鮮を訪れ、社会主義偉業に一身を捧げることを誓った。

金正日総書記はこのように、世界の社会主義運動が試練を経ていた1990年代の前半に、チュチェ思想に基づく世界の社会主義運動の再建のために不眠不休の活動を続け、社会主義偉業の遂行に偉大な歴史的貢献をなした。

第７章　領袖永生の大業を立派に実現、先軍政治をより高い段階で全面的に実現し、「苦難の行軍」、強行軍を勝利に導くために

（1994年７月～1998年12月）

第１節　領袖永生の大業を成し遂げるために

朝鮮労働党と朝鮮人民は社会主義を固守し、祖国統一の画期的局面を開くためのたたかいを推し進めていた1990年代の中期、思いがけない重大な損失を被った。

つとに革命の道を踏み出して時代の前途を示すチュチェ思想、先軍思想を創始し、その旗の下に人民大衆の自主偉業の達成のために精力的に活動してきた金日成（キムイルソン）主席が、1994年７月８日に急逝したのである。

主席の逝去は何をもってしても償うことのできない最大の損失、最も大きな悲しみであり、全人類にとって取り返しのつかない不幸であった。総書記は主席が逝去した後、その喪失の痛みを不屈の意志をもって堪え忍び、領袖永生の大業を成し遂げるべく思索と心血を注いだ。

金正日（キムジョンイル）総書記は領袖永生の大業を成し遂げるうえでの原則的問題を明らかにした。

1994年７月11日、19日、党中央委員会の責任幹部への談話『偉大な領袖金日成同志をわが共和国の永遠なる主席に高く

戴こう』と1994年10月16日、党中央委員会の責任幹部への談話『金日成同志を永遠に高く戴き、その偉業をあくまで成し遂げよう』、1995年12月25日、朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』に発表した談話『革命の先輩を敬うのは革命家の気高い徳義である』など一連の著作と談話で、領袖永生の大業を成し遂げることを朝鮮人民の念願を果たす問題としてだけでなく、世界の社会主義運動内に真の道徳観を打ち立てる重要な問題とし、それを実現するうえでの原則的問題を明らかにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは金日成同志の永生についてよく口にしますが、金日成同志はとわに生きるということも金日成同志の思想と業績が不滅であり、金日成同志が朝鮮人民の心に生き続けるという意味です」

領袖永生の大業を成し遂げるうえで重要なのは、領袖が人民の心に生き続けるようにし、領袖を生前の姿で高く仰ぎ、領袖の思想と業績を代をついでさらに輝かせることである。

金正日総書記は領袖永生の大業を成し遂げる事業を賢明に導いた。

まず、主席の追悼行事を通して金日成主席は永遠にわれわれとともにおられるという信念を人民の心に植えつけた。総書記は、哀悼期間、弔意行事と告別式、追悼大会などの追悼行事が厳かに行われるようにした。

主席が逝去して数時間後の７月８日の朝、党中央委員会政治局の非常会議を招集した総書記は、青天のへきれきのような知らせに接して大きな悲しみに沈んでいる政治局員たちを慰め、追悼行事を最

大の忠誠心を持って行うよう指示し、必要な措置を講じた。

そして、主席の霊前にもうでることを願う人民の切なる心情を図り、国家葬儀委員会がすでに発表した哀悼期間を延長し、弔客を受け入れる期間を延ばすようにした。

この措置によって７月17日までとされていた哀悼期間は20日まで延長され、16日までとなっていた弔客を18日まで受け入れることになった。哀悼期間、主席の霊前や弔意式場を訪れた弔客は全国的に延べ２億1200余万名に達した。

総書記は外国駐在の代表部でも追悼行事を厳かに挙行するようにした。そうして、外国に住む同胞とその国の党及び国家首班をはじめ多くの人士と各階層の人民が主席の逝去に深い哀悼の意を表した。

1994年７月10日、告別式の準備を指導していた総書記は、告別式の時に掲げる主席の影像を太陽のような明るい笑顔の姿にするようにし、その原画写真まで選んでくれた。その後、主席の太陽像を最上の水準で完成するよう再三細かに指導し、７月19日の告別式の時にそれを霊柩車行列の先頭に掲げるようにし、追悼行事の場と平壌（ピョンヤン）市内にはもちろん、全国各地の主な大衆教育の場にも主席の太陽像を丁重に掲げるようにした。

総書記は主席を追慕する追悼大会を厳かに挙行するようにした。

７月20日、平壌では総書記の参加のもとに主席を追慕する中央追悼大会が厳かに挙行され、追悼大会に参加したすべての人は、生涯を終える最後の瞬間まで、ひたすら祖国の隆盛・発展と人民の自由と幸福のため、祖国の統一と全世界の自主化のために不眠不休の労苦と心血を注いできた主席を最も敬虔な気持ちで追慕し、主席の永

生を祈願した。

総書記は、主席の懐で思う存分幸せを享受してきた世代だけでなく、次世代も社会主義朝鮮の始祖である主席を忘れないようにするため、1996年２月11日、主席が逝去した７月８日を民族最大の追慕の日として迎えることを伝統化とする指針を示した。

この措置により、朝鮮人民は毎年７月８日に主席を限りなく敬虔な気持ちで追慕しながら、主席の高貴な革命的生涯を感慨深く思い返すことをたがえることのない慣習とし、民族固有の伝統と見なすようになった。

総書記は、領袖永生祈願のスローガンと永生塔、記録映画、文学・芸術作品を通して、人民の心に領袖永生の信念を深く植えつけた。

1994年７月16日、「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる」というスローガンを示し、金剛山(クムガン)と妙香山(ミョヒャン)の名所と天然の岩に主席を称える文を刻み付けるようにした。

また、主席の永生塔を全国の工場と農場、軍部隊、街と村に建てるようにし、1996年７月初旬には、主席がいつも通っていた金星(クムソン)通りの入り口に大型の永生塔を建立することを発起し、それを立派に建てるよう指導した。

総書記は、『偉大な領袖金日成同志はとわに生きる』（第１～７部）、『偉大な生涯の1994年』などの記録映画を制作し、それを通しての教育を強めるようにし、歌謡『主席はいつもわれらとともに』、叙事詩『永遠のわが領袖金日成同志』、長編小説『永生』など領袖永生をテーマにした文学・芸術作品を創作して普及するようにした。

主席が逝去した後、党中央委員会の政治局員と人民から、金正日

総書記を共和国の主席に推戴すべきだという請願が数多く提起された。

総書記は1994年７月11日、19日の談話『偉大な領袖金日成同志をわが共和国の永遠なる主席に高く戴こう』と1994年10月16日の談話『金日成同志を永遠に高く戴き、その偉業をあくまで成し遂げよう』で、金日成同志を共和国の永遠なる主席に、社会主義朝鮮の始祖に高く戴くべきだと言明した。

そして、主席という言葉は金日成同志の尊名と切り離しては考えられないものとして全朝鮮民族の胸に刻みつけられており、金日成主席という尊称は世界人民にとって消しがたいものとなっているとして、金日成同志を金日成主席という親しい尊称と高い尊名で朝鮮人民と世界の進歩的人民の心の中にとわに生き続けるようにすべきだと述べた。

また、祖国と人民、世界と人類に卓抜な貢献をなし、最高の尊敬と欽慕を受けてきた金日成同志を朝鮮の歴史にただ一人の主席、最初にして永久に変わらぬ主席として高く戴こうというのが自分の確固とした意志であると語った。

総書記は、金日成同志のような天稟を持った偉人はこの時代にまたとなく、それゆえ、金日成同志だけを唯一の主席として高く戴き、ほかの人は誰も主席という職名を持てないということを法制化すべきだと強調した。

総書記の意思に従い、1998年９月５日、最高人民会議第10期第１回会議で新たに採択された朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法では、朝鮮民主主義人民共和国の創建者であり、社会主義朝鮮の始祖である金日成同志を共和国の永遠なる主席に高く戴くというこ

とを規定した。

金正日総書記は錦繍山（クムスサン）議事堂（当時）をチュチェの最高聖地に整え、そこに金日成主席を生前の姿で永久に安置する事業を賢明に導いた。

1994年７月11日、総書記は党中央委員会の責任幹部たちに、主席が長い間、革命と建設を指導してきた錦繍山議事堂を主席の記念館として立派に整え、ここに主席を生前の姿で永遠に安置しなければならないと教えた。そして、錦繍山記念宮殿（当時）の建設工事を人民軍に任せ、工事に必要な設備と資材を最優先的に供給する措置をとった。

総書記は、工事が行われた１年間、およそ400余回もの指示を与え、ほぼ毎日のように、ある日には２回も３回も現地に出かけて錦繍山記念宮殿と錦繍山地区を立派に整えるよう精力的に指導した。

主席の大理石の立像を立てたホールと生前の姿のまま安置されている主席にまみえるために上る大階段を立派につくる問題から宮殿内部の照明や音響設備に至るまで深い関心を払って細かに指導し、チュチェの最高聖地を訪れる人民の便宜を図って金星通りに路面電車も設けるようにした。

工事が仕上げの段階に入った1995年６月12日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院決定書「偉大な領袖金日成同志を永生の姿で末長く安置することについて」が採択、発表された。

主席の１周忌に当たる1995年７月８日、総書記の参加のもとに新装なった錦繍山記念宮殿の開館式が行われた。

その後も、総書記は錦繡山地区をより立派に整えることに引き続き深い関心を向けた。

錦繡山記念宮殿の内部を一層立派に整備し、宮殿の広場を拡張して花崗岩で舗装し、宮殿を訪れる人民の便宜をはかって宮殿外廊を建設するようにした。

そして、宮殿の石垣と石造門を民族の情趣に富み、現代的美感に合うよう特色づけて形成し、広い空地に樹木園を造成し、錦繡山記念宮殿と平壌空港をつなぐ9･9節通りを新しく建設するようにした。

金正日総書記は、金日成主席の思想と業績を代をついで輝かせる事業を賢明に導いた。

主席の革命思想を革命の永久の指導思想として輝かせることに特別な意義を付与した総書記は、主席との永別を前にした1994年７月18日、党中央委員会の責任幹部たちに、主席の生存時といささかも変わることなく主席の思想を100％継承しなければならない、これが徹底されれば主席を永久に戴くことになると語った。

1994年７月22日に「偉大な領袖金日成同志の革命思想でさらにしっかり武装しよう！」を党の基本スローガンとして提示し、それを実行するための積極的な措置を講じた。

総書記は主席の著作の編纂と展示に特別な関心を向け、主席の回顧録『世紀とともに』を続編の形式で引き続き編纂するようにし、チュチェ思想著作展示館を設けることを発案し、それを実現するうえでの諸問題を明示した。

総書記は、主席の革命的生涯と業績を永遠に輝かせることにも深い関心を払った。

主席の革命事績が宿る由緒深い所に主席の銅像を丁重に建て、現

地指導事績碑と現地教示碑を設け、主席の尊名を記すようにした。

こうして、金日成政治大学と金日成軍事総合大学に大元帥服姿の主席の銅像が立てられ、全国の数多くの単位に主席の現地指導事績碑と現地教示碑が立てられた。

そして、1996年１月には朝鮮社会主義労働青年同盟が金日成社会主義青年同盟に改称され、主席が数回現地指導した平壌大同門（テドンムン）人民学校が「金成柱（キムソンジュ）人民学校」（当時）と命名された。

主席の１周忌を迎えて板門店（パンムンジョム）の統一閣の前には偉大な生涯の最後の瞬間まで祖国統一のために腐心した主席の革命業績を末長く伝えるため、主席の最後の親筆である「金日成　1994・7・7」という文字の親筆碑が建立され、朝鮮労働党創立50周年に際して党創立記念塔が立てられ、金剛山の法器峰（ポプキ）の天然岩に「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる」という文が、玉女峰（オクニョ）の明堂岩（ミョンダン）には「朝鮮よ誇ろう、5000年の民族史に最も偉大な金日成同志を領袖として戴いていた栄光を！」という文が彫り付けられた。

一方、総書記は主席の革命業績を末長く輝かせるために図書の編纂を発起し、その活動を精力的に指導した。

こうして、全21巻からなる叢書『偉大な領袖金日成同志の不滅の革命業績』はわずか数年の間に編纂、刊行され、その他数多くの図書が執筆、出版された。

総書記は、主席の革命的生涯と業績を末長く輝かせるために、チュチェ年号と太陽節を制定するようにした。

1997年７月８日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和

国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院決定書「偉大な領袖金日成同志の革命的生涯と不滅の業績を末長く輝かせるために」が発表された。

決定書は、主席がチュチェの太陽として誕生した1912年を元年とするチュチェ年号を制定し、主席が誕生した民族最大の祝日である４月15日を太陽節とすることを内外に宣言した。

第２節　先軍政治方式の確立、党と国家の首位に推戴

金正日総書記は、長い間先軍革命指導、先軍政治を実現していく過程に積んだ貴い経験に基づき、アメリカ帝国主義との対決が極に達していた1990年代の中期に至り、先軍政治方式を確立する活動を賢明に導いた。

科学的で革命的な政治方式を確立することは、1990年代中期のかつてなく複雑で厳しい朝鮮革命の内外の環境から提起される切実な要求であった。

ソ連と東欧諸国での社会主義の挫折を奇貨として強化されはじめた帝国主義者の反社会主義、対共和国孤立・圧殺策動は、朝鮮民族が被った最大の痛恨事を機にさらに悪辣に強行され、そのうえ数年来引き続く天災によって朝鮮革命はより厳しい環境にさらされた。

革命発展情勢の要求を科学的に洞察した総書記は、先軍政治方式を確立するための活動を賢明に導いた。

金正日総書記は人民軍を革命の主力部隊、国の柱に押し立てた。

総書記は国と民族、チュチェの革命偉業の運命を決する政治方式

の問題について思索に思索を重ね､その過程で久しい以前から育ててきた人民軍を革命の主力部隊、国の柱に押し立て、それに依拠して金日成主席の偉業を達成する決心を固めた。

総書記は1994年７月13日､朝鮮人民軍の指揮メンバーに、主席が開拓し指導してきた革命偉業を達成するうえで人民軍が主力部隊とならなければならないと言明した｡そして1995年１月１日の小松林軍営への歴史的な視察によって先軍政治をより高い段階で全面的に実現するという決心を内外に表明した。

小松林軍営を訪れた総書記は､寒風吹きすさぶ砲陣地で長い時間をかけて中隊軍人の訓練を指導し､党に限りなく忠実な強大な人民軍があるかぎり、祖国を統一し、チュチェの革命偉業をあくまで達成できることは確定的だと語った。

ついで、中隊教育室と兵舎を見て回りながら、区分隊の思想教育活動と文化生活、給養活動の状況を確かめ、人民軍を政治的、思想的にしっかり武装させ、戦闘準備を完了し、軍人の生活を改善するための方途を示し、中隊軍人とともに意義深い記念写真を撮った。

小松林軍営への総書記の視察は､新たな情勢に対処して人民軍の威力をさらに強め､それに依拠してチュチェの革命偉業をあくまで達成せんとする鉄の信念と意志の宣言であり､この時から先軍政治がより高い段階で全面的に実現されるようになった。

金正日総書記は革命的軍人精神を創造し、それを全社会に一般化させた。

金正日総書記は次のように述べている。

「わたしは『苦難の行軍』の時期、人民軍軍人の間で高く発揚されている領袖決死擁護精神と肉弾精神、自爆精神を革命的

軍人精神だと言い、全党と全社会が革命的軍人精神を見習うようにしました。全党と全社会に革命的軍人精神を見習う気風が強く発揮され、人民軍の威力がさらに強まった時、わたしの指導は先軍指導であり、わたしの政治は先軍政治だと言いました」

総書記は小松林中隊に対する視察について、柿の木中隊、五聖（オソン）山、鉄（チョル）嶺など絶え間ない先軍長征の道を歩みながら、人民軍が革命の首脳部を決死の覚悟で防衛する無敵の革命強兵、人民の幸福の創造者としての使命を果たしていくよう導いた。

人民軍部隊に対する絶え間ない視察によって常に軍人の中に入った総書記は、彼らを情愛と信頼を持って見守り導き、軍隊内での党政治活動を一段と強化して軍人を革命的に教育し鍛えるようにした。

総書記の精力的な指導のもとに、人民軍の政治的・思想的品格と闘争気風には新たな転換がもたらされ、人民軍は革命の首脳部決死擁護精神がみなぎる革命隊伍に育ち、先軍時代を象徴し代表する革命的軍人精神の創造者となった。

人民軍軍人の間では、党と領袖、祖国と人民のためには自爆、自決の道もためらわぬ多数の英雄戦士が輩出し、「敬愛する最高司令官の命令を貫徹するまでは祖国の青空を仰ぐな！」というスローガンを掲げ、地下の切羽で青春の情熱を捧げ、さらには生命をもなげうってたたかった安辺（アンビョン）青年発電所軍人建設者の英雄的な行為も現れた。

総書記は1996年６月10日、安辺青年発電所建設現場を現地指導し、軍人建設者が発揮した徹底した闘争精神を革命的軍人精神と命名した。この革命的軍人精神は、自分の領袖、自分の最高司令官のた

めなら青春も生命も惜しみなく捧げる徹底した領袖決死擁護精神、決死貫徹精神、英雄的犠牲精神を基本とする朝鮮人民軍の気高い革命精神である。

総書記は全党と全社会が、人民軍で創造された革命的軍人精神を大いに見習うようにした。

革命的軍人精神についての学習と安辺青年発電所建設現場の参観、見学を大々的に組織し、出版・報道、文学・芸術などさまざまの手段と方法を総動員して革命的軍人精神を体得させるための宣伝キャンペーンを繰り広げるようにした。

そして、1997年３月17日の党中央委員会の責任幹部への談話『革命的軍人精神を見習うために』で、すべての部門、すべての単位で革命的軍人精神を見習うための課題と方途を示し、その実行のための対策も示した。

金正日総書記は、国家機構体系を軍重視の原則で改めるようにした。

金日成主席が逝去した直後、すでに国家機構体系を継承性を確固と保障し、軍重視思想の要求に即して発展させる構想を示し、その後、幹部にその具体的な方向と方途を示した。

これに基づき、1998年９月５日、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第10期第１回会議では、新たな社会主義憲法が審議、採択され、それによって国家機構体系は国防委員会を中枢とする、軍重視思想が具現された新たな国家機構体系に変わった。

こうして、先軍政治の法的・制度的保証がもたらされ、国の政治体系は先軍政治の要求に適った新しい国家機構体系、完成された先軍政治体系となった。これは、独創的な先軍政治を全面的に実現で

きる確固たる法的保証がもたらされた歴史的出来事であった。

総書記は1999年２月８日､先軍政治は自分の基本政治方式であり、革命を勝利に導くための万能の霊剣であることを内外に宣言した。

金正日総書記は、全党、全軍、全人民の一致した意思と念願によって党と国家の首位に推戴された。

金日成主席が逝去した後、朝鮮人民は金正日同志を朝鮮労働党の総書記に、国家主席に戴くことを切願した。

総書記を一日も早く党と国家の首位に戴くことを請願する各界層人民の手紙が毎日のように党中央委員会に寄せられた。

総書記は､主席の霊前で涙にむせんだ人民の悲憤がまだ心に残っているのに､党と国家の指導機関を新たに選挙して万歳を叫ぶのは戦士の道理でないとし、推挙を急がなかった。そして、ひたすら主席をさらに高く戴き、その遺訓を貫徹するために夜を日についで献身した。

そうするほど､総書記を党と国家の首位に戴こうとする全党､全軍、全人民の熱望はさらに高まった。

総書記を党の首位に戴こうとする全党員の意思と念願をこめて、各級党組織では党創立52周年を控えて金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推挙する政治行事を行った。

1997年９月に平城（ピョンソン）市で開かれた朝鮮労働党平安（ピョンアン）南道代表会議を皮切りに、朝鮮人民軍代表会議、道（直轄市）代表会議など各党組織の代表会議が相次いで開かれた。これらの会議では金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推挙する問題を討議し､全代表の支持賛同により総書記推挙の決定を採択した。

これを受けて､朝鮮労働党中央委員会と朝鮮労働党中央軍事委員

会は1997年10月８日、特別報道を通じて、全党員の一致した意思により、金正日同志が朝鮮労働党の総書記に推戴されたことを厳かに発表した。

金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推戴しようとする党員と人民の熱望は、主席が逝去して３年後にようやく実現された。

朝鮮人民の総意により、1998年９月５日の最高人民会議第10期第１回会議では金正日総書記が朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に選出された。

金正日総書記を党と国家の首位に戴いたことは、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業を最終的に完遂できる決定的保証がもたらされた意義深い出来事であった。

第３節　人民軍を強化するための活動を指導、呉仲洽第７連隊称号獲得運動の創造

金正日総書記は先軍政治をより高い段階で全面的に実現していくべき現実発展の要求に即して、革命の主力部隊であり、国の柱である人民軍を強化する活動を賢明に導いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは人民軍を朝鮮式の軍隊、党の軍隊としてさらに固めなければなりません。われわれは人民軍の強化に引き続き大きな力を注ぎ、すべての軍人を、党と領袖を決死の覚悟で擁護する無敵の戦士として準備させなければなりません」

金正日総書記は人民軍を思想と信念の強兵に鍛え上げることに

第一義的な力を注いだ。

人民軍軍人を革命の首脳部を決死擁護する銃弾•爆弾勇士に鍛え上げることを人民軍における党の政治活動の総体的目標、基本的方向として示した総書記は、その実現のための政治・思想教育活動を活発に展開するようにした。

まず、人民軍軍人の間で政治・思想活動を強化するようにした。

人民軍内の政治学習において、金日成主席と党の偉大さを深く認識させることを基本とするようにし、太陽節と建軍節をはじめ重要な記念日を契機に、チュチェの革命偉業、チュチェの建軍偉業の実現のために築き上げた金日成主席と党の業績について集中的に宣伝するようにした。

特に、人民軍内の各級部隊と区分隊が部隊に秘められている金日成主席と党の革命事績を総合的に整理し、それを通じての軍人教育を強化することに格別な関心を払った。

総書記は、1996年４月、建軍節の日に前線西部の某人民軍部隊を視察し、革命事績を通じての教育を強化することは人民軍軍人の心に金日成主席と党の栄えある革命歴史と不滅の指導業績を深く植え付けるうえできわめて重要な意義があるとし、革命事績・遺物保存室の参観を活発に行う問題をはじめ革命事績を通じての教育を強化する方向と方途を明らかにした。そして、翌年の６月には、ある部隊の革命事績・遺物保存室を見て回った後、幹部たちに革命事績を通じての教育に力を入れ、すべての軍人が党と領袖への信頼感を抱いて金日成主席を永久に戴き、党の指導に忠実に従っていくようにすべきだと強調した。

総書記は、すべての人民軍将兵が呉仲洽（オジュンフプ）、李寿福（リスボク）、吉永祚（キルヨンジョ）など

の英雄を見習うための教育を強化することにも大きな力を傾けた。

彼らの模範を宣伝する活動を新聞や放送をはじめ各種のマス・メディアを通して広範に繰り広げ、党及び青年同盟組織がこの活動を党員と軍人の組織・思想生活と密接に結び付けて着実に推し進めるようにするとともに、この活動を自分の部隊の戦闘偉勲をもって教育する活動と密接に結びつけて行うようにした。

その過程で、人民軍では領袖決死擁護の模範となる英雄が数多く輩出した。

総書記は、軍人の間で階級的教育を一段と強化するようにした。

1998年11月22日をはじめ数次にわたる教示で軍人に対する階級的教育を強化するよう強調し、最前線である板門店の軍営を訪ねては、将兵たちの胸に強い階級的自覚を呼び起こす訓話も行った。そして、軍人の強い階級的覚悟にみなぎる芸術公演を見ては全軍にその模範を一般化させるようにした。

総書記は、思想教育活動をさまざまな形式と方法で生き生きと戦闘的に行うようにした。

人民軍の部隊と区分隊を視察する過程で、ある中隊で卓上こよみ形式の偉大性教育カードをつくって軍人たちを教育しているのを見て、全軍の中隊教育室にその卓上教育カードをつくって配布するよう指示した。

また、人民軍内の思想教育活動が時代の要求に適い、戦う軍隊らしく戦闘的に、火線式に行われるようにすることに深い関心を払い、軍隊では歌を一つ歌っても勲功国家合唱団が歌っているように戦闘的な歌を歌い、速報を一つ発刊しアジ演説を一つ行うにしてもアピール性が強く、戦闘的気迫にあふれたものになるようにした。

総書記の精力的な現地指導と細やかな配慮によって、人民軍内の思想教育活動は、すべての軍人を領袖決死擁護精神に徹した肉弾英雄、自爆勇士に育てる方向で、斬新な形式と方法で火線式に行われるようになった。

こうして人民軍は、最高司令官の第一の決死隊、領袖決死擁護の隊伍に鍛えられるようになった。

金正日総書記は人民軍を不敗の戦闘力を備えた強兵に育てる活動を賢明に導いた。

総書記は、人民軍のすべての指揮官を党に忠実で有能な作戦指揮能力を備えた戦士に育てた。

まず、人民軍内に新たな講習制度を設けるようにした後、機会あるごとに講習に参加する対象と期間、時間と日程、形式と方法など講習の質的向上のためのさまざまな措置を相次いで講じた。そして数多くの軍事教育機関を現地で指導しながら、すべての教育活動を主体的立場で、実利主義の原則で着実に行うよう導いた。

総書記は、戦闘訓練を強化して人民軍の戦闘力を全面的に強化するようにした。

まず、戦闘訓練において主体性の原則を確実に具現するようにした。絶え間ない現地指導の道すがら、軍人たちの戦闘訓練模様を見ながら、戦闘訓練教範の中でわが国の実情に合わない内容は現実に即して改め、すべての訓練をチュチェ戦法の要求どおり行うよう導いた。

また、訓練において戦闘性の原則をしっかり具現するようにすることにも深い関心を払った。総書記は前線視察の途中、某海岸砲兵区分隊の訓練模様を見て、海岸砲兵の訓練では命中率を高めること

が基本だと教えた。

総書記は、人民軍の武力装備を近代化することにも深い関心を払った。

すべての部門、すべての単位が人民軍の強化と国防工業の発展に必要なものを優先的に供給する措置をとるとともに、国防工業部門の科学者と労働者、技術者をしばしば訪ねてより大きな偉勲を立てるよう励ました。これとともに、集団的技術革新運動を繰り広げ、既存の武器をはじめ戦闘技術機材の性能をさらに高め、合理的に改造する活動も積極的に推し進めた。

金正日総書記は、軍紀を強化するよう導いた。

まず、人民軍内の軍紀を一段と強化するため、全軍あげての軍事規定学習を発案し、1996年の初めから数カ月間、集中的な軍事規定学習を行わせ、その後にも軍紀を強化するうえで平壌市駐屯部隊が全軍の模範となるよう指示や方針を示し、それを実行するための活動を強力に推し進めた。

金正日総書記は人民軍軍人の物質・文化生活の改善にも大きな力を注いだ。

国の経済状況が厳しかった「苦難の行軍」の時期にも、軍人に基礎食品を欠かさず供給するようにした総書記は、部隊と区分隊を訪ねては、軍人の兵舎や食堂、主・副食物貯蔵庫などをつぶさに見て回った。

また、現地視察の道すがら、軍人が着用している防寒着の厚さまで確かめ、良質の防寒着や靴をつくって供給する措置を講じると同時に、すべての部隊と区分隊が「兵士の日」を着実に運営し、それぞれ副業を行って軍人の食生活水準を高めるようにした。

総書記は、人民軍軍人の楽天的な文化・情操生活にも深い関心を払った。

人民軍の基本戦闘単位である中隊を拠点として文化･情操生活を活発に行うようにし､現地視察の際には中隊の芸術サークル公演をはじめ娯楽会、バレーボール、バスケットボールの試合なども見ながら、軍人が文化生活を活発に行うよう導いた。そして、全軍の中隊と哨所にアコーデオンをはじめ楽器やテレビ、録音機、カラオケなどの文化娯楽機具とさまざまなスポーツ器材をたびたび送ってよこした。

金正日総書記は、全軍が呉仲洽第７連隊称号獲得運動を力強く繰り広げるようにして､人民軍を領袖決死擁護の銃弾･爆弾の隊伍、無敵の強兵に育てた。

1996年１月１日、朝鮮人民軍指揮メンバーへの談話で「全軍が革命の首脳部を決死擁護する今日の第７連隊になろう！」というスローガンを示し､このスローガンを貫徹するための新たな大衆運動として呉仲洽第７連隊称号獲得運動を発起した。

呉仲洽第７連隊称号獲得運動は､抗日革命闘争の時期､革命の司令部を命を賭して守った第７連隊の模範を見習って朝鮮革命の首脳部を断固擁護するための新たな高い形態の大衆運動である。

総書記はこの運動を人民軍の軍事・政治活動の総体的方向とし、これを党委員会あげての活動として推し進めるようにする一方､各単位を現地で指導しながら軍人を励まし､この運動が着実に進められるよう導いた。

その結果、人民軍では「偉大な金正日同志を首班とする革命の首脳部を生命を賭して守ろう！」というスローガンが高く掲げられ、

軍人の政治的･思想的品格と闘争気風には一大革新がもたらされた。そうして、1997年２月12日、朝鮮人民軍の某軍部隊に呉仲洽第７連隊称号を授与するという朝鮮労働党中央軍事委員会の命令が下達され､この軍部隊は初の呉仲洽第７連隊称号を受ける栄誉を担った。

金正日総書記の指導のもとに人民軍は、革命の主力部隊、国の柱としての使命と役割を果たすことができるようになった。

第４節　朝鮮式社会主義の政治的・思想的基盤を固めるために

金正日総書記は、朝鮮式社会主義の政治的・思想的基盤を打ち固めることをチュチェの社会主義偉業を最終的に完遂するためのかなめの問題と見なし、これを賢明に導いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会主義を守り勝利に導くためには、思想活動を強化しなければならない。人民大衆を社会主義思想で武装させ、社会主義の思想的基盤を固めてこそ、社会主義を強化し発展させ、いかなる狂風に見舞われても社会主義を固く守り通すことができる」

社会主義の変質は思想の変質から始まり､思想部門が崩れれば社会主義のすべての部門が崩れ､しまいには社会主義そのものを台無しにしてしまう。これは､いくつもの国での社会主義の挫折がもたらした最も深刻な教訓である。

思想活動を強化して社会主義の思想的基盤を固めることは､特に

帝国主義者が朝鮮式社会主義制度を内部から崩壊させようと思想的・文化的浸透策動を執拗に強化している状況のもとで、さらに切実な要求となった。

金正日総書記は、朝鮮式社会主義の思想的基盤を一層打ち固めた。

まず、社会主義思想・理論を擁護し、現実発展の要求に即してさらに深化発展させる活動に大きな力を注いだ。

総書記は、『社会主義は科学である』『思想活動を優先させるのは社会主義偉業の遂行にとって必須の要求である』『革命と建設において主体性と民族性を固守するために』をはじめ数多くの著作を執筆して発表した。

総書記はこれらの著作で、社会主義の科学性と真理性、不敗の生命力を論証し、一部の国で社会主義が挫折した原因を社会主義理念と社会主義制度そのものに求めようとする帝国主義者とその手先の反動的な詭弁に決定的な打撃を与えた。そして、最も優れた人民大衆中心の朝鮮式社会主義を強化、発展させ、社会主義偉業を最終的に完遂するうえでのすべての理論的・実践的問題をチュチェ思想と革命的領袖観の原理に基づいて解明した。

総書記は、チュチェの社会主義思想・理論の純潔を固守し、それをさらに輝かせるためにチュチェ思想の研究と宣伝活動を強化することにも深い関心を払った。

1996年７月26日、朝鮮労働党中央委員会理論誌『勤労者』に寄せた談話『チュチェ哲学は独創的な革命哲学である』をはじめ多くの著作と談話で、チュチェ思想の研究と宣伝において現れている偏向や原因を明らかにし、社会科学の研究と理論・宣伝活動で主体的な立場と方法論を堅持すべきだと強調した。

総書記は､人民大衆を社会主義思想で武装させるための思想教育活動を強化することにも大きな力を注いだ。

総書記は､労働者階級の党は社会主義偉業を遂行するための正しい指導思想と指導理論を打ち出すこととともに､それをもって人民大衆を武装させるための教育活動に力を入れるべきだと指摘した。

思想教育の内容を複雑な国際情勢と朝鮮革命発展の要求に即して深めることに深い関心を向けた総書記は､党員と勤労者の間で偉大性教育、忠実性教育、信念教育を強化することを重視し、この活動を着実に行うよう導いた。

こうして､党員と勤労者に党と領袖の偉大さをより深く認識させたうえで、金日成主席と金正日総書記に忠義を尽くすことを革命的信念､道義として身につけるようにする教育が強化されるようになった。

総書記は､チュチェ思想教育を党の思想活動の基本としてとらえ､党員と勤労者の間でチュチェ思想の原理教育を引き続き強化し､彼らがチュチェの革命的世界観を確立してチュチェ思想の要求どおりに生き働くようにした。

総書記は、複雑な情勢に対処して党員と勤労者の間で、必勝の信念と難関克服の精神を植え付けるための教育を一段と強化するようにした。

1996年１月14日、党中央委員会の責任幹部たちに「今日のための今日を生きるのでなく、明日のための今日を生きよう」というのが自分の人生観であり、革命家が持すべき信念、胆力だとし、信念教育を強化するよう強調した。また､1997年２月17日と同年３月５日をはじめ機会あるたびに､革命的信念と良心は革命家と背信

者を分かつ基本表徴に、試金石になるということを強調し、幹部と党員の間で革命的信念と信義を重んじる教育を強化するようにした。

総書記は、革命伝統教育を深めることにも大きな力を注いだ。

1995年１月、金日成主席が「解放の千里の道」を歩んだ70周年に際して行われる全国の高等中学校生徒の踏査行軍をはじめ、学生・生徒と勤労者の間で革命戦跡、革命史跡を通じての革命伝統教育をさらに強化するようにした。

総書記は、反帝・反米教育、階級的教育を引き続き強化するようにした。

1994年12月10日、党員と勤労者、特に次世代の間で階級の敵に対してはいささかの幻想も抱かないように階級的教育を強化するよう強調した。特に、1998年11月22日、信川（シンチョン）博物館を現地指導した際、この博物館を反米意識を高める重要な拠点に、階級の敵に対する憎悪心と闘争精神を高める重要な階級的教育の拠点にすべきだと強調した。そして、平壌と各地方の都市に階級的教育館を、各級学校、工場、企業、農村の里には階級的教育室を新設してそれを通しての階級的教育を強化するようにし、アメリカ帝国主義の武装情報収集艦「プエブロ」号を平壌の大同江畔につなぎとめて反米教育に利用するようにした。（現在は祖国解放戦争勝利記念館に展示されている）

総書記は、党員と勤労者を社会主義的愛国主義で教育することにも深い関心を払った。

人民に社会主義的愛国主義精神と朝鮮民族第一主義の精神を深く植えつけるため、朝鮮史を正しく体系化して広範に宣伝し、人民的で健全な民俗資料を発掘、整理して今日の現実に即して発展させ

ていくようにした。これとともに、自分の住んでいる村や職場、国土をより立派に整備するための実践活動の過程で、社会主義祖国を熱烈に愛する感情が強くはぐくまれるよう導いた。

総書記は、思想活動が当時の苦難と試練にうちかつ動力となるようにした。1996年12月をはじめ数次にわたり、軍隊が火線宣伝、火線鼓舞活動をするように、幹部が大衆の中に深く入って彼らと苦楽をともにしながら、大衆の胸を打つ政治活動をするよう強調した。また、1997年５月には、全国の芸能宣伝隊と機動芸能宣伝隊の生産鼓舞活動を現実発展の要求に即して革新する措置をとって、生産鼓舞活動を軍隊でのように火線式に行うようにした。これとともに、人民軍が利用している卓上教育カードを社会のすべての部門、すべての単位に一般化させて、党思想活動に生新の気を吹き込んだ。

総書記は、大衆を社会主義思想で武装させるための思想教育活動を、非社会主義的傾向を一掃する活動と密接に結びつけて進めるようにした。

総書記は、帝国主義者が資本主義思想と生活様式をはびこらせるために思想的・文化的浸透策動をかつてなく強化している状況下で、それが浸透するルートを徹底的に遮断するとともに、内部に現れるささいな傾向に対してもそのつど徹底的に一掃するようにした。

こうして、思想活動はさらに深化するようになり、社会主義の思想的基盤は一層強固なものになった。

金正日総書記は、党をしっかり固め、革命隊伍の一心団結をさらに強化する活動に大きな力を注いだ。

総書記は、金日成主席の革命偉業を断固擁護し、あくまで完成していくためには、党をしっかり打ち固め、領袖、党、大衆の一心

団結を強化しなければならないと強調した。

まず､党をしっかり打ち固めるための活動を積極的に推し進めた。

総書記は1995年10月２日に発表した著作『朝鮮労働党は偉大な領袖金日成同志の党である』で、主席がチュチェの党建設偉業を切り開き導いてきた過程で築き上げた業績を守り､輝かせていくことによって、党を永久に栄えある金日成同志の党として強化、発展させるための課題を示した。

そして主席の革命思想を固く守り、立派に具現し、主席が築き上げた党の統一団結を瞳のように守り、よりしっかり固め、党と人民の血縁的つながりを一段と強化し､全社会の一心団結を絶えず強化､発展させなければならないと強調した。

総書記は､党内に唯一思想体系と唯一的指導体系を確立する活動をさらに深め､全党を一つに固く結束することに引き続き大きな力を注いだ。

すべての党員と勤労者が党中央の唯一的指導下で一糸乱れず動く革命的規律を確立し､全党と全社会に党の路線と政策を無条件に受け入れ､あくまで貫徹する革命的気風を確立するための活動を強力に繰り広げるようにした。

総書記は､党の活動方法と闘争気風に画期的な転換をもたらすため､1997年１月と1998年１月、２回にわたって全党活動家会議を開催し、人民軍の党政治活動気風が全党に確立されるようにした。

総書記は､革命隊伍の一心団結を一枚岩のように固める活動をさらに深化させた。

1994年12月31日、党中央委員会の責任幹部たちに、革命隊伍の一心団結はわが国、わが祖国をより富強にする重大な保証であり、こ

こで重要なのは、全党、全軍、全人民が指導者により忠実に従うようにすることであると強調した。

総書記は、幹部が党の指導により忠実に従うようにすることに大きな関心を払い、抗日革命闘争の時期に金日成主席を仰いで革命の道を変わることなく歩んできた抗日革命闘士の気高い革命精神を見習い、良き日にも厳しい日にも変わりなく党に従ってあくまでたたかっていくよう導いた。

そして、機会があるたびに金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）、金策（キムチェク）、崔賢（チェヒョン）など抗日革命闘士の気高い模範について語り、すべての幹部が指導者への彼らの絶対的な信頼と高潔な人生観を見習うよう強調した。そして、幹部が実際の活動と生活において闘士たちの忠実性の模範を具現するために大いに努力するよう導いた。

また、幹部だけでなく、すべての党員と勤労者が、朝鮮革命の各年代に指導者に心から忠義を尽くしてきた典型、特に指導者への清らかな忠誠心を抱いて自分の持ち場をしっかり守っている90年代の典型、時代の英雄の模範を大いに見習うようにした。

総書記は、同志愛と革命的信義によって指導者と戦士との渾然一体を一層強固なものにした。

民族最大の痛恨事で全国が悲しみに沈んでいた時期にも、抗日革命闘士の健康問題に深い関心を払い、彼らが革命の道を変わることなく歩むように気を配り、愛国烈士陵を新しく建設して世を去った愛国烈士を生前の影像で永生の丘に立たせた。また、党と領袖を仰いで忠実に働いてきた人たちを大いに押し立て、先立った英雄戦士や革命戦士の遺族が革命の道で誇り高く生きていくよう導いた。

総書記は、全社会に社会主義的道徳気風を確立することにも大き

な力を注いだ。

1996年２月26日、党中央委員会の責任幹部への談話をはじめ多くの著作と談話で、全社会に社会主義的道徳気風の確立が持つ意義とその貫徹のための具体的な課題を示した。

総書記は、党と領袖への忠実性教育だけで社会主義的道徳教育がスムーズになされるものと思う幹部たちの観点を正し、礼儀・道徳と公衆道徳をはじめ革命家が身につけるべき道徳の範囲を包括して道徳教育の内容を正しく定め、それに基づいて社会主義的道徳教育をさらに深めていくようにした。

特に、育ち行く新しい世代に対する社会主義的道徳教育を強化するために、学校で社会主義的道徳課目の教育内容を正しく設定し、全社会的に社会主義的道徳教育を強化する画期的な措置をとった。

そして、社会と集団、同志のためにすべてを捧げる美風を広く宣伝し、全社会に健全な社会主義的道徳気風がみなぎるようにした。

総書記は、幹部が人民への献身的な奉仕精神をもって人民のためにすべてを尽くして働くよう導いた。

総書記は幹部が「全党が大衆の中へ！」という党のスローガンを高く掲げて大衆の中に深く入り、大衆を教え大衆に学び、大衆の革命的熱意と創造的積極性を呼び起こして負わされた革命課題を実行する革命的で人民的な活動態度を身につけるようにした。そして幹部の間で、謙虚でおおらかな性格を持ち、質素で清廉潔白な生活をする気風を確立するため、彼らに対する思想教育を絶えず強化するようにした。

こうして、すべての幹部が人民の真の忠僕としてよりしっかり鍛えられ、党の崇高な仁徳政治が実現され、党と革命隊伍の一心団結

は一層強固になった。

総書記は、軍民一致の思想を具現することによって、全社会の一心団結を一層強固にした。

軍民一致とは、革命的軍人精神に基づいて軍隊と人民の思想と闘争気風の一致を成し遂げるということを意味し、これは朝鮮において社会の根源をなす。

総書記は1998年２月22日、人民軍指揮メンバーへの談話と同年３月29日、軽喜劇『手紙』を見た際の談話で、軍民一致思想の本質的内容とその地位を新たに規定し、人民軍が軍民一致を成し遂げるうえで主動的役割を果たすようにした。そして、党の軍民一致思想を実現することを各級党組織の重要な課題の一つとし、それを実現するための大衆運動を着実に展開するようにした。これとともに、軍民一致をテーマにした軽喜劇『手紙』をより多くの軍人と人民に観覧させ、その効力を発揮させる運動を広範に進めるようにした。

この過程で、人民軍を肉親のように愛しいたわり、支援する気風がいつにもまして高く発揮され、軍隊と人民の血縁的つながりは一層強固なものになった。

金正日総書記の指導によって、社会の一心団結が一層強まり、朝鮮式社会主義の政治的・思想的基盤はさらに強化された。

第５節　帝国主義者の孤立・圧殺策動を粉砕するために

金正日総書記は、帝国主義者の対共和国孤立・圧殺策動を粉砕し、朝鮮式社会主義を守るためのたたかいを賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わたしは金日成同志の遺志を体し、人民軍を掌握して先軍政治を敷き、最も厳しかった『苦難の行軍』と強行軍の時期に、帝国主義者の対共和国圧殺策動を粉砕してわれわれの社会主義制度を守り抜き、国と民族の運命を守護しました」

1990年代の中期に入り、共和国を孤立・圧殺しようとするアメリカをはじめ帝国主義反動勢力の策動はその極に達した。

金正日総書記は、祖国の神聖な空と地、海で強行される敵の無謀な武力挑発策動に仮借ない懲罰を加えるようにした。1994年11月19日、人民軍指揮メンバーに、敵は表面では「平和」と「協力」について喧伝しているが、彼らの本心はいささかも変わっていない、人民軍では、アメリカ帝国主義者と日本軍国主義者、南朝鮮反動勢力に対して革命的警戒心を高め、軍人に対する思想教育をさらに強めて、敵の策動から社会主義を最後まで守り通さなければならないと述べた。

その後にも人民武力部の責任幹部たちに、対話の幕裏で推進している敵の戦争挑発策動を示す諸々の軍事・政治情勢資料を送り、前線の指揮官たちに電話をかけて状況を確かめ、全軍が革命的警戒心を高めて祖国の空と地、海の前哨の防備を固めるようにした。

1994年12月17日、人民軍は前線東部の軍事境界線を越境して共和国の領空に不法侵入した米軍ヘリコプターを一撃のもとに撃墜した。

その日、総書記は人民軍指揮メンバーたちに、人民軍が今回アメリカ帝国主義侵略者にわれわれの気概をしかと示した、これは、いかなる敵もわれわれの領土と領空、領海を侵すならば絶対に許さないという宣言が決して空言ではないことを実際の行動によって示

したものであり、朝米会談の幕裏で共和国に対する新たな戦争挑発策動を強行しているアメリカ帝国主義侵略者に対する断固たる懲罰である、と言明した。

アメリカは1994年12月28日、大統領の特使を平壌へ送り、彼らの不法侵入行為を公式に謝罪し、今後このような事件の再発を防ぐ措置を取ることを公式に保証する「了解覚書」に署名した。

総書記は1995年９月13日、351高地一帯の某前哨を訪ね、祖国解放戦争の時期に351高地の戦闘員たちは金日成主席の命令を奉じ、最後の血の１滴まで捧げて戦った、英雄戦士たちが血をもって守り通した祖国の１木１草、領土の0・001ミリも敵があえて侵犯できないようにしなければならない、と強調した。

1997年７月中旬、前線中部の軍事境界線で正常な巡察勤務に当たっていた人民軍前哨の軍人たちに向けて敵が不意に射撃を加える武力挑発を起こした時、前哨の軍人たちは即時反撃を加えてまたたく間に敵の憲兵軍営を木っ端微塵にし、多数の敵兵を殺傷した。

金正日総書記は、アメリカ帝国主義の軍事演習と戦争挑発策動をことごとく粉砕した。

1996年初に入り、アメリカと南朝鮮当局は情勢を極度に激化させた。敵は正月に、米海軍の主力核潜水艦を引き入れて連合対潜水艦訓練を行い、ついで２月にも大規模合同軍事演習を行い、３月28日からは「護国96」陸・海・空軍合同戦争演習を強行した。時を同じくして、米国防長官はいわゆる「年次防衛報告書」で、「アメリカの死活的利益を危うく」する脅威を抑止するにとどまらず、「戦って勝利しなければならない」と暴言を吐き、南朝鮮の反動勢力もこれに調子を合わせて、南北関係の問題は「軍事力による解決のみ

が可能である」とほざいた。ひいては、天災による朝鮮の経済的難関を戦争挑発の絶好の機会と見なして情勢を戦争瀬戸際に追い込んだ。

こうした時期の1996年３月末、総書記は人民武力部第１副部長の談話を発表させた。

３月29日のこの談話では、火には火をもって、棍棒には棍棒をもって治めるのがわが軍隊の気質だとし、人民軍は南朝鮮反動勢力があえて祖国の寸土、一木一草でも侵すならば、強力な自衛的措置をとって粉砕するであろう、と宣言した。結局、朝鮮の経済的難関を奇貨に新たな戦争を引き起こそうとしていた敵の企みは腰くだけに終わってしまった。

しかしアメリカは、1998年に入ると、朝鮮の人工衛星打ち上げを弾道ミサイル発射だと強弁し、「地下核施設疑惑」を喧伝しながら、共和国を侵略するための戦争挑発策動に再び熱を上げた。敵は、去る朝鮮戦争で喫した惨敗を「復讐」するという、いわゆる第２の朝鮮侵略戦争計画である「作戦計画5027」の内容を第３国の出版物に公開し、それを発動して共和国に対する封じ込め作戦に入った。

1998年11月22日、総書記は朝鮮人民軍指揮メンバーに、アメリカ当局があえて「作戦計画5027」を公開している本音を知らせ、「作戦計画5027」の侵略的性格を暴露する声明を発表させた。

こうして、1998年12月2日、朝鮮人民軍総参謀部スポークスマンの声明「わが革命武力はアメリカ帝国主義侵略軍の挑発に仮借なきせん滅的打撃で応えるであろう」が発表された。

声明は、アメリカ帝国主義が作成し本格的な実行段階に入った「作戦計画5027」の具体的な内容とその侵略的性格をあばき、アメ

リカ帝国主義が「対話」と「協商」の仮面を脱ぎ捨て、情勢を戦争瀬戸際に導いている今日の重大な状況に対処して、わが革命武力は、アメリカ帝国主義侵略軍の挑発に仮借なきせん滅的打撃で応えるであろうということを宣言した。声明は発表されるやいなや世界を震撼させ、アメリカはそれに対し一言の釈明もできなかった。

金正日総書記は朝米基本合意文が採択された後、その履行にかかわる対米外交戦を賢明に導いた。

朝米基本合意文では、朝鮮が黒鉛減速炉とその関連施設の凍結と解体、非核化意志の表明、核拡散防止条約（ＮＰＴ）への復帰を保証する代償として、アメリカは2003年までに総200万キロワット発電能力の軽水炉発電所の提供と、毎年50万トンの重油納入、貿易及び投資障壁の緩和と連絡事務所の設置、国交樹立などを公約した。

朝米基本合意文の採択により、アメリカは朝鮮の自主権を尊重し、彼らに負わされた国家的及び国際的義務を免れることができなくなった。しかしアメリカは、朝米基本合意文の履行を放棄するためあらゆる術策を弄した。

総書記は主動的に核活動凍結措置をとるようにし、1994年10月30日、政務院決定で核施設に対する凍結措置を早速公表するようにした。

朝鮮民主主義人民共和国政務院は、同年11月初から５メガワット試験原子炉の稼働を中止し、それに対する国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の監視を許容し、５万及び20万キロワット発電能力の黒鉛減速炉の建設を中止するなど、核エネルギー施設を即時凍結する措置を講じたことを公表した。

外交部（当時）スポークスマンは11月１日、朝鮮が主動的に核活

動の凍結措置を講じたことを内外に公表し、その後再び、条約上の要求を上回る核活動の全面的凍結を行ったということ、そして国連とＩＡＥＡが朝米基本合意文を支持賛同して相応の履行措置をとることによってこの合意文は朝米双方の範囲を超えた一つの国際公約になったということを明らかにした。

同時に、５メガワット試験原子炉の燃料棒保管に関する協商など、各分野の専門家協議を行うことを提案した。

共和国の連続的で主動的な措置は、米国政府をして朝米基本合意文の履行に応ぜざるを得なくした。クリントン政府は、朝米基本合意文に従って初年度分の重油15万トンのうち、まず５万トンを1995年１月までに納入した。

総書記は、朝米基本合意文の核心をなす軽水炉提供に関する公約を実現させるための対米外交戦を引き続き推進させた。

軽水炉の提供を実現させるための対米外交戦において最も鋭い問題として取り上げられたのは、アメリカの責任を明確にすることであった。アメリカは、1995年３月、アメリカと南朝鮮、日本が参加する国際連合体「朝鮮半島エネルギー開発機構」（ＫＥＤＯ）を設け、手先を押し立てて自分の責任を逃れようとした。南朝鮮傀儡はこの機会に、軽水炉の「生殺与奪の権」を握ろうという心算で、愚かにもありもしない「韓国型」軽水炉について云々し、軽水炉の提供において自分たちが「代表」の役を演じようとした。

1995年５月19日から６月12日にかけて、マレーシアで朝米政治会談が開かれた。

会談では、アメリカが朝米基本合意文に基づき、軽水炉提供実現の全過程に全的な責任を負うことが再確認され、アメリカ主導のＫ

ＥＤＯは軽水炉発電所の建設資金と設備を提供するだけで、朝鮮民主主義人民共和国の相手はアメリカであり、したがって総決算もアメリカとだけ行うということを明白にした朝米共同コミュニケが採択、発表された。

日本の某新聞はこの会談の状況を評しながら、「クリントン政府は北朝鮮の要求を文句なしで受け入れた。平壌は戦争をせずに勝利した」と報じ、アメリカの某新聞も「アメリカと南朝鮮は、北朝鮮という小さい国が引きずり回して圧力を加えてもこらえるしかないようだ」と報じた。

共同コミュニケの発表後、アメリカはＫＥＤＯを発動して1995年12月15日に軽水炉提供に関する協定文に調印し、1997年８月には、軽水炉対象建設のための着工式が朝鮮の琴湖（クムホ）地区の現地で行われた。そしてアメリカは、軽水炉対象建設を終えて鍵を渡す前まで自分たちが実行することになっている代替燃料提供公約に従って重油も引き続き納入した。

金正日総書記は、朝鮮に対するアメリカの不当な経済制裁措置を撤回させるたたかいを賢明に導いた。

アメリカ帝国主義は朝米基本合意文に署名する際、３カ月以内に通信サービスと金融決済に対する制限措置の解消を含めて貿易と投資の障壁を緩和し、漸次双方の政治及び経済関係を正常化することを公約した。しかし、軽水炉をだしにして時間を引き延ばしながら、経済制裁緩和に関する公約条項をどれ一つとして誠実に履行しなかった。経済制裁緩和措置の履行を回避しようと策動したアメリカは、特に人工衛星「光明星—１」号の打ち上げを「弾道ミサイル試験発射」だと騒ぎ立て、制裁解除問題を上程することさえ反対

した。

共和国政府は､数回にわたる実務接触と会談においてアメリカが朝鮮に対する制裁を解除するよう対米外交戦を強力に推し進めた。

こうして、1998年９月17日、朝鮮に対する経済制裁を一部解除すると発表しておきながら､あれこれと口実を設けて時間を延ばしていたアメリカは、2000年６月19日にそれを実行する措置をとった。50年もの間朝鮮を「敵国」と決めつけて経済制裁を加えてきたアメリカは、一般商品の貿易と農業、鉱業など経済分野への投資と、商業用船舶及び飛行機の利用、一部の金融取引を許した。

第６節　人民軍を先頭に立たせて富強祖国建設の跳躍台をもたらすために

金日成主席の逝去後、社会主義建設のための朝鮮人民の闘争の前途には幾多の隘路と難関が横たわった。

アメリカをはじめ帝国主義者は､朝鮮での｢国家元首の空白状態｣について云々しながら、愚かにも内部に何かしら「変化」の兆しを見つけ出そうと躍起になり､共和国に対する政治的･外交的圧力と軍事的威嚇をさらに強化する一方、経済的封鎖を一層執拗に追求した。

また、この時期、いくつもの国で社会主義が挫折し、社会主義市場がなくなったため､朝鮮は主要戦略物資と社会主義建設に必要な一部の原料と資材､設備を資本主義市場を通じて解決しなければならなくなった｡帝国主義者の経済封鎖の中で社会主義経済建設に必

要な原料と資材､設備を資本主義市場に頼って解決するというのは､実に困難なことであった。そのうえ､数年来引き続いた厳しい天災のため､社会主義経済建設のための朝鮮人民のたたかいはなおさら困難に直面せざるを得なかった。

そのため､祖国が解放されて以来半世紀が過ぎた1990年代の中期から、経済建設と人民生活の分野では、言い知れぬ厳しい「苦難の行軍」、強行軍をせざるを得なくなった。

このような厳しい試練の時期に、金正日総書記は人民軍を先頭に立たせて富強祖国建設の強固な跳躍台をもたらすためのたたかいを賢明に導いた。

金正日総書記は、当面の経済的難局を打開するたたかいに、全党、全軍、全人民を立ち上がらせた。

まず､軍隊と人民を奮起させるための組織・政治活動に力を入れるようにした。

民族史上最も悲痛な血涙の年であった1994年を送り､1995年の新年を迎えて全人民に、金日成同志の戦士、金日成同志の教え子らしく、わが国、わが祖国をより富強にするため、われらすべてが一心一体となって奮闘しよう、という親筆書簡を送った。この書簡を受けたすべての人民軍将兵と人民は､さらに固く団結し総書記の指導に従って前進する決意を固めた。

総書記は全人民が「苦難の行軍」の精神をもって生き、たたかうよう導いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「党は現情勢と現実発展の要請に即して、幹部と党員、勤労者が『苦難の行軍』精神をもって生き、たたかおうというスロ

ーガンを打ち出しました」

「苦難の行軍」精神は、金日成主席の指導のもと抗日革命闘争の最も厳しかった時期に、朝鮮革命の命脈を守り、革命の一大高揚をもたらした徹底した革命精神、百折不撓の革命精神である。

総書記は、1996年１月14日、党中央委員会の責任幹部への談話『今日のための今日を生きるのでなく、明日のための今日を生きよう』と、10月14日、党中央委員会の責任幹部への談話『幹部は「苦難の行軍」精神をもって生き、働くべきである』などの談話で、すべての幹部と勤労者が「苦難の行軍」精神をもって生き、たたかうよう強調した。

そして、「苦難の行軍」精神をもって生き、たたかうには、ただ困難に耐えるだけでなく、試練を乗り越えて力強く前進しなければならない、幹部は困難な時ほど、「苦難の行軍」精神をもって生き、たたかおうという党のスローガンどおりに一層奮発し、難しいことであっても手を尽くしてやり遂げるために奮闘しなければならない、と述べた。

総書記は、「苦難の行軍」の時期の要求に即して党活動をより戦闘的に、着実に進めて、大衆を新たな革命的高揚へと奮い立たせた。

1996年12月７日の談話や1997年１月１日の談話などで、党活動家が大衆の中に深く入り、メガホンを手にして火線宣伝、火線鼓舞式で政治活動を行い、大衆を革命的高揚へと奮い立たせるよう強調した。そして、1997年１月には全国党活動家会議の参加者に送った書簡『今年を社会主義経済建設において革命的転換の年にしよう』で、すべての党組織と党活動家が党の思想と方針に従って、党活動を覇気にみちて革命的に、戦闘的に展開して、経済問題と人民生活

の問題を解決するうえで転換をもたらすよう強調した。

こうして、多くの工場、企業が困難な状況にあっても内部の潜在力を大いに探し出し、人民経済計画を超過遂行する成果を上げた。

金正日総書記は、絶え間ない超強度の現地指導によって軍隊と人民を奮起させた。

総書記は、小寒・大寒の寒さと三伏の極暑の中でも、仮寝と握り飯に甘んじ、昼夜兼行の前線視察と現地指導を続けた。

前線と後方の人民軍部隊への引き続く現地視察によって、人民軍の戦闘力を全面的に強化し、祖国の防衛線を鉄壁のごとく打ち固めることにより、人民に確たる勝利の信念を抱かせた。

総書記は都市と農村、工場と企業、発電所建設現場と耕地整理作業の現場など、人民経済各部門への現地指導を通して生産の活性化を促した。

総書記の精力的な現地指導に励まされた軍隊と人民は、折り重なる難関と試練を堅忍不抜の意志をもって果敢に乗り越え、「苦難の行軍」を勝利のうちに締めくくる闘争にこぞって立ち上がった。

金正日総書記は、人民軍の先駆的役割によって厳しい経済的難局を切り抜けるようにした。

総書記は、主席の遺訓貫徹のための重要対象建設をすべて人民軍に任せ、それを所定の期日内に立派に完成させるようにした。

1994年11月９日、朝鮮人民軍最高司令官命令第0051号「平壌市に清流（チョンリュ）橋（第２段階）と錦綾（クムルン）第２トンネルを建設すること」を下達し、党創立50周年を迎えて人民軍にこの建設を終えるようにした。それだけでなく、安辺青年発電所の建設、平壌―香山観光道路の建設、九月（クウォル）山を人民の文化休養地に整備する工事など、重要対

象建設をすべて人民軍が担当して完工するようにした。

総書記は、農業、電力、石炭、鉄道運輸などを国の経済全般を盛り立てる基本部門として定めた。

農業部門に人民軍を派遣することを決心し、1997年３月18日、人民軍が農村支援を積極的に進める措置を講じ、その翌年にも人民軍が国の食糧問題の解決に大きく寄与するようにした。

総書記は、多くの中小発電所の建設を人民軍に受け持たせる一方、1997年10月には北倉（プクチャン）火力発電連合企業所と炭鉱、鉄道運輸部門に多数の除隊軍人を送った。

そして、重要建設対象に軍人を派遣して建設を盛り立てるようにした。

人民軍軍人は、「祖国防衛も社会主義建設もわれわれがみな受け持とう！」というスローガンを掲げて、社会主義祖国の防衛線を確固と守りながら、総書記が気をつかう重要対象に駆けつけ、経済建設の進撃路を先頭に立って切り開いた。彼らは、各建設現場で戦闘的な火線式政治活動と率先垂範によって、社会の幹部と勤労者に革命的軍人精神を示した。

こうした過程で、数多くの工場、企業が原状どおり復旧されて生産を正常化できる軌道に乗り、混乱した経済活動が一つ一つ立て直されるようになった。

金正日総書記は、すべての部門で革命的軍人精神の具現である江界（カンゲ）精神を発揮して、全般的な人民経済の活性化を促すようにした。

総書記は、慈江（チャガン）道で「苦難の行軍」、強行軍を勝利のうちに締めくくるモデルケースを創造した。

自然・気候条件が不利で、かつて道内の経済管理が計画的に進め

られず他より先に「苦難の行軍」を余儀なくされた慈江道を、自力更生して経済を活性化し、人民生活を安定させる模範をつくりだす地域に変えることを決心した総書記は、「苦難の行軍」の当初からこの道の活動に深い関心を向けた。

総書記は、道内の経済状態と人民の生活をつぶさに確かめたうえで、1996年９月、道の責任幹部に、慈江道をモデルとして押し立てようという自身の意図を告げ、頑強に推し進めてみよと励ました。

1997年には、数回にわたって道内の中小発電所の建設状況を確かめて、建設を大々的に推し進めるよう必要な対策を立てた。

慈江道のすべての幹部と勤労者は、総書記の大きな信頼を胸にこぞって立ち上がり、「道は険しくとも笑顔で行こう！」というスローガンを掲げて、「苦難の行軍」精神、革命的軍人精神を発揮し、６カ月余の間にいろいろな形式の数十個の中小発電所を自力で新設もしくは整備・補強して、大量の発電能力をつくり出した。道では、自力で生産した電力で道内の地方産業工場を稼働させ、住宅の照明と暖房問題を解決し、中小発電所の建設と運営の新たな模範をつくり出した。そして誰もがみな、工場、企業や街と村、住宅を文化的、衛生的に整備した。

総書記は、慈江道で達成された成果を確かめるため、1998年１月にこの道を訪れ、数日にわたって各部門の活動を現地で指導した。

総書記は、革命的軍人精神を見習う闘争の過程で慈江道の人民が発揮した革命精神を「江界精神」と名づけ、それを全国が見習うようにした。

慈江道の労働者と人民が生み出した江界精神は、党と人民が最も厳しい試練に見舞われているときに生み出された社会主義防衛精

神であり、新たなチョンリマ（千里馬）大高揚の炎を燃え上がらせた闘争精神である。

それは、金正日将軍がおられればわれわれは必ず勝利するという必勝の革命精神であり、金正日将軍の意図と構想を水火も辞せずあくまで実現していく決死貫徹の精神、無から有を生み出す自力更生、刻苦奮闘の精神であり、困難であるほど笑顔でたたかっていく革命的楽天主義の精神である。

総書記は江界精神を全国に一般化させるようにした。

1998年６月と10月に再び慈江道を訪れ、江界精神の創造者が強盛国家の建設で引き続き先頭に立っていくよう力づけ、中央機関の幹部と道・市・郡党の責任幹部、工場の党書記が慈江道内の工場を見学してその模範を見習うようにさせた。

そして、新聞、放送などマス・メディアに、慈江道人民の自力更生の革命精神と活動態度、これまでの成果と経験を宣伝する記事を集中編集させた。同時に、慈江道人民の革命精神と活動態度、活動経験を一般化させる措置として、全国自力更生模範活動家大会をはじめ全国的な規模の各種会議を催すようにした。

特に、1998年３月９日、城津（ソンジン）製鋼連合企業所の労働者が先頭に立って新たな大高揚ののろし、城鋼（ソンガン）ののろしを上げるよう呼びかけた。

城津製鋼連合企業所の労働者は、従業員決起集会を開き、総書記が火を点じた先軍時代の新たな革命的大高揚ののろし―城鋼ののろしを高く上げて今一度チョンリマ（千里馬）を駆る勢いで社会主義経済建設において革命的大高揚を起こすことを、全国の労働者と勤労者にアピールした。

国中が、城鋼ののろしに応えてこぞって立ち上がった。

革命的軍人精神の具現である江界精神に基づく城鋼ののろしが燃えさかる中で、金属工業、機械工業など人民経済の基幹工業部門を活性化する土台が築かれ、両江（リャンガン）道大紅丹（テホンダン）郡でジャガイモ栽培革命が起こり、黄海（ファンヘ）南道延安（ヨンアン）郡と慈江道長江（チャンガン）郡で２毛作、３毛作の立派な経験が生まれ、江原（カンウォン）道で耕地整理と農業の総合的機械化が促進され、随所にヤギ牧場、家禽飼育牧場や養魚場が建設された。また、総書記が1996年８月11日、党中央委員会の責任幹部への談話『国土管理事業に新たな転換をもたらすために』で提示した課題を受けとめた全国の軍隊と人民は、国土管理事業にこぞって立ち上がり、国土の面目は一新されるようになった。

金正日総書記の指導により、「苦難の行軍」の試練の中でも、軍隊と人民はただ困難を耐え抜くことにとどまらず、必勝の信念と堅忍不抜の意志を発揮して逆境にめげず頑強な闘争を展開して経済的難局を切り抜け、富強祖国建設の強固な跳躍台をものにした。

第７節　社会主義文化建設に革命的転換をもたらすために

全国が「苦難の行軍」、強行軍をしていた困難な状況の中でも、金正日総書記は社会主義文化建設に転換をもたらすための活動を賢明に導いた。

金正日総書記は国の科学技術を発展させるための活動を指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが国、わが祖国をさらに富強にするためには、科学技術を早急に発展させなければなりません」

総書記は全社会に科学重視の気風を確立するために力を尽くした。

まず、幹部から科学技術に対する正しい立場と観点に立って科学技術を発展させるための事業を責任を持って指導するようにした。また、幹部が科学技術発展の直接的担当者であり主人である科学者、技術者の活動と生活に深い関心を払うようにした。そして、科学者、技術者の間で思想教育を強化して、彼らを主体性の強い知識人に育て、科学研究活動で主体性を確立することに大きな力を入れるようにした。

総書記は、科学者、技術者の研究活動条件を十分に保障するため、科学研究基地を現代科学技術発展の趨勢に即して強固に築き、特に科学地区を2000年代にも遜色がないように建設するようにさせ、全国が取り組んで科学地区の建設を進めるようにした。

また、科学技術を人民経済に優先させる原則で科学研究部門に対する国家的投資を増やし、科学研究活動に切実に必要な実験設備と資材、試薬などを適時に供給するようにした。そして、科学者、技術者が科学研究活動に専念できるようにする措置を取り、彼らを社会的に押し立て、優遇する気風を打ち立てるようにした。

総書記は、国の科学技術を急速に発展させるための対策を講じた。

1995年４月、国家科学院を現地指導して、科学研究活動を改善し、科学技術を世界的水準に引き上げるための指針を示した。

また、1995年９月、全国のすべての科学研究機関に対する行政的指導体系を正しく確立するようにし、科学技術に対する審査、評価とその導入を正しく行うための整然たる体系を確立した。そして、

実力を基本として老・壮・青を適切に結合して科学者、技術者陣容を固め、外国との科学技術交流と科学技術情報活動を強化するための諸措置を取った。

総書記は1997年４月、科学技術発展５カ年計画（1998年～2002年）を立てる課題を示し、党の革命的経済戦略の貫徹における科学技術上の問題を解決して生産を正常化し、人民生活を向上させるとともに、電子工学、生物工学をはじめいくつかの先端科学分野に力を入れてこれらの部門の科学技術を高い水準に引き上げることをこの計画の中心的課題とするようにした。

総書記は、国の主要科学部門を速やかに発展させるため、コンピュータ部門をはじめ主要科学部門の活動を指導した。プログラム技術を発展させるための方向と方法を示し、科学研究機関に高性能のコンピュータを完備させるとともに、科学研究機関と教育部門、人民経済の各部門でプログラムの開発に大きな力を入れるようにした。そして、全国的なプログラムコンテスト及び展示会をしばしば組織して、プログラムの開発に大きな転換がもたらされるようにし、科学技術資料検索のための全国的なネットワークを形成する課題を示し、その実現のための活動を推し進めるようにした。

その結果、1997年の２月の祝日を迎え、科学者、技術者は科学技術資料検索のための全国的なネットワークの形成を完成する成果を収めた。

総書記は、電子工学と電子工業を新たな高い段階へ発展させ、細胞及び遺伝子工学、熱工学などを発展させるための科学研究活動の具体的な方向と方法を示し、その実現を大いに促した。

また、電力工業、採掘工業、金属工業、機械工業、化学工業、鉄

道運輸、建設建材工業など人民経済の主要部門を発展させるための科学研究活動と軽工業の近代化、水産業の発展など人民生活を向上させるための科学研究活動、そして地質、地理学を発展させるための科学研究活動にも大きな力を入れ、人工衛星情報技術の発展にも深い関心を払った。

総書記の指導によって科学者、技術者は、全国が「苦難の行軍」、強行軍をしていた困難な状況の中にあっても国の科学技術を世界的水準に引き上げるうえで大きな前進を遂げ、1998年８月31日には初の人工衛星「光明星１」号を成功裏に打ち上げた。

金正日総書記は、教育の質的水準を一段と高めるために力を尽くした。

総書記は、各大学が教育事業を強化して、社会主義偉業の達成に寄与する革命的人材を多数養成することは朝鮮革命の差し迫った要請であると指摘した。

1996年10月１日、金日成総合大学創立50周年に際し、教職員、学生に送った書簡『革命発展の要請に即して大学教育を強化するために』と、1996年12月７日、金日成総合大学を現地指導した際の談話をはじめ諸著作と談話で、発展する現実の要請に即して教育事業を決定的に改善、強化するための進路を明示し、チュチェ教育の発展に新たな転換をもたらすための活動を精力的に指導した。

総書記は、社会主義建設の一翼を担う有能な人材をより多く養成できるように教育体系を改善させた。

普通教育部門ですでに1980年代から平壌第１高等中学校と各道都に第１高等中学校を設けて運営する過程で積んだ経験に基づき、1995年７月、第１高等中学校を増設するようにした。

こうして、1995年９月１日から平壌と順川（スンチョン）をはじめ各道に第１高等中学校が新たに開校され、優れた素質と才能を持った生徒をより多く育てることができるようになった。

総書記は、科学者、技術者、専門家の養成においてその量的拡大にのみ偏る偏向をなくし、社会主義建設で実際に役立つ才能のある人材を養成できるように高等教育体系を合理的に整備する措置をとった。

1997年３月18日と1998年９月19日の総書記の指示によって、各単科大学が専門学校体系に転換されたり、他の大学に統合され、金日成総合大学と金策工業総合大学をはじめ科学者、技術者、専門家養成の中心的基地が一層強固になった。そして、専門分野の優れた人材を育てる英才教育体系も整然と確立された。

総書記は、教育内容を有能な人材をより立派に育成できるように全面的に改善させた。

まず、政治・思想教育を最優先させるようにした。政治・思想教育で基本はチュチェ思想教育を着実に行うことであるとし、特に白頭山（ペクトゥ）３大将軍の栄えある革命活動史と金日成主義著作課目の教育を強化し、チュチェ哲学とチュチェ政治・経済学の教育内容を党の思想と意図に即してさらに完成させることに深い関心を払った。

そして、基礎科学知識教育と専門科学技術教育の水準向上に大きな力を入れた。

中等一般教育の段階から数学、物理、生物、化学などの基礎知識教育を高い水準で行うようにするとともに、特にコンピュータ教育を強化するための措置を取った。また、高等教育機関も国の実情と発展する革命の要請に即して科学技術を急速に発展させるのに役

立つ科学技術人材を育てることを原則として科学技術教育を絶えず改善するようにした。

そうして、すべての大学、専門学校で革命と建設を進めるうえで切実に必要な科学技術知識を基本として教育することができるようになった。そして、科学の最新成果と先端技術資料をそのつど敏感に取り入れて学生に教え、すべての大学でコンピュータ教育を一段と強化できるようになった。

総書記は、朝鮮式の優れた教育方法を全面的に具現するための活動を推し進めた。

すべての教育を啓発する方法で行うようにし、直観手段を大いに利用し、討論と練習、実験と実習を強化して、学生に実際の活動に活用できる生きた知識を体得させるようにした。特に、学生に原理を明確に教え、彼らの思考を啓発して学生に自立的に、能動的に真理を体得させる方法で大学教育を行い、実技教育を一段と強化するようにした。そして、教授コンテストと経験討論会、教育展示会などさまざまな形式と方法で先進的な教育方法を積極的に一般化させるようにした。

総書記は教員の役割を強め、学生の間で革命的学習気風を確立することにも深い関心を払った。

教育事業の直接の担当者である教員の責任感と役割を強めるため、科学理論的資質を高める活動を推し進めるようにした。これとともに、教員陣容を老・壮・青を適切に結合する原則で将来を見通して構成し、教員の再教育と後進の育成を着実に行って教員陣容の質的構成を絶えず改善することに大きな力を注いだ。

総書記は、学生の間で学習第一のスローガンをさらに高く掲げ、

学生に対する評価を常に学習を基本にして行うようにした。そして、1997年２月には全国高等中学校7・15最優等賞受賞者大会の参加者に送った祝賀文で、学生青少年の基本的革命課題は学習であるとし、学生青少年は20代、30代に世界的な科学者、創作家、発明家になる抱負と理想を持って学びに学び、また学ばなければならないと指摘した。

金正日総書記は、社会主義文化建設の他のすべての分野でも革新を起こすための活動を賢明に導いた。

まず、チュチェの文学・芸術の発展で大きな成果を収めるようにした。

1996年４月26日、党中央委員会、文学・芸術部門の責任幹部への談話『文学・芸術部門でより多くの名作を創作しよう』で、現段階において党の求める名作は、金日成同志の遺志が込もっている赤旗の精神と「苦難の行軍」精神、明日のための今日を生きようという革命的人生観を具現した作品であるとし、先軍時代が求める名作の創作、普及において提起される原則的問題を明らかにした。

総書記は、革命の柱であり主力部隊である人民軍が先軍時代の革命的文学・芸術の創造と普及において先頭に立つよう導いた。

勲功国家合唱団を思想的、芸術的に完璧な独自の芸術団体として押し立て、前線視察と現地指導の際に率いて行き、党の先軍政治に忠実な戦闘的芸術部隊に育てた。そして、朝鮮人民軍4・25劇映画撮影所（当時）が先軍時代の求める数多くの軍事テーマの劇映画と国宝級の価値を持つ軽喜劇を立派に創作して先軍時代の革命的文学・芸術創造において大きな役割を果たすようにした。これとともに、人民軍部隊を訪れるたびに軍部隊の芸能宣伝隊の公演と中隊の

芸術サークル公演を見､軍人が先軍時代の新しい文化の創造においても先頭に立つよう導き､特に軍人家族芸術サークルコンクールの新しい歴史を創造し、それを伝統化するようにした。

総書記は、文学・芸術部門で革命的軍人精神を大いに見習い、時代の名作をより多く創作するよう導いた。

映画芸術部門でシリーズ劇映画『民族と運命』の労働者階級編をはじめ数多くの傑作を創作させ､社会主義の現実をテーマにした映画も時代の名作として創作させた。

また、叢書『不滅の歴史』の中の長編小説『永生』、叢書『不滅の嚮導』の中の長編小説『歴史の大河』をはじめ小説と、叙事詩『永遠なるわれらの領袖金日成同志』や長詩『主席はいつもわれらとともに』をはじめ詩作品を名作として創作するよう、作品の「種子」も選定し､創作の全過程を指導しながら文学作品の創作に新たな転換がもたらされるようにした。

この他にも音楽、舞踊、美術、舞台芸術など文学・芸術のすべての分野で創作的高揚を起こし、文学・芸術活動を大衆化することにも深い関心を払った。

総書記は国のスポーツ活動の発展にも大きな力を入れた。

まず､スポーツの大衆化の方針をより立派に実行するようにした。

人民の全般的な体力増進のために大衆リズム体操と健康テコンドーを年齢別の特性に即して創作して広く普及し、すべての部門、すべての単位で朝のランニングや中休み体操をはじめ大衆体育活動を日常化し､国家的祝日や休日を利用してスポーツ競技もたびたび組織するようにした。そして、人々の健康と体力増進に良いバスケットボールを広く奨励して､誰もが楽しむ大衆的なスポーツ種目

となるようにすることに深い関心を払った。

総書記は専門スポーツ技術の発展にも大きな力を入れた。

専門スポーツマンの間で思想戦、闘志戦、速度戦、技術戦の方針を貫徹することを基本としてとらえ、スポーツ科学研究活動をさらに深化させ、国際競技で共和国の栄誉をとどろかせる勝算のある種目に力を集中させるとともに、才能のある選手をより多く将来を見通して養成するようにした。

総書記は、生産文化と生活文化を確立することにも深い関心を払った。

陸・海・空軍の数多くの区分隊を現地視察しながら、人民軍を生産文化と生活文化の確立の先頭に立たせ、その模範を全社会が見習うようにした。

金正日総書記の指導により、「苦難の行軍」、強行軍をしていた困難な状況下でも社会主義文化建設のすべての分野で革新的成果が収められ、朝鮮が文化分野でも高い水準に達することのできる確固たる土台が築かれた。

第８節　祖国統一の３大憲章の旗のもとに国の統一を実現し、海外朝鮮人運動を新たな高い段階へ発展させるために

金日成主席が生涯の最後の瞬間まで心血を注ぎ、一生涯何よりも心を砕いてきた問題は分断された祖国を統一することであった。

金正日総書記は、金日成主席の祖国統一遺訓を必ず実現するこ

とを自身の気高い使命とし､祖国統一３大憲章の旗の下に国の統一を実現するために全力を尽くした。

総書記は祖国統一の３大憲章を定式化し､その実現のための原則的立場と方法を示した。

1996年11月24日、板門店にある金日成主席の祖国統一親筆碑を見た際の教示と、1997年８月４日に発表した著作『偉大な領袖金日成同志の祖国統一遺訓をあくまで貫こう』で、金日成主席が示した祖国統一の３大原則、全民族大団結10大綱領、高麗（コリョ）民主連邦共和国創立方案を祖国統一の３大憲章として定式化した。

金正日総書記は次のように述べている。

「祖国統一の３大原則と全民族大団結10大綱領、高麗民主連邦共和国創立案は、金日成同志が偉大なチュチェ思想と祖国統一をめざす闘争の過程で積んだ貴い経験に基づき、祖国統一の根本的原則と方法を全一的に体系化し集大成した祖国統一の３大憲章である」

総書記は著作で、祖国統一の３大憲章に基づき、祖国統一偉業を実現するための党の原則的立場を今一度明らかにしながら､国の統一問題はあくまでも民族自主の原則に基づいて解決し､武力行使ではなく平和的方法によって実現し､連邦制方式に基づいて実現しなければならないと指摘した。

また、３大憲章に基づいて北南関係を改善し、祖国統一の画期的局面を開くための方法を示した。

南朝鮮当局者は外部勢力に依存し､外部勢力と共助すべきでなく､民族自主の立場で同族と力を合わせて外部勢力を排撃する道へ進むべきであると言明した。そして、北南間の政治的・軍事的対決状

態を終わらせ､南朝鮮の社会政治生活が民主化されなければならないと指摘した。

総書記は､祖国統一の３大憲章の旗のもとに民族の大団結によって国の統一を実現するための闘争を賢明に導いた。

1998年４月18日、歴史的な南北朝鮮政党･社会団体代表者連席会議50周年記念中央研究討論会に送った書簡『全民族が大団結して祖国の自主的平和統一を成し遂げよう』で民族大団結の５大方針を示した。

総書記は、民族の大団結はあくまでも民族自主の原則に基づき、愛国･愛族の旗、祖国統一の旗の下に全民族が団結しなければならないと指摘した。そして、民族の大団結を成し遂げるためには、北南間の関係を改善し、外部勢力の支配と干渉に反対し、外部勢力と結託した民族反逆者､反統一勢力に反対してたたかうべきだということと、北と南、海外の全民族が互いに来往し接触し、対話を発展させ、連帯・連合を強めるべきだということを明らかにした。

総書記は､民族の大団結を実現するための闘争を積極的に推し進めた。

まず､北と南の来往と接触、協力と交流を通じて民族的団結をさらに強めるようにした。

総書記は､南朝鮮の各階層の人士が平壌を訪問できる道を大きく開き、彼らと会見した。

総書記が開いた平壌訪問の大路を通じて1995年７月には南朝鮮の統一愛国人士である文益煥（ムンイクファン）牧師の夫人をはじめ数多くの各界人士が平壌を訪問し､1998年６月と10月には南朝鮮の現代グループの名誉会長一行が平壌を訪問し、11月に平壌で催された尹伊桑（ユンイサン）統

一音楽会にソウル演奏団のメンバーが参加したのをはじめ、南朝鮮各階層の人士が共和国を訪問した。

南朝鮮の各階層人士の平壌訪問は、北と南の全人民に朝鮮民族は一つであり、民族の大団結は祖国統一を実現する根本的な方途であるという認識を植えつける重要な契機となった。

総書記は平壌を訪問した南朝鮮の各階層人士に接見し、全民族の統一熱気をさらに高揚させた。

金日成主席の１周忌に際して平壌を訪れた文益煥牧師の夫人である朴容吉（パクヨンギル）女史に会い、高齢の身で万難を排して訪ねてきた行動を高く評価し、金日成主席があれほど願っていた統一のために全力を尽くすという自身の意志を披瀝した。そして、1998年10月30日、平壌を訪問した南朝鮮現代グループの鄭周永（チョンジュヨン）名誉会長一行に接見し、記念写真も撮った。これは南朝鮮各階層の人士に、朝鮮労働党の民族大団結の思想と方針が決して空言ではなく、祖国と民族への愛情を多少とも持っている人であるなら誰とでも手を取り合って統一の門を開いていこうという朝鮮労働党と共和国政府の揺るぎない路線であることを如実に示した。

総書記は、北南間の民間級対話と来往、協力、交流も一層活発に行うようにした。

そうして、南朝鮮の各民間級団体や会社との和解・協力及び交流が推し進められた。

南朝鮮の各民間級団体の代表と各界の人士は傀儡当局の迫害と弾圧にもかかわらず、合法的または非合法的に北半部の当該団体の幹部と会って祖国統一のために民族的和解と団結の雰囲気をつくり出すための協議を真剣に行い、その実現のための一連の来往と交

流を行った。特に、汎青学連（祖国統一汎民族青年学生連合）南側本部の韓総連（韓国大学総学生連合）の代表はほとんど毎年、北半部で行われる祖国統一汎民族青年学生連合の民族統一祭典に参加することで、南朝鮮青年・学生のくじきがたい統一意志を内外に強く示した。

これは、南朝鮮で反統一的・ファッショ的悪法である「保安法」を撤廃させようとする各階層の広範な人民の闘争気運を盛り立て、民族的和解と団結の雰囲気を一層高める重要な契機となった。

総書記は、北と南、海外の３者連帯・連合を実現するための闘争を積極的に推し進めた。

そのために1995年１月、共和国政党・団体連合会議を開き、南朝鮮と海外の政党、団体、各階層の同胞に、祖国解放50周年を契機に民族統一大祭典を盛大に行うことを提案するアピールを送るようにした。

こうして、同年８月13日から15日にかけて祖国解放50周年民族統一大祭典が、北と海外各階層の代表はもちろん、汎青学連の南側本部「韓総連」の代表と南朝鮮の「民家協」（民主化実践家族運動協議会）後援会の会員などが参加した中で盛大に行われた。

総書記は、祖国統一のための３者連帯・連合を実現するうえで汎民連と汎青学連組織の役割を強めることに大きな意義を付与し、汎民連が主管する汎民族大会が北、南、海外の３者連帯・連合を強める重要な契機となるようにした。そして民族最大の痛恨事に見舞われた中でも計画済みの第５回汎民族大会を予定通り開催するようにし、第６回、第７回、第８回、第９回汎民族大会も分裂主義勢力の反統一策動を粉砕し、北と南、海外全同胞の統一意志を込めて成

功裏に行われるようにした。

金正日総書記は、海外朝鮮人運動を新たな高い段階へと発展させるようにした。

1995年５月24日､在日本朝鮮人総聯合会結成40周年に際して総聯と在日同胞に送った書簡『在日朝鮮人運動を新たな高い段階へ発展させるために』で、在日朝鮮人運動を新たな高い段階へ発展させるための課題と方法を示した。

総書記はまず､総聯組織と同胞の間で社会主義祖国への信念を抱かせる教育を一層強化するようにした。

1995年３月２日と10月20日､祖国を訪問した総聯中央常任委員会の責任幹部への談話と1996年１月、祖国で行われる社労青創立50周年記念行事と社労青代表者会に参会した総聯の各代表団に接見した際の教示をはじめ､機会あるごとに総聯の活動家と同胞の間で３、４世代の同胞に対する教育に重点を置き、彼らに社会主義への確固たる信念とチュチェの魂､民族の魂を持たせるための教育を着実に行うよう強調した。そして､1996年10月には平壌音楽舞踊団を日本に派遣して総聯の活動家と同胞に社会主義祖国への信念をさらに強く抱かせるようにした。

総書記は､総聯隊伍の思想的･意志的団結を強化することに大きな力を入れた。

1995年10月中旬､祖国を訪問した総聯中央常任委員会の責任幹部たちに会い､総聯の老革命家の模範を見習って彼らのように総聯の活動を忠実に行うよう強調し､特に総聯中央常任委員会の責任幹部が思想的団結を成し遂げ、互いに尊重し、総聯の活動において提起される諸問題を真剣に討議して見解の一致を見るべきだと指摘した。

総書記は、総聯が同胞大衆との活動を幅広く行うよう導いた。総聯第17回全体大会後、総聯のすべての活動家が同胞大衆の中に深く入って大衆の思想動向を正確に把握し、それに基づいて同胞大衆との活動を綿密に行うようにした。

総書記は、総聯の基層組織を強化することに大きな力を入れた。

そのために、総聯支部委員長を能力のある人でしっかり固めることに特に関心を払うようにし、彼らが社会主義祖国を訪問するたびに毎回会って総聯支部の活動を改善、強化するよう強調した。

総書記は、日本反動勢力と南朝鮮傀儡の反総聯策動を粉砕するためのたたかいを正しく導いた。

1990年代の後半期に入り、日本反動勢力と南朝鮮傀儡は、総聯を分裂、崩壊させようと一層悪辣に策動し、特に1996年を「総聯を崩壊させる年」と定め、いわゆる「参政権」付与という奸策を弄して悪辣に策動した。

総書記は1996年６月、当該部門の幹部に「参政権」付与という術策の本質をあばき、それを粉砕するための具体的な方途を示した。そして、その後にも数回にわたって、祖国を訪問した総聯代表団と訪問団に会い、日本反動勢力と南朝鮮傀儡の反総聯策動を粉砕するよう強調した。

総聯組織は、同胞大衆を自覚させて敵の反総聯策動を粉砕するための闘争に立ち上がらせ、社会主義祖国でも断罪と糾弾の声を高めた。そうして、敵の反総聯策動はことごとく粉砕され、総聯組織は一層強固になった。

総書記は、総聯の強化、発展のために一生を捧げた老世代の幹部を大事にし、次世代も彼らの功労を末永く忘れないようにすること

に気を配った。

1995年５月23日、総聯結成40周年に際して平壌軽工業大学を「韓徳銖平壌軽工業大学」と命名する集いが行われた。そして、総聯と在日同胞が祖国に寄贈したすべての対象に彼らの愛国的な行いが末永く伝えられるように、同胞の名を冠して呼んだり、「愛国」という呼称をつけて呼ぶようになった。

総書記は、総聯の民族教育の発展のために、国の経済状況が困難な状況下でも毎年、巨額の資金を教育援助費と奨学金として送り、1995年１月、兵庫県をはじめ近畿地方で大地震が発生した時には即刻慰問電文と多額の慰問金を送った。

総書記は、全般的な海外朝鮮人運動を民族的愛国運動に発展させるために力を尽くした。

まず、朝鮮人の住むすべての国と地域に同胞組織を結成するようにした。

1990年代の初めに発足した在中朝鮮公民総連合会が1998年４月から発展する現実の要請に即して在中朝鮮人総連合会に発展し、1997年９月には国際高麗人統一連合会の下部組織として極東高統連（極東高麗人統一連合会）が結成された。この他にも、朝鮮人の住む世界のすべての国と地域に同胞組織が結成し強化するための活動が活発に行われるようになった。

総書記は、すべての海外同胞が祖国統一をめざす闘争に積極的に奮起するようにした。

祖国統一は北に住もうと南に住もうと海外に住もうと、朝鮮人の血筋を引いた人であれば誰も度外視できない民族至上の最も差し迫った課題である。

総書記は､海外に住むすべての同胞に自主的な祖国統一方針を深く認識させるための宣伝活動を積極的に行うようにした。そして、祖国の自主的平和統一を必死になって反対し､外部勢力依存と民族分裂を執拗に追求する事大主義的売国奴､分裂主義者の策動とその重大な結果についても具体的な資料をもって明確に認識させるようにした。

こうして、世界各国と地域に分散して住みながら、ただ生業にのみ没頭していた多くの海外同胞が祖国の現実を知り､民族分裂によって半世紀以上もなめている民族の苦痛とその原因について知り、それを終わらせるための統一運動に積極的に立ち上がるようになった。

総書記は､海外同胞組織と汎民連及び汎青学連組織の役割を一段と高めるようにした。

祖国解放と民族分裂50周年に当たる1995年８月15日を契機に､広範な内外同胞の参加の下に祖国統一のための多彩な行事が盛大に行われるようにした。

そうして、1995年８月、北と南の各階層の代表だけでなく、総聯代表団、在中朝鮮公民総連合会代表団、在オーストラリア同胞代表団、在米同胞代表団、在カナダ同胞代表団、汎民連顧問一行、汎民連事務総長である海外本部事務局長､国際高麗人統一連合会代表団､汎青学連海外本部代表団、汎青学連中国地域本部代表団をはじめ、世界各国と地域に住む海外同胞の参加の下に祖国解放50周年民族統一大祭典が盛大に行われた。

総書記は､すべての海外同胞が高い民族的誇りを抱いて民族性を固守し、社会主義祖国を擁護し、祖国の富強発展のために積極的に

奮闘するようにした。

　金正日総書記の指導により、海外朝鮮人運動は朝鮮人の住んでいる世界のすべての国と地域を包括する広範な民族的愛国運動に拡大、発展するようになった。

第９節　著作『社会主義は科学である』を発表、社会主義偉業・反帝・自主偉業を成功裏に前進させるために

　金正日総書記は、金日成主席の逝去後、帝国主義者の反社会主義策動を粉砕し、社会主義偉業、反帝・自主偉業を成功裏に前進させるための闘争を賢明に導いた。

　総書記は1994年11月１日、朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』に論文『社会主義は科学である』を発表した。

　金正日総書記は次のように述べている。

　「わたしは社会主義に反対する帝国主義者と反動勢力に打撃を加え、人民に社会主義は必ず勝利するという信念を抱かせるために、『社会主義は科学である』という論文を発表しました。この論文には社会主義の科学性と真理性が明らかにされています」

　総書記は論文で、多くの国で社会主義は挫折したが、科学としての社会主義は依然として諸国人民の心の中に生きているとし、社会主義は日和見主義によって一時心痛に耐えない曲折を経てはいるが、その科学性と真理性によって必ず再生し、最終的勝利を収めるであろうと言明した。そして社会主義の科学性と真理性、社会主義

を固守し前進させるうえでの原則的問題について全面的に明らかにした。

まず、人民大衆の自主性は社会主義によって実現するとし、個人主義に基づく社会が人間本来の要求である集団主義に基づく社会、人間の自主的本性にかなった最も先進的な社会である社会主義へと移行するのは歴史発展の必然的要求であることを明らかにした。

また、人間に対する最も正確な主体的観点と立場に基づいていることに朝鮮の社会主義の科学性と真理性があるということを解明した。

そして、朝鮮の社会主義は人民大衆に対する主体的観点と立場に基づいているがゆえに、人民大衆に絶対的に支持され信頼される、最も優れた威力ある社会主義であることを明らかにした。

論文の最後の部分で人間本位の社会主義、人民大衆中心の社会主義は最も科学的で最も優れた、最も威力ある社会主義であるとし、社会主義はその科学性と真理性によって必ず勝利すると強調した。

世界の革命的人民はこぞって、総書記の論文『社会主義は科学である』は総書記の政治綱領、「現段階における世界の社会主義運動の指針」「進歩的人類が堅持していくべき革命路線」であると賛辞を惜しまなかった。

金正日総書記は、チュチェ思想に基づく社会主義運動の再建と反帝自主偉業を成功裏に前進させるためのたたかいを精力的に指導した。

総書記は、チュチェ思想に基づいて社会主義運動を再建するための革命的党と人民の闘争を積極的に鼓舞激励し、誠心誠意支援するようにした。

そうして、金日成主席と総書記の著作が数カ国語で翻訳、出版され、広く普及された。特に、著作『社会主義は科学である』は、発表されてから３カ月余りの間に世界各国210余の報道・出版物に掲載、紹介され、60余カ国で220余回にわたってセミナー、講演会、会読会、説明会などさまざまな形式と方法で研究、普及された。

総書記は、チュチェ思想信奉者の国際的な討論会を通じてチュチェの社会主義思想・理論を広く宣伝、普及するようにした。

1995年２月、デンマークの首都コペンハーゲンでは各国政党の党首、代表団と代表、社会団体、チュチェ思想研究組織の代表団と代表、学界、出版・報道界の人士の参加の下に世界の自主化に関するチュチェ思想国際討論会が行われ、ここでは総書記の著作『社会主義は科学である』を討論会の公式文書として採択した。

国際討論会はこのほかにも、1996年２月、ロシアの首都モスクワで催された自主、平和、親善に関するチュチェ思想国際学術討論会、同年４月、エクアドルのクエンカで催されたラテンアメリカの自主的発展のためのチュチェ思想国際討論会をはじめ世界各地で数回にわたって行われた。

チュチェの社会主義思想・理論が集大成されている著作の出版、普及とチュチェ思想国際討論会は、世界の革命的人民をチュチェの真理で武装させ、チュチェの社会主義理論に基づいて社会主義運動を再建するための彼らの闘争を力強く鼓舞激励するうえで大きな意義を有するものであった。

総書記は、社会主義偉業のためにたたかう世界各国の革命的党と革命家の闘争を誠心誠意支援するようにした。

ソ連式の社会主義が多くの国で挫折した後、チュチェ思想と朝鮮

式の社会主義に憧憬を抱き、朝鮮の党建設と社会主義建設の経験を見習おうとする革命的党が急激に増え、社会主義が挫折した国では社会主義の再建をめざしてたたかう政党、団体が数多く出現した。

こうした現状をかんがみて、朝鮮労働党代表団は多くの国を訪問し、それらの国の共産党をはじめ革命的党との活動を積極的に行った。

朝鮮労働党代表団は、それらの国の革命的党の党大会と諸政党が共同で主催する党建設経験討論会などの国際的な会合に参加してチュチェ思想と朝鮮労働党の建設理論と経験を説明し、社会主義をめざす彼らの闘争に全的な支持と連帯を表した。

総書記は一方、社会主義再生のためにたたかう世界各国の政党の指導者と個々の人士を招いてチュチェ思想が具現された朝鮮の社会主義の現実を実見させた。

こうして、社会主義が挫折した国の多くの左翼政党の党首や代表団、革命家が朝鮮を訪問して党建設と社会主義建設の経験を目の当たりにし、社会主義偉業の正当性をさらに強く確信するようになった。

総書記は、反帝・自主偉業を成功裏に前進させるための闘争を賢明に導いた。

アメリカ帝国主義を頭とする帝国主義者が「グローバル化」「一体化」の美名の下に他の国と民族の主体性と民族性を抹殺し、彼らを同化させようと悪辣に策動している状況下にあって、帝国主義、支配主義に反対し、自主性を擁護してたたかうのは人類の自主偉業の勝利のために格別重要な問題として提起された。

総書記は、帝国主義者の「グローバル化」「一体化」の策動を粉砕し、国と民族の自主性を固守する思想的・理論的武器をもたらす

ために1997年６月19日、著作『革命と建設において主体性と民族性を固守するために』を発表した。

著作は、帝国主義者の「グローバル化」「一体化」の詭弁の反動的本質をあばき、それを排撃するための闘争で堅持すべき原則と課題、方法を完璧に解明した。

総書記は著作で、革命と建設において主体性と民族性を固守することは、社会主義偉業をその自主的本性と歴史的、現実的状況に即して遂行していくための原則的要求であり、国際的団結と連帯を強化し、世界革命運動の発展に真に寄与する必須の要求であることを明らかにした。

また、愛国愛族の立場を守るのは、革命と建設において主体性と民族性を堅持するための前提条件であり、民族自主の原則で革命と建設を自らの方式で進めるのは主体性と民族性を固守するための基本的要求であると指摘した。そして、主体的力量を強化することは主体性と民族性を固守するための闘争であることを明らかにした。

そして、帝国主義、支配主義に反対してたたかうためには、帝国主義に対する幻想と恐怖心をなくし、世界の進歩的人民の国際的団結と協力を強化しなければならないとし、そのための具体的方法を示した。

総書記は、非同盟運動を反帝・自主の政治勢力に強化、発展させることに大きな力を注いだ。

総書記は、バンドン会議40周年行事が非同盟運動の発展に尽くした金日成主席の業績を輝かし、いかなるブロックにも加わらず、自主的に進むこの運動の根本的原則を固守し、統一団結を示威する重要な契機となるよう導いた。また、1995年10月、コロンビアの地

方都市カルタヘナで行われた第11回非同盟諸国首脳会議と、1998年９月､南アフリカの地方都市ダーバンで開かれた第12回非同盟諸国首脳会議がこの運動の根本理念と根本的原則に基づいて行われるようにした。

金正日総書記の指導により、朝鮮労働党と朝鮮人民は「苦難の行軍」、強行軍をしていた困難な状況下でも、反帝・自主のための闘争を力強く繰り広げ､その過程で共和国の国際的権威と威信はさらに高まるようになった。

第８章　先軍の旗を高く掲げて社会主義強盛国家を建設するために
（1999年１月～2011年12月）

第１節　社会主義強盛国家建設路線を提示

金正日（キムジョンイル）総書記は社会主義強盛国家建設路線を提示し、それを実現するための闘争を賢明に指導した。

社会主義強盛国家を建設するのは金日成（キムイルソン）主席の遺志であり、金正日総書記の確たる決心であり、朝鮮人民の理想であり闘争目標である。

金正日総書記はかつてその類例を見ない「苦難の行軍」、強行軍のさなかに、強盛国家を建設するための準備を整えた。

金日成主席の遺志を体して1994年12月31日、党中央委員会の責任幹部への談話『金日成同志の遺志を継いで、わが国、わが祖国をさらに富強にしよう』と、1995年１月１日、新年を迎えて全人民に送った直筆の書簡で、富強祖国を建設する意志と決意を内外に明らかにした。

総書記は人民軍の強化に第一義的な力を注ぎ、全人民が革命的軍人精神を見習って革命の首脳部を断固擁護し、党の指導に従ってチュチェの革命偉業を達成するために一層力強くたたかっていくよう導いた。

総書記は、人民軍の各部隊と地方の各部門の活動を現地指導しな

がら、経済建設と人民生活の向上で新たな飛躍を起こすための土台を築いた。

1998年の年初から、経済建設において重要な役割を果たす工場、企業を現地指導し、特に慈江（チャガン）道を何回も現地指導して新たな革命的大高揚を起こすようにし、全国の労働者を強盛国家の建設に奮い立たせた。

総書記の賢明な指導のもとに、軍隊と人民は「最後の勝利をめざし強行軍で前進せよ！」という党のスローガンを高く掲げ、江界（カンゲ）の精神、城鋼（城津（ソンジン）製鋼連合企業所）ののろしに従い、「苦難の行軍」を楽園への行軍に変える高揚の火の手を上げ始め、その過程で富強祖国建設の跳躍台がもたらされた。

人民経済の各部門で経済振興の好ましい兆候が現れ、各地で大衆的運動で中小発電所を大々的に建設して不足する電力問題を少なからず解決できるようになり、農業部門でも食の問題を解決し、畜産業と蚕業を大々的に発展させる新たな土台が築かれた。

金正日総書記は革命発展の現実的要求に即して、1999年１月１日、党中央委員会の責任幹部への談話『今年を強盛大国建設への偉大な転換の年として輝かせよう』と、2000年１月１日、党中央委員会の責任幹部への談話『社会主義強盛大国の建設において決定的な前進を遂げるために』をはじめ多くの談話で社会主義強盛国家建設路線を打ち出した。

総書記はまず、社会主義強盛国家の本質的内容とその革命的性格を明確に示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれが言う強盛国家とは、社会主義強盛大国です。国

力が強くすべてが栄え、人民が満ち足りた生活を営む国が社会主義強盛大国です」

総書記が示した強盛国家は、その性格においてチュチェの社会主義強盛国家である。

総書記は次に、社会主義強盛国家の建設において堅持すべき基本原則を明らかにした。

人民大衆の自主的要求と利益を擁護し具現すること、革命と建設において主体性と民族性を具現することを社会主義強盛国家建設の基本原則として明示した。

人民大衆は国と民族を単位として暮らしており、自らの運命を開いている。国と民族から遊離した社会主義強盛国家はあり得ない。

すべての国と人民は自分の祖国と民族の自主性を実現することを求め、自民族の優れた固有の特性を保持し発展させることに切実な利害を持っている。人民大衆の心に深く根を下ろし、彼らの支持と信頼を受ける社会主義強盛国家を建設するためには、主体性と民族性を具現しなければならない。

主体性と民族性は国際主義と矛盾するものではない。国際的団結と連帯は、それぞれの国と民族の自主性を尊重する基礎の上に立ってこそ真に自発的で強固な関係となる。主体性と民族性を固守してこそ国際的団結と連帯を強め、社会主義強盛国家の建設に有利な国際的環境と条件を整えることができるのである。

総書記は、思想重視、銃剣重視、科学技術重視の路線を堅持することを社会主義強盛国家建設の基本原則の一つとして明示した。

総書記は、社会主義強盛国家を建設するための課題と方途を明確に示した。

まず社会主義強盛国家建設における課題を示した。

それは第一に社会主義祖国の政治的・思想的基盤をさらに強固に打ち固めることであるとした。社会主義の威力は政治的・思想的威力であり、社会主義祖国の政治的・思想的基盤を打ち固めることは強盛国家建設の必須の要求である。したがって革命と建設の深化、発展に即して思想活動を積極化し、軍隊と人民の無限の精神力を全面的に発揮させ、政治・思想強国としての社会主義朝鮮の偉容をさらに強くとどろかせなければならない。

総書記は、先軍の旗を高く掲げ、国防力の強化に引き続き大きな力を注ぐべきだとした。

国防力は先軍朝鮮の自主権と生存権であり、権威と尊厳であり運命である。国防力を引き続き強化してこそ祖国と人民の安全を守り、社会主義強盛国家の建設を軍事的に確固と保証することができるのである。

総書記は社会主義経済建設を強力に推し進めて国を経済強国にすべきだとした。

経済建設は強盛国家建設の基本的部門である。経済建設を促進して社会主義経済強国を打ち立ててこそ先軍朝鮮の政治的・軍事的威力を一層強め、国を富強にし、人民の生活を画期的に高めることができるのである。

総書記は教育と保健医療、文学・芸術をはじめ社会主義文化建設のすべての分野を全面的に発展させるべきだとした。

総書記は、社会主義強盛国家建設のための方途を明確に示した。

社会主義強盛国家を建設するためには、党の指導のもとに先軍の威力、一心団結の威力を高く発揮しなければならず、また、千万軍

民の不屈の精神力と愛国心を高く発揚し、現代科学技術に基づく自力更生の革命精神を強く発揮すべきだとした。

金正日総書記によって社会主義強盛国家建設路線が示されることにより、朝鮮労働党と人民は強盛国家建設の明確な目標と青写真を持って社会主義強盛国家の建設に力強く立ち上がった。

第２節　著作『わが党の先軍政治は強力な社会主義政治方式である』を発表、先軍思想を深化発展させるための思想・理論活動を展開

金正日総書記は精力的な思想・理論活動によって金日成主席の先軍思想を深化、発展させ、金日成主義の牽引力と生命力を強めて先軍革命偉業遂行の指導指針をもたらした。

金正恩（キムジョンウン）第１書記は次のように述べている。

「…金正日同志は金日成同志の銃剣重視の思想を先軍革命思想、先軍政治理論として深化発展させ、社会主義強盛国家建設理論を提示することにより、金日成主義の牽引力と生命力を一段と高め、革命実践でその正当性を実証しました」

抗日の銃砲声と祖国解放戦争の炎の中で銃剣の重要さを誰よりも深く痛感した総書記は、1960年８月25日に先軍革命の指導を始めて以来、半世紀にわたる先軍長征の道を歩みながら、主席の銃剣重視、軍事重視思想を断固擁護し終始一貫堅持し、特に先軍革命指導、先軍政治を全面的に展開する壮大な革命実践の過程で先軍思想を深化、発展させ、定立、体系化した。

総書記は2001年７月５日、著作『わが党の先軍政治は強力な社会主義政治方式である』を発表して先軍思想を深化、発展させた。

この著作で、先軍政治と主席の銃剣重視、軍事重視思想との相互関係、先軍政治の本質と社会主義政治方式において先軍政治の占める地位を明らかにした。

まず、党の先軍政治と主席の銃剣重視、軍事重視思想の相互関係を明らかにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党の先軍政治は銃剣重視、軍事重視思想を立派に具現した独創的な社会主義政治方式です」

著作ではまず、軍は党であり国家であり人民であるという独創的な思想を示し、銃剣によって朝鮮革命を切り開き前進させてきた主席の革命活動史を総括している。

労働者階級の革命闘争史が示しているように、革命武力を強化することなしには革命の勝利を達成することはできない。革命闘争は反革命勢力との力の対決を伴うものであるため、強い革命武力に依拠せずには革命で勝利することはできず、勝利した革命を守り通すこともできない。これは革命の原理であり公式である。

主席はつとに革命の道を踏み出して長い間、朝鮮革命を導いてきた全行程で銃剣重視、軍事重視路線を一貫して堅持してきた。そして武装した敵を打ち破って祖国を解放する唯一の道は武装闘争を展開することにあるという思想を示して抗日遊撃隊から創建し、祖国の解放を成し遂げてからはじめて党も国家も創建した。

総書記は銃剣重視、軍事重視路線を一貫して堅持してきた主席の革命活動史を総括し、それに基づいて主席の先軍思想を今日の現実

的条件に即して一つの政治方式として深化､発展させたことを明らかにした。

総書記は､先軍政治の本質と社会主義政治方式における先軍政治の地位を明らかにした。

わが党の先軍政治は人民軍を無敵の強兵にして祖国を守り､人民軍を中核とし模範として革命の主体を打ち固め､人民軍を革命の柱として全般的社会主義建設を推し進めていく政治方式である。

このように先軍政治の本質を解明したうえで､社会主義政治における先軍政治の地位を科学的に論証した。

先軍政治は社会主義の基本的政治方式である。先軍政治は、革命と建設を自分の力で、自分の実情に即して、自分のやり方で進める独創的な政治方式であり､いかなる試練にさらされても革命と建設を勝利に導いていける万能の宝剣であり､地球上に帝国主義が残存し､帝国主義者の侵略策動が続くかぎり恒久的に堅持していくべき戦略的な路線であり、政治方式である。

総書記は相次いで著作を発表し、先軍思想を一層深化、発展させるための思想・理論活動を展開した。

2003年１月29日、党中央委員会の責任幹部への談話『先軍革命路線はわれわれの時代の偉大な革命路線であり、朝鮮革命の百戦百勝の旗じるしである』で、革命の主力部隊に関する独創的な解明を行い、革命的軍人精神の地位と役割、先軍政治の性格を明確に解明した。

まず、革命の主力部隊に関する独創的な解明を行った。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党は、時代の発展と変化する社会・階級関係を深く分

析し、それに基づき革命運動史上はじめて先軍後労の思想を打ち出し、人民軍を革命の中核部隊、主力部隊として押し立てました」

著作は､労働者階級を革命の主力部隊と見なした従来のマルクス主義革命理論を深く分析し､朝鮮労働党が先軍政治を行いながら人民軍を革命の主力部隊として押し立てたのは革命の主力部隊に関する問題､革命と建設で革命軍隊が果たす役割の問題に対する新しい見解、新しい観点に基づいていることを論証した。

従来のマルクス主義の革命理論では､19世紀中葉の西欧資本主義諸国の社会階級関係を分析して､資本の支配とあらゆる搾取制度を一掃し､社会主義･共産主義を実現する使命を帯びた最も先進的で革命的な階級は労働者階級であるとし､労働者階級を革命の指導階級､主力部隊として規定した｡これは当代の資本主義社会の現実を反映した理論であり､その後､世界のいくつもの国で労働者階級を主力部隊とする社会主義革命が勝利し､社会主義建設が進められた｡しかし､１世紀半前のマルクスの理論と公式は今日の現実には合わなくなった。時代ははるかに前進し、社会的環境も階級関係も、労働者階級の境遇も大きく変わった。

総書記は､朝鮮労働党はいかなる既成理論や既存の公式にもこだわることなく､情勢の変化と革命発展の要請に即して軍隊を強化し､その役割を強めて革命と建設を勝利に導いてきたとし､党が人民軍を革命の主力部隊として押し立てるのは､人民軍が朝鮮革命の第一の生命線を守る隊伍であり､社会のどの階級や階層より最も革命的で戦闘的であり、最も強力な集団であるからだということを解明した。

総書記は、革命的軍人精神の地位と役割、先軍政治の性格を明らかにした。

革命的軍人精神は領袖決死擁護の精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神を基本とする人民軍の高潔な革命精神である。革命的軍人精神は先軍時代を象徴し代表する気高い精神であり、革命と建設で奇跡を起こし、偉勲をとどろかせる革命的で戦闘的な思想的・精神的武器である。

先軍政治の革命的性格は、帝国主義反動勢力のあらゆる侵害から人民大衆の自主的要求と利益、国と民族の自主権と尊厳を確固と守り保証する原則的で正義の反帝・自主の政治であり、気高い愛国、愛族、愛民の政治だということにある。

総書記は2007年４月18日、党及び軍隊の責任幹部への談話『偉大な先軍の旗を高く掲げ、金日成同志の偉業、チュチェの革命偉業を成功裏に完成させていこう』で、党の銃剣哲学と先軍政治の根本的基礎、先軍政治の柱について明らかにした。

この談話で、銃剣には銃剣で対抗し、革命は銃剣によって保証すべきだというのが朝鮮労働党の銃剣哲学であり、革命の銃剣の上に人民大衆の自主偉業、社会主義偉業の勝利があり、国と民族の富強・繁栄があるということはチュチェ思想によって明らかにされ、歴史によってその真理性が実証された革命の原理であり法則であることを明らかにした。

また、革命的軍人精神に関する思想をさらに深化、発展させ、それを先軍政治の根本的基礎として定義づけ、チュチェの革命的党と無敵の革命武力、革命隊伍の一心団結、この３大革命要素を先軍政治の柱、チュチェの革命偉業の強力な推進力として規定した。

このほかにも著作『今年を新世紀の進撃路を開くうえで転換の年にしよう』『記者、言論人はわれわれの思想、われわれの制度、われわれの偉業を断固擁護する思想的旗手である』で、先軍指導体系と指導芸術、先軍革命の原則と先軍政治の目的を明らかにした。

総書記は2011年10月16日、先軍思想の構成体系を先軍革命の原理と先軍革命の原則、先軍政治理論として定立し体系化した。こうして、先軍思想は全一的な構成体系を備えたチュチェの革命理論として完成された。

金正日総書記によって先軍思想が絶えず深化、発展し、定立、体系化されることによって、チュチェの革命理論はさらに発展し豊富になり、チュチェの革命偉業の完成と社会主義強盛国家建設の前途を明示する強力な思想的・理論的武器がもたらされた。

第３節　金日成主席の生誕90周年を盛大に祝うために

2002年は金日成主席の生誕90周年にあたる年であった。

金日成主席はチュチェ思想を創始して人類に明るい未来を指し示した思想・理論の英才、卓越した指導と壮大な革命実践によって現代史を飾った偉大な政治家、百戦百勝の鋼鉄の総帥であり、限りなく広大な徳望と高潔な人品を備え、人民を懐に抱いて保護してくれた慈父である。

金日成主席はつとに革命に身を投じたときから生涯を終える最後の日まで、ひたすら人民の自由と幸せのためにすべてをささげ、あらゆる試練と辛苦をなめながら朝鮮革命と世界革命を勝利に導

き、不滅の功績を残した。

歳月が流れるほど、主席を懐かしむ朝鮮人民の思想・感情はなお強烈になり、これは主席の生誕90周年が近づくにつれさらに高まった。

金正日総書記は金日成主席の生誕90周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えるための活動を賢明に導いた。

総書記は、主席の生誕90周年を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための組織・政治活動に第一義的な力を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「党組織と党の初級宣伝活動家は、金日成同志の生誕90周年を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための政治活動を集中的に展開しなければなりません」

総書記は2001年１月10日、主席の生誕90周年を意義深く迎えるための準備活動を進める措置を講じた。

これに従い2001年６月６日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会、朝鮮民主主義人民共和国内閣は決定書「偉大な領袖金日成同志の生誕90周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えることについて」を採択して各級党組織と機関に下達した。この共同決定書では、金日成主席は社会主義朝鮮の始祖であり、チュチェの永遠なる太陽であると称揚して金日成主席が残した不滅の業績を記述し、民族最大の祝日である翌年の太陽節（金日成主席の誕生日、４月15日）を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えるための課題と方途を示した。

７月17日には首都の金日成広場で10万余の大衆の参加のもとに、主席の生誕90周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎え

るための平壌市大衆集会が開かれた。

これを皮切りにして各道、市、郡、機関、企業、協同農場、大学、専門学校など全般的単位で大衆集会や決起集会が開催された。

そして全国の街や村、職場ごとに「偉大な領袖金日成同志の生誕90周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えよう！」「偉大な領袖金日成同志を千年万年高く戴こう！」というスローガンが掲げられた。

また2002年１月１日の党機関紙、軍機関紙、青年同盟機関紙の共同社説「金日成主席の生誕90周年を迎える今年を強盛大国建設の新たな飛躍の年としてかざろう」では「経済強国建設の誇り高い成果で民族最大の祝日をかざろう！」というスローガンを高く掲げ、社会主義建設のすべての部門で新たな革命的高揚を起こすことをアピールした。

総書記は全人民の高揚した熱意に依拠して、社会主義建設のすべての部門で新たな革命的高揚を起こすよう導いた。

2001年９月、党中央委員会の責任幹部たちに、黄（ファンヘ）海南道の10万ヘクタールの耕地整理と价川（ケチョン）――台城（テソン）湖間の用水路工事を翌年の農繁期以前に完了し、軽工業製品の生産を増大するとともに食の問題を解決して、何不自由することなく暮らせる国にしようとした金日成同志の願いを実現させようと述べ、2001年11月には、主席生誕90周年に関する共同決定書の実行状況を確認し、各級党委員会は活動家と勤労者が共同決定書の決定貫徹のための決意目標を狂いなく達成するよう極力援助すべきだと強調した。

こうして黄海南道の耕地整理が完成し、大同江（テドンガン）ビール工場が建設されて操業を始めたことをはじめ、主席の生誕90周年に贈る数多

くの勤労の成果がもたらされた。

金正日総書記は、金日成主席の生誕90周年を迎え、主席の革命業績を永遠に輝かせていくための事業を賢明に指導した。

2001年１月３日、党中央委員会の責任幹部への談話で、金日成同志の革命活動史は先軍革命指導の歴史だと言える、金日成同志は先軍革命指導によって朝鮮革命を開拓し、勝利に導いてきた、金日成同志が切り開いたチュチェの革命偉業を完成させる革命的政治方式である先軍政治の正当性と不敗の威力を明確に知り、その要求を立派に具現していくべきであると語った。

また、2001年４月12日の著作『新世紀の革命的進軍の要求に即して、党初級宣伝活動家の役割を一層高めよう』では、主席の偉人の姿と革命業績を体得させる活動を絶えず深め、人民が金日成民族としての限りない誇りと自負を抱き、主席をチュチェの永遠なる太陽として崇めるようにし、主席の偉大さの宣伝を続けることによって、現世代はもちろん、次世代にも主席に対する人民の忠実性の伝統が永久に継承されていくようにすべきであると強調した。

また2001年11月18日には、朝鮮記者同盟第８回大会の参加者に送った書簡『記者、言論人は、われわれの思想、われわれの制度、われわれの偉業を断固として擁護、固守する思想的旗手である』で、記者、言論人は、軍隊を先に創建し、それに依拠して祖国解放偉業と党創立偉業、国家建設偉業を実現し、強固な軍事的土台の上で社会主義偉業を正しく導いてきた金日成主席の偉大さについての宣伝を全般的に深めていくべきであると強調した。

こうして、主席の生誕90周年を迎え、図書、革命逸話集、回想実記など数多くの図書が出版され、全党的に主席の偉大さについての

講習や録音講演が行われた。そして、主席の偉大さを内容とする問答式学習コンテストが行われ、主席の接見を受けた内外人士のテレビ回顧舞台も行われた。

主席の生誕90周年に際して、「解放の千里の道」・价川革命史跡地と清津（チョンジン）市羅南（ラナム）区域に主席の銅像が丁重に建てられ、平壌（ピョンヤン）紡織工場（当時）には白頭（ペクトゥ）山３大将軍の現地指導事績碑が、万景台（マンギョンデ）養鶏工場には金日成主席と金正日総書記の現地指導事績碑が建立されて除幕式が行われた。

金正日総書記は主席の生誕90周年慶祝行事が盛大に行われるよう導いた。

この慶祝行事が金日成主席は永遠にわれわれとともにおられるという全人民的思想･感情を社会全般にみなぎらせる重要な契機に、太陽称賛の意義深い大祝典になるようにした。

そのためにさまざまの政治・文化活動を行って、主席に対する敬慕と称揚の熱気が全国に満ちあふれるようにした。

2002年４月２日、平壌では金日成主席の生誕90周年記念全国チュチェ思想討論会が行われた。そして４月14日には金日成主席生誕90周年記念中央報告大会が盛大に開催され、地方と朝鮮人民軍各部隊でも祝賀報告大会や祝賀報告会が行われた。

総書記は主席の生誕90周年に際して金日成花・金正日花展示館を開館し、第４回金日成花展示会を催すようにした。

2001年６月６日、展示館の形成図案を見て、建設を早めて翌年の太陽節に開館し、そこで第４回金日成花展示会を行うよう指示し、その後2002年３月７日、またも展示館の建設と展示会の準備状況を確かめ、展示館の建設で提起される問題を解決するようはからった。

こうして金日成花・金正日花展示館は完成され、2002年４月14日に第４回金日成花展示会が開幕された。

この他にも、金日成主席生誕90周年慶祝労農赤衛軍の閲兵式や大マスゲームと芸術公演『アリラン』、平壌市青年学生の祝賀夜会、中央科学技術祭典、全国労働者・事務員家族芸能サークルコンテスト、中央写真展覧会、平壌美術祭典、国家図書展覧会、万景台賞体育祭などが盛況を呈した。全国各地でも太陽節を迎えて多彩な行事が行われた。特に大マスゲームと芸術公演『アリラン』は主席の生誕90周年慶祝行事を最も立派にかざった。

総書記は主席の生誕90周年に際し朝鮮で行われる国際行事が盛大に行われるよう深い関心を払った。

2002年３月13日、主席の生誕90周年に際して訪朝する外国の党及び国家代表団と代表たちに先軍政治の正当性と生命力、人民のたたかいの姿を見せて、彼らに人民大衆の自主偉業、社会主義偉業に対する勝利の信念を与え励ますようにした。

４月16日、平壌では金日成主席と金正日総書記の業績に関する世界各国政党の討論会とチュチェ思想国際研究所理事会執行委員会第９回会議が開かれた。参会者たちは、自主時代の前途を指し示した金日成主席の尊名は不滅のチュチェ思想とともに世紀と世紀を継いで永遠に光り輝くであろうと称賛し、さらに力強くたたかっていく決意を固めた。

総書記は主席の生誕90周年に際して催される第20回４月の春親善芸術祭に対しても深い関心を払った。４月14日から20日にかけて第20回４月の春親善芸術祭が行われ、これには５大陸の60余の国からきた国際・国内コンクール受賞者や名優で構成された100余の芸

術団、サーカス団、それに海外同胞の芸術団と国内の芸術団が参加した。

世界の革命的人民も金日成主席の生誕90周年を人類共通の祝日として盛大に慶祝した。

毎年そうであったが、主席の生誕90周年に際しても、数多くの国の国家元首と110余の進歩的政党から総書記に祝電と書簡、花かごと贈物が寄せられた。また世界の50余の国で70余の政党が政府高官、政界、社会各界の著名な人士を網羅して太陽節慶祝準備委員会を組織し、全社会的な関心のもとに280回余りの記念集会や回顧集会、講演会、討論会、映画鑑賞会、図書及び写真展示会、芸術公演など多彩な政治・文化行事を盛大に催した。

金日成主席の生誕90周年慶祝行事が盛大に行われることによって、党の先軍革命指導に従い、金日成主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業をあくまで実現せんとする党と軍隊と人民の強い意志が内外に力強く示された。

第４節　政治的・思想的基盤を固めるために

金正日総書記は社会主義強盛国家の建設において、朝鮮革命の政治的・思想的基盤を強固にし、政治・思想強国の偉容をとどろかせるための活動を賢明に指導した。

まず、党を先軍革命の導き手として強化し発展させた。

金正日総書記は次のように述べている。

「強盛大国を建設するためには党活動に新たな転換をもたら

さなければなりません」

総書記は全党に唯一的指導体系をさらに強く確立することに第一義的な力を注いだ。

2004年６月９日、党中央委員会の責任幹部への談話『党の先軍革命指導に従い、党活動に革命的転換をもたらすために』と2006年10月17日、党及び軍隊の責任幹部への談話『「トゥ・ドゥ」の伝統を継承してチュチェの革命偉業を最後まで完成させていこう』、2007年４月18日、党及び軍隊の責任幹部への談話『偉大な先軍の旗を高く掲げて金日成同志の偉業、チュチェの革命偉業を成功裏に完成させていこう』、2010年10月８日、朝鮮労働党創立6５周年に際して発表した著作『朝鮮労働党は金日成同志の革命偉業を成功裏に継承し完成させていく偉大な党である』など数々の著作と談話で、党の唯一的指導体系を確立するうえで提起される諸問題を明らかにした。

総書記は、すべての党組織が重要な問題を党に報告し、結論を受けて処理する規律を打ちたて、党の路線と方針を無条件受け入れて最後まで実行する革命的気風を確立するようにした。また、全党、全軍、全人民が党の唯一的指導のもとに等しく動く革命的規律と秩序を確立するようにした。

総書記は、党組織の戦闘的機能と役割を強めることに大きな力を注いだ。

まず、党の隊伍を打ち固め、その威力を最大限に発揮させるようにした。

党の中核であり根幹である幹部陣容を質的に充実させ、彼らの責任感と役割を強めるために、革命の首脳部を決死の覚悟で守り、党

の先軍政治に忠実に従う人たちで幹部陣容を固め、彼らがすべての活動において旗手となるよう教育する措置をとった。特に、人民軍で鍛えられ、専門技術を身につけた人たちを幹部に登用するようにした。

幹部陣容とともに党員の隊伍を強固に固め、彼らの役割を強めることにも大きな力を注ぎ、党員が党の先軍革命路線、先軍政治を擁護、貫徹するうえで中核的、前衛的役割を果たすようにした。そして2009年２月には、金日成主席の生誕100周年に当たる2012年までに強盛国家の扉を開くための革命的大高揚において朝鮮労働党員が自己の本分を尽くすべきだと強調した。また、組織・思想生活を強化して、すべての党員が思想も意志も運命も党とともにする忠実な革命戦士にならなければならないと述べた。これとともに、実践を通じて鍛えられ点検された人たちを党に受け入れる原則を厳格に守るようにした。

総書記は、党組織が新たな情勢と革命発展の要請に即して党活動を創造的に、革新的に展開するよう導いた。

党組織が幹部と党員の間で革命的党生活気風を打ち立て、党生活に対する手配と指導を革命課題の遂行と結びつけて行うようにした。

2000年１月１日と12月３日には、党活動家が「実力によって党を支えよう！」というスローガンを掲げて政治・実務水準を絶えず高めることを強調し、特に党組織と党活動家が党の革命的指導芸術を修得し、それを強盛国家の建設をめざす活動に具現していくようにした。

さらに、党組織が指導的政治組織としての使命と役割を果たせるようにするため、細胞の活動を強化することに特別な関心を払い、

すべての党組織が忠誠の細胞創造運動を適切な方法論を持って着実に推し進めるようにし、2007年10月には朝鮮労働党第３回細胞書記大会を契機に細胞の機能と役割を一段と高めるようにした。

2009年７月29日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『新たな革命的大高揚によって強盛大国の扉を開くうえで幹部の責任感と役割を強めることについて』では、党組織と党活動家が革命と建設のすべての部門で絶えず革新を起こして総進軍を早めるための組織・政治活動を力強く繰り広げ、新たな革命的大高揚を起こすために党員と勤労者の精神力を最大限に発揮させるよう強調した。

総書記は、革命と建設に対する党の指導を強めるようにした。党組織が科学技術上の問題を適時に解決し、経済管理において社会主義的原則を堅持するようにした。

総書記は党の思想活動を積極的に展開して全人民の精神力を全面的に発揚させるようにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命と建設の深化、発展に応じて思想活動を強力に進め、わが軍隊と人民の底知れない精神力を全面的に発揚させ、政治・思想強国としての社会主義朝鮮の威容をさらに高くとどろかせなければなりません」

2001年４月12日、全国党初級宣伝活動家大会の参加者に送った書簡『新世紀の革命的進軍の要求に即して、党初級宣伝活動家の役割を一層高めよう』と2008年４月10日、党中央委員会の責任幹部への談話『現在、党の思想活動を改善、強化するために提起される諸問題について』、2009年６月25日、党、軍隊、国家経済機関の幹部への談話『金日成民族の偉大な精神力によって、強盛大

国建設のすべての部門で革命的大高揚の炎をさらに強く燃え上がらせよう』など多くの著作で、党の思想活動を改善、強化するための原則的諸問題を明らかにした。

まず、強盛国家を建設するための総攻撃において幹部と党員と勤労者の精神力を最大限に発揚させることに党の思想活動の力点を置くようにした。

総書記は、チュチェ思想、先軍思想教育を絶えず深め、全人民を思想と信念の強者、強い精神力の持ち主に育てることに第一義的な力を注いだ。

2002年10月、先軍政治の偉大さと正当性を幅広くしかも深く解説、宣伝することを党の思想活動の総体的方向、基本的課題とし、すべての宣伝・鼓舞活動を先軍思想で一貫されたものにし、先軍政治の宣伝に服従させるようにした。また、先軍政治の偉大さと生命力を今日の生々しい事実をもって解説、宣伝して、党員と勤労者に先軍政治の不敗性に対する強い信念を持たせるようにした。

2008年４月には、チュチェ思想、先軍思想についての原理教育を先行させ、チュチェ思想、先軍思想の旗を高く掲げて百戦百勝をとどろかせてきた党の先軍革命実録による教育を強めるようにした。

総書記はチュチェ思想、先軍思想教育とともに革命伝統教育を絶えず深めていくようにした。

2000年３月、白頭山地区の革命戦跡に関する事業を現地指導した際の幹部への談話『革命戦跡、革命史跡を通じた革命伝統教育を強化するために』で、主席が抗日革命闘争の時期に築いた革命伝統を永遠に固守し、継承、発展させ、その伝統に基づいてチュチェの革命偉業をあくまで完成しようとするのは党の確固たる意志で

あり決心であるとし、革命の世代が替わり、革命が深化するほどなお革命伝統教育を積極的に進めなければならないと強調した。そして、全国各地の革命戦跡と革命史跡を訪ね、革命戦跡、革命史跡を原状どおり整備し、それを通じての教育を強化するようにした。そして2002年11月25日、党中央委員会の責任幹部への談話『金日成同志の革命的信念と意志、胆力をもって新たな勝利の道を切り開こう』では、党員と軍人、勤労者、青少年の間で主席の革命活動史の学習をさらに強化するよう強調した。また2008年７月30日にも、党中央委員会の責任幹部への談話『朝鮮革命博物館は金日成同志と党の革命事績が集大成されている大国宝館であり、革命伝統教育の殿堂である』で、革命事績を通じての教育を強化するよう指摘した。

総書記は社会主義教育を強化することにも深い関心を払った。

2002年９月５日と８日、党中央委員会の責任幹部への談話『公民としての自覚を持って共和国公民の本分を尽くそう』と2006年12月20日、党中央委員会の責任幹部への談話『社会主義教育を強化することはわれわれの時代、朝鮮革命の切実な要求である』で、社会主義教育を強化するうえで提起される原則的諸問題を明らかにし、幹部と党員、勤労者の間で社会主義に対する信念を持たせる教育と社会主義防衛精神で武装させる教育、社会主義的愛国主義教育を強化する課題を示した。

総書記は、時代と革命発展の要請に即して党の思想活動の形式と方法を革新するよう導いた。

思想活動においてその質的水準と効力を高めることに力を集中するようにし、党の思想活動が人々の心との活動になるようにした。同時に、情報産業時代の要請に即して宣伝・鼓舞手段も近代化し、

マルチメディア編集物のような新しい形式の教育資料も大いに利用するようにした。また、党宣伝活動家の責任感と役割を決定的に高めるようにした。

金正日総書記は革命隊伍の一心団結を鉄壁に固めていった。

金正日総書記は次のように述べている。

「一心団結を強化し打ち固めていくうえで、その中心を確固と保障することがきわめて重要です。中心のない団結は団結ではなく、一団の烏合の衆にすぎません。わが党と軍隊、人民の一心団結の中心、核は革命の首脳部です」

総書記は2007年２月17日、党中央委員会の責任幹部への談話『一心団結の威力で先軍朝鮮の尊厳と偉容をとどろかせるべきである』と2007年４月18日、党・軍隊の責任幹部への談話『偉大な先軍の旗を高く掲げ、金日成同志の偉業、チュチェの革命偉業を成功裏に完成させていこう』をはじめ多くの談話で、革命の首脳部を中心とする革命隊伍の一心団結をさらに強固にするうえで提起される原則的諸問題を明らかにした。

2003年１月２日、党中央委員会の責任幹部への談話で、革命の首脳部と一心団結、社会主義は運命共同体であるという定義を下し、すべての人民軍将兵と人民が党のまわりに思想・意志のうえで、道徳的信義をもって固く団結し、党の思想と指導に忠実に従うようにした。

2001年１月と2005年１月には、すべての活動家が革命の指導者に純潔な革命的良心と信義をもって忠誠を尽くした金策（キムチェク）と、チュチェ偉業継承のための党の基礎構築時期の活動家のようにたたかうよう強調し、2009年10月８日には、一心団結は文字どおり心の統一、

思想の統一だとし、活動家は指導者の思想と意思に従わなければならないと述べた。

また、2002年２月３日には、党員と勤労者に党と領袖の偉大さを深く体得させ、自分の領袖、自分の党が一番だという思想・感情が全社会にみなぎるようにすべきだとし、2007年２月には、全党、全軍、全人民がひたすら自分の指導者のみを信じ、生死、運命をともにする指導者の真の同志となり戦友となるべきだと説いた。

総書記は、革命的同志愛に基づく革命隊伍の一心団結をさらに強化するよう導いた。

2004年４月７日、党中央委員会の責任幹部への談話『革命的同志愛は一心団結の基礎であり、朝鮮革命の推進力である』をはじめ多くの談話で、革命的同志愛に基づいて革命隊伍の一心団結をさらに強めるうえで提起される原則的な問題を明らかにし、それを実現するための活動を賢明に導いた。

総書記は仁徳政治を行って、すべての人が心から党のまわりに団結するようにした。

党の大衆路線を貫徹することに第一義的な関心を払った総書記は、2003年10月28日には、党中央委員会の責任幹部への談話『幹部は人民のために献身する人民の真の奉仕者にならなければならない』で、すべての幹部が人民的活動作風を体得して人民から「われらの」と呼ばれる人民の真の奉仕者になるよう強調し、2006年９月１日と2007年２月17日、2008年９月をはじめ数回にわたって、党組織と党活動家は民心を把握し、対人活動を正しく行って人民を党のまわりに固く団結させなければならないと強調した。そして、2010年12月１日には、党中央委員会の責任幹部への談話『現実発

展の要請に即して党の大衆路線を貫徹することについて』で、大衆路線を貫徹するうえでの重要な問題を具体的に提示した。

総書記は、政治的・思想的基盤を崩し、一心団結を破壊しようとする敵の策動に警戒心を高め、それに断固として対処していくようにした。

帝国主義者の思想的・文化的浸透策動と心理謀略戦を粉砕するための闘争を強力に繰り広げ、ブルジョア思想と生活風潮の些細な要素もわれわれの内部に浸透できないようにすると同時に、一心団結を損ない弱める非社会主義的傾向が現れないようにした。

金正日総書記は人民政権と勤労者団体の役割を強めることに深い関心を払った。

まず、主権機関の代議員の選挙を通じて人民政権を強化するようにした。

2003年８月と2009年３月の最高人民会議第11期、第12期代議員選挙に参加する全参加者に公開書簡を送り、金日成軍事総合大学と金日成政治大学を訪れて代議員候補者たちに賛成投票をした。

また、道・市・郡人民会議の代議員選挙にも深い関心を払い、2007年７月29日には主席の現地指導を受けた咸州（ハムジュ）郡楸上（チュサン）協同農場へ出向いて選挙に参加して、道人民会議の代議員候補者である咸州郡上中協同農場の分組長と咸州郡人民会議の代議員候補である咸州郡楸上協同農場の管理委員長に投票した。

総書記は、人民政権機関が行政・経済活動に全的に責任をもって活動するよう指導した。人民政権機関が行政・経済活動に対する手配と指揮をぬかりなく行って経済課題を正しく実行し、行政規律を強めて国家の法令と決定、指示が確実に実行されるようにし、人民

の生活に支障がないよう難問を責任をもって解決するようにした。

総書記は、人民政権機関が全社会に革命的順法気風を確立することに力を注ぐようにした。

2002年９月５日と８日、勤労者に対する順法教育を強化し、全社会に順法気風を確立して社会のすべての人が国家の法を順守し、社会共同の生活規範と気高い社会主義的生活様式どおり働き生活するよう強調し、2007年２月には全国法務活動家大会の参加者に『社会主義順法生活を強化して先軍時代の革命的法秩序を確立しよう』と題する書簡を送り、先軍時代の社会主義順法生活を強化するための指針を与えた。

そして、法律執行機関の役割を強めることに第一義的な関心を払い、2010年１月23日には新しく建設された中央裁判所（当時）の法廷を見て回り、人民民主主義独裁を強化するうえで裁判機関がその役割を果たすための原則的諸問題を明らかにした。

特に2008年９月５日、党機関紙『労働新聞』と政府機関紙『民主朝鮮』に寄せた談話『朝鮮民主主義人民共和国は不敗の威力をもったチュチェの社会主義国家である』で、人民政権機関の活動家が時代と革命発展の要請に即して活動気風と活動方法を改善して自己の使命と任務を立派に遂行し、人民の奉仕者としての本分を尽くしていくよう強調した。

総書記は勤労者団体の役割を一層高めることに深い関心を払った。

まず、青年重視思想を一貫して堅持し、青年同盟の役割を強めることに大きな力を入れた。

1999年９月29日、金日成社会主義青年同盟の模範初級活動家大会の参加者に送った書簡『青年同盟初級組織の役割をさらに高め

よう』と2001年１月３日、党中央委員会の責任幹部への談話『今年を新世紀の進撃路を開く転換の年にしよう』、2007年８月22日、青年事業部門の活動家への談話『青年はチュチェの青年運動の伝統を継いで先軍時代の青年前衛の栄誉をとどろかせていこう』で、青年同盟と青年の基本的使命と任務を示し、青年がその栄誉ある使命を果たすための課題と方途を明らかにした。

青年の間で忠実性を培う教育を基本としながら、先軍思想教育、社会主義教育をはじめ思想教育を強化し､彼らを先軍革命偉業の頼もしい継承者としてしっかり準備させるようにした。これとともに、青年が社会主義強盛国家の建設と祖国防衛の第一線で朝鮮青年の英雄的気概と本領を発揮するよう導いた。

総書記は、職業同盟、農業勤労者同盟、女性同盟の活動の改善にも大きな力を注いだ。

職業同盟と農業勤労者同盟組織が忠実性を培う教育を強化するとともに、「先軍烽火賞」獲得のための社会主義的競争をはじめさまざまな大衆運動を活発に展開し､彼らが強盛国家建設担当者としての使命と任務を立派に果たしていくよう導いた。

また､女性同盟の役割を強めて女性を先軍時代の女性革命家に育てることにも深い関心を払い､2010年２月24日､党中央委員会の責任幹部への談話『強盛大国建設大戦でチュチェの朝鮮女性運動の誇りある伝統をさらに輝かせていこう』で､3･8国際婦人デー100周年を迎える全国の女性に祝意を表し､女性同盟組織に提起される課題を示した。

第５節　国防力を強化するために

国防力を強化して軍事強国としての偉容をとどろかせることは、社会主義強盛国家建設の必須の要求である。

国防力を強化することはまた、当時の情勢の切実な要求でもあった。

アメリカは共和国を圧殺するため軍事的侵略策動を引き続き強化する一方、共和国を「悪の枢軸」と決めつけて核先制攻撃の企図をむき出しにし、情勢を一触即発の戦争瀬戸際に立ち至らせた。そのため、情勢は新世紀に入っても依然として複雑かつ緊張をきわめていた。

金正日総書記は人民軍を無敵の白頭山革命強兵に強化するための活動を賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民軍は朝鮮革命の主力部隊であり、祖国防衛の中核勢力です。われわれの先軍政治においては軍事は第一義であり、人民軍を強化することが基本となります」

総書記は人民軍内に党の軍指揮体系を確固と打ち立てるようにした。

2000年１月１日をはじめ多くの機会に、人民軍内に最高司令官の命令に絶対服従し等しく動く革命的軍紀を確立するよう強調し、2003年５月20日には、かつて革命武力の建設において党の指導を骨抜きにしようとした反党反革命分子らの罪業とその弊害の重大さを幹部と軍人に教え、それを忘れないようにするための教育を強化

するよう指示した。

特に2009年10月13日、党中央委員会の責任幹部たちに、チュチェ革命偉業継承の歴史的転換期に至った現実発展の要請に即して幹部がそれぞれの責任を果たし、すべての部門、すべての単位で金正恩同志の指導に忠実に従うよう強調し、2010年７月27日と10月８日には、人民軍指揮メンバーに、人民軍内に金正恩同志の軍指揮体系を確立し、金正恩同志に心から従い、その指導にあくまでも忠実でなくてはならないと強調した。

総書記は人民軍の政治的･思想的威力を強めることに力を注いだ。

人民軍の軍人を革命の首脳部を決死の覚悟で擁護する銃弾･爆弾精神と先軍思想で武装させることを基本としながら､忠実性を培う教育、革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育と信念教育、李寿福(リスボク)、金光徹(キムグァンチョル)、吉永祚(キルヨンジョ)英雄たちに学ぶ教育などを強化して彼らを思想と信念の強者に育てるようにした。

また､政治・思想教育の形式と方法を改善することにも深い関心を払い､2000年に全軍的な政治活動家の講習と会議を開催する措置をとり、宣伝・鼓舞活動を軍隊らしく戦闘的に行い、人民軍新聞の発行部数を増やし､内容と形式の充実した卓上教育カードをすべての中隊に配布して広く利用させるようにした。また、軍隊内の党の思想活動を軍人の心との活動、感情・情緒との活動に変え、部隊の沿革室をきちんと整え､それを通じての教育を強化するようにした。同時に､革命事績を通じての教育と芸能宣伝を通じての教育を強化するようにした。

また、「人民を助けよう！」「全軍が一体の同志となろう！」というスローガンのもとに､全軍が官兵一致、軍民一致の美風をさら

に高く発揚するようにした。

総書記は人民軍の軍事技術的威力を全面的に強化することに力を尽くした。

全軍に白頭の訓練熱風が巻き起こるようにした総書記は、指揮官、参謀部の訓練に第一義的な関心を払い、各級の指揮官と参謀部のメンバーが現代戦の困難で複雑な状況下でもそれぞれの任務を円滑に遂行できるよう、彼らの軍事的資質と指揮能力を決定的に高めるようにした。また、軍人の間で実戦訓練とともに行軍と射撃、地形熟達訓練を強化することに大きな力を注ぐようにし、すべての軍種、兵種、専科兵の各部隊でも訓練を強めるようにした。そして各軍種、兵種の実動訓練を現地で指導した。

総書記は中隊を全軍強化のキーポイントとしてとらえ、すべての軍事・政治活動を中隊の強化に重点を置いて行い、人民軍の幹部が中隊に随時出向いて助けるようにした。

そして1999年２月、朝鮮人民軍中隊長会議を開き、参会者に金日成主席が1973年10月11日に行った演説『人民軍の中隊を強化しよう』を録音で聴取させ、2002年10月には朝鮮人民軍中隊青年同盟初級団体書記熱誠者会議の参加者に書簡を送った。

総書記は、部隊の指揮・管理を改善し、軍紀を確立するため、部隊内に厳格な命令・指揮体系を打ち立て、指揮官の責任感と役割を強めるようにした。

軍人の生活改善にも深い関心を払い、人民軍の給養基地をしっかり築くようにする一方、軍人の食生活を細やかに気づかって改善のための対策と方途も示した。そして、人民軍軍人の文化・情操生活にも深い関心を払い、彼らが軍務生活を楽天的にしていくよう導いた。

総書記は人民軍が強盛国家建設の主要部門で絶えず奇跡と革新を起こすようにし、強盛国家の面貌にかなった生活文化を確立するうえでも人民軍をその先頭に立たせ、軍隊で創造された軍人文化の模範を社会に一般化させるようにした。

金正日総書記は軍事を重視し、国防工業に引き続き大きな力を注ぎ、全国土を鉄壁の要塞にするために力を尽くした。

まず、全社会に軍事重視の気風を強く確立するようにした。

新しい世代の等しい志向を汲んで2002年５月８日、全民軍隊服務制を実施するという党中央軍事委員会の命令を下達した。こうして2003年から祖国の歴史において初めての全民軍隊服務制が実施されることになった。

全民軍隊服務制の実施と相まって、その優越性と生命力が明確に現れるようにすることに細やかに関心を払い、2003年５月30日には最前線に位置する人民軍部隊を視察しながら、全民軍隊服務制によって新しく入隊した人民軍兵士たちに会って彼らを励ました。

総書記は、全人民武装化と全国土要塞化をより高い水準で実現するための活動を精力的に指導した。

全人民武装化を高い水準で実現するため、民間武力の隊伍を強固に築き、訓練を強化する一方、戦闘動員の準備を完璧に整えるようにした。

全国土要塞化を高い水準で実現するため、戦闘施設をしっかり建設し、全国土を鉄壁の要塞にする過程で得た成果と経験を広く一般化させるようにした。また1999年１月と４月、後方の要塞化を完成し、主要工場をはじめ各種の対象を保護する対策を立て、2009年２月には世界的な兵器発展の趨勢に対応して全国土の要塞化水準を

引き続き高め、民間防空対策をしっかり立てるようにした。

総書記は全社会に軍支援の美風を確立するよう指導した。

2002年11月に初めて開かれた全国軍支援美風熱誠者大会を契機に、全国に軍支援の熱風を巻き起こすようにした。また、全人民が先軍政治に従い人民軍を愛し支援するための宣伝･鼓舞活動を党の思想活動の中心的課題として引き続きとらえていくようにした。そして、軍支援活動で模範的な幹部と勤労者に感謝を送り、彼らの美挙を新聞、放送を通じて広く宣伝するようにした。

総書記は国防工業の強化に引き続き大きな力を注いだ。

まず、軍需工業部門の幹部と労働者が君子里（クンジャリ）精神で働くよう彼らを奮起させた。

君子里精神は、祖国解放戦争の時期、君子里の軍需工場の労働者が、欠乏するものが多く最悪の状況下で、金日成将軍がおられるかぎり必ず勝利するという信念と決死の覚悟を持って機械を地下に設置し、人力でベルトを回して自動小銃や迫撃砲を生産した決死貫徹の精神である。

総書記は2000年12月24日、軍需工業部門の従事者が君子里精神で働くよう激励し、具体的な実行措置も取った。君子里精神は軍需工業部門に新たな高揚をもたらす思想的･精神的力の源となり推進力となって国防工業をさらに高い段階に発展させた。

総書記は軍需生産を高い水準で正常化し、軍需品の質を高めるようにした。

国の経済活動全般を国防工業の優先的発展に重点を置くようにさせ、人民経済のすべての部門が国防工業に必要な労力と設備、原料、資材を最優先的に供給するようにした。

そして軍需生産の正常化と軍需品の品質向上を国防工業部門の第一義的な課題とし、経済組織活動を綿密にし、既存生産土台とすべての潜在力を最大限に動員、利用して生産計画を必ず遂行するようにし、兵器と戦闘技術機材の質を最上の水準で保障し、その性能と堅固性、信頼性が確実に保証されるようにした。

総書記は、国防工業の自立性と近代化、情報化を促進する措置をとった。

国防工業を国内の原料と資材に依拠し、自分の力と技術に基づく自立的国防工業にさらに発展させるようにする一方、日増しに発展する軍需工業の発展趨勢に即して軍需工業部門をさらに近代化、情報化することに深い関心を払った。

総書記は、世界的な国防科学技術発展の趨勢に即して国防科学技術の急速な発展を促した。

集団的技術革新運動を一層活発に展開するようにさせる一方、最先端技術に基づく近代的な戦闘技術機材を開発するよう科学者、技術者を導いた。

第６節　先軍時代の経済建設路線を提示、経済強国建設の土台を築くために

金正日総書記は先軍時代の経済建設路線を提示し、それを貫徹するための活動を指導した。

2002年９月５日の談話と2003年８月28日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『党が示した先軍時代の経済建設路線を確実に貫

徹しよう』で、先軍時代の経済建設路線を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党は先軍時代の要請を反映させて国防工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業を同時に発展させるという経済建設路線を打ち出しました」

総書記は先軍時代の経済建設路線を貫徹するための課題を示した。

国防工業の優先的発展に全力を集中するとともに、軽工業と農業を同時に発展させて人民の生活を決定的に向上させることを主要課題とした。また、電力工業と石炭工業、金属工業、そして鉄道運輸部門を早急に発展させ、機械工業と化学工業などの重工業部門をさらに発展させる課題を示した。

総書記は、先軍時代の経済建設路線を貫徹するための方途を示した。

先軍時代の経済建設路線を貫徹するための闘争を先軍政治方式で行い、経済活動において社会主義の原則を守り、社会主義経済の優越性を高く発揚し、内閣をはじめ経済指導機関と経済指導幹部の責任感と役割を決定的に高めることを重要な方途として示した。

金正日総書記は先軍時代の経済建設路線を貫徹するための活動を賢明に指導した。

まず、国防工業を優先的に発展させながら、それと関連する重工業をさらに発展させるようにした。

総書記は、機械工業の発展に第一義的な力を注いだ。

2001年８月と11月に羅南炭鉱機械連合企業所を現地指導して新世紀ののろし、羅南ののろしを燃え上がらせ、2001年２月と2002年５月、2004年６月、2006年９月など数回にわたって亀城（クソン）工作機械工場を現地指導して全国的な近代化のモデル工場につくりあげ、

それをモデルとして熙川（ヒチョン）工作機械工場（当時）、楽元（ラクウォン）機械連合企業所、竜城（リョンソン）機械連合企業所など機械工業部門の工場、企業の近代化を促し、生産を活性化するよう導いた。

総書記は金属工業の近代化、主体化の実現に力を尽くした。

金策製鉄連合企業所と城津製鋼連合企業所をはじめ製鋼所、製鉄所と関連企業所を現地指導しながら、生産正常化と技術改造で提起される問題を具体的に調べて必要な対策を立てた。特に、金属工業部門の近代化の推進において、それを国の実情と現実的要請に即して現行生産を続けながら一つ一つ実現していくようにした。

これとともに、金属工業に必要な主要原料、資材を国産でまかなうための闘争を強めて、金属工業の主体化を高い水準で実現していくようにした。

総書記は、電力工業を盛り立て、電力不足を解消していくようにした。

1999年１月、全党、全軍、全人民の動員によって大規模水力発電所の建設を促進するという国防委員会の命令を下達し、その建設を強力に推進するようにした。

これと同時に、慈江道の模範にならって中小発電所の建設を大衆的運動で進めるようにし、現存の発電能力を最大限に高めるための措置もとった。

総書記は、石炭工業を盛り立てて石炭生産を増大させることにも大きな力を注いだ。

炭鉱に電力と設備、資材を集中的に供給し、埋蔵量が多く採掘条件の有利な炭鉱、特に火力発電所用の石炭を生産する主要炭鉱に力を集中して生産で革新を起こすようにした。これとともに、炭鉱夫

の生活条件と労働条件を改善することにも深い関心を払い、栄養剤と必須食料品を切らさず供給し、作業着と作業靴、その他の労働保護用物資が円滑に生産、供給されるようにした。

総書記は鉄道運輸の発展に大きな力を注いだ。

2002年１月に金鐘泰（キムジョンテ）電気機関車工場（当時）を、2002年10月には6・4車両工場（当時）を現地指導して、電気機関車と貨車の生産を増やすとともに、機関車と貨車の修理に力を入れるようにした。また、鉄道の強度を高め、構築物の工事を着実に行って鉄道の通過能力を高め、安全性を保障し、鉄道運輸部門に鉄鋼材と電力が円滑に供給されるようにした。これとともに鉄道運行と輸送組織を綿密にし、特に鉄道運輸において唯一指令・指揮体系を厳格に立て、規律と秩序を強めるようにした。

総書記は、軽工業と農業も同時に発展させ、人民生活を一層向上させるようにした。

2000年１月23日、党中央委員会の責任幹部への談話『人民生活を向上させるうえで提起されるいくつかの課題について』、2007年４月４日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『人民生活を決定的に向上させることは今日わが党が打ち出した最も重要な革命課題である』をはじめ多くの著作で、人民生活を向上させるための課題を示した。

まず、軽工業を発展させて一般消費財の生産を増大させるようにした。

総書記は人民の生活に切実に必要な一次消費財の問題を解決することに力を集中しながら、人民の需要に沿って各種の一般消費財生産を増やし、その質を高めるようにした。

そして、軽工業部門の工場を近代化するため、既存の軽工業工場の技術的改造と、最新科学技術で装備された軽工業工場の新設を並行させるようにし、道、市、郡でもそれぞれの実情に即して地方産業工場を一つか二つずつ近代化していくようにした。

総書記は農業革命方針を貫徹するよう指導した。

2003年５月２１日、党中央委員会の責任幹部への談話『わが党の農業革命方針を貫徹することについて』をはじめ諸著作で、チュチェ農法の要求どおり適地適作、適期適作の原則を守るうえで提起される諸問題を明らかにした。

適地適作の原則で国の農業生産構造から大胆に改善し、稲やトウモロコシのよくできる地帯にはそれを主作とし、北部山間地帯ではジャガイモ栽培を主とするなり、その地帯に適した作物を多く栽培するようにし、農民の要請と意思を汲んでその地方の気候・風土に適した品種を選択させるようにした。同時に、適期適作の原則ですべての営農作業を適期に着実に行うようにした。

2004年10月12日、党・軍隊の責任幹部への談話『農業革命で基本となるのは種子革命である』で、種子革命で提起される課題を示した。

育種事業において主体性を確立し、国の気候・風土に適した各種優良品種の種子をつくりだす一方、外国の多収穫品種を取り入れるようにした。そして多収穫品種の種子の栽培技術、肥培管理方法を研究し完成させるようにした。また、育種事業とともに採種事業を種子革命の重要な構成部門と規定し、農業生産に必要な優良種子を多く採種して各協同農場へ送るようにした。

総書記はジャガイモ栽培に根本的な転換をもたらし、農業生産を

盛り立てる確固たる展望を開いた。

すでに1998年10月１日に両江(リャンガン)道大紅丹(テホンダン)郡を現地指導した際、ジャガイモ栽培に画期的転換をもたらすよう強調しているが、それについで2000年３月21日、党中央委員会の責任幹部への談話『大紅丹郡をジャガイモ栽培革命のモデルに、住みよい共産主義楽園にすることについて』など諸著作で、ジャガイモ栽培に新たな転換をもたらすための問題を明らかにした。

総書記は、大紅丹郡をジャガイモ栽培で根本的な転換をもたらすためのモデルケースとし、大紅丹式の科学的農法をつくりだすようにした。

1999年８月と2000年３月をはじめ大紅丹郡を重ねて現地指導しながら、営農作業の総合的機械化を実現し、ジャガイモ栽培の研究を強めるようにした。これと同時に、営農機械の提供をはじめジャガイモ栽培で提起されるすべての問題の解決策を講じ、全国が大紅丹郡のジャガイモ栽培を支援するようにした。

2002年10月には再度大紅丹郡を訪ね、大紅丹式の科学的農法を広く一般化させて、白岩(ペクアム)郡、赴戦(プジョン)郡、長津(チャンジン)郡などの山間地帯でジャガイモ栽培を大々的に行うようにした。

総書記は２毛作と大豆栽培においても画期的転換をもたらすようにした。

2002年６月17日、党中央委員会の責任幹部への談話『党の２毛作営農方針を貫徹することについて』、2004年10月12日、12月10日、党中央委員会の責任幹部への談話『大豆栽培に転換をもたらすために』で、二毛作と大豆栽培で提起される諸問題を明らかにし、2002年10月１日と2003年６月をはじめ数回にわたって人民軍の

農場を現地指導しながら、人民軍が２毛作と大豆栽培で模範を示し、その経験を全国の農村に一般化させるようにした。

総書記は、近代的な畜産基地と養魚基地を築くことにも大きな力を注ぐようにした。

総書記は経済管理において社会主義の原則と実利主義の原則を具現するよう指導した。

経済活動において堅持すべき「種子」は社会主義の原則を堅持しながら、最も大きな実利が得られる経済管理方法を考案することだとし、工場を一つ建て、経済活動を一つ展開しても、必ず社会主義の原則と実利保障の原則を具現し、その質を最高水準のものにするようにした。

金正日総書記は新たな革命的大高揚によって経済強国の建設を推進するための活動を指揮した。

新たな革命的高揚ののろしを上げて全党と全人民を奮起させた。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれが金日成同志の生誕100周年にあたる2012年に強盛大国の扉を開け放つためには、金日成同志によって創造されたチョンリマ大高揚の伝統を継承して、すべての部門で新たな革命的大高揚の一大旋風を巻き起こさなければなりません」

まず、新たな革命的大高揚ののろし、降仙（カンソン）ののろしを上げた。

2008年４月と５月など数回にわたってチョンリマ製鋼連合企業所に、共和国創建60周年までにＵＨＰ電気炉と取瓶精錬炉を完成させる課題を与え、降仙の労働者が戦後のチョンリマ大高揚を起こした時期のように自力更生の革命精神を強く発揮するよう鼓舞した。そして、30年も前に創作された歌『降仙の夕焼け』を編曲し直して

送り届け､党と国家が企業所の事業を積極的に支援し励ますようにした。降仙の幹部と労働者は自力更生の革命精神を強く発揮して、近代的なＵＨＰ電気炉の建設工事をわずか数カ月の間に完成した。

2008年12月24日、チョンリマ製鋼連合企業所を訪れた総書記は、降仙がわき立ってこそ全国がわき立ち､降仙の労働者が掛け声をかけて走ってこそ全人民の足どりが速くなる､降仙の労働者がチョンリマ大高揚のときの気勢と意気込みで今一度革命的大高揚を起こすべきだと強調した。

降仙の労働者は12月28日､新たな革命的大高揚の先頭に立って進む決意を固め、全国の勤労者に、党の呼びかけに応えて大高揚の熱風を巻き起こすことを熱烈にアピールする手紙を送った。全人民がこの手紙に積極的に呼応し､全国が新たな革命的大高揚でわき立った。

総書記は､2009年１月１日､新年の共同社説を通じて全党員と勤労者が新たな革命的大高揚を起こすうえでとらえていくべき目標と方向、課題を示した。同時に、新年劈頭から人民軍部隊と人民経済各部門の活動を現地指導しながら､降仙ののろしが全国に燃え広がるようにした。

総書記は､新たな革命的大高揚の炎の中で「150日間戦闘」と「100日間戦闘」を発起し、勝利へと導いた。

新たな革命的大高揚の炎をさらに激しく燃え上がらせて経済強国の建設を促進するため､2009年３月28日と４月１日､党中央委員会の責任幹部に「150日間戦闘」と「100日間戦闘」を連続展開するよう指示した。

まず、「150日間戦闘」と「100日間戦闘」において人民の精神力を最大限に発揮させるようにした。

戦闘を発起しながら党指導グループを組織して下部に派遣し、彼らが大衆を新たな革命的大高揚へと奮い立たせるうえで主動的役割を果たすようにした総書記は、戦闘期間、各部門の活動を現地で指導しながら、党指導グループの活動状況を把握し、党指導グループが当該単位の現行生産を党の立場から後押しするとともに、党の大衆路線を貫徹することを重要な課題として示し、それに力を入れるようにした。

また2009年６月25日、党・軍隊・国家経済機関の幹部への談話『金日成民族の偉大な精神力をもって、強盛大国建設のすべての部門で革命的大高揚の炎をさらに強く燃え上がらせよう』で、強盛大国の建設において人民の精神力を高く発揚するための課題と方途を示した。

総書記は戦闘期間、現地指導を通じて、人民経済の４大先行部門を盛り立てることに引き続き大きな力を入れながら、機械、化学、建材、鉱業などの重工業部門全般で大高揚の炎をさらに強く燃え上がらせるようにした。

2009年９月と12月には城津製鋼連合企業所を現地指導して、チュチェ鉄の生産体系を確立するようにさせ、金属工業部門の他の工場、企業でも最新科学技術の成果を取り入れ、それぞれの実情に即してチュチェ鉄の生産体系と方法を完成し、より多くの鉄鋼材を生産するようにした。

また、2009年５月27日には党・国家経済機関の責任幹部への談話『全力を集中して電力不足を決定的に解消していこう』で、戦闘期間、電力工業部門で革新を起こすための課題と方途を示した。

2009年１月、熙川発電所の建設を発起した総書記は、2009年３月

と９月、建設現場を現地指導して、新たなチョンリマ速度、熙川速度を生み出すようにし、2009年８月には北倉（プクチャン）火力発電連合企業所を、2009年10月には水豊（スプン）発電所を現地指導して、電力問題を解決するための闘争を強力に展開するようにした。

2009年３月には安州（アンジュ）地区炭鉱連合企業所を、８月には2・8直洞（チクトン）青年炭鉱を現地指導して、石炭生産で革新を起こすようにし、鉄道運輸部門で輸送組織と指揮を綿密にして輸送で決定的な改善をもたらし、鉄道の近代化を推進し鉄道運輸の物質的・技術的土台を強化するようにした。

総書記は、機械製作工業部門で工作機械と酸素分離機、発電機とコンプレッサー、自動車とトラクターなどの機械設備と運輸機材、部品の生産で一大高揚を起こし、化学工業部門では南興（ナムフン）ガス化対象の工事を完成し、興南（フンナム）ガス化対象の工事を推し進めるようにした。そして、大興（テフン）青年英雄鉱山と検徳（コムドク）鉱業連合企業所、龍陽（リョンヤン）鉱山などの鉱業部門で鉱物生産を増大し、建材工業部門では総合的な建材基地である大同江タイル工場（当時）を建設し、セメントとガラスなど良質の建材をより多く生産するようにした。

「150日間戦闘」と「100日間戦闘」によって国の経済的土台はより強固なものになった。

総書記は「150日間戦闘」と「100日間戦闘」を成功裏に締めくくったその気勢で強盛国家の扉を開くための最後の突撃戦を力強く繰り広げるようにした。

まず熙川発電所の建設場を強盛国家建設の最前線と定め、2010年１月３日の新年初の現地指導を皮切りにして毎年何回も熙川発電所の建設現場へ出向き、「一気に」という攻撃精神と気概で10

年以上かかると言われた建設をわずか３年間で終える奇跡を起こすようにした。

また、新世紀の産業革命の炎、咸南の炎を燃え上がらせ、経済強国の建設で驚異的な出来事を次々と起こさせた。

総書記は産業革命の炎を燃え上がらせ、国の経済を知識経済型強盛国家建設の道に突き進むようにした。

2010年12月をはじめたびたび熙川工作機械総合工場（当時）を現地指導して、工場をＣＮＣ工作機械生産の母体工場、モデル工場である熙川蓮河（リョンハ）機械総合工場に発展させ、最先端ＣＮＣ設備を生産するようにさせた。そして、最新式ＣＮＣ工作機械の生産で飛躍的発展を遂げた蓮河の開拓精神、蓮河の創造気風によって、機械工業だけでなく、金属工業、電力工業、石炭工業、鉄道運輸など人民経済の主要部門は言うまでもなく、小さい地方産業工場でもＣＮＣ化を実現するようにした。

総書記は、咸鏡（ハムギョン）南道の労働者と人民を経済強国建設のための突撃戦の先頭に立たせ、咸南の炎を燃え上がらせた。

毎年ほとんど毎月、咸鏡南道を現地指導して、2・8ビナロン連合企業所でのビナロン生産を正常化する展望を開き、興南肥料連合企業所の褐炭ガス化第一系列の工事を完成してチュチェ肥料の大量生産を実現させた。そして、大興青年英雄鉱山と端川（タンチョン）マグネシア工場でマグネサイト工業のチュチェ化、国産化を実現させるようにし、端川港の建設で世人を驚嘆させる奇跡と革新を起こすようにした。

この過程で咸境南道で革新の炎が燃え上がった。

総書記が燃え上がらせた咸南の炎には、党が与えた課題を最短期

間内に最高の水準で成し遂げる頑強な攻撃精神、自力で世界に浮上しようとする強い民族自尊の精神、自分の故郷、自分の職場で強盛復興の扉を真っ先に開こうとする先駆者の気質が具現されている。

金正日総書記の賢明な指導のもとに、朝鮮は金日成主席の生誕100周年を迎え、社会主義強盛国家の扉を開く転換期に入るようになった。

第７節　金日成主席の生誕100周年を迎えて人民生活向上に画期的転換をもたらすために

朝鮮人民は金正日総書記の指導のもとに社会主義強盛国家建設偉業の歴史的転換期をかざる大高揚進軍の道で、金日成主席の生誕100周年を間近にするようになった。

金正日総書記は金日成主席の生誕100周年を迎えて強盛国家の扉を開くという雄大な目標を示した。

2007年10月27日、党中央委員会の責任幹部への談話『革命発展の要請に即して党細胞の機能と役割を絶えず高めるべきである』と、2008年１月２日と１月６日、党中央委員会の責任幹部への談話をはじめ多くの機会に、2008年から総攻撃戦を繰り広げて主席の生誕100周年を迎え強盛国家の扉を開くという目標を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「2012年は金日成同志の生誕100周年に当たる意義深い年です。われわれは経済強国の建設を強力に推し進めて、金日成同志の生誕100周年に当たる年には青く澄んだこの空の下に強盛大

国の扉を開かなければなりません」

金正日総書記は主席の生誕100周年を迎え、人民生活の問題を決定的に解決することを決心し、それを実現するための活動を指導した。

金正日総書記は、軽工業と農業生産を決定的に盛り立てるようにした。

2010年３月31日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『軽工業と農業生産に力を集中して人民生活の向上に決定的転換をもたらそう』で、軽工業と農業を発展させて人民生活を決定的に向上させるうえで提起される問題を明らかにし、これに全党的、全国家的な力を集中させるようにした。

まず軽工業を優先視し、これに総力を集中して一般消費財の問題を解決するようにした。

軽工業工場の老朽化した設備と生産工程を近代的に改造することに力を入れる一方、最先端技術で装備された新しい軽工業工場を建設するようにした。

こうして、原料の投入から製品の包装に至るまで自動制御装置を備えた近代的な食品工場が建設もしくは改造され、紡織・日用品工場の生産工程と設備が近代化され、一般消費財の生産を増大させる土台が築かれた。

2009年４月、三日浦（サムイルポ）特産物工場で食品工業発展の火の手を上げるようにし、その模範を全国に一般化させた総書記は、食料、紡織、ニット、靴、日用品など軽工業部門の工場、企業を現地指導しながら、生産の正常化と製品の品質向上に努めるようにした。

また、軽工業と関わりのある単位の工場、企業で生産を増やし、この部門に必要な原料と資材と資金を円滑に提供し、軽工業の原料、

資材の生産をチュチェ化、国産化することに力を入れるようにした。

特に、2008年５月、2009年２月と11月をはじめたびたび2・8ビナロン連合企業所を現地指導して、改造工事の段階別目標とその遂行のための方向と方途を示し、提起される問題を一つ一つ解決しながら、既存生産工程を全面的に改造してビナロン生産工程のＣＮＣ化を実現するための膨大な建設を２年間で完了するという奇跡を起こすようにした。

2010年２月７日と９日、2・8ビナロン連合企業所を重ねて訪ね、16年ぶりに再び生産されたビナロン綿を見て大いに満足し、2010年３月５日にはビナロン工場を再興して全国を祝賀の雰囲気にわき立たせた2・8ビナロン連合企業所の労働者、技術者と幹部に総書記自身の名で特別感謝文を送った。そして、３月６日にはビナロン工場の竣工を祝う咸興（ハムフン）市大衆集会に参加して、2・8ビナロン連合企業所の労働者をはじめ咸興市民を熱烈に祝った。

そして2010年８月、2011年１月と８月、10月と12月に重ねて2・8ビナロン連合企業所を訪れ、水平紡糸職場と繊維職場をはじめ全般的生産工程を新たに設け、正常に運営するよう精力的に指導した。

総書記は地方産業の発展にも大きな力を注いだ。

2010年11月、昌城（チャンソン）郡を現地指導して地方産業発展の火の手を上げ、すべての市、郡がそれぞれの実情に即して地方産業工場の技術改造を着実に進め、自己の原料源泉を動員して生産を増大させるようにした。

総書記は、中央軽工業、地方産業とともに一般消費財の生産で重要な役割を担っている8・3一般消費財生産運動を根気よく推し進めるようにした。

2010年８月３日、咸鏡南道一般消費財展示場を見て回りながら、8・3一般消費財生産運動を活発に推し進める課題を示し、2011年１月にある工場で8・3一般消費財として生産した「ソリコッ」氷掻き機を見て、工場、企業で一般消費財の生産を増大させるようにした。

総書記は、農業生産で変革を起こすようにした。

まず穀物生産で革新を起こして食糧問題を解決するようにした。

2009年４月８日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『穀物生産で革新を起こして食糧問題を解決するのは現段階の社会主義経済建設で提起される最も切実な課題である』と、2011年１月28日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『農業で大革新を起こして食糧問題を決定的に解決することについて』で、農業に力を総集中、総動員して穀物生産で革新を起こす課題を示した。

これとともに、沙里院(サリウォン)市嵋谷(ミゴク)協同農場と載寧(チェリョン)郡三支江(サムジガン)協同農場、龍川(リョンチョン)郡新岩(シンアム)協同農場、泰川(テチョン)郡銀興(ウンフン)協同農場、咸州郡東峰(トンボン)協同農場が互いに社会主義的競争を展開するようにし、すべての農場がこの単位の模範を見習って穀物のヘクタール当たり収量を一段と高めるようにした。

そして、農業部門に対する国家的投資を増やし、すべての部門、すべての単位が農作業に必要な設備と資材を営農工程に支障をきたさないように優先的に提供し、農村に対する勤労支援を強化するようにした。特に2009年２月と11月、2010年８月、2011年１月と10月には興南肥料連合企業所を、2009年５月と2010年６月、2011年５月には南興青年化学連合企業所を現地指導し、技術改造と近代化工事を推し進めてより多くの肥料を生産して農業部門に供給するようにした。

総書記は、人民生活の向上で重要な役割を担っている畜産と果樹栽培、養魚の発展にも深い関心を払った。

新しく設けられた家禽工場と養豚工場、ヤギ牧場、ウサギ種畜場など家禽及び畜産基地がその能力を最大限に発揮して、肉類やタマゴ、乳類などの畜産物生産を画期的に増やすようにした。

2009年には元興（ウォンフン）地区に大規模の果樹農場を設ける構想を示し、2009年11月と2010年６月、2011年７月など現地指導を重ねて大同江果樹総合農場を国のモデル果樹農場として立派につくるようにした。

この課題を受けた朝鮮人民内務軍の軍人建設者と618建設突撃隊員たちは２年余りの間に1000ヘクタール余りの土地を整理し、数百万株の果樹を植えて大同江果樹総合農場を整備し、大同江果物総合加工工場、大同江網工場、大同江養豚工場、乾果チップス工場、果実保管庫など果物の生産と加工に必要な対象を一式そろえて建設した。

2009年６月と2011年６月には高山（コサン）果樹農場を、2011年５月には竜田（リョンジョン）果樹農場と徳城（トクソン）果樹農場を現地指導して、果樹農場を近代的な果実生産基地にする事業を大がかりに推進するようにした。

これとともに、2009年８月と2011年５月に拡張された球場（クジャン）養魚場を、2009年10月にはサケ研究所を、2010年11月には竜井（リョンジョン）養魚場などの養魚場を現地指導して、養魚場を拡充し、先進的な魚類飼養管理方法を広く取り入れて生産を増やし、人民が実際にその恩恵を受けられるようにした。

金正日総書記は人民の住宅問題をより円滑に解決するための事業を精力的に指導した。

まず、万寿台（マンスデ）通りを先軍時代のモデル住宅街として完成させる

ようにした。

総書記は、万寿台通りの古い住宅をすっかり取り払い、21世紀のモデルとなり、強盛国家の面貌に似つかわしい近代的な住宅街を建設する課題を示した。

2007年12月27日、新しく建設する万寿台通りの住宅形成模型を見て、街の形成、住宅の内部構造を最高レベルで建設するようにし、その街の名を「万寿台通り」と命名した。そして強力な建設陣を編成し、建設において綱領的指針とすべき事柄を一つ一つ示し、提起されるすべての問題を解決するよう取りはからった。こうして万寿台通りは１年２カ月という短期間に完成された。

総書記は万寿台通りの住宅をモデルにして近代的な住宅を次々と建設するようにした。

2009年10月20日、完成された万寿台通りの住宅を見て回り、幹部と建設者たちが1950年代の「平壌速度」の創造者たちと1970年代～1980年代の「平壌繁栄期」の開拓者のように、新世紀の首都建設において先軍時代の新たな「平壌速度」を生み出し「平壌繁栄期」を再現するよう呼びかけた。

2010年５月26日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『党が示した首都の10万所帯住宅建設を強力に推し進めよう』で、首都の10万所帯住宅建設は党が決心し打ち出した重要な課題であり、世に宣言し人民に約束したことであるから、どんなことがあっても期限内に無条件遂行しなければならないと強調した。

特に2011年４月、金日成主席の生誕100周年を迎えて倉田（チャンジョン）通りの住宅建設を完成させる課題を示し、幾度も住宅建築形成案を見て、新世紀の要請どおり最高の水準で建設するよう強調した。こうして

金日成主席の生誕100周年を迎え、首都の中心部に位置する倉田通りは近代的な通りに変貌した。

総書記は、全国の地方都市と農村でもそれぞれの実情に適した住宅を多く建設するようにした。その結果、嵋谷里のスモモ村、アンズ村、黄津(ファンジン)温泉郷など全国各地に仙境都市、仙境村が次々と建設されるようになった。

金正日総書記は商品供給と給養及び便益・サービス事業をさらに改善するよう取り計らった。

まず商品供給活動を改善して、人民の生活必需品の需要を充足させるようにした。

百貨店や商店をはじめ商業サービス基地を立派に整え、商業設備を近代化し、商品価格も適正なものにするようにした。そして、商品供給体系を整然と打ち立てて商品を切らさず人民に販売し、商品陳列とサービスの形式、方法を絶えず改善し、サービス従事者の奉仕精神を高めるようにした。

総書記は生涯の最後の年である2011年にしても、７月には平壌第１百貨店の第２回商品展示場を、９月には普通門(ポトンムン)通りの食肉商店を、12月には光復(クァンボク)地区商業センターを現地指導し、商業部門の幹部とサービス従事者が人民に対する献身的奉仕精神を発揮して商業サービス活動に決定的な改善をもたらすようにした。

こうして首都平壌には普通江(ポトンガン)百貨店、普通江商店をはじめ近代的な商業サービス基地が生まれ、金日成主席の生誕100周年を契機に万寿橋(マンスギョ)食肉商店と未来(ミレ)商店が建設されてオープンした。

総書記は給食サービス事業の改善にも力を尽くした。玉流(オンリュ)館と清流(チョンリュ)館を人民のための公共給食サービス基地として立派に整備

するようにし、日増しに高まる人民の文化的要求に即して香満楼（ヒャンマンル）大衆食堂をはじめ給食サービス基地を改造するようにした。

また、民族料理だけでなく、スッポン、チョウザメ、ウズラ料理など世界的な名料理を専門に供する玉流館料理専門食堂を新設して国の料理発展において原種場の役割を果たすようにした。

一方、中央と地方の給食サービス基地を訪ねて、すべての食堂で料理の水準を高め、衛生安全性を保障し、運営とサービス活動を絶えず改善していくようにした。

総書記は、便益サービス事業の改善にも努めた。

国を発達した社会主義文明国にし、人民によりよい文化生活条件をもたらすため、総合的な便益サービス施設を新たに建設し、既設の蒼光（チャングァン）院式便益サービス基地をより立派に整備するようにした。

総書記の恩愛によって、首都平壌市の東平壌地区に蒼光院と同じような総合的な便益サービス基地である柳京（リュギョン）院が新たに建設され、全国各地に建設されていた数百カ所の蒼光院式の便益サービス基地である恩情（ウンジョン）院、恩徳（ウンドク）院が改装されて面貌を一新した。

総書記は、便益サービス部門従事者の技術・技能水準を高めて各種便益サービスの質を向上させ、人民の利益と生活上の便宜を最優先的にはかる原則でサービスの手配りと方法を改善するようにした。

金正日総書記は、発展する時代の要請と人民の日増しに高まる文化的要求に即して人民の文化・情操生活をさらに改善するようにした。各地に近代的な文化・情操生活拠点と人民の文化的な憩いの場を設けるようにした。平壌市内の劇場、映画館を人民の立派な文化・情操生活基地として充実させるようにし、金日成主席の生誕100周年を迎え、万寿台地区に人民劇場を先軍時代の記念碑的建造

物として新しく建設するようにした。そして、黄海北道芸術劇場をはじめ各道に劇場を新しく建設または改装し、市、郡、工場、企業にも文化会館を立派に整備するようにした。

総書記は、公園や遊園地、動物園を人民の憩いの場として立派に整備することにも深い関心を払った。

2008年７月、凱旋（ケソン）青年公園を最新式の遊戯娯楽施設と電飾、各種のサービス施設を備えた総合的な遊園地に改造することを発起してその建設を具体的に指導し、2010年４月と2011年12月、立派に建設された凱旋青年公園遊戯場を見て回り、人民になんの不便もないように遊戯場の管理運営を改善するようにした。

また、竜岳山（リョンアクサン）遊園地と妙香山（ミョヒャンサン）遊園地をより立派に整備して、人民がここで祖国の美しい絶景を俯瞰できるようにし、綾羅（ルンラ）島に遊戯場と総合遊泳場、イルカ館からなる遊園地を建設するようにした。これとともに中央動物園をたびたび現地指導して、動物園を勤労者と青少年の文化･情操生活と教育の重要な拠点となるよう拡充させた。

総書記は、人民の文化・情操生活に役立つ電子設備と製品を開発して生産する近代的な基地を設け、その管理・運営を改善して人民の文化・情操的要求を充足させるようにした。モンランビデオ社に先端技術を導入したＤＶＤ工場を建て、勤労者と青少年に映画や演劇、テレビドラマなど各種の文芸作品を収録した文化媒体をより多く普及するようにし、液晶テレビをはじめ各種電子製品の生産を拡大するようにした。

さらに、国内と外国の音楽、舞踊に関する資料を収集、編集、普及する総合的な芸術情報基地としてハナ音楽情報センターを建設

するようにし、偉大な生涯を終える時期である2011年12月15日にはセンターを現地指導し、自ら数十年間、革命と建設を指導する過程で体系的に収集してきた音楽作品をすべて寄贈し、それを人民が広く鑑賞し利用できるようにした。

金正日総書記の指導のもとに、金日成主席の生誕100周年を迎え、人民の物質・文化生活が一段と向上することによって、強盛国家の扉を開くための闘争に決定的な転換がもたらされるようになった。

第８節　国土の面貌を一新させるために

金正日総書記は国土の面貌を一新させるための事業を賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは祖国の山河をさらにきちんと保護し、立派に整備して、風光明媚で百果が実る社会主義の桃源郷、労働党時代の錦繍江山にしなければなりません」

金正日総書記は平壌市をはじめ全国の都市と農村を百花咲き誇る公園の中の都市、公園の中の村にするために力を尽くした。

まず、首都平壌の錦繍山（クムスサン）記念宮殿（当時）地区をチュチェの最高聖地としてより立派に整えるようにした。

錦繍山記念宮殿は金日成主席が生前の姿で安置されている太陽の家であり、朝鮮人民と世界の進歩的人民が絶えず訪ねるチュチェの最高聖地である。

総書記は、錦繍山記念宮殿と樹木園に最上のさまざまな木と美し

い花をより多く植え真心をこめて育て、樹木をうっそうと生い茂らせ、緑地をきれいに造成して、記念宮殿の風致を一層引き立てるようにした。

また、万景台革命史跡地をはじめ平壌市内の革命史跡を緑林化するようにし、これとともに平壌市内の公園や遊園地、道路の周辺により多くの緑地を造成し、良種の樹木と美しい草花を多く植えるようにした。

特に2000年７月に平壌花卉研究所を新設し、2011年３月３日、この研究所を現地指導して、花卉研究事業を一層強化し、花卉栽培を科学化、工業化して花卉生産を増やすようにした。そして、近代的な花卉温室を新設し、市内のあちこちに花売り場を設け、花卉栽培を大衆的運動として展開するようにした。

総書記は、すべての道、市、郡が緑林化事業に力を入れて都市と村を公園の中の都市、公園の中の村にするようにした。618建設突撃隊を組織して白頭山地区の革命戦跡を整備するとともに、三池淵(サムジヨン)郡を密林の中の都市として立派に建設するようにし、咸鏡南道利原(リウォン)郡と慈江道満浦(マンポ)市の模範にならってすべての市、郡の緑林化事業を積極的に進めるようにした。

金正日総書記は土地の管理と保護に力を注いだ。

まず、耕地整理を大々的に行って国土を社会主義朝鮮の土地らしく変貌させるようにした。

1998年５月４日に耕地整理の構想を示し、江原(カンウォン)道、平安(ピョンアン)北道、黄海南道、平安南道、平壌市、南浦(ナンポ)市と相次いで全国の耕地整理事業を指揮した。

2000年１月24日と27日、平安北道の耕地整理事業を現地指導した

際の幹部への談話『耕地整理は国の富強発展のための大自然改造事業であり、万年大計の愛国偉業である』をはじめ多くの談話で、耕地整理で提起される課題を示し、全国の耕地整理現場へ出向いてその工事を指導した。

総書記は干拓地建設を強力に推進させた。

2008年６月13日と2009年７月５日、大渓島（テゲ）干拓地の建設現場を現地指導して、工事を早期完成させるように指導した。

2010年７月15日、完工した大渓島干拓地を訪れ、まる一つの郡の面積に匹敵する耕地を得て国土の面貌を一新させた彼らの偉勲を高く評価しながら、「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンは1980年代に人民軍が唱えたものだが、今度は「朝鮮は決心すれば実行する！」という新たなスローガンを出すべきだと語った。そして、大渓島干拓地の建設を完成して金日成主席の遺訓を貫徹した平安北道干拓地建設連合企業所に金日成勲章を、大渓島干拓地の設計には金日成賞を授与するようにした。

総書記は土地を保護し、地力を高めるための事業に力を入れるようにした。

2008年４月２日、党・国家経済機関の責任幹部への談話『水害を防ぐ対策をしっかり立てることについて』をはじめ多くの機会に、長雨などの天災によって耕地が埋没したり流失することのないようにし、客土をしたり消石灰をまいたりし、有機質肥料も多く施し、緑肥作物も栽培して地力を高めるようにした。

金正日総書記は山林の造成と保護にも力を入れるようにした。

2002年３月６日、党・国家・軍隊の責任幹部への談話『治山治水事業を強力に展開して祖国の山河を労働党時代の錦の山河に

変えよう』をはじめ多くの談話で、朝鮮民族が代々住んできた3千里錦の山河をわれわれの時代により立派に保護し、より立派に整備して、風光明媚で数々の果実がたわわに実る社会主義の桃源郷に、労働党時代の錦の山河にするのが今日の党の構想であり決心だと述べ、山林の造成と管理に関する問題を全面的に明らかにした。

総書記は、山林の造成を将来を見通して計画的に進めるようにした。中央と地方の育苗場を現地指導して苗木の生産を先行させるようにした。2008年８月８日には利原郡山林経営所の育苗職場を、2009年10月２日と2011年10月９日には国土環境保護省の中央育苗場を現地指導して、育苗場をよく整備し、その生産能力を拡大し、苗木生産の科学化、工業化、集約化を実現するようにした。

これと同時に、植樹を大衆的運動で繰り広げ、植えた木の肥培管理に力を入れるようにした。

毎年、春と秋の国土管理総動員期間と植樹期に全党、全国、全人民が植樹に参加するようにし、2004年３月には前線視察の最中に人民軍将兵とともに植樹した。

そして適地適樹の原則を守り、混成林を造成する方向で良種の樹木を多く植えて国の山々を黄金の山、宝の山にし、植樹を技術規定どおり真心をこめて行い、それをきちんと管理して活着率を高めるようにした。

総書記は山林の造成とともに山林の保護にも深い関心を払った。

2008年７月１日、慈江道和平（ファピョン）郡の五佳（オガ）山自然保護区を現地指導しながら指摘したことをはじめ、樹木を乱伐しないように教育と統制を強めると同時に、住民の焚き物問題を解決し、山火事と病害虫による被害を防止するための対策をぬかりなく立てるよう重ねて

強調した。そして、山林監督員を責任感の強い人たちで固め、時代の英雄である江東（カンドン）郡山林経営所垈里（テリ）労働者区の山林監督員の模範を見習う運動を起こすようにした。

金正日総書記は自流式水路の工事を推し進め、河川整理に力を入れるようにした。

まず自流式水路の工事を推し進めるようにした。2000年１月23日、党中央委員会の責任幹部たちに、全党、全軍、全人民を総動員して价川――台城湖間の水路工事を行う課題を示し、２月24日にはこれに関する朝鮮民主主義人民共和国国防委員会の命令を下達し、工事を最上の質的水準で進めるようにした。こうして膨大な价川――台城湖間の水路工事は２年余りの間に完成されることになった。

これについで2002年11月に白馬（ペクマ）――鉄山（チョルサン）間の水路工事を発起して工事が成功裏に進められるようにし、2005年12月４日に完成された白馬――鉄山間の水路を見て回り、今度はミル原の水路工事に着手するよう指示した。この工事も総書記の精力的な指導によって完成され、全国各地での中小規模の水路工事も順調に進められて全国的な水利体系が整備され、国土の面貌は一新された。

総書記は河川整理に力を注ぐようにした。

2008年４月２日、党・国家経済機関の責任幹部への談話と2011年２月９日、党中央委員会の責任幹部への談話をはじめ多くの機会に、清川（チョンチョン）江と普通江をはじめ主要河川の浚渫工事と護岸整理工事を進め、堤防の補修を定期的に行うよう強調した。また2011年１月には新しく作られた浚渫船の構造と作用原理、性能などを具体的にあらため、浚渫作業の機械化が高い水準で実現されるようにした。

金正日総書記は道路の近代化を推進し、鉄道の革新をもたらす

ようにした。

総書記は、高速道路と幹線道路、産業道路、革命戦跡踏査道路、名勝参観道路を新たに増設し、各都市に迂回道路を建設し、道路の技術状態を改善し、道路の舗装をきれいにして全般的道路網を立派に完成させるようにした。

2000年８月に慈江道城干（ソンガン）郡の道路補修管理隊九峰（クボン）嶺家族小隊員たちに会って彼らの愛国的行為を高く評価し、すべての人が彼らの模範を見習うようにした。

総書記は鉄道を改造するための事業を推し進めるようにした。

まず、鉄道の建設を推し進め、線路の強度を高めることに力を入れた。2009年９月、黄海製鉄連合企業所を強固なレール生産基地にする措置を講じた。また、この企業所での重レール生産を全党的、全国家的な事業とする問題、関連単位が必要な設備と資材の供給対策を立てる問題など重レール生産を推し進めるための対策を立てるとともに、重ねて黄海製鉄連合企業所を現地指導して、重レールの生産工程を早急に稼動させて重レールを生産するようにした。

2001年９月には羅興（ラフン）コンクリート枕木工場を現地指導して、工場を近代的に改造する一方、その生産能力を高めるようにし、党創立60周年を迎えて勝湖（スンホ）里コンクリート枕木工場を拡充して枕木の問題も解決されるようにした。そして、セメントと鋼材をはじめ鉄道の改造に必要な原料や資材を優先的に供給する国家的措置を講じるようにした。

総書記は全社会的に鉄道建設と補修、管理に責任を持って参加するようにした。

各道の鉄道の補修、管理を道自体の力で行う整然たる体系を確立

し、青年同盟に北部鉄道の改造、補修工事を受け持たせた。そして大衆的運動で鉄道駅と鉄道周辺の整備事業を根気よく進めていくようにした。

総書記はこの他にも、東西海岸の築造に深い関心を払った。津波と台風による被害を防ぐため、海岸防潮堤をはじめ各種の保護施設を堅固に構築して定期的に補修し、防風林を計画的に造成していくようにした。

金正日総書記の賢明な指導により国土の面貌が一新され、全国が風光明媚で百果たわわに実る社会主義の桃源郷に、労働党時代の錦の山河に変貌するようになった。

第９節　先軍文化の全盛期をもたらすために

金正日総書記は、社会主義強盛国家建設の要請に即して先軍文化の全盛期をもたらすための活動を指導した。

まず、党の科学技術重視路線を貫徹して国の科学技術を飛躍的に発展させるよう導いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「科学技術は強盛大国建設の推進力であり、強盛大国は科学技術によって裏打ちされてこそ成功裏に建設することができるのです」

総書記は2000年１月１日、党中央委員会の責任幹部への談話『社会主義強盛大国の建設において決定的な前進を遂げるために』で科学技術を強盛国家建設の３大柱の一つとして位置づけ、2003

年10月15日には党中央委員会の責任幹部への談話『党の科学技術重視路線を貫徹することについて』をはじめ多くの著作で、党の科学技術重視路線の基本的要求とそれを貫徹するうえで提起される諸問題を明らかにした。

党の科学技術重視路線の基本的要求は、短期間内に先端科学技術を早く発展させ、国の科学技術を世界的水準に引き上げ、社会主義強盛国家の建設を科学技術的に確固と保証することだと指摘した。

そして、党の科学技術重視路線を貫徹するためには、科学技術発展の基本方向を正しく定め、それに力を集中し、国の科学技術発展に大飛躍をもたらして最先端を突破しなければならないと強調した。また、科学技術と生産を密接に結びつけ、科学者、技術者の役割を強め、科学技術に関する事業を全党、全国、全人民の事業として推し進めなければならないと述べた。

党の科学技術重視路線を貫徹するためにまず、全社会に科学技術を重視する気風を確立するようにした。

1999年を科学の年とし、すべての幹部が科学技術に対する正しい観点に立って現代科学技術習得の先頭に立つようにし、すべての単位で科学技術の要求どおり働くようにした。また、科学者、技術者を社会的に大いに押し立て優遇し、彼らの研究条件と生活条件を十分に保障するようにした。そして、1999年３月と2003年10月には全国科学者・技術者大会、2005年10月には全国科学者・技術者突撃隊運動先駆者大会、2007年11月末～12月初には全国知識人大会、2010年３月末には先軍時代の全国科学者・技術者大会を開いて、それらの大会が科学者、技術者を強盛国家の建設に奮い立たせ、全社会に科学技術重視気風を打ち立てる重要な契機となるようにした。

総書記は、科学技術の発展に一大飛躍を起こし、最先端を突破することに深い関心を払った。

1999年１月の国家科学院に対する現地指導をはじめ、国家科学院咸興分院、農業科学院ジャガイモ研究所、国家科学院生物工学分院など多くの科学研究機関を現地で指導して、科学者、技術者を最先端突破戦へと奮起させた。

また、核心基礎技術である情報技術、ナノ技術、生物工学の発展に第一義的な力を入れ、その中でも情報技術、特にプログラム技術を急速に発展させるようにした。そして、情報技術を発展させるため、情報技術の核心技術であるプログラム技術を発展させるうえでかなめとなる朝鮮式のオペレーティングシステムの開発に力を入れるようにした。

総書記は核心基礎技術とともに新しい材料技術、宇宙技術をはじめ先端科学技術の発展にも努めるようにした。このほかにも、経済強国の建設で切実に提起される科学技術的問題の解決に力を注ぐようにした。こうして、朝鮮は人工衛星「光明星２」号の打ち上げ成功という驚異的な成果を収めるようになった。

金正日総書記は強盛国家建設の要請に即して教育事業に革命的転換をもたらすよう導いた。

2001年９月19日、金策工業総合大学を現地指導した際の教職員への談話『金策工業総合大学は国の強力な科学技術人材養成基地である』と、2008年５月７日、党中央委員会の責任幹部への談話『社会主義強盛大国建設の要請に即して教育事業に革命的転換をもたらすために』をはじめ多くの談話で、先軍時代に教育部門に提起される主な任務と強盛国家建設の要請に即して教育事業に革命

的転換をもたらすうえで堅持すべき原則、その遂行方途を示した。

総書記は、教育事業に転換をもたらすためにまず、全国各地の多くの大学と学校を現地で指導し、教育部門の従事者が次世代の教育事業に知恵と精力を尽くしていくようにした。

新世紀の初年である2001年９月と2006年１月に金策工業総合大学を現地指導し、ついで金元均（キムウォンギュン）平壌音楽大学、咸興化学工業大学、清津鉱山金属大学、咸興医科大学、元山（ウォンサン）農業総合大学、熙川工業大学、金正淑（キムジョンスク）師範大学、咸興水利動力大学などの大学を現地指導しながら、大学の使命と任務に即して強盛国家の建設を担っていく各分野の有能な科学技術人材をより多く、より立派に養成する課題を示した。また、2002年10月と2003年７月には両江道三池淵郡茂峰（ムボン）中学校と英雄江界将子山（チャンジャサン）第１中学校を、2009年２月と４月、８月には金基松会寧（キムギソンヘリョン）第１中学校と楽元郡西中（ソジュン）中学校、江原道文川（ムンチョン）中学校を現地指導し、授業の参観もしながら、教員が次世代の教育に高い熱意を示すよう細やかに心を砕いた。

また、著作『教育事業をさらに発展させることについて』発表20周年に当たる2004年10月に開かれた全国教育者大会が教育部門従事者を党の教育政策貫徹に奮い立たせるうえで画期的な転換の契機となるようにした。

総書記は教育体系を整備し、改善、完成するようにした。

英才教育システムと大学教育システム、専門学校教育システムを整備、完成し、働きながら学ぶ高等教育システムをさらに強化、発展させるようにし、全民学習、社会教育の強化にも深い関心を払い、2007年４月11日、党中央委員会、内閣の責任幹部への談話『人民大学習堂は金日成同志の貴い遺産であり、全民学習の大殿堂で

ある』で、社会全体に革命的学習気風を確立し、社会教育を強化するうえで人民大学習堂に提起される重要な問題を明らかにした。

特に金日成総合大学をモデルにしてすべての大学を盛り立てるようにした。2009年７月24日の教示と９月11日、党中央委員会の責任幹部への談話、2009年12月11日、党及び教育部門の責任幹部への談話『金日成総合大学をチュチェ教育と科学の最高殿堂に、世界一流級の大学に一層立派に整えよう』をはじめ多くの談話で、金日成総合大学を世界一流級の大学に整備する雄大な構想を示し、2009年と2010年に再度大学を現地指導し、それを実現するための方向と方途を具体的に提示した。

総書記は、教育内容と方法を改善して強盛国家の建設に役立つ革命的人材をより多く養成するようにした。

まず、すべての教育段階で政治・思想教育を優先させながら科学技術教育を強化する方向で教育内容を構成するようにし、現代科学技術の急速な発展とその水準の飛躍的な向上に即して教育内容を絶えず改善し、補充、完成させていくようにした。

教育内容とともに教育方法を改善するため、金日成主席の示した啓発式授業方法を具現することに力を注ぎ、情報産業時代の要請に即してコンピュータとビデオ、マルチメディア編集物などの視覚演試手段を大いに利用するようにした。また、優れた授業方法を考案して広く一般化させ、授業で優秀な教員と新しい授業方法を考案した教員には「10・8模範教育者」称号と新授業方法登録証を授与するようにした。これと同時に、すべての学校で理論と実践、教育と生産労働を適切に結合し、学校での試験方法、学生・生徒の実力評価方法を改善するようにした。

総書記は、教員の責任感と役割を強め、学生・生徒の学習熱意を高めるようにした。

教員の責任感と役割を強めるために、教員が職業革命家としての政治的・思想的品格を備え、教育者としての科学理論的資質と実力を高めるようにした。また、教員を社会的に大いに押し立て優遇する気風を打ち立てるようにし、特に2008年には教員栄誉勲章と教員栄誉メダルを制定して功労のある教員に授与するようにした。

また、学生、生徒の学習熱意を高めることに深い関心を払い、すべての学生、生徒が党の示した学習第一のスローガンを高く掲げて党と革命、祖国と人民のために学びに学びまた学ぶようにし、特に2009年12月17日には金日成総合大学に「自国の地を踏まえ、目は世界に向けよ！　崇高な精神と豊富な知識を兼備した先軍革命の頼もしい根幹となれ！　奮発しまた奮発して偉大な党、金日成朝鮮を世界が仰ぎ見るようにせよ！　2009・12・17　金正日」という親筆書簡を送り、すべての学生に明確な学習目標と正しい見解を持たせるようにした。

総書記は、教育事業に対する国家的保障と社会的関心を高めるようにした。

教育に必要な物質的条件を優先的に、責任を持って提供することに第一義的な関心を払い、金日成総合大学をはじめ主要な大学に近代的な教育設備を提供するようにした。また、金策工業総合大学に電子図書館と体育館を設け、ついで金日成総合大学に電子図書館と水泳館を建設するようにして2009年と2010年に４回も現地指導し、咸興化学工業大学と金亨稷（キムヒョンジク）師範大学をはじめ各級学校を立派に整備するよう取りはからった。また、社会的に模範教育郡称号

獲得運動を活発に繰り広げるようにし、2005年には初めて教育後援基金を設けて、次世代教育のための支援事業を全国的規模だけでなく国際的規模でも活発に展開するようにした。

金正日総書記は先軍時代の文学・芸術を高い境地に引き上げるための活動を賢明に指導した。

まず、先軍時代の要求にかなった思想性・芸術性の高い文学作品をより多く創作するようにした。

作家が現実に深く入って現実を反映し、時代の要求を具現した文学・芸術作品を多く創作するようにした総書記は、2001年９月に長詩『五聖山（オソン）に稲妻ひらめく』、詩『遠い後日の歴史家たちに』『前線高地にぬか星流れる』『五聖山兵士の物語』をはじめ、作家が創作した数多くの作品を見て細かに指導し、作家が何の不便もない創作活動ができるよう厚い配慮をめぐらした。こうして、長編小説『天池』『閲兵の広場』『西海戦役』『江界の精神』など数多くの小説と詩が創作された。

総書記は先軍時代の映画制作で新たな高揚を起こすようにした。

軍人と人民を社会主義防衛の精神で教育し、強盛国家の建設に立ち上がった軍人と人民を革命的に教育するのに役立つ劇映画をより多く、立派に作るようにし、新しく作られた劇映画を見て、映画部門の創作家、芸能人が先軍時代を立派に反映させた映画を作るよう励ました。

劇映画とともに記録映画、科学映画、児童映画の制作にも深い関心を払い、創作原則と方途を示してこれを賢明に指導した。こうして1990年代末について新世紀に入っても映画創作に新たな転換がもたらされ、模範作品である劇映画「平壌ナルパラム」と「白玉」を

はじめ多くの劇映画と記録映画、科学映画、児童映画が制作された。

総書記は舞台芸術部門でも一大転換をもたらすようにし、主体的舞台芸術の開花期を開いた。

音楽芸術分野に新たな転換をもたらすため、すばらしい歌を多く創作するようにすると同時に、非凡な音楽的才知をもって創作方向と方途を示し、創作家の創作的情熱を大いにかき立てた。また、国立交響楽団の芸術創造活動に深い関心を払い、2004年から2011年の間に20数回にわたって交響楽団の公演を見て、チュチェ交響楽をさらに発展させるための課題を示し、彼らの創作公演舞台である牡丹峰劇場を特色のある劇場に改装する措置を取った。

こうして、2005年と2008年に音楽会形式の芸術公演『祖国の青空』と『降仙の夕焼け』など新しい形式の音楽芸術作品や管弦楽と合唱『雪が降る』をはじめ多くの作品が創作されてチュチェ音楽芸術の発展に大きく寄与した。

総書記はマスゲームと芸術公演を適切に結合した大マスゲームと芸術公演を創作、公演するようにした。

党創立55周年を迎え、マスゲームと芸術公演『百戦百勝の朝鮮労働党』を完成させ、それについで金日成主席の生誕90周年と朝鮮人民軍創建70周年を迎えて大マスゲームと芸術公演『アリラン』の創作を発起し、作品の「種子」と内容から構成と形式、作品に入れる歌に至るまで細かに指導した。大マスゲームと芸術公演『アリラン』は2007年８月15日にギネス世界記録証書を受けた。

総書記は時代精神を反映させた軽喜劇と演劇をより多く創作し、『血の海』式革命歌劇と世界的な名作も新世紀の要求に即して立派に再生して公演するようにした。

こうして、金日成賞受賞作品である軽喜劇『山びこ』（2010年再創作）をはじめ多数の軽喜劇と金日成賞受賞作品である演劇『今日を思い起こさん』（2011年創作）が先軍時代の傑作として創作、公演された。これとともに、2009年と2010年には歌劇『紅楼夢』『エブゲニー・オネーギン』『梁山伯と祝英台』、演劇『ネオン街の兵士』など外国の名作も再生されて広く公演された。

総書記は強盛国家建設の要請に即して大衆文化･芸術活動も活発に展開するようにした。

人民軍で創造された大衆文化･芸術の模範を大いに見習うようにし、2003年３月と2007年10月には大衆文化・芸術活動に対する指導体系を確立した。また、大衆文化・芸術活動に広範な大衆を参加させるため、人民軍でのように社会でも労働者、事務員の家族芸術サークルコンテストを開催するようにし、2010年４月には第２回４月の春人民芸術祭の大衆芸術部門総合公演を観覧した。これとともに、興南肥料連合企業所と平壌市内の大学生の芸術サークル公演状況をはじめ多くの単位の大衆文化・芸術活動状況を確かめ、党の思想と要求にかなった芸術活動を革命的に繰り広げていくようにした。

金正日総書記はスポーツと保健医療事業に画期的な転換をもたらすようにした。

スポーツの発展に深い関心を払い、まず、専門スポーツ技術を発展させるようにした。

スポーツ部門の幹部とスポーツマンに対する思想教育に第一義的な力を入れ、2001年１月、スポーツ部門の幹部と選手が革命的軍人精神を見習って活動気風と活動態度に新たな転換をもたらすようにした。

スポーツ技術を発展させるために2001年２月をはじめ多くの機会に、スポーツ部門で勝算のある種目に力を入れ、国際競技で世界の覇権を握るよう導き、2006年９月12日と30日には、党、軍隊の責任幹部への談話『朝鮮式のスポーツ競技原則と競技方法を具現して国のスポーツ水準を決定的に高めよう』で、思想戦、闘志戦、速度戦、技術戦を一貫して堅持するよう強調した。

またスポーツ科学を発展させるため、2002年２月、スポーツ図書館の建設問題を検討して図書館を充実させるようにし、７月には全国スポーツ部門科学者会議を開催させ、特に2008年６月25日には党中央委員会の責任幹部への談話『スポーツ科学を早急に発展させるために』で、スポーツ科学を速やかに発展させるための諸問題を明らかにした。

また、スポーツの大衆化方針を貫徹するように力を注ぎ、特に2000年10月、芸能人スポーツ大会開催中の金日成競技場へ出向いて芸能人たちを激励した。

こうして、マラソン女王や４重世界女子柔道選手権保有者が生まれ、女子サッカー選手団が国際競技で好成績を収めるなど、スポーツ発展において新たな転換がもたらされるようになった。

総書記は人民保健医療事業に新たな転換がもたらされるようにした。

党の予防医療方針を貫徹し、医療奉仕と科学研究活動、物質的・技術的土台を近代的に改善する活動を強力に推進させた。特に、医薬品の生産と医療機器の生産に深い関心を払い、2000年12月には新設された医薬品研究所と注射器工場を、2001年12月と2005年９月には江界高麗（コリョ）薬工場と興南製薬工場を訪れ、大衆医薬品の生産と医

療機器の生産を画期的に増大させるようにした。これとともに、江西（カンソ）鉱泉水のような鉱泉水を国家的に保護し、広く利用することにも深い関心を払った。

金正日総書記は社会主義的生活文化を確立し、民族文化遺産を正しく継承し発展させるようにした。

全国に先軍時代にかなった社会主義的生活文化を確立するようにした総書記は、2003年２月10日、７月２日、党中央委員会の責任幹部への談話『先軍時代に即した社会主義的生活文化を確立するために』で、全国に時代の要請にかなった生活文化を確立するための旋風を巻き起こすよう強調し、それを実現するための事業を精力的に指導した。

すべての人が自分の住む村と町、住宅と職場などの生活環境を新しい時代にふさわしく文化的に、清潔に整備するようにし、服装や身づくろいを時代の要請にふさわしくし、言葉づかいや食生活の文化水準を高めることにも深い関心を払った。

総書記は民族文化遺産を正しく継承し発展させる事業を賢明に指導した。

歴史文化遺跡を原状どおり保存、管理し、それを通じての教育を正しく行うようにするため、2002年６月に高原（コウォン）郡の梁泉（リャンチョン）寺、2003年２月と４月には博川（パクチョン）郡の深源（シムウォン）寺、金野（クムヤ）郡の安佛（アンブル）寺を訪ねたのをはじめ数多くの歴史文化遺跡を訪ねて現地で指導した。

また、良風美俗をはじめ民族固有の民俗伝統と風習を生かしていくことに深い関心を払い、2002年９月８日、2003年１月２日、党中央委員会の責任幹部への談話『朝鮮人民の優れた民族的伝統を大いに生かすために』と、2007年３月20日、31日、党中央委員会、

文学・芸術部門の責任幹部への談話『啓蒙期の歌謡は朝鮮民族の貴重な音楽遺産である』をはじめ多くの談話で、それを実現するための原則的諸問題を明らかにした。また、2008年12月には平壌市の大城(テソン)山地区に民俗公園を建設する構想を示し、その位置と規模、建設形成方向と内容に至るまで細かに指導した。

第10節　朝鮮労働党第３回代表者会議を指導、先軍革命偉業継承の問題を立派に解決

金正日総書記は、党と革命の発展が新たな歴史的転換期に入っていた2010年に、朝鮮労働党の最高指導機関選挙のための朝鮮労働党第３回代表者会議の開催を発議し、代表者会議が成功裏に行われるよう賢明に指導した。

金正日総書記は次のように述べている。

「今度の党代表者会議ではチュチェの革命偉業、社会主義強盛大国建設偉業の遂行において決定的転換がもたらされているわが党と革命発展の新たな要請に即して、朝鮮労働党の最高指導機関の選挙を行うことになります」

朝鮮労働党中央委員会政治局は2010年６月23日、決定書「朝鮮労働党代表者会議の開催について」を採択した。

決定書には、社会主義強盛国家建設偉業の遂行において決定的転換がもたらされている党と革命発展の新たな要請に即して朝鮮労働党最高指導機関選挙のための朝鮮労働党第３回代表者会議を2010年９月に開催することを決定するという内容が言及されている。

金正日総書記は、朝鮮労働党第３回代表者会議を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための活動を賢明に指導した。

まず、党代表者会議を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための組織・政治活動に第一義的な力を注いだ。全国各地で、機関、工場、企業、協同農場、大学、専門学校の単位別に、党代表者会議を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための決起集会が開かれた。

党代表者会議を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えようという内容の講演会が行われ、「朝鮮労働党代表者会議を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えよう！」「朝鮮労働党代表者会議をわが党と祖国の歴史に末永く輝く慶事として意義深く迎えよう！」というスローガンが街と村、職場ごとに掲げられた。

『労働新聞』をはじめ新聞と放送、出版物では、党の偉大性の宣伝とともに、党代表者会議を契機に革命的大高揚を起こすよう鼓舞する報道宣伝と集中放送、集中編集が行われた。

総書記は、中央と地方の芸術団体と機動芸能宣伝隊、芸能サークルが公演活動を活発に展開して全国をわき立たせるようにした。一方、党代表者会議開催に関する対外宣伝も活発に行うようにした。

総書記は党代表者会議を迎え、党のまわりに固く団結した革命隊伍の政治的・思想的威力をさらに強く誇示するようにした。

人民に党を絶対的に信頼する革命的信念を持たせるための思想教育をさまざまな形式と方法で行い、党員と勤労者の間で、一心団結の精神力の核心をなす領袖決死擁護の精神がより強く発揮されるようにし、党の大衆路線を貫徹して一心団結の威力がさらに強まるようにした。

総書記は､党代表者会議を勤労の成果をもって迎えるための大高揚進軍に一層拍車をかけるようにした。

人民経済の各部門を引き続き現地指導しながら生産と建設で難渋している問題を解決し、党員と勤労者の勤労闘争を激励した。

2010年７月15日には完成された大渓島干拓地を見て回り､党代表者会議に贈る誇り高い勤労の成果だ､党代表者会議に贈る贈り物のうちでこれ以上偉大で立派な贈り物はないと高く評価した｡そして､2010年７月31日にはある連合企業所を現地指導しながら､この企業所の労働者が短期間で最新技術に基づく近代化、科学化を実現し、新しい技術を開発して最新式の電子製品を作り出したことは大きな成果だとし、党創立6５周年と党代表者会議に贈る立派な贈り物をもたらした彼らの偉勲を高く評価した。

2010年８月２日には2･8ビナロン連合企業所を現地指導しながら、連合企業所が重要な対象の建設を短期間で終え､集団的技術革新運動によってビナロン生産を飛躍的に増やし､ビナロン綿の質を高めて再び勝利を宣言したとし､立派な成果を収めた企業所の労働者を高く称賛した。

総書記の賢明な指導により､党代表者会議と党創立65周年を迎えて全国的に250余カ所の対象建設が完成され、主要工場、企業が年間計画を繰り上げて完遂した｡軽工業部門では前年の同期に比べ指標別の生産を1･2倍に増大させ､数多くの年間計画完遂者を輩出した。

金正日総書記は、朝鮮労働党第３回代表者会議の準備を精力的に指導した。

2010年７月13日､党中央委員会の責任幹部への談話をはじめ多くの機会に､党代表者会議を成功裏に開催する問題について指摘した。

チュチェの革命偉業､先軍革命偉業の遂行において歴史的な転換がもたらされていた当時の現実は、朝鮮労働党を全面的に強化し、その指導的役割をさらに高めるよう党規約を改正することを求めていた。

そのため朝鮮労働党の規約は、金日成主席を党と革命の永遠なる領袖として高く仰ぎ､朝鮮労働党の創立と強化､発展に尽くした金日成主席と党の業績について新たに反映させ、革命の首脳部を中心とする組織的･思想的全一体としての党の特性に即して朝鮮労働党最高指導機関の構成とその地位と役割について新たに規定した。

また､党の当面の目的は共和国北半部で社会主義強盛国家を建設し､全国的規模で民族解放民主主義革命の課題を遂行することであり､最終目的は全社会をチュチェ思想化して人民大衆の自主性を完全に実現することであると規定した。

これとともに､チュチェ革命の新時代の要請に即して党員の義務と各級党組織の活動内容を全般的に修正､補充し､「党と人民政権」「党マーク、党旗」の章を新たに設け、人民政権と青年同盟に対する党の指導を強化し、人民軍内の党組織の役割を強める内容を補充した。

党代表者会議の開会の辞と決定書、代表たちの討論文にも､党の指導のもとに社会主義強盛国家建設偉業を立派に遂行していく軍隊と人民の信念と意志がそのとおり反映された。

こうした準備に基づき､朝鮮労働党代表者会議のための朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会議、道、政治局代表会議が開催された。

2010年８月25日に朝鮮労働党代表者会議に参加する代表者選挙のための朝鮮人民軍党代表会議が開かれ､それについで各道の党代表会議と朝鮮人民内務軍、内閣、鉄道省、文化省の代表会議が行われた。

朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会議と道、政治局代表会議では、全党員と人民軍将兵、人民の一致した意志をこめて、金正日総書記を朝鮮労働党代表者会議の代表として推挙した。それぞれの代表会議では党と革命に限りなく忠実であり、新たな革命的大高揚の各分野で愛国的献身性を発揮している軍人と勤労者、幹部が朝鮮労働党代表者会議の代表として選出された。

2010年９月28日、平壌では全国の党員と人民軍将兵、人民の大きな関心と期待の中で朝鮮労働党第３回代表者会議が開催された。代表者会議には朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会議、道、政治局代表会議で選出された1653名の代表と517名の傍聴者が参加した。

代表者会議では一番目の議案として「わが党と人民の偉大な指導者金正日同志を朝鮮労働党総書記として変わりなく高く推戴することについて」を討議し、金正日同志を朝鮮労働党総書記として変わりなく高く推戴するという決定を採択した。

代表者会議では二番目の議案として「朝鮮労働党規約改正について」を討議して党規約を改正した。そして３番目の議案として朝鮮労働党中央指導機関を選挙した。

代表者会議は、全党員と人民軍将兵、人民の等しい意思と念願をこめて、朝鮮労働党の創立者である偉大な領袖金日成同志を党の最高指導機関に永遠に戴くことを宣言した。

代表者会議は、朝鮮労働党規約と朝鮮労働党最高指導機関選挙細則に基づき、朝鮮労働党総書記である金正日同志が党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会政治局委員、党中央委員会委員、党中央軍事委員会委員長に推戴されたことを公表した。

代表者会議では朝鮮労働党中央指導機関を選挙した。

金正日総書記は社会主義強盛国家建設のための闘争を指導しながら、先軍革命偉業継承問題の解決に格別の関心を払った。

革命偉業継承の問題を解決することは新たなチュチェ100年代が始まり、新しい世代が革命と建設の主役として登場している重大な歴史的転換期の切実な要求であった。

チュチェの革命偉業、先軍革命偉業継承の歴史的転換期に、党と軍隊と人民は傑出した政治実力と指導者の資質と品格を十分備えた敬愛する金正恩同志を絶対的に信頼し敬慕し、金正日総書記の唯一の後継者として推戴することを等しく念願した。

実生活を通じて金正恩同志の偉人としての風格と業績の偉大さに魅せられた全党員と人民軍将兵、人民は、金正恩同志を金正日総書記の後継者として厚く敬慕し仰ぎ慕った。

全党員と人民軍将兵、人民は金正恩同志を「金将軍」「われらの将軍」と称揚し絶対的に信頼して高く仰ぎ、「足どり」など尽きせぬ尊敬と欽慕の念をこめた頌歌をつくって歌った。

金正恩同志が2010年に世界で最も影響力のある名士10人の中の一人として選ばれたことをはじめ、世界の進歩的人民も金正恩同志を熱烈に敬慕し称賛した。

こうしたなかで、全国の党組織と人民軍将兵、人民はいろいろな契機に、金正恩同志を仰ぎ、その指導に従ってチュチェの革命偉業、先軍革命偉業を代々継承し完成させていく誓いをこめた手紙を寄せた。特に朝鮮労働党第３回代表者会議を控えて、金正恩同志を党と軍隊、国家事業全般を受け持つ公職に推戴することを求める数多くの請願書が寄せられた。

まさにこうした時期、2010年９月に朝鮮労働党第３回代表者会議

が開かれたのである。

朝鮮労働党第３回代表者会議では、参会者の一致した支持と賛同により、党と軍隊と人民の組織的意思を反映させて、金正恩同志を党中央指導機関の一員に、党中央軍事委員会の副委員長に推戴した。

その後、金正日総書記の遺訓に従い、2011年12月30日、党中央委員会政治局会議では金正恩同志を朝鮮人民軍最高司令官に推戴した。そして、2012年４月11日には朝鮮労働党第４回代表者会議で金正日同志を永遠なる朝鮮労働党総書記として戴き、金正恩同志を朝鮮労働党第１書記に推戴した。ついで４月13日に開かれた最高人民会議第12期第５回会議では金正日総書記を朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる国防委員会委員長とし、金正恩同志を国防委員会第１委員長に推戴した。

金正恩同志を党と国家、軍隊の首位に戴き、その指導体系を確立するための活動が力強く展開されることによって、朝鮮では先軍革命偉業継承の問題が立派に解決された。

こうして、金日成主席が切り開き、金正日総書記が導いてきたチュチェの革命偉業、先軍革命偉業は、金正恩同志の指導のもとに前進する新たな高い段階に入ることになった。

第11節　「わが民族同士」の理念のもとに祖国の統一を実現するために

金正日総書記は金日成主席の祖国統一遺訓を必ず実現する固い意志を持して、「わが民族同士」の理念のもとに祖国統一を実現す

るための闘争を指導した。

祖国の統一は金日成主席の畢生の偉業であり、切なる念願であり、朝鮮民族の最大の悲願であり至上の課題である。

金正日総書記は北と南、海外の３者連帯・連合を実現するための闘争を賢明に指導した。

まず、南朝鮮の「民主労総」代表たちの平壌訪問を実現させて、北南労働者の組織的な連帯・連合を可能にする道を開いた。

1999年４月、平壌に来る南朝鮮「民主労総」の代表を歓待し、彼らが提起した北南労働者サッカー競技開催の問題も成就させ､北南間の自由な往来を実現するようにした。

こうして南朝鮮「民主労総」の代表たちが４月27日に平壌に到着し､滞留期間に双方代表間の実務会談が行われ､共同合意文が採択された。

共同合意文で双方は､国と民族が分裂して以来初めての「民主労総」代表たちの平壌訪問が､北南間の合意による祖国統一の３大原則を具現して民族の和合と大団結､統一偉業を達成するうえで有意義な契機になると認め､1999年８月と翌年８月に平壌とソウルでそれぞれ北南労働者のサッカー競技大会を開催することにした。

総書記は､1999年４月と５月に､生涯を民族の和解と祖国統一のための愛国愛族の道に捧げた文益煥（ムンイクファン）牧師を回顧する集いと第10回汎民族大会を共同で推進する活動を通じて、北と南、海外統一運動団体の連帯・連合を発展させていくようにした。

これに基づき、同年６月１日に中国の竜井で「文益煥牧師を回顧する集い」が催され、これには北の民族和解協議会と南の「全国連合」をはじめ北と南、海外の統一運動団体と個別的人士が多数参加

した。
　この集いで北と南、海外の統一運動団体は、8・15統一大祝典を汎民連と共同で主催することに意見の一致を見、南朝鮮の「全国連合」は汎民連南側本部を固守し、汎民連との連帯・連合を実現していく決意を表明した。
　総書記は特に、民族の自主と大団結のための99統一大祝典、第10回汎民族大会が北と南、海外の広範な統一愛国勢力の参加する完全な大会、３者連帯・連合が実現した汎民族的な大政治・文化祝典となるようにした。
　1999年8・15統一大祝典を契機に３者連帯・連合を新たな高い段階に引き上げる構想を示し、第10回汎民族大会が北と南、海外の３者連帯の大会となるよう祝典の名称を３者連帯の要請に即して改め、大会に南朝鮮の基本統一運動団体をすべて参加させるようにした。
　そうして、民族の自主と大団結をめざす99統一大祝典、第10回汎民族大会は汎民連南側本部と海外本部の代表だけでなく、南朝鮮の基本運動団体である「全国連合」「韓総連」「民主労総」など南朝鮮のほとんどすべての運動団体の参加のもとに全民族的な大統一祝典として盛大に開催された。
　民族の自主と大団結のための99統一大祝典、第10回汎民族大会は北と南、海外の広範な統一愛国勢力が参加した大会に、３者連帯・連合が立派に実現した汎民族的な大政治・文化・体育祝典となった。
　金正日総書記は、6・15北南共同宣言の採択とそれを実行するための闘争を賢明に導いて祖国統一の画期的局面を開いた。
　金正日総書記は次のように述べている。

「民族自主の原則、愛国と民族愛の精神で貫かれた先軍政治と、それに基づくわれわれの祖国統一政策と主動的な努力によって、歴史的な平壌対面が実現し、6・15北南共同宣言が採択され、北南間の和解と協力の関係が各分野にわたって深化、発展しています」

20世紀の最終年である2000年に至り、朝鮮人民の祖国統一運動と内外情勢には新たな変化が起きた。

偉大な先軍の旗のもとに共和国は祖国統一の強力な堡塁として打ち固められ、朝鮮人民の祖国統一運動は全民族的規模でさらに組織化、積極化され、統一を志向する愛国勢力と反統一勢力間の勢力構図は祖国統一に有利に変わった。南朝鮮では、大勢の流れに便乗して保守的な政治家と執権上層までも北南関係の改善を標榜するようになった。

こうした情勢の推移を読み取った総書記は2000年初に、北南首脳の対面によって祖国統一偉業実現の画期的局面を開く構想を立てた。

2000年４月８日、歴史的な平壌対面と北南最高位級会談開催に関する北南合意書が採択された。

全民族の耳目が集中される中、2000年６月13日から15日までの間に平壌で、国の分断以来55年目に初めての北南首脳対面と最高位級会談が行われた。

総書記は空港に出て南側当局者一行を同胞愛をもって迎え、６月13日から15日まで10回にわたって多くの時間を南朝鮮執権上層との活動に当て、６月14日には南朝鮮執権者との単独会談を行った。

総書記は単独会談で、われわれが初めて対面するのであるから、７千万同胞に祖国統一への希望と未来への楽観を与える宣言文を

一つ発表すべきだとし､民族が力を合わせて自主的に統一を実現することに関する問題と統一の方途に関する問題､非転向長期囚の送還と離散家族・親戚の訪問団交換問題、北南対話問題など、祖国の統一を実現するうえで提起される重要な問題を主動的に提起した。

こうして2000年６月15日、北南共同宣言が採択、発表された。

総書記が南朝鮮当局者とともに署名した歴史的な北南共同宣言には､国の統一問題をその主人である朝鮮民族同士で互いに力を合わせて自主的に解決していく問題､北側の低い段階の連邦制方案と南側の連合制方案に共通性があると認め､この方向で統一をめざしていく問題､離散家族･親戚訪問団の交換と非転向長期囚問題の解決など人道主義的問題を速やかに解決していく問題､経済協力を通じて民族経済を均衡的に発展させ、社会、文化、体育、保健医療、環境など各分野の協力と交流を活性化して相互の信頼を深めていく問題､以上のような合意事項を早急に実践に移すため、早い期日内に双方当局間の対話を行う問題などが明記されている。

6・15北南共同宣言は「わが民族同士」の理念で一貫されている北南関係発展の里程標であり、祖国統一の大綱である。

総書記は歴史的な北南首脳対面と最高位級会談以後、6・15北南共同宣言履行のための活動を賢明に指導した。

北南閣僚級会談をはじめ各分野の会談が北南関係の改善と祖国統一に寄与する実のある会談になるようにした。

こうして6・15北南共同宣言が発表された後、2007年６月までの間､北と南の間に数十回の閣僚級会談をはじめ各分野の会談と接触が行われた。

総書記は北南間の協力と交流が活発に行われるよう導いた｡その

結果、北南間の不信と対立の歴史が和解と協力の新時代に変わる歴史的転換がもたらされた。

北南間の和解と協力の雰囲気の中で断ち切られた鉄道と道路を連結する驚くべき出来事が起こり、2003年２月に開城（ケソン）――汶山（ムンサン）間の臨時道路が開通し、2003年６月と2007年５月には北南東西海鉄道連結行事と北南東西海列車開通のための試験運行が行われて全同胞と世界の注目を受け、北と南が共同で開発する開城工業地区の建設と金剛山（クムガンサン）観光事業が成功裏に開始されるようになった。

北南間のスポーツ・文化の交流もかつてなく活発に行われた。

2002年の秋、南朝鮮の釜山（プサン）で開かれた第14回アジア競技大会と2003年８月に大邱（テグ）で開かれた第22回ユニバーシアードに共和国の選手団と応援団が、2003年10月に済州（チェジュ）島で開かれた民族統一平和スポーツ・文化祝典に共和国の体育団とテコンドー示範団などで構成された大規模の代表団が参加し、2006年12月にはカタールのドーハで開催された第15回アジア競技大会の開幕式に北と南の選手が統一旗を掲げて一緒に入場したのはスポーツ事業において北と南の民族的和解と協力の明白な発現であった。

また、2000年８月の朝鮮国立交響楽団のソウルでの公演と2002年９月の南朝鮮「ＫＢＳ」交響楽団と「ＭＢＣ」公演団の平壌訪問公演をはじめ北南アーチストの合同公演と合同演奏会が開かれ、2001年６月には平壌で民族服装展示会が、2002年９月と10月には平壌とソウルで北南テコンドー示範団の出演、そして北南歴史学者の平壌とソウル、金剛山での討論会と共同資料展示会及び写真展示会などが開かれた。

総書記は北南間の往来と接触も活発に行われるようにした。

2000年８月に南朝鮮の言論社代表団が共和国北半部を訪問した。８月12日、総書記は南朝鮮言論社代表団と会見し、昼食会を催し、記念撮影もした。

南朝鮮言論社代表団の平壌訪問以後、南朝鮮言論人の間では金正日総書記の偉人としての風格を積極的に宣伝し、連共・連北を志向する言論活動がかつてなく強化された。

このほかにも、朝鮮労働党創立55周年祝賀行事に南朝鮮の政党、団体代表団と各界の人士40人が参加し、2005年には分断以来初めて北と南、海外が当局と民間の区別なく朝鮮民族同士で6・15と8・15を記念し、北と南の離散家族・親戚の10余回にわたる平壌とソウル、金剛山での対面が行われた。そして李仁模（リインモ）の祖国帰還についで2000年９月には数十年間、敵のあらゆる迫害を受けてきた63名の非転向長期囚が金正日総書記の懐に抱かれる劇的な出来事が起こった。

総書記は民族自主によって北南間の対決状態を解消し、和解と団結を成し遂げることに大きな関心を払った。

いかなる情勢においても歴史的な北南共同宣言を固守し履行していく原則的立場を堅持するようにし、北南間の軍事的緊張を緩和し、多方面にわたる協力と交流を推進していく積極的な対策も立てた。また2002年１月には、共和国政府・政党・団体合同会議で祖国統一のための画期的な提案として、全朝鮮人民に送る３大呼びかけ、３大提案をこめたアピールを発表するようにした。

共和国政府・政党・団体合同会議で採択、発表された6・15北南共同宣言の徹底固守履行、北南関係の前進と祖国統一運動の活性化、国の平和を脅かし、統一を妨げる要因の除去を内容とする３大呼びかけと、2002年を「『わが民族同士』で団結と統一を促進する年」

に、北南共同宣言が発表された６月15日を「『わが民族同士』で統一の扉を開く日」に、５月から7・4共同声明が発表された７月を経て祖国が解放された８月までを「『わが民族同士』で力を合わせていく運動期間」にするという３大提案は北と南、海外のすべての同胞の全幅的な支持と呼応を受け、外国の政党、社会団体も支持を表明した。

こうして、対決と不信が存在するだけだった北南間には「わが民族同士」で力を合わせて統一をめざす6・15時代が開かれるようになった。

金正日総書記は北南関係を新たな高い段階に拡大発展させるため、北南首脳の対面を再び実現させた。

2007年７月、南側当局者一行の平壌訪問を受諾し、その準備を細心に指導した。そして2007年10月２日には4・25文化会館の前まで出て彼らを温かく出迎え、最高位級会談を成功裏に導き、10月４日には「わが民族同士」の精神で一貫された「北南関係発展と平和繁栄のための宣言」を採択させた。

「北南関係発展と平和繁栄のための宣言」は、全民族の統一意志を内外に誇示し、朝鮮民族同士で力を合わせて北南関係をより高い段階へ発展させ、平和と民族共同の繁栄を成し遂げるための具体的な目標と課題を明らかにした実践綱領である。

総書記によってもたらされた北南首脳の対面と10・4宣言は、北南関係の発展と平和繁栄の新たな局面を開いた歴史的な出来事であり、その結果、北南間には和解と協力の雰囲気がさらに高まり、祖国統一の前途には明るい展望が開かれた。

金正日総書記は北南関係を完全な破局に導いた李明博（リミョンバク）一味の

反共和国対決策動を粉砕し､祖国統一運動を力強く推し進めるようにした。

2008年２月、南朝鮮で「政権」の座についた李明博は執権するやいなや6・15共同宣言と10・4宣言を全面的に否定し、反共和国対決策動に狂奔して北南関係を最悪の破局へと導いた。

総書記は共和国の不敗の政治的･軍事的威力に依拠して祖国統一の前途に横たわる難局を打開し､民族最大の悲願である祖国統一偉業を成就するための活動を賢明に導いた。

まず､李明博一味の反共和国･反統一策動を粉砕するようにした。

「非核・開放・3000」だの「非常統治計画─復興」だのを唱え、共和国の「体制変化」と「吸収統一」を妄想する一方、アメリカ帝国主義とともに「キー・リゾルブ」「フォール・イーグル」などの北侵戦争演習を繰り広げて情勢を極度に悪化させる李明博一味の体制対決策動を強硬威圧によって粉砕するようにした。

また､北南間の対話と協商を全面拒否し､北南間の人道主義的協力事業まで遮断した李明博一味の策動も断固として暴露断罪するようにした。

総書記は、「わが民族同士」の旗を高く掲げて6・15共同宣言と10・4宣言を固守し履行するための闘争を引き続き強力に推し進めるようにした。

2008年の新年の共同社説を通じて､民族の自主的発展と統一促進を鼓舞する旗じるしであり､6･1共同宣言を全面的に具現するための実践綱領である10・4宣言を履行することによって、対決時代の残滓を取り除き、北南関係を名実ともに「わが民族同士」の関係に確固と切り替え､平和繁栄の新しい歴史を創造していくべきことを

強調するようにした。

これに基づき、共同社説では北と南、海外のすべての同胞が「『わが民族同士』で力を合わせて自主統一、平和繁栄の新しい時代を開いていこう！」というスローガンを高く掲げ、祖国統一運動をさらに力強く推し進めていこうと強調した。

総書記は2008年１月、新年の共同社説で示された課題に従い、「わが民族同士」で力を合わせて自主統一、平和繁栄の新しい時代を開いていくための有利な対外的環境をつくりだすことに重点を置いて祖国統一に対する国際的支持と連帯を確保する活動を展開するようにした。

2009年８月には南朝鮮の現代グループ会長と会見して彼の要請をかなえてやり、南朝鮮の元「大統領」金大中（キムテジュン）が死去したときには弔電を送り、高位級の特使弔問団をソウルへ派遣した。

金正日総書記の賢明な指導により、北と南、海外のすべての朝鮮民族は、「わが民族同士」の理念のもとに反統一勢力のあらゆる悪辣な策動を果敢に粉砕し、この地に必ず統一された強盛国家を打ち立てるための全民族的な闘争に力強く立ち上がるようになった。

第12節　海外朝鮮人運動の強化、発展のために

金正日総書記は、新世紀の要請に即して在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすための活動を賢明に指導した。

この時期、共和国の海外公民団体である総聯（在日本朝鮮人総聯合会）を崩壊させようとする日本反動層の策動はその内容と手法に

おいて一層悪辣になり、在日同胞社会では１世、２世から３世、４世への世代交替がなされ、日本経済の長期的不況と構造変化の影響により商工人が減る反面、給与生活者が増えていた。

在日同胞社会の世代交替を奇貨として日本反動層の帰化･同化策動も一層執拗になり、そのため同胞の志向と生活様式、価値観には急激な変化が起こるようになった。

総書記は、総聯の活動方法を新しく切り換えるうえでの諸問題について明らかにした。そして、すべての活動をそれぞれの実情に即して行う原則を堅持するよう強調した。また、総聯の中核基盤を強固にするとともに、同胞大衆との活動、特に新しい世代との活動方法を彼らに合わせて切り換え、広範な在日同胞をさらに強く結束できるように総聯の組織体系、活動体系を改めるべきだと指摘した。

総書記は総聯の活動に画期的な転換をもたらすための活動を賢明に導いた。

まず、総聯が中核基盤の強化に第一義的な力を注ぐようにした。

総聯活動家を在日朝鮮人運動の有能な指揮メンバーになるようにし、総聯が新しい世代の活動家の比率を高める一方、活動家の教育に力を入れるようにした。

また、新しい世代をはじめ広範な同胞大衆を教育し獲得して総聯の大衆的地盤を固めるようにした。

３世、４世をはじめ広範な在日同胞を結集できるよう、総聯中央と地方本部の機構体系を変化した活動環境に即して改編し、総聯中央の指導方法を改めるようにした。また、同胞に対する思想教育活動も彼らの要求とレベル、総聯の実情に即して改善し、同胞の権利擁護組織の特性に合わせて民族権利擁護運動を大衆運動の中心的

位置に置いて進めるようにした。

総書記は､総聯が同胞の生活と権利を擁護する活動に深い関心を払い、教育・文化運動と文芸・スポーツ活動を活発に展開して同胞大衆を結束するようにした。

総聯は2002年５月､総聯中央委員会第19期第２回会議を開き、民族教育・文化活動と同胞の生活奉仕・福祉活動を２大中心柱とし、その愛国活動をすべての在日同胞を対象とする運動に切り換えることを決定した。

総書記は2001年､朝鮮大学校創立45周年と在日朝鮮人中等教育実施55周年記念行事が民族教育事業の雰囲気を盛り上げ､新世紀の要請に即して総聯の民族教育事業をさらに発展させる重要な契機となるようにし、2002年には朝鮮大学校に100万ドルの資金と学術的価値のある「大同江動物標本」や写真解説書を、2004年12月には朝鮮大学校創立50周年を迎えて歴史博物館に新しく補充する展示品を祖国から整えて送るようにした。

また､総聯の民族教育の発展のために毎年巨額の教育援助費と奨学金を送り、朝鮮大学校と朝鮮高級学校の学生･生徒が祖国を訪問して強盛国家の建設にわき立つ現実を見学できるようにした。

総書記は、総聯の合法的地位を固守し、同胞の権利を守るための闘争を力強く展開するようにした。

総聯を守り､同胞の民主主義的民族権利を守ることは､この時期、日本反動層の反総聯､反朝鮮人策動がその極に達していた状況のため、特に重要な問題として提起されていた。

総書記は在日同胞の法的地位の問題を朝･日平壌宣言の１条項として明記するようにしただけでなく、日本が総聯の破壊を謀り、同

胞を迫害するたびに強力な国家的措置を講じ、内外の世論を喚起して総聯の活動家と在日同胞を力づけ、勇気を奮い起こさせた。

総聯は日本反動層が総聯組織に対する不当な政治的干渉と財政的圧迫、民族教育と同胞商工人に対する各種の差別と妨害策動を行うたびに、それを阻止するための闘争を果敢に展開した。特に2007年３月と10月に日本各地で繰り広げられた大規模な糾弾大会と抗議デモは、総聯の団結力と闘争の正当性を同胞社会と日本人民に誇示し、日本の極右反動勢力に大きな打撃を与える重要な契機となった。

総書記は、韓徳銖（ハンドクス）議長をはじめ１世の幹部は総聯を結成して在日同胞を結集させ、祖国の統一と富強・繁栄のための愛国偉業に一生を捧げた革命の元老、老革命家、真の愛国忠臣だと称揚した。

2004年10月、新潟県中越で地震が起きたときと2011年３月、大地震と津波が東日本一帯を襲ったとき、被害を受けた同胞たちに慰問金を送り、祖国から総聯へ慰問電文も送るようにした。

金正日総書記は広範な海外同胞が愛国愛族の道を力強く前進していくよう導いた。

まず、世界各地域の海外同胞組織を強化するようにした。

在中国朝鮮人愛国運動の強化、発展に大きな力を注いだ総書記は、在中国朝鮮人総連合会が同胞大衆の中に根を下ろした強力な愛国組織となるようにした。特に在中国朝鮮人総連合会の祝賀団が民族最大の祝日である太陽節などの主な祝日を契機に祖国を訪問する機会に盛大な国家宴会を催し、彼らの誕生60周年、70周年の祝宴も催す配慮をめぐらした。

総書記は、独立国家共同体地域の海外同胞運動の強化、発展にも大きな力を注いだ。国際高統連傘下の各共和国高統連組織もそれぞ

れの独自性を強化する方向で国別､地域別の特性に即して各階層同胞大衆の中に根を下ろした組織として発展していくようにした。これとともに､独立国家共同体地域の同胞組織と同胞たちが祖国統一のための闘争において階級、階層の利害を超越して愛国愛族の旗、祖国統一の旗のもとに固く団結していくようにした。

総書記は､アメリカとヨーロッパ地域の同胞の運動にも深い関心を払い、この地域の海外同胞が祖国の富強・繁栄のための愛国事業に積極的に参加するようにした。

総書記は､海外同胞の間に党の先軍政治を積極的に宣伝するようにした。

音楽芸術を通じて海外同胞に先軍政治について積極的に宣伝し、彼らを愛国の旗のもとにさらに強く結束させることに深い関心を払い、2006年にコンピュータ名曲集『先軍革命千万里』やビデオ映画『民族守護の軍歌』を海外同胞の間で利用させる一方、万寿台芸術団などの芸術団が海外同胞の間で芸能活動を活発に展開するようにした。

第13節　国の対外的威信を高めるために

金正日総書記は朝鮮の対外的威信を高めるための活動を指導した。

1990年代末期から2000年代初期にかけて世界の政治情勢は複雑をきわめていた。

アメリカは世界一極化の野望を抱いて他の国と民族に対する無

分別な侵略と干渉、支配と略奪策動をはばかることなく行った。アメリカの傲慢な軍事的侵略と戦争策動によって、世界の多くの国と民族の自主権と生存権は無残に踏みにじられていた。

複雑な国際政治情勢は、強力な軍事的抑止力とそれに依拠した自主外交によってアメリカの強権政策に打撃を加え、国と民族の自主権と尊厳を守り、国際関係を自主化、民主化することを求めていた。

金正日総書記はアメリカと日本の対朝鮮敵視政策を破綻させるための闘争を賢明に導いた。

朝米基本合意文を採択した後、アメリカが新たな「核疑惑」説を持ち出してきたとき、それは共和国を孤立圧殺しようとする粗暴なじゅうりん行為だと糾弾し、もしその「疑惑」を解消しようとするなら、卑劣な中傷冒瀆によってわが共和国のイメージを汚したことに対し、政治的、経済的に補償させるようにした。

総書記はアメリカが喧伝する朝鮮の「ミサイル脅威」説の侵略的本質と危険性を鋭く看破し、朝米会談で強硬な立場をとるようにした。こうして1999年９月にベルリンで開かれた朝米会談で、アメリカは彼らが会談に持ち出してきた要求を放棄せざるをえなくなり、2000年６月には共和国に対する経済制裁を一部解除する措置を取った。

総書記は、先任の政権と合意した公約をすべて覆し、朝鮮を「悪の枢軸」「圧制の拠点」呼ばわりして対朝鮮強硬政策をとるブッシュ政権の策動に超強硬の態度で対抗するようにした。

これに基づき2003年１月10日に核拡散防止条約からの完全脱退に関する共和国政府声明が、2005年２月10日には核兵器保有に関する朝鮮民主主義人民共和国外務省声明が発表された。そして2006

年７月、人民軍のミサイル発射訓練と同年10月と2009年５月、２度にわたって地下核実験が成功裏に行われた。

金正日総書記はアメリカの共和国圧殺政策に積極的に追従する日本の策動を粉砕するための対日外交戦を賢明に指導した。

歴史的にアメリカの対朝鮮圧殺政策に便乗して共和国に対する敵視政策をとってきた日本の執権層は、新世紀に入って対朝鮮政策に一連の変化をもたらした。

そうして朝・日政府間の第８回会談の決裂後８年ぶりの2000年４月、平壌で第９回会談が再開され、それは第10回、第11回会談と続行された。まさにこうした延長線として2002年９月に日本の首相が平壌を訪問することになった。

総書記は2002年９月14日、日本の共同通信社社長の質問に対する回答で、朝・日両国はいずれもアジアにある国であって、近くて遠い国ではなく近い隣邦として互いに仲よく過ごし、共存、共栄をはかるべきだというのが朝鮮の意志であり、一貫した立場であるとし、朝・日関係を正常化するうえで解決すべき基本問題は両国間のしこりとなっているいまわしい過去をきれいに清算することだと述べた。

総書記はその後９月17日、平壌を訪問した日本の首相と対面し会談を行った。

この対面と会談では、朝・日間のいまわしい過去を清算し、懸案事項を解決し、結実のある政治・経済・文化関係を打ち立てることが双方の基本的利益にかない、地域の平和と安定に大いに寄与することになるという共通の認識を確認した。

会談について採択された朝・日平壌宣言では、日本が過去、朝鮮を軍事的に占領して朝鮮人民に莫大な損害と苦しみを与えた歴史

的事実を謙虚に受けとめ、痛切な反省と心からの謝罪の意を表明した。そして双方は国際法を順守し、相互の安全を脅かす行動をしないということと、北東アジア地域の平和と安全を維持、強化すべく互いに協力していくことを確認した。

その後、2004年５月に再度平壌を訪問した日本首相は、朝・日平壌宣言を誠実に履行することがきわめて重要であるということと、朝・日平壌宣言が両国関係改善の基礎となることを再確認した。

金正日総書記は、朝鮮の自主権を尊重し、友好的に対する世界のすべての国と友好・協力関係を発展させていくようにした。

先軍政治によって朝鮮と好ましい関係を結ぼうとする国の数が日増しに増えている状況に即して、朝鮮の自主権を尊重するすべての国と国家関係を結び発展させていくための活動を推し進めた。

まず、自主性の原則で中国、ロシアとの友好・協力関係を発展させていった。

総書記は精力的な対外活動によって朝中友好を一層強固にしていった。

2000年３月５日と2007年３月４日、2008年３月１日に朝鮮駐在中国大使館を訪問し、2000年５月、2001年１月、2004年４月、2006年１月、2010年５月と８月、2011年５月と８月、８回にわたって中国を訪問し、朝中友好を深めた。

訪問期間、中国の党及び国家の指導的幹部たちと対面し会談を行った。対面と会談では両党、両国の社会主義建設での成果と経験が交わされ、伝統的な朝中友好をさらに強固にし、朝鮮半島の安定と平和を保障する問題をはじめ相互の関心事となっている問題について意見が交換され、討議された問題について意見の一致を見た。

そして、社会主義建設と国の統一のための両党、両国人民の闘争に対する支持と連帯を再確認した。

総書記は2000年10月、中国人民義勇軍の朝鮮戦線参戦50周年を契機に訪朝した中国高位軍事代表団と会見した。そして、江沢民主席（2001年９月）と胡錦濤主席（2005年10月）、温家宝総理（2009年10月）の朝鮮に対する公式親善訪問を契機に友好・協力関係を新たな高い段階に発展させた。

また、朝中両国間で党・国家・軍事代表団をはじめ各分野の代表団を交換して相互の理解と友好の情を引き続き深めるようにし、2009年10月の朝中国交樹立60周年と2010年10月の中国人民義勇軍朝鮮戦線参戦60周年を契機に朝中友好を一層強化するようにした。

総書記は、朝ロ関係の発展においても画期的な転換をもたらすようにした。

ロシア連邦プーチン大統領の朝鮮訪問を契機に朝ロ友好の新しいページを開いた。

プーチン大統領は2000年７月19日から20日にかけて朝鮮を訪問した。総書記は、ロシア大統領としては初めての訪問者であるプーチン大統領との対面と会談で両国間の関係と相互の関心事である国際問題について幅広く意見を交わし、朝ロ共同宣言に署名した。

そしてプーチン大統領の訪朝以後、朝ロ友好をさらに強化することに深い関心を払った。

プーチン大統領が朝鮮訪問を終えて帰国した後、北洋艦隊所属の最新潜水艦「クルスク」号の沈没事件に関して西側と反プーチン勢力が彼を指名攻撃して騒ぎを起こしていた時期の2000年８月22日、プーチン大統領に弔電を送り、ロシアの貫禄ある芸術団体が訪朝し

て公演を行うようにし､両国人民と芸能人間の友好の絆をさらに強めた。

総書記は特にロシアを何度も訪問して朝ロ友好関係を新たな高い段階に引き上げた。

2001年７月24日、ロシアのイタル・タス通信社の質問に対する回答で、朝ロ両国間の関係とその発展展望について明らかにし、ついで同年７月26日から８月18日までロシア連邦を公式訪問した。

訪問期間にプーチン大統領と数回にわたって対面と会談を行い、21世紀の朝ロ友好と自主偉業の里程標となる朝ロモスクワ宣言に署名した。そして、レーニン廟と無名戦士の墓を訪ねて、ロシア人民と全世界に大きな衝撃を与えた。

世界の数多くの国の言論界をはじめ社会各界の人士と各階層の人民は、金正日総書記を「世界的な政治元老」「自主時代の偉大な指導者」と称賛し、金正日総書記のロシア訪問を「2001年の国際的な出来事」だと激賞した。

その後2002年８月にはロシア連邦の極東地方を訪問し､2011年８月にはシベリア及び極東地方を再度訪問して朝ロ友好関係をさらに強化した。

金正日総書記は、アジア太平洋地域諸国との関係、ヨーロッパをはじめ西側諸国との関係を拡大､発展させることに大きな関心を払った。

こうして朝鮮は2000年５月に､25年間断絶されていたオーストラリアとの関係を回復し、2000年７月にはフィリピン、2001年４月にはクウェートと国家関係を結び､2000年７月にはＡＳＥＡＮ地域フォーラムに加入した。また2007年４月にはミャンマーと国家関係を

回復し、ベトナム、インドネシア、ラオス、カンボジアとの友好関係も発展させた。

2000年１月､西欧諸国のうちで最初のイタリアとの国交樹立についでイギリス、オランダ、トルコ、ベルギー、スペイン、ドイツ、ルクセンブルク、ギリシャと国交を樹立した。

総書記は2001年５月に訪朝した欧州連合の最高位級代表団と会見し､朝鮮と欧州連合間の関係発展と種々の国際問題に対する原則的で明確な解明を与えた。これは、朝鮮と欧州連合間の関係を発展させる重要な契機となり､同年５月14日､欧州連合は朝鮮との外交関係を結んだ。西欧諸国とともに、カナダ、ブラジルをはじめ他の地域の国々も朝鮮と国交を樹立した。

金正日総書記はまた、アフリカ諸国との友好・協力関係を発展させることにも深い関心を払い、長い友好･協力関係を保ってきたアフリカ諸国の間で共和国の対外的イメージを著しく高めた。こうして朝鮮はアフリカ大陸のすべての国と国交を樹立し､多くのアフリカ諸国は国際舞台で朝鮮の革命偉業を支持した。

偉大な指導者金正日同志は永遠に
われわれとともにおられる

　チュチェ革命偉業の継承完成のために一生涯を捧げ、社会主義強盛繁栄と人民の幸せのために、祖国の統一と世界の自主化のために昼夜を分かたず精力的に活動していた金正日総書記は、2011年12月17日８時30分、急病により現地指導の途上であまりにも突然、あまりにも惜しく逝去した。

　社会主義強盛国家建設偉業の遂行に画期的局面が開かれていた歴史的時期に金正日総書記が急逝したのは、朝鮮労働党と朝鮮革命にとって最大の損失であり、全朝鮮人民の最も大きな悲しみであった。

　12月19日正午、重大報道として金正日総書記が逝去したという青天霹靂のごとき悲報が伝えられるや、全国、全世界が悲しみにとざされた。

　全朝鮮人民は悲憤やるかたなき心情を抑えきれず、地をたたき胸をたたいて嗚咽し、最大の悲しみを抱いて金正日総書記を追慕した。

　10余日の哀悼期間、延べ２億6000余万の人民軍将兵と各階層の勤労者、青少年・学生が、全国大家庭の父を失った最も大きな悲しみに暮れて金正日総書記に弔意を表した。12月28日、首都平壌では雪が降りしきる40キロの沿道に立ち並んだ数百万の平壌市民と人民軍将兵の哭声が天地をゆるがす中、金正日総書記との告別式が厳かに挙行された。12月29日には平壌で中央追悼大会が挙行され、

各道・市・郡でも追悼大会が催された。

海外同胞と南朝鮮の同胞も民族の父を失った喪失の痛みを抱いて、金正日総書記の逝去に深甚なる哀悼の意を表した。

希世の政治元老であり、人類の自主偉業の旗じるしである金正日総書記逝去の悲報に接して、全世界は大きな悲しみに沈んで深い哀悼の意を表した。

世界190余の国々と国連をはじめ国際機構、朝鮮と敵対関係にあった国々まで金正日総書記の逝去に最も深い哀悼の意を表し、党及び国家、政府首班の弔問、弔旗掲揚などさまざまな弔意行事が厳粛に行われた。

哀悼期間、120余カ国の党及び国家、政府首班と政党、社会団体、それに政界、社会各界、軍部、経済界の高位人士、チュチェ思想研究組織、友好及び連帯組織の代表が3000余件の弔電を寄せ、数多くの国の党及び国家、政府首班、政党、機関、団体と人士が敬慕の念をこめた4100余の花輪や花かごを金正日総書記の霊前と金日成広場、在外代表部にある金正日総書記の太陽像、肖像画に捧呈した。

国連本部とジュネーブ国連事務局をはじめ国連各機関の庁舎にも弔旗が掲げられ、世界食糧計画では慣例を破って機関史上初めて庁舎の庭園だけでなく庁舎の屋上にも弔旗を掲げた。

アメリカの元大統領カーターから弔電が寄せられ、日本の元首相小泉純一郎は金正日総書記の逝去に「心から哀悼の意を表したい」と言って総聯中央会館を訪ねて献花し、金正日総書記の偉人像を回想した。朝鮮とは国交のない国まで弔意表示として、計画していた火砲実弾射撃及びミサイル発射訓練を中止する措置をとった。

哀悼期間、世界150余の国と地域の１万余の報道・出版物が金正日

総書記の逝去に関して、外国の国家元首の弔意行事ニュースの前例を破って時々刻々、速報として連日特集した。

全世界が最も敬虔な態度で金正日総書記を追慕した日々は、朝鮮人民がいかに偉大な人を領袖として仰ぎ、代を継いで享受した領袖の福運、将軍の福運が朝鮮民族にとっていかに大幸運であったかを心の奥底から感じた日々であった。

金正日総書記は逝去したが、朝鮮人民と全世界人民の心にチュチェの先軍太陽として生き続けている。

金正日総書記は長い革命指導の全期間、人民をこよなく愛し、いつも人民と苦楽をともにし、強盛国家の建設と人民の生活向上のために不眠不休の労苦を尽くし、超強度の現地指導強行軍を続けてきた。

革命的生涯の全期間、地球をほぼ17回も回ったことに等しい延べ65万8000余キロの強行軍を続け、全国の１万4290余の単位を訪ねた。そのうち、先軍革命指導の全期間に現地指導をした単位数だけでも延べ１万2790余カ所であり、路程は61万9000キロに達している。

金正日総書記は反帝・自主の旗を高く掲げて社会主義偉業の勝利のために、世界の平和と安定、諸人民間の友好・団結のために精力的な対外活動を展開して、朝鮮の国際的地位と権威を著しく高め、世界の自主偉業達成に不滅の貢献をした。

1959年１月にソ連を訪問したときから革命的生涯を終える時期に当たる2011年８月まで、外国を歴訪した回数は18回、その路程の延長距離は９万8000キロであり、そのうち列車を利用した距離は６万4000キロ、空路を利用した距離は３万4000キロに達している。

金正日総書記は、チュチェ革命偉業の偉大な継承者である金正恩

第１書記の気高い革命的徳義心によって生き続けている。

金正恩第１書記は次のように述べている。

「金正日同志はわたしの心に、わが人民軍軍人と人民の心に永遠にともにおられます」

金正恩第１書記は金正日総書記を千年万年高く戴き、金正日総書記の強盛国家建設の念願を必ずや実現せんとする千万軍民の信念と意志をこめて、「偉大な金日成同志と金正日同志は永遠にわれわれとともにおられる」「偉大な金日成同志と金正日同志の革命思想でしっかり武装しよう！」というスローガンを提示した。

金正恩第１書記はチュチェの最高聖地である錦繍山記念宮殿を錦繍山太陽宮殿と命名し、ここに金正日総書記を生前の姿で安置し、錦繍山太陽宮殿が永遠の太陽の聖地となるようにした。

2012年２月14日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会は共同決定で、金正日総書記に朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を授与し、2012年４月、朝鮮労働党第４回代表者会議と最高人民会議第12期第５回会議では、金正日総書記を朝鮮革命の永遠の領袖に、朝鮮労働党の永遠の総書記に、共和国の永遠の国防委員会委員長に推戴した。

金正恩第１書記は金日成・金正日主義を朝鮮労働党の指導思想として定め、全社会の金日成・金正日主義化を党の最高綱領として宣言した。

そして、金正日総書記の思想と業績を断固として擁護、固守し、革命と建設で提起されるすべての問題を金正日総書記の思想と意図どおり、金正日的方式で解決していくようにし、金正日総書記

の遺訓を綱領的指針として、寸分の狂いもなく、一歩の譲歩もなく無条件あくまで貫徹して、金正日総書記の構想と念願を立派に実現していくようにした。

全朝鮮人民の念願により、万寿台の丘と万寿台創作社をはじめ全国各地に金正日総書記の銅像と太陽像が丁重に建てられ、金正日総書記の誕生日である２月16日が光明星節として制定され、金正日勲章と金正日賞、金正日青年栄誉賞、金正日少年栄誉賞が制定された。

金正恩第１書記の洗練された指導により、金正日総書記は永遠に朝鮮人民とともにあって千万軍民を新たな勝利へと鼓舞しており、金正日総書記の革命活動史は金日成民族、金正日朝鮮の富強・繁栄のなかに引き継がれている。

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国

ㄱ-5835031

E-mail:flph@star-co.net.kp

http://www.naenara.com.kp

ISBN 978-9946-0-1310-7